

奇譚クラス

1954.6



新時代の風俗雑誌

奇譚クラス

6



定価 百円

奇譚クラブ臨時増刊号ノ

[原名 THE GLOOMY EXPERIENCE]

吾妻氏の麗姿により心にくき迄執拗に描写された
サディズム文学の決定版
美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く
サディ・ブラッツイズ◎吾妻 新訳

アリスの人生学校 (定価 100円)

堂々五百枚に垂んとする長篇サディズム小説
口絵(色刷・単色)カット・挿絵多数挿入
第一部 純潔教育 第二部 貞操教育
書店にてお買渡れの方は直接発行所へお申込み下さい
送料共

月 刊 **KK通信** 定価 20円 半年100円

(既に第二十号迄毎月) (休みなしに発行)

奇譚クラブの誇る特別会員の機関誌
本誌愛読者を中心に楽しいグループ
B6判十六頁に新聞用稿平活字にて記事掲載
挿絵、写真等毎号多数掲載、本誌愛読者の欠
かすことの出来ない伴侶です。一般市販せず
予約者のみに送付、目下三千の会員を擁し毎
日増加の一途を辿っています。本誌をごらん
下さった方は是非KK通信も併せて御愛読下
さい。絶対他誌の真似の出来ない内容を持っ
ております。旧号は第九号より第十九号迄在庫し
ております。[六回分送付共百円にて急送]
僅か百円の会費で半年分(送料当方負担)
毎月B6判十六頁の機関誌をお送り
いたします。○見本は切手二円にて急送します

【読者案内KK通信係】

縛られた女ばかりの16態

豪華アルバム 美しき縛しめ 第一集

(各葉解説文句入・美術コロタイプ印刷)

美濃村晃構成・塚本鉄三撮映

内容
工足高麗李 遅く滑床鏡紅荒目横 鏡鏡
ビ 手小 燭さ車 と の 性 づ
責杭手打虫責り吊物急白縛絞台目わ

【全部未発表】
四人のモデルを使つて完成した
縛られた女の集大成、優美さと
堅固感の秀れた代表的な責め写
真集、縛れるような妖しい雰囲
気は素晴らしい反響を呼んで瞬く
間に限定部数を突破、これは同
好者のために若干増刷した分
です。
何卒大切にしながら中にコレク
ションの一端へお加え下さい。
曙書房代理部
(頒価一部 500円 送料60円)

本誌6,7,8月号の3回に
亘り連載大好評を博し
たクリスチーヌの受難
の全譯遂に成る!

再版出来!

クリスチーヌの受難全訳
キドロドシュトック 被虐の家
吾妻 新訳
B6判 二二六頁 上製画入
ボールド装綴 挿絵 十五葉入
可憐なる美女クリスチーヌに対する緊縛と鎖
くつわは汚辱と鞭打と凌辱の地獄図絵サディ
ズムの粋をつづいたクリスチーヌの全訳、画
壇の一方の雄、某氏のアブノーマル挿絵相俟
つてここに完全なるサディズム文学の金字塔
が打ち建てられた。

定価 三二〇円(送料四〇円)
申込所 曙書房代理部

本欄はすべて新版 [女体緊縛] 断然卓絶した特写
未発表の作品です 群を抜く素晴らしい傑作
価格は全部送料共 ●寫真集● 類例のない犠牲的安価

悦慮写真は同好者本位の迅速、確実、安価で信用のある曙書房代理部へ

◎村田那美子悦慮集◎

手札型 五枚 一組 200円

◆さるぐつわ三態◆

キヤビネ版 3枚 1組 300円

◆二女連縛集◆

(中宮綾子、並川トミの二嬢)

手札型 六枚 一組 300円

自分から縛りのモデルを志願してきた二人
の乙女を仲よく連縛したポーズ

◆三人連縛棒吊り◆

(杉、坂口、村田の三嬢)

キヤビネ版 3枚 1組 300円

これは誠に珍妙な写真である。予想して出
来るものでなく、偶然のチャンスをつかん
で得た三人連縛の棒吊りである。

◆様子責め三態◆

(伊吹 真佐子嬢)

キヤビネ版 3枚 1組 300円

様子に縛りつけるということは、サディス
トの果てに夢の一つである。

男性被縛写真 (縛られた男)

第三集 手札型 5枚 1組 300円

第四集 手札型 5枚 1組 300円

男性マゾ写真 (女に苛められる男)

第一集 キヤビネ 3枚 1組 300円

第二集 キヤビネ 3枚 1組 300円

◎川端多奈子嬢

第二集 悦慮姿態集◎

手札型 7枚 1組 300円

大好評の第一集に引続いて待望の第二集は
多奈子嬢の真価を遺憾なく発揮した作品と
なっている。乞御期待。

◆股間縛りの5態◆

(坂口 利子嬢)

キヤビネ版 5枚 1組 500円

問題の股間縛り十数態の中から選んだ最も
強烈で美しさのある五態をおすすめする

◆椅子責めの5態◆

(伊吹 真佐子嬢)

キヤビネ版 5枚 1組 500円

十四貫三百の豊満な姿態を縦横に椅子の上
に縛りつけて得た変化のある真佐子嬢の緊
縛のポーズ。

◆半吊り二態◆

(村田嬢、坂口嬢)

キヤビネ版 2枚 1組 200円

完全に吊り下げられてしまうよりも、半吊
りの方が、辛いとはモデル嬢の偽らざる告
白。

女性切腹姿態

オニ集 手札型 6枚 1組 300円

女性切腹難態シリーズ

キヤビネ版 8枚 1組 600円

正坐より割腹に至る迄の連続写真。

華麗な責めの色刷画帖が皆様への興入を待っています

装釘、縦六寸、横八寸五分、横トシ豪華美本、各葉説明文句入、特アールト使用、オフセット多色印刷

画帖

三条春彦・画

時代物責絵巻

特価三百円（送料五十円）

内容

- 一、山法師と静御前
- 二、女スリと岡引き
- 三、淀君と千姫
- 四、犬公方と侍女
- 五、八百屋お七の最期
- 六、新撰組と芸妓
- 七、十郎左門と腰元
- 八、小紫と悪旗本連

縛られた女ばかりの三十二態

（九人のモデルを駆使して得た未発表の秘作）

辻村隆構成・塚本鉄三撮映

豪華アルバム 頒価一冊五百円（送料五十円）

美しき縛しめ 第二集

◇責め写真は欲しいが、印画紙に焼付けたのは高くて困る、とおつしやる方は是非この傑作集をお求め下さい。

印画紙と変らぬ極鮮明コロタイプ印刷により他の追随を許さぬ低廉な値段で堂々三十二態のあらゆる姿態の責写真がお手元へ届くのです。御申込次第厳重荷造りの上急送申し上げます。

傑作緊縛女体写真

キヤビネ版 三枚一組

三百円（送料共）

◎灸責めの三態

杉 芙 美 嬢

◎碁盤責め三態

雲 井 久 子 嬢

◎溪流の飛魚

村 田 美 那 子 嬢

◎高手小手三態

木 田 雅 子 嬢

◎鞭打ちの三態

杉 芙 美 嬢

◎制服の女学生

雲 井 久 子 嬢

◎野外全裸の縛り

村 田 美 那 子 嬢

◎ナイロンに包まれた女体

杉 芙 美 嬢

◎女が女を責める

第一集 一女対一女

第二集 一女対二女

急襲

手札型十五枚 一組 五百円

連続十五枚続きで、女が縛られる迄の過程を描いた最優秀作

川端多奈子悦虐姿態集

第一集 手札型 七枚一組 三百円

吊り 三態 特集

キヤビネ版 三枚一組 五百円

第一組 第二組

第三組 第四組

男性マゾフォト

虐待（一、二月号の口絵掲載の四枚の外に一枚）

キヤビネ版 五枚一組 五百円

台上の殉教者

キヤビネ版 二枚一組 二百円

磔 キヤビネ版

第一組 二枚一組 三百円（送共）

第二組 一枚 百円（送八円）



奇譚クラブ ★六月号 目次

あぶの一まる・ふねと・せくしよん

| | |
|-----------------------------------|---------------|
| 六月の真昼 良弁瀧の狂女 | 伊藤晴雨、画 |
| 回廊轉り方 椅子を用いた縛り | 瀬原麗子、画 |
| アメリカン・スタイルの賣め(3) | 杉原虹児、画 |
| (戯文戯画) 縄について(文芸に勝) | 神事数久 |
| 欧米の縛りと瘡ぐつわ、ボニイ、響をかまされる恐怖 | |
| 空ぞひすちつくた調(足の下にうごめく、天鼓、さあ早く立たないか!) | |
| 女レスリング二題、切腹擬態写真、男性美(写真) | |
| 緊縛寫真 ストッキング 白衣の女 | (藤千枝子、文) |
| 辻村 隆、構成 縄の四十八手 | (前掲井上、一文、中編) |
| 瀬原麗子、画 倉庫 地下室 | (後のみの子、前後共十巻) |
| 神事数久、画 斬首、問答鏡、大蛇二題、縛り音…… | 神事数久、画 |

（前掲井上、一文、中編）

緊縛の構成と

責めのアイディア

辻村 隆

悪の部屋 (最終回)

少年矯正院 体験記 つりとえび

二俣志津子 獄 收一

わが心の記

古川裕子

私のモデル (二席) 美しい暴君 (三席)

飛田良二 馬族 保

海外サティ 服装の利用(上) アブニストの記 痴 迷(ちめい)

吾妻 新 鬼山絢策

非小説 性 液

伊藤晴雨 松井籥子

松井籥子 自伝小説 私の求めた男

ANUS(アヌス) いじめ 奇術に於ける磔刑と絞首刑 私の新婚旅行 孤兒院の折檻

沼田扶二 世 帆村 幾久 富永 一雄 野々村由紀夫 篠原 幸雄 山田 芳枝 越野 義夫 須藤 律夫 眞鍋 四十六 龍田 信二

(特集) 尻夫人 責めの自画像 臍窩への省察 女性の鼻及鼻腔の美に就て 稚兒兵士幹部候補生

感情教育(8) あるマソヒストの手帖から

木村美智子 吾妻 新 沼 正三

残酷なる女性達

森本愛造 沢 久留木 栄

夫から妻から

川端多奈子

稀書婚姻の儀

瀬川 泰子



良弁滝の狂女

【伊藤晴雨・画】

相模国大山阿夫利神社の良弁滝は江戸時代に女の癡狂者を癒すのに効があると云われて居た。武蔵国、高雄山の琵琶滝も亦同様である。此等弁滝のある所から今はハイキングコースと地図で書かれて居るが減多に通行人のない路が広沢寺温泉の横に出る地点に通じて居る。此人跡未踏とも云うべき中央に無住の廃堂がある、茲へ狂女を縛つて滝に打たせて、水の冷えと山伏の金剛杖に叩かれて失神状態にある女をかつぎ込んだと伝えられて居る。

旧六月は大山詣での節であるから六月号に当て、大山の滝を描いた。





くつわをかまされる恐怖

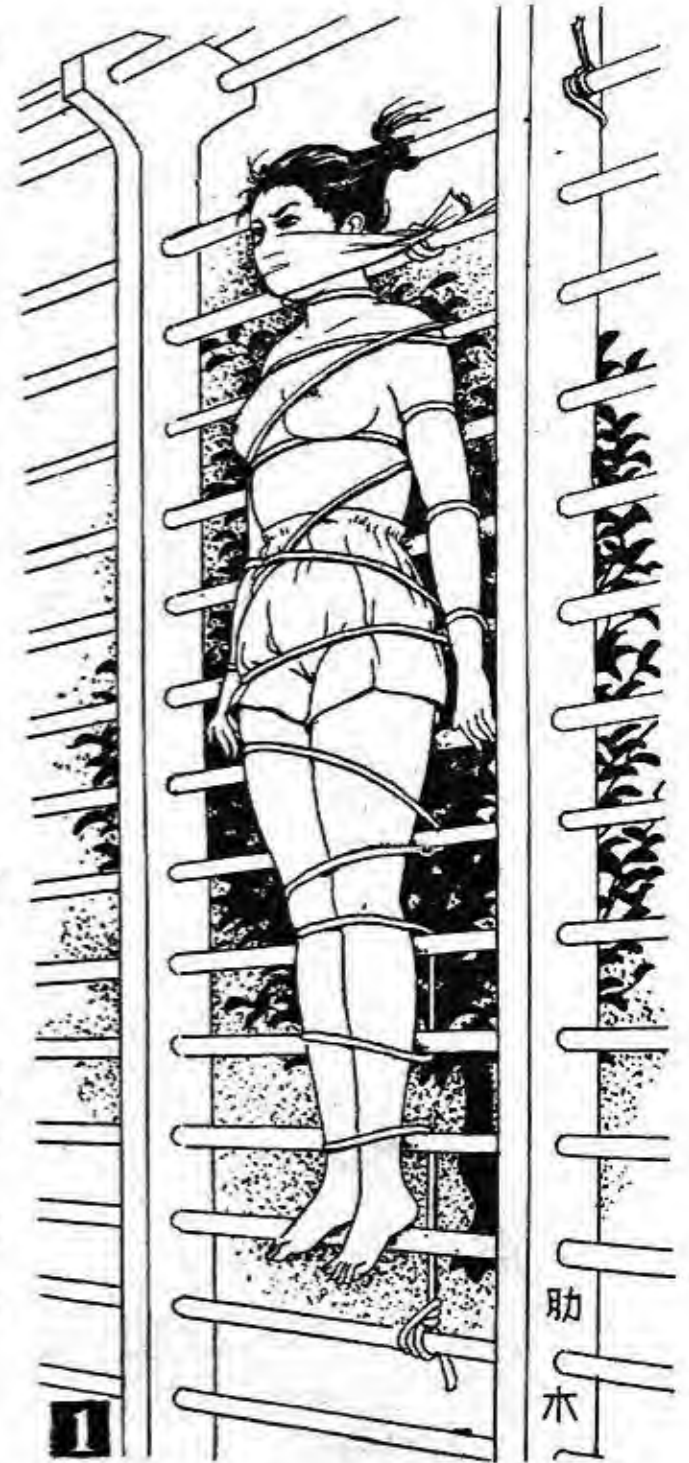
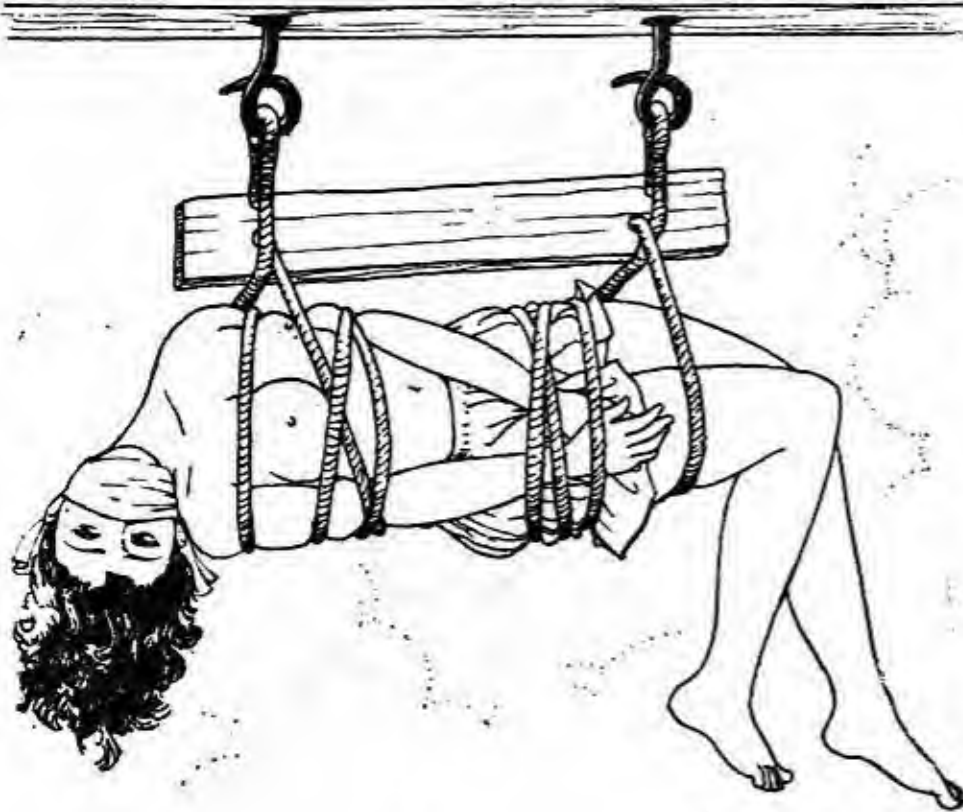
欧 米 の

縛りと猿ぐつわ



ポニイ (PONY)

(外人某氏より寄贈を受けたもの)



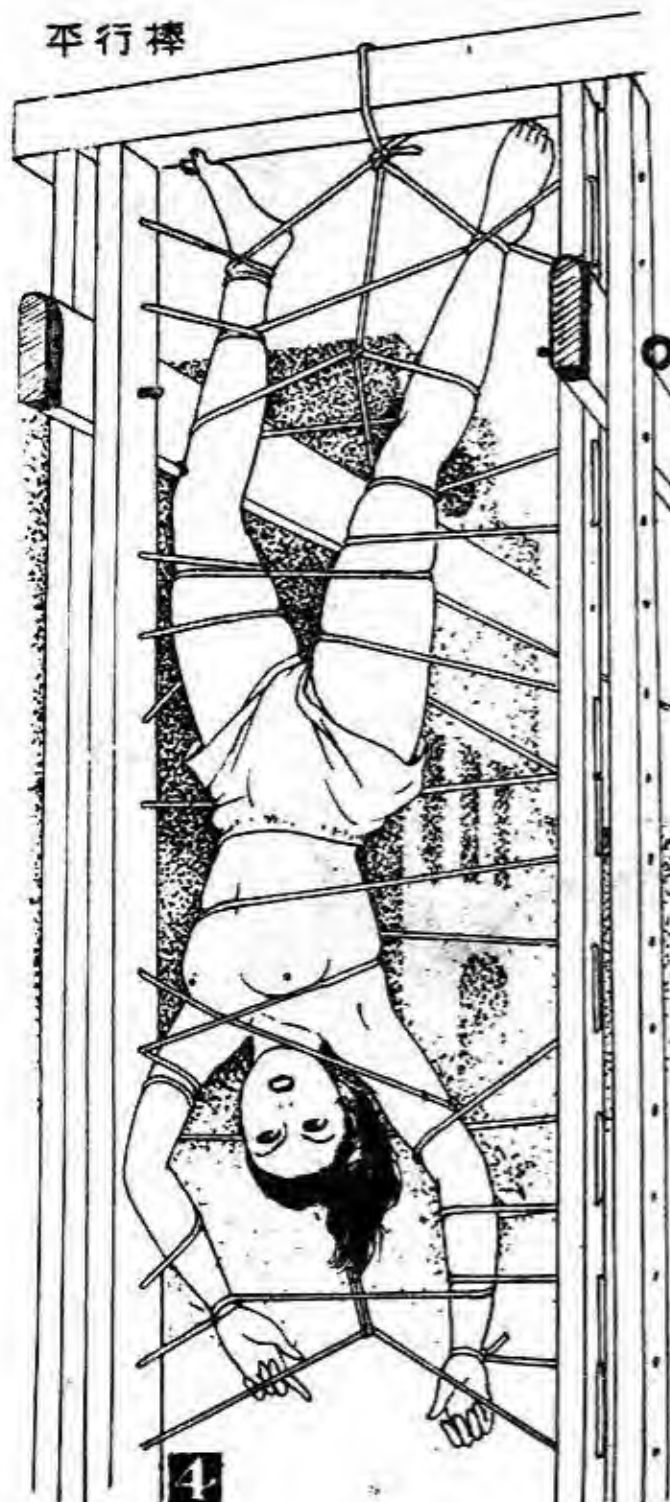
助木

戯文戯画

縄について

責絵には縄が重要な役目をつとめています。そ

平行棒



木馬

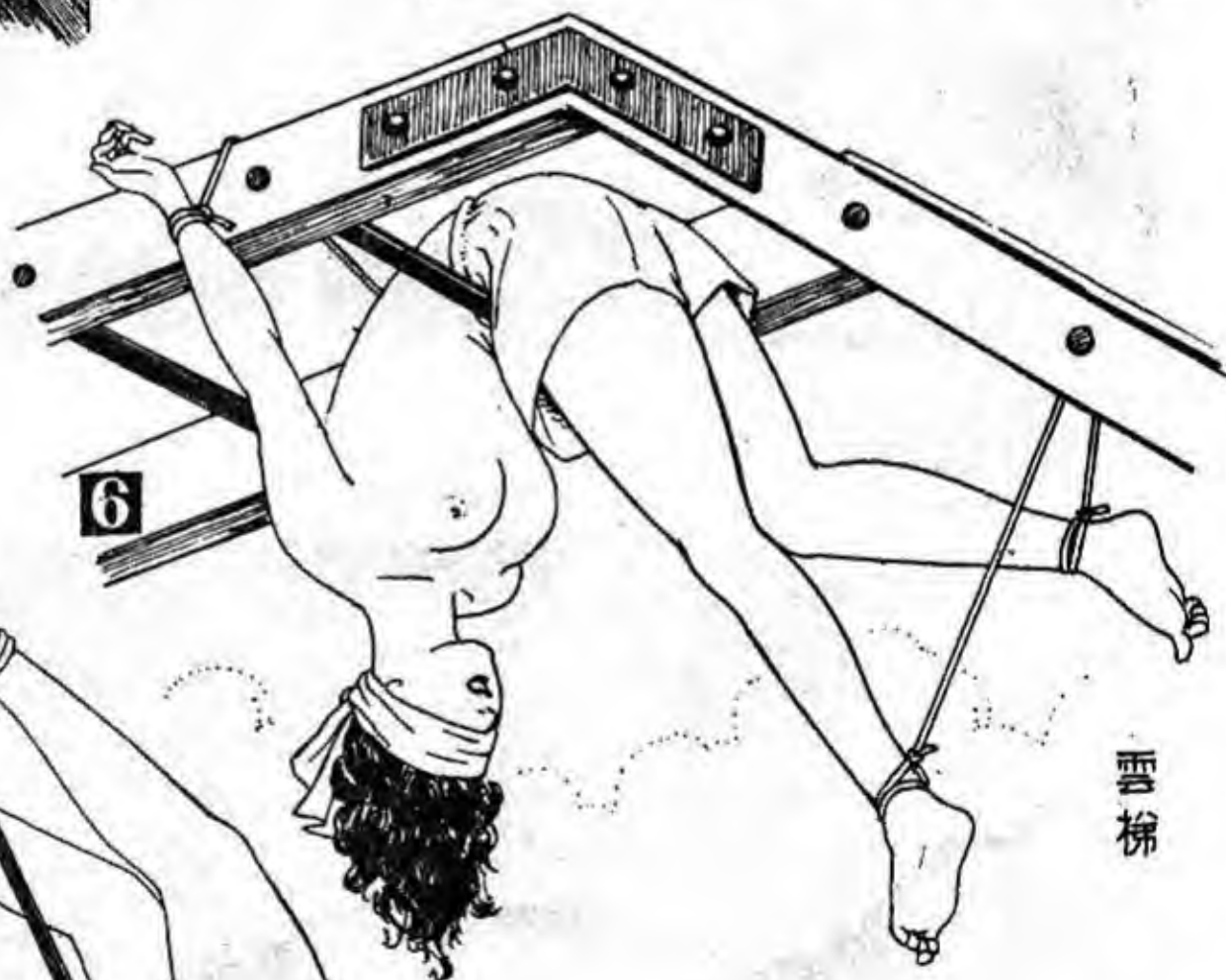
畔亭数久【文並画】

5 鉄棒



して遂には責める人が消えてしまつて被縛と縄だけが画材となり、更に縄が主役とさえなつて参ります。奇譚クラブの読者諸子にはこゝろした縄の演技にこよない愛着を感じて居られる方々が非常に多いと思います。

処で、私は今迄意識的に縄に抵抗して参りました。それは私が縄による美しさよりも自然のまゝの姿態美により打たれるか



雲梯



遊動円木

らなのです。でも今月は一つ縄をふんだんに使つて緊縛愛好家の御批判をお願いする事にいたしました。皆様の御教示を頂ければ幸甚に存じます。

燦々と降りそぐ初夏の陽光の下、のびのびと肝体をきたえる体操道具をテーマにして苦い乙女の素肌を画くのはたのしい限りです

女王様の足の下にうごめく奴隸



犬奴、さあ早く起たないか！

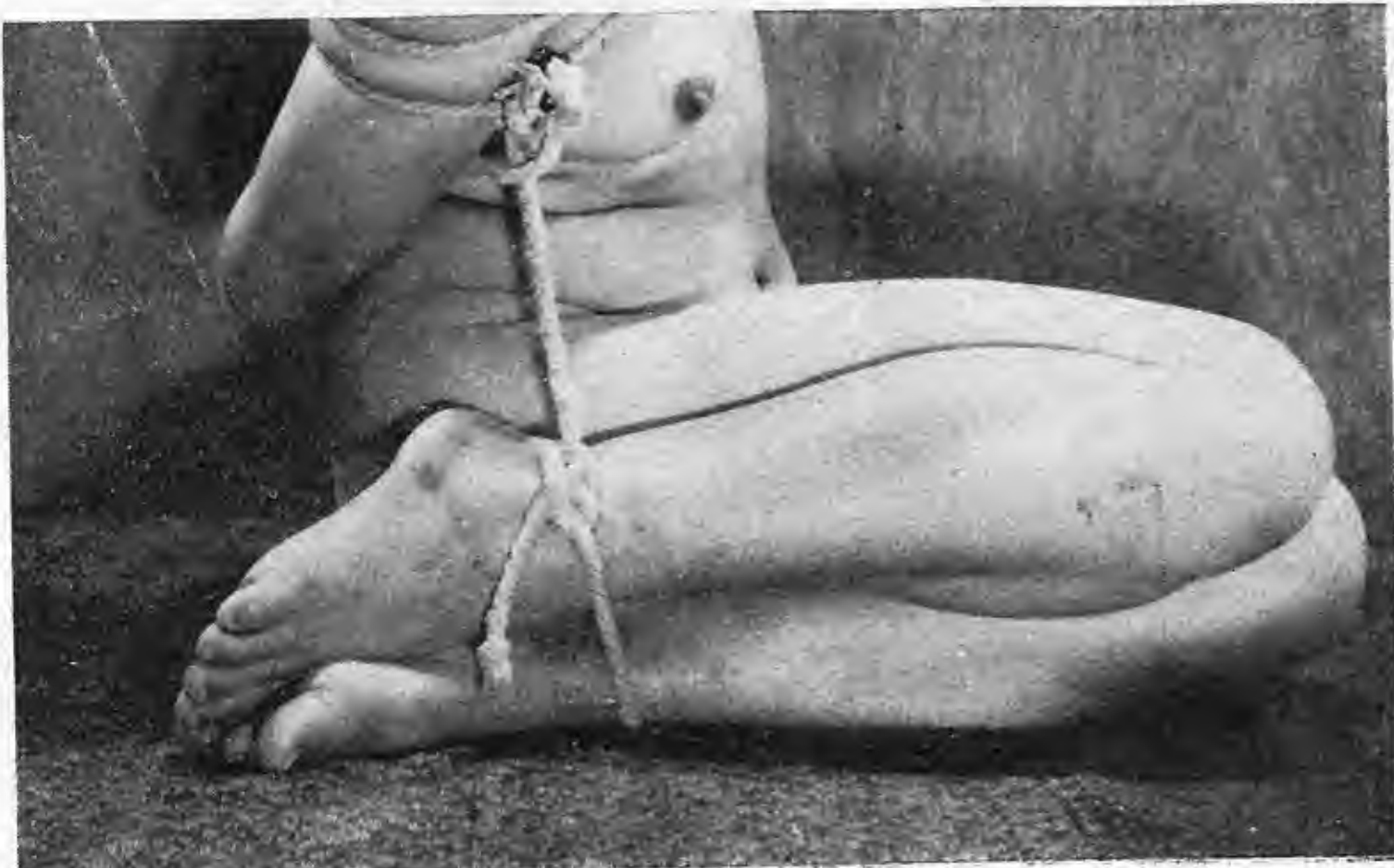


男性美

◁ 【身長五尺七寸，体重十九貫，スポーツマン】



女性切腹の擬態



足と緊縛



女レスリング・二題

アメリカ某社版より

ストッキング

(緊縛のなにげないポーズ)



モデル・伊吹真佐子嬢

アメリカン・スタイルの責め (3)

松原虹児構成





白

の

衣

女



構成・辻村 隆
モデル・萩 千枝子嬢



後のみの菱縄



前後共菱縄



前後共十字繩



一文字繩



倉庫

「やいく、よくも、この俺の目を盗んで若僧と乳繰りやがつたナ、お前達はやくざの掟が、どんなにあくどいものであるか、万更知らねえわけでもあるめエ、それを承知で俺の顔に泥をぬりやがつた上は、覚悟はしているだろうなア」——滝 麗子畫——



地下室

周囲を見廻した多美子は、そこが地下室のような窓一つない部屋で物置小屋の様な所であることに気がついた。「何処だろう此所は？」改めて多美子は両手を後手に縛られ口をふたされている自分の姿を見廻した。その時、地下室の天井がぼつかりと口を開けてサビのある男の音がこもるように聞えてきた。(岡田咲子作「復讐」の一場面より)



いた縛り

滝麗子



椅子を用

案並画



麗

2

斬首



肉親、財産、着衣と貞操
すべてを失った少女は更
に生命をも断たれぬばな
らなかつた。彼女の屍体
を棄てる孔が一隅に口を
開いて待ち受けている。

SUK.

間諜銃殺

嚴重な身体検査を受けた美しいスパイは羞恥も恐怖も超えて従容と死をみつめている。女士官はその断末魔の姿を冷酷なカメラに捕えんとしている。



焙 火

佛蘭西の
ジャンヌ
ダルクは
灰になるま
で焼き続けら
れたが我國の火刑は
息絶えると共に所刑を
終る。そして鼻か乳房
を焼いて止めとする。



Suk.

火 焙

放火の罪を犯した乙女は白紙の
元結、油紙の湯文字、蓮華と塔
婆と珠数に縛しめられて自らの
身を焦熱地獄に焼き亡ぼした。

(原の於關に着想す)



縛り首

縛り首にされることは武士にとって最大の恥辱である。不義密通、小姓はいま其つぐないを身を以てせねばならぬ。



新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

1954年 6月号

(第八巻 第六号 通刊第六十九号)

水瓜盗人の晒

野荒し者の野晒刑である。殊に水瓜の実り時の水瓜盗人には、水瓜番を立て、これを防ぐが、盗人はなかなか止まない。かくて往來の旅人や村の若者や貧者等のふとした出来心から盗んで畑守に取押えられるものがある。許すべきは許しもするが、常習者と見ると詫るもかまわず錠の通り行方。即ち丸裸にして縛りつけて法度書の杭に縛りつけて、三日間晒すのが習慣である。



刑事博物図録より

緊縛の構成と責めのアイデア



辻 村 隆

序

緊縛写真の構成に就いては、日頃、数々の御熱心な御批判、御叱責、御鞭撻を戴いており、衷心より感謝に堪えないが、仲々に御期待に副うものが出来ない。今更弁解する訳でもないがその理由として、責めのアイデアも相当量にのぼった今、その御希望なり御意見

と、実際にヌードを駆使して、緊縛写真を構成する編集者側との見解の相違といったものに対して分析して見たいと思う。

自虐的と他虐的

責めのアイデアを大別すると、サジズム傾向の、所謂斯うして縛つて見たい、責めて見たいという他虐的なものと、マゾヒズム傾向

の、こんな縛られ方をして見たいと希う自虐的なものとに二分されている。だから同一形式のものにして見ても、その説明なり、描き方によつて、自からその両者のどちらかの傾向が現われているのは面白いと思つた。

概説的であるが、サドのものは、その大半が、セックスの前戯的責めであるに反し、マゾのものは、緊縛や責めによつて虐められた

い願望がまざ／＼とかゞわれている。その点を考慮に入れて、こうして縛つて見たいと思われるサド式ポーズ。この様に縛つて欲しいと願うマゾ的ポーズを、それ／＼に按分して構成を考えている。

尚本稿で云う責めのアイデアは、緊縛の構成を主体としたもので、緊縛と責めの本質については大いにその趣を異にすると思うが、広い責めと云う言葉の中には、当然緊縛も含む事であるから、便宜上の言葉としてその偏見は予め御諒承して戴き度い。

美感と猥せつ感

泰西の名画や、写真、彫刻の中にも、被縛そのものを扱った惚れ／＼とする頹廢的な美しさ、芸術感に充ち溢れたものが数多存在している。

緊縛のヌードも、対象とするモデルを第一として撮るポーズなり、配置なり、光線、環境、雰囲気等によつて、その出来上つたもの自体が、美しい情感を盛り上げたものにもなれば、見るに堪えぬ猥せつなものにもなるのであつて、緊縛の美と、猥せつは実に紙一重の差で、極端な例を挙げると、股縛りの場合両股を開いたその正面からまともに撮れば猥

せつそのものだが、カメラの位置を一寸許り横にずらせて、斜めから女体の苦悶の姿を撮れば、柔肌に縄の喰い込んだ生々とした緊縛の美感が盛り上がってくる。

アイデアの中に、この両股を開いて正面から撮つてほしいという希望が相当に多いが誌上公開のものである以上、この御希望にはどうしても添えないのは残念で、仮に撮つたとしても、その部分を修正、削除する事によつて、收拾のつかぬノツペラ棒なものになつてしまうので、一部からは物足りぬとの御言葉を頂くが、この点は今後アイデアを送つてこられる方にも御諒察願いたいと思う。

セックスとアース

アイデアの絵には、余りにもセックスに関連するものが多いので困惑する。ローソク等の使用は、或る程度まで実施もして見たが、これとても使用目的によつては、その個所を判つきり撮る事は不可能であつてましてや、試験管とか、ガラス棒、こけし人形、鶏卵、バナナ、サイダー瓶等のアクセサリーを巧みに使つた、アイデアに至つては、到底実現する勇氣もなく、山梨のV



氏の強姦の模様を克明に描いた、そのものズバリ式絵に対しては何をかいわんやである。且つ又、緊縛のアイデアが、肝腎の縄の掛け方が案外粗雑で、或る部分のみ綿密微に入り細を穿つて描いてあるのも多く、これなど

寧ろアイデアそのものより、そうした枕絵式趣味の絵を描くことに興味を持つて居られる人の様に見受けられ、微苦笑を禁じ得ない。

セックスに次いで多いのがアーヌスへの希望で、便器に跨がつて排泄中の縛られた女、アーヌスへ空気ポンプを挿入したもの、浣腸器の差し込んだもの等が可成り多く、標題に「禁じられた遊び」と銘打つてあるものもあつて、一層のこと、禁じられた写真と変えた方がよさそうだと大笑いしたことがある。

勿論アイデアとしては決していけないと云うのではないが、これらは何れも写真にしてどうかと思われるものばかりで、モデル諸嬢が、ヴァギナよりアーヌスへ、より以上の羞恥を抱く事をこの際附言して置きたい。

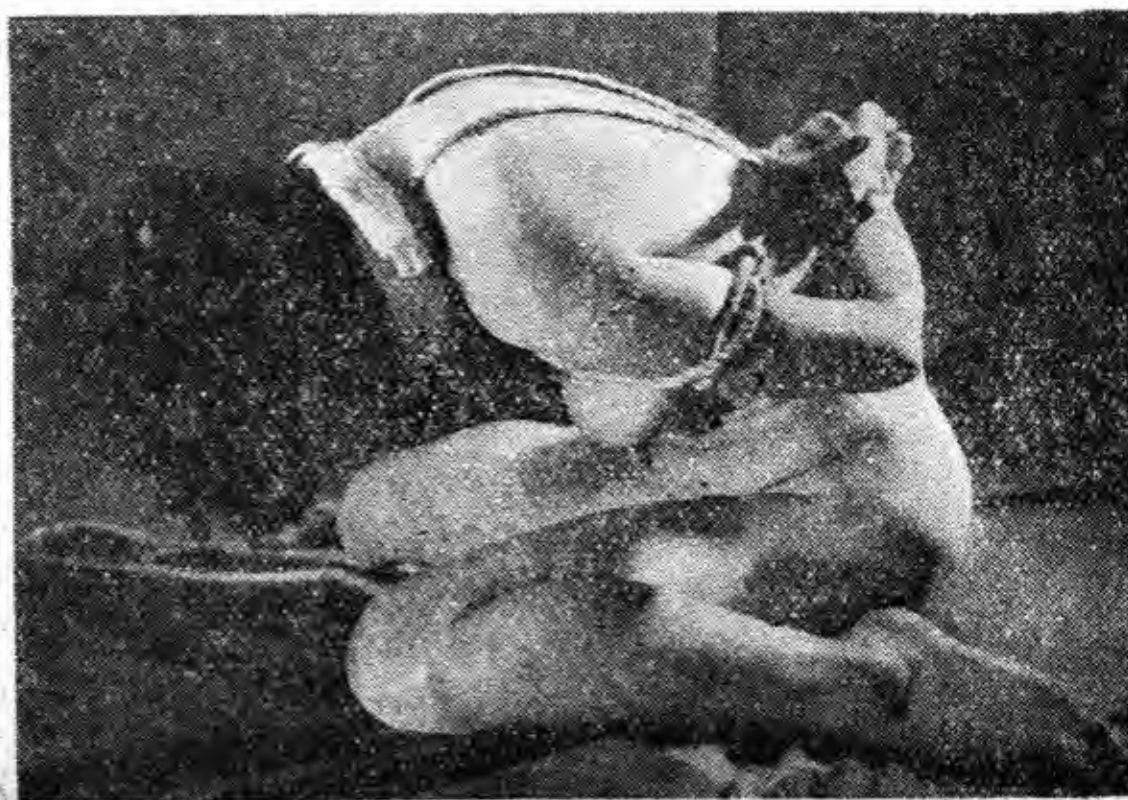
絵画と写真

想像と現実を織り交ぜたアイデアの絵は、全部が全部、実際に行くことは当然不可能であつて、仮にそれに近いものをやつて見たとしても、恐ろしく不自然なポーズになつて、絵に描いたイメージには程遠く、和歌山T氏の絵を例にとつて見ても、一本の太い円柱に両手を上に縛り上げて、軀を円柱に巻きつけた、丁度蛇が樹木に巻きついた様な恰好は、

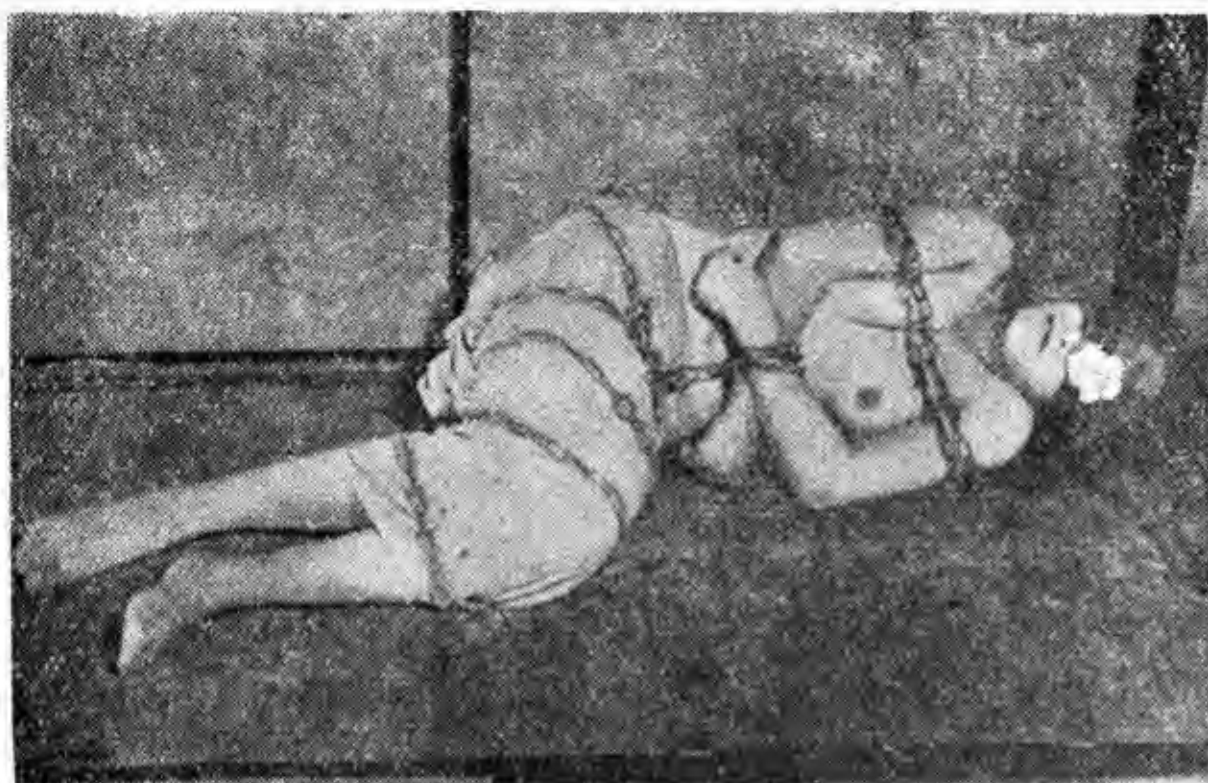
如何にも無理で、面白いと思つてやつて見たが、柱のポーズに至る迄に先ずモデル嬢が悲鳴をあげ、無理にポーズをとらそうとして、遂に成らずこちらが草臥れてしまつた有様で、アイデア自体はよくとも可能性のあるものが希ましく、T氏が出来ると思ふ有るのなら、この構成は喜んで氏にお任せしたいと思う。

絵に描けば非常に美しくとも、実際に撮つて見て存外つまらぬのが多々ある。四本の棒杭に手足を縛つて鞭打つと云う、一月号にのせた黒人奴隷打撲の図など、やつて見たらベタリと伸びた様で全然変化に乏しく、組板状のものに仰臥して四方に手足を緊縛したものも同巧異曲で、これはカメラの位置を上にして撮つて見たが至極平凡だつた。そのお詫びの意味ではないが、四月号では外国写真の中からそうしたものを選び、クラウ社の「腰を下す女」や、「ベツトに縛られる」を掲載して見た。外国のものに負けぬ立派なのを撮つて、いつか本誌の口絵を見てアツと云わせて見たいとはかねて考えているのであるが――。

絵画で描ける苦悶の表情についても、モデル嬢では限界があつて、様々に注文をつけて



は見るが、実際の責苦、苦悶を伴わぬモデル諸嬢にとつて、こうした苦悶の表情を出せとは無理な注文で、女の役者を縛つて見たらとも考えているが、彼女達がすべて、緊縛される事に悦楽を感じているわけでもないで、マゾでない彼女達にマゾの真髓の分らぬのも当



然で、特別の例外として川端嬢の様なマゾヒストもあるが、彼女を強く縛れば縛る程愉悅にうつとりした顔付になつて、それが又カメラに捉えたと笑っている様に見えるので、苦悶の表情は案外に難かしい。併し、マゾが縛

られる事に愉悅を覚える場合、うつとりと笑つた顔になるのが反つて本当かも知れないと思つて見たりもしている。

正常緊縛と異常緊縛

繩の四十八手を履んだ理路整然とした緊縛を好む方と、A氏の様に変型的な股縛りや、K氏の如き吊り専門の方もある。

肌に喰い込んだ緊縛を、殆んどの方が希望しているが、モデルへの考慮も払わねばならず、又一日に、何十ポーズと撮る場合次から次へと、一ポーズづゝその構成を変えてゆく者の手間も相当の重労働で、あれこれと考えた挙句、散々に時間をかけて縛り終り、ホツとする間もなく、ハチリと一瞬、それですぐさま縄解きにかゝつて、次のポーズに進んで行くので、時には構成の筆者に対し、羨望や、恨の便りを戴くが、とてもその様なものでない事をこの際知つておいて頂きたい。

誌上にのるのは写したフィルム何十分の一かであつて、取捨選択の結果その中の何枚かが誌上を飾るので、恐らく過去何十枚かのせられた写真の、その何百倍かのポーズが撮られているわけである。

緊縛をゆる／＼愉しみ、縛り終つて自由を奪つた女をどうこうするといふのなら兎も角モデルの疲労を常に念願に入れて、痛いと言われ／＼縛り直し、縛り方が気に入らぬと又解いて、時にはウン／＼云い乍ら逆吊りにしたかと思つと、直ちに解いて抱き降したり、まあこれが偽らぬ構成者の実情である。

アイデアとして、股縛りは確かに嶄新であるが、概してモデル嬢は最初余りこの縛りを好まぬ様である。併し一度これを行つた場合二回目からは彼女達はさしてそれを苦にしなくなつてくる。最初の羞恥を過ぎると女は大胆になると云ふおうか、寧ろ股縛りを好む様に変貌するのは、興味ある問題である。

責めと拷問

絵画では、どぎつい拷問の実感を描き得ても、モデルに拷問をかける事は道徳上出来得ないから、自然真似事に終始してしまふ。

責めの場合には或る程度、責めの様相を暗示した、鞭とか、竹の棒切、木片によつて現わし得るが、それも鞭がうなりを生じて肌を打つ瞬間をとるのは、映画にならざるが、普通のカメラの場合、静止してそのポーズをとるより仕方がないから、どうしても中途半

端なものになり勝ちであるのも又已むを得ない。

その外、江戸期の刑罰からテーマをとつたはりつけ、獄門、曝し者、切腹のアイデアは随分多いが、これは追々背景や道具を整えて一貫したものをつくり上げたいと考えている。

切腹はやつて見たが、アイデアの絵に描かれてある様な、はらわたのドロ〜とはみ出した凄まじさは到底無理で、所詮、刃を腹にあてた、切腹一步手前の構成で我慢して頂くか、絵具をといた血紅様のものを作つて塗るより仕方がない。

鞭打ちの跡を墨や口紅で描いたり、刃物の傷を絵具でつくつて見たりしたが、カメラにとるとそれが判つきりと判つてかえつて興奮めの時もあった。

シロシロとシロクロ

サドの女とマゾの男——。又、マゾの女にサドの男、サドの女にマゾの女、とこの種の組合せは相当面白い構成も出来るので各号にぽつ〜と掲載もしているが、女に虐められたい男の希望者もあつて、やつて見たが、慨して男は、実際に緊縛すると、案外早く弱音

を吐き、日頃自ら夢想し、願望する十分の工程の緊縛にも、早や逃げ腰になつてしまう事が多い。その点、女性には身体が柔軟でもあるせいか、相当強度の緊縛や、長時間の責苦にもよく堪えて、大抵の事には辛抱している。

本人の希望もあつて、男性の緊縛の写真をとるべく、ハンモックの様に両手足を左右の梁に縛つて、宙吊りにし、ハイヒールを履いたモデル嬢に、踏台に昇つて、男の臀部の上に腰かけさせ、踏台を外したら、十秒は愚か忽ち悲鳴をあげて、縄を解いて下してからでも、暫くは、ぐつたりとものを云う元氣もなく伸びていた。

女性同志の場合、お互の気持を付度し合つてか、如何にもきこまないポーズで、激しい悦虐の表情なり、効果が上らないのは残念だが、何れサチスチツクなモデル嬢を発掘した暁は、之にマゾのモデル嬢を組合せて素晴らしいものを構成して見たいと思つてゐる。

太い縄と細い縄

緊縛の場合、見た目に緊縛感を感じるのは太い縄であるが、実際は余り苦痛を感じず、反つて細い縄の方が肌に痒々と喰い込んで、暫く縛つた儘にしておく、肌が紫色に變じ

て冷めなくなり痺れて感覚を失なつてくる。併し、写真にとつた場合、細い縄では、も一つ頼りなく感じられるので、現在六分の縄を使つてゐるが、先日、試みに細い黒のナイロンロープを使用して見た。之は或る程度伸縮性もあるので、モデルも余り苦痛を感じなかつた様であるが、このナイロンロープの緊縛に対して、お褒めの言葉を賜つたのは恐縮である。

逆吊りの場合、細い縄では絶対に耐えられないと思われる。全身がんにがらめに縛り上げて、逆吊りにしたのなど、見た目には如何にも悦虐の様相が出ているが、足首を一本の細い縄で縛つて逆吊りにしたものに較べて、遙かに苦痛の程度のゆるい事は、経験者なら御存知の事と思う。

井戸縄の如き太縄の緊縛と、細引程度の細縄の緊縛とのコントラストを現在考えておるが、某誌掲載の、幔幕の、だんだんの太紐が実際の緊縛には、最も苦痛の少ないものである事を附言しておく。

猿轡と眼隠し

緊縛ポーズに猿ぐつわはなくてはならぬアクセサリーである。それも口と鼻を蔽う大幅

のものがよく、アチラ式にハンカチを口に喰い込ませたものや、舌を二本の箸で押えて、ぎり／＼ハンカチを巻きつけて縛つたものは見た眼にもパツとしない。併し凌辱を主とした猿ぐつわ十数種のクローズアツブも、アイデアとしては一案で、之はよきモデル嬢を得て是非実現して見たいと思つてゐる。

眼かくしのものは余り撮らないが、之は顔の表情が殆んど蔽されてしまうからで、モデル嬢の中には、眼かくしさえすれば、如何なる大胆奔放なポーズでもOKすると云うのがあつたが、之など、眼かくしによつて、己れの赤裸々な肢態を見る事もなく、且つは縛る相手の顔も見得ない気安さから、所謂羞恥心を眼かくしによつて消してしまふ結果、自然大胆にもなれるので、こうしたものに、案外誌上にのらぬ素晴らしいポーズのものが自由にとれる事がある。

が、併し、この種のもものは殆んどが使いものにならぬ写真である事は言う迄もない。

有毛と無毛

モデルによつて非常に毛深いものと、殆んどパイパンに近いものがあるが、撮る方にして見れば毛深いのは修整の際、非常に手間

がかかるので同じ事ならどうしても敬遠し勝ちなになる。

自体の好みとしては、パイパンより毛深い方に心を惹かれるが、それと云うのが、完成した写真がすべて真白に修整されてある以上

実物までが写真同様パイパンである場合、丁度写真を見ている様で感興が湧いて来ないと云ふことにも一因がある。どうせあるべき処にない不自然さに、きつと一抹の不満を禁じ得ないと思われるが現在陰毛のつけた写真がすべてワイセツのスタンプを押される限り、これは永久にコレクシヨンの中より姿を消しているに違ひなからう。

今迄のモデル嬢のうち、二人程剃毛して来た人もいたが、

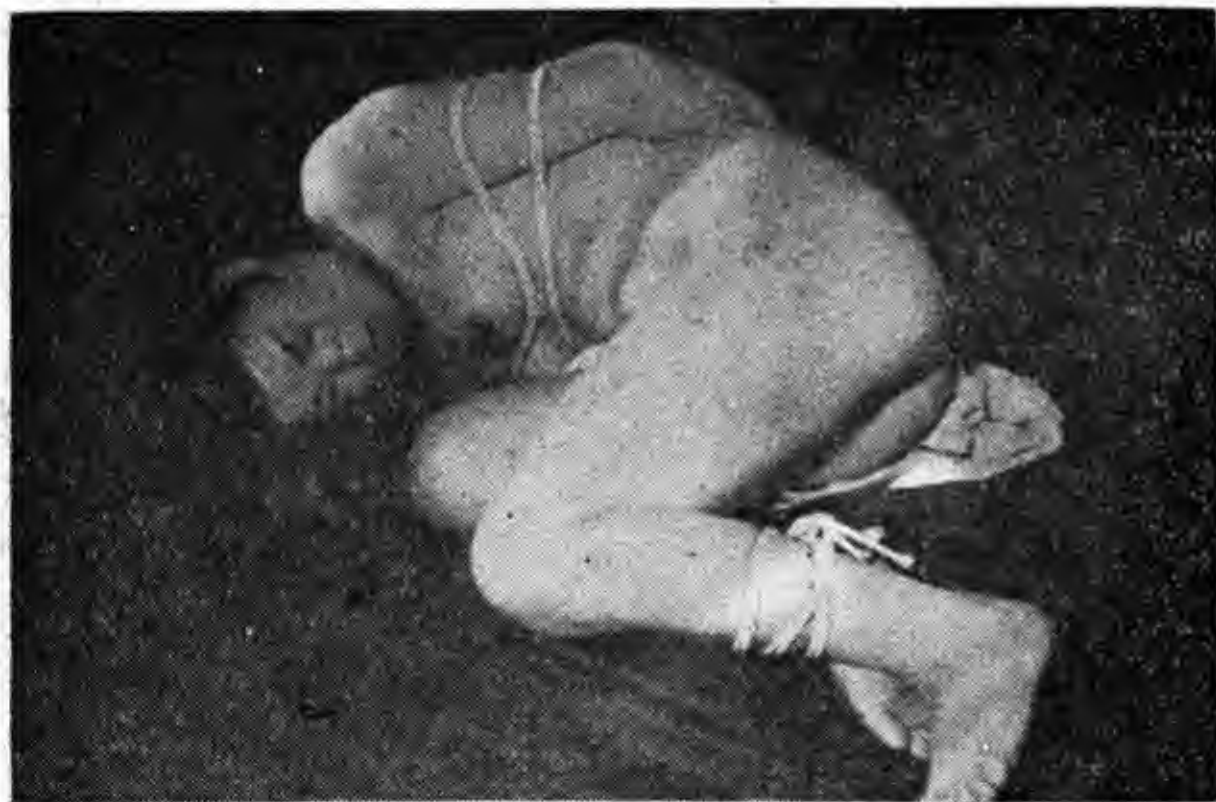
反つて不自然に思われ、その剃毛の態を想像しては、反つて妄想を逞しくする事になる。

室内と野外

室内であると、配光が思う儘になるし、ゆ

つくりと落付いて撮れるが、野外となると、どうしても一抹の慌たゞしい焦りを感じずにはおられない。だからどうしても、ポーズでも一応お座たりのものしか出来ない。外界に対する一種の不安定な気持が、知らず／＼心をせき立てる様で、この事はモデル自身も落付かなく気にしている様である。

完全な緊縛、技巧を凝した賣めは、何と云つても室内でなければ実行出来ない



I山の森林中で撮った時の事だが、和服姿のモデルを両側の立木に、左右の手を縛ってぶら下る様に足を浮かさせ、いざ撮ろうとした時、突然犬が吠えてかけてくると、猟師まがいの親爺がぬつと立木の間から現われ、モデルを隠す暇もなく、じろく眺められたのにはすつかり閉口してしまった。モデル嬢の恥かしさもさる事乍ら、すつかり感興を壊されて、そこく立去った事もある。

瀬戸内海辺りの、絶えて人なき離れ小島に上陸して、心行くまで伸々と落付いて野外のさまぐのポーズを撮って見たいと常に念願している。

全裸と半裸

緊縛に於て、全裸のものと、半裸のものと賛否が常に相半ばしている。本誌の行き方として、肉体の線をはつきり出し、緊縛感を出す為、大体全裸の方針をとつて来たが、真紅の湯巻のみの半裸や、T氏のいわれる赤禪をした女の股縛りのアイデア等も比較して多く、長襦袢に胸が割れて、乳房のこぼれた危な絵式を好むのもあり、パンティの上から股縛りを説くもあり、之等は何れも半裸の正にこぼれんとする姿態を讚美している。

全裸讚美は凌辱

感を昂めるもの、肌を喰い込む縄目の跡、ポーズの魅力、白い柔肌のよさを強調しているが、構成側としては、之等の意見を出来るだけ尊重して、全裸、半裸時には正装をも加えて、ヴァラエティに富んだものをねらつて行きたいと思う。アメリカの緊縛モードに於て、殆んど全裸がなく、手袋、黒タイツ、バタフライ等が、実に巧妙なアクセサリーとして使用されているのは印象的で、現在構成を考えているもので、黒い仮面、黒タイツにハイヒールの裸女の様々の悦虐のポーズは是非とつて見たいと思つてゐる。

前写しと後写し

乳房の盛り上り、顔の表情、臍の魅力、こうした概してストリップ式緊縛モードに興味



のある方は正面写しを喜ばれるが、矢張り緊縛の醍醐味は、なんと云つても後手の、肘からぐつと二の腕を吊り上げて縛つた背後の状态である。

正面から撮して、削除された下腹部より、生まのまゝのポーズの双つの盛り上りの方が魅力は大きく、その点でも削除なしに掲せうるのは背面の得なところであるが、唯、背面許りであると、顔や乳房の見えぬ物足りなさは確かに同感である。

だから撮影の場合、その何れへの期待にも



そう為、斜めより背面の後手の緊縛を写し、且つ乳房や顔を見せる為、上体を捻じ向けて前面をもとり入れる態ばつたポーズのものがどうしても多くなり勝ちになるのは己むを得ない。

ポーズ自体が不自然であつても、そうする事によつて、一応両者に御満足を得て戴けるので、滋賀のR氏のアイデアによる、背面の後手縛りの跪まづいたポーズに、背後から髪の毛をぐつと掴んで顔を反らせ、殆んど乳房が盛り上る程に反らせて、倒れかゝる上体を片足で押えているのがあつたが、これは今更目新らしくもないが、正面、背面の両方をとり入れる方法としては可成り優秀な方であると思う。

洋髪と和髪

伊藤晴雨氏の乱れ髪は既に定評あるところであるが、伊藤氏の場合、明治、大正に亘つては、総じて女は和髪の黒髪であつた為、氏はあゝした乱れ髪によつて苦悶の表情を現わしたのであつて、明治の時代若し女が殆んど断髪であれば、氏も又自ら断髪の女に乱れ髪の苦悶を見出したに違いなからうと思われる。

時代の推移と共に、モデル嬢が殆んどショートカットの場合、今更何を好んで古めかしい乱れ髪を選ぶ必要があるか。

現在ではかつらでもつけぬ限り、乱れ髪は中々困難であり、感興に於てもかつらの

髪の毛では実際に感じが出ない。だからことさらに和髪の乱れ髪を強調する必要はないと思う。二三を除いて和髪の希望がさして見当らない事は、こうした緊縛ヌードを好む方々が、時代おくれの和髪に興味を感じなくなつたせいかも知れない。だからと云つて、伊藤氏の和髪にけちをつける気持は毛頭なく、先駆者としての氏の着眼点に万腔の敬意を表している。現在の、ざんぎりに近いショートカットで所詮あの味は出るものでなく、髪の毛については深く言及しない事にしておく。

凌辱と悦虐

責め自体、凌辱と悦虐の二相を有しておるが、アイデアから選び出した凌辱の図はカメラに不向きなもの許りで如何ともし難い。

縛つた女の顔を、土足で踏みにじるのは未だしも、シャールラツパリツペンに小穴を開けて、封鎖したものなど、どうして撮れよう。男の下帯の汚れた部分を口に押し込んであるものや、月経帯のゴムを口にはめていし込む図等々、所詮小説では描き得ても、カメラには納められそうにもない。

悦虐のシーンの場合、奴隷式屈辱を甘んじ

てうけるマゾのものが圧倒的に多く、大鎖でつながれて、馬乗りになつた女から、尻を鞭で叩かれると云つたもの、潮水を吞ませて腹部膨脹の苦悶、灸を据え、煙草の火で焼き針をさすと云つたものは、折々に撮つて見たが、勿論、真の悦虐のポーズは出ないかも知れないが、真似事だけでも可能の限界にあるだけに実施出来ない事もない。

痩せた女と肥えた女

モデルの体重は、大体十三貫—十四貫ぐらいが最も發育もよく適當である。

肥つた女の柔肌にギョツと喰い込む縄目に魅力を感じる人も相当にあるのか、アイデアの絵には肉付のいい肥えた女が割合に多く、特に乳房など、子供を生んだ直後のあの大きさをほうふつさせる程の大きさに描いてある。

その外、妊婦の緊縛も嗜虐の対象となるのか、以前掲載した、安達ヶ原の鬼婆式のものが多いのも、カメラでは撮れないものの一つである。

痩せた女を好む人は一般に少ないが、K氏の如く、極度に骨と皮になつた栄養失調の著せめた女を、地獄図絵式に責めているのも

あつたが、逆も亦真で、これなど反つて生々しい実感を呼ぶ傑作であつた。ヌード写真の場合、こうした痩せた女は、凡そグロテスク以外のなにものでもないが緊縛と肉体のウオリユムは不可欠の関係がある。

処女と非処女

A氏が云つておられた、既に飼ひ狂された猫同然の、柔順云うが儘の女に対する緊縛は興味がないとの話であつたが、モデルの場合も同じで、処女——本人自称、又或る程度肉体の部分的觀察でも分るが——の場合、羞恥を全身にくねらせて、さも恥かしげに縛られた方が、カメラにはよく、どうぞ御自由に云つた半ば不貞腐れ型や、既に男を知りつくし、或はマゾの味をしつた経験済み型を縛るのは、縛り易くもあるが、それだけに緊縛する側も事務的で、情感と云つたものが全



然湧いてこない。

処女であつても、二度三度縛られているうちに馴れてもくるが、矢張り体の線や肢態が生き／＼としており、そこに幾許かのハニカミがあつてこそ、始めて縛る方も力を入れて縛つても見たくなるものである。

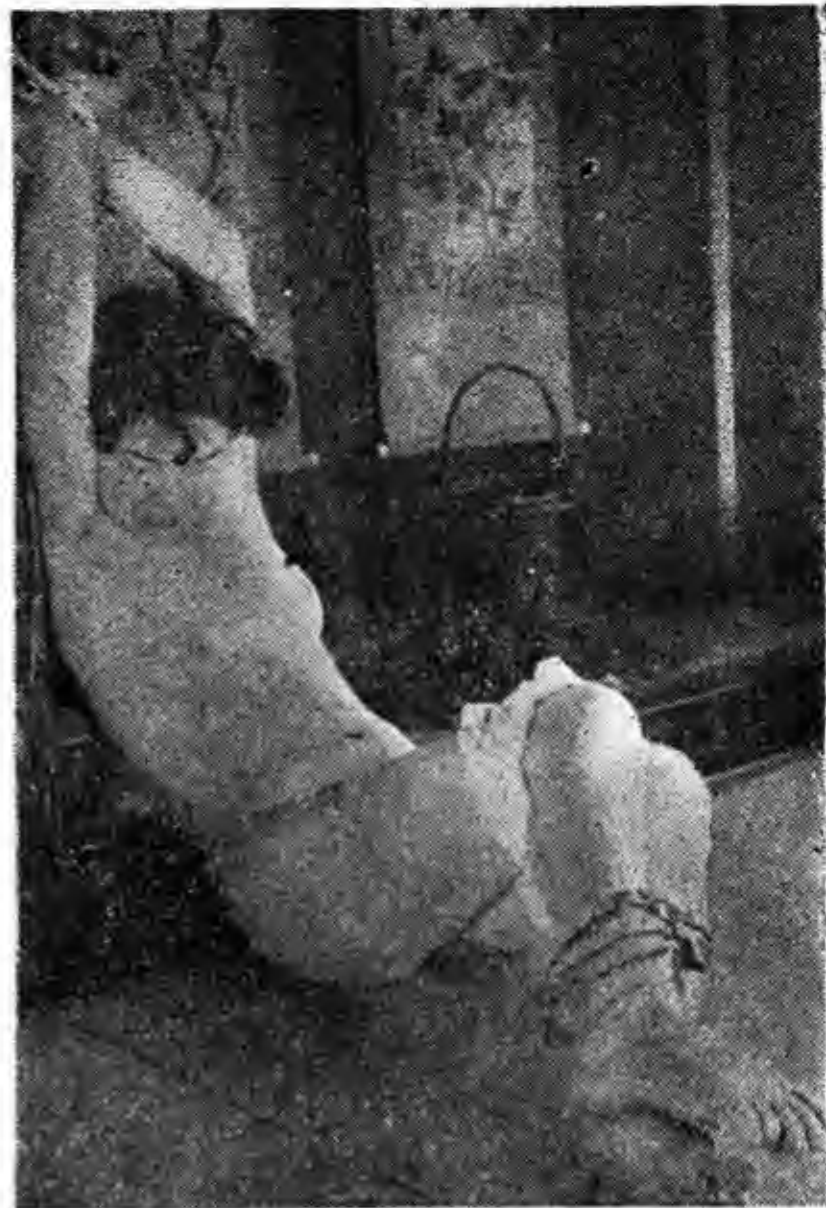
処女、非処女を問わず、緊縛によつて情感を覚えるのは確かで、縛られた女達が例外なく程度の差こそあれ反応を示しているということは何よりの証拠だと思う。又、無闇に咽

喉がかわき、カラ／＼になつて屢々水を欲するの、その一種であると思うが如何。

苦痛と悦楽

海老責めにされて、火のついたローソクを肌の上に立て、タラ／＼と流れる蠟涙を受け乍ら、長時間放置しておけばおく程悦ぶT嬢の様なモデル。

後手に腕を捻じ上げただけで苦痛を訴え、一縛りごとに苦悶を訴えて、一瞬でも早く解放を希うモデル。



モデルも様々であるが、同じ縛り方をしても、マゾ傾向の女は悦楽に飲び、正常の女は苦痛の呻めきをあげる。

緊縛に対し、必らず事前にモデルに諒解を求めるが大抵の場合承諾はしてくれる。唯、彼女達共通の恐れは、緊縛される事によつて、我が身がどの様に扱われるのだろうか、又、女としての貞操に対する不安から、一抹の危惧を感じる事は確かである。

それだけに構成者もカメラも、人一倍身を持するに厳であり、いやしくも好色的言辭を弄する様な事なく、常に紳士的であることが必要である。

緊縛ヌードのみに終始してその日の予定が終ると、彼女達はホッとした様に解放的になつて、緊張がほぐれて多少饒舌になり、最初縛り始める時の、あの硬直した、貝殻の様に

閉じ込めていた警戒心を解いてしまう。

初めてのモデルの場合、構成するものにとつて、例えその時、どのような素晴らしい構想が浮んでも、それを抑えて、彼女を徐々に緊縛のルートへと導入して行く細心の注意を怠らない。

初めは体に縄を巻きつける程度でも彼女達は不安と危惧に打震えている。硬ばつた顔は恐らく極度の緊張と羞恥を精一杯に押えているに違いないのだ。

つづいて柔かく両手だけを縛り、初歩の初歩と云つた処でその日は一段落にして次回を懇望しておく。彼女は不安から解放された喜びから、又、緊縛何ほどの事やらんと多少は甘くみくびつてその次も必らずやつてくる様になる。小鳩を手なづける様に、一度二度三度、根気よく徐々に導入して行く結果、そこに始めて美的な満足して戴けるものが奇クの誌上を飾る様になる。

アブノーマルな行為をノーマルに行つて、飽く迄も紳士的に。之が緊縛ヌードに対するコツであると思つている。

何れ筆を改めて諸氏に訴えたい事も多々あるが、構成の上から思いつく儘に羅列して見た。諸賢の御指示、御意見を喜んでお受けしたいと思つている。



【完結篇】

この部屋に入つた者は、どんな善人でも、人間の誰でもが秘かに持つてゐる悪の息吹きを息吹き始める。

私は久し振りにハンコを彫つた。すつかり

技術が下手になつてしまつて、素人と大差ないようにさえ思えた。まつとうな仕事になれなくなるほど、そうであつた。それがポルノグラフィ的なものと、まあ少しは見られるのであるが……

——この部屋に居ると、世のためになるすべての技術、思想、哲理、道徳、倫理は、破壊され、忘却されてしまうのだわ。

——それでいいじゃないの

——いけないわ。少しも人間らしくないわ。

私が人のためにやつてゐることで、少しはまあ、ためになることと言つたら、智子を大学へ通わせてゐる位なものである。年令も大差はなかつたが、私が絶対優位に立つて振舞つてゐるうちに、いつか冬が来てしまつた。

二俣 志津子



電燈を全部点ければ、天井裏も寒くはないのであるが、春まではあまり使わないことにして専ら、座敷で痴戯をくり返してゐた。

雖家であるので、少し位い声をたてても、他に聞えることもないので、一層私達は、楽しく、自由で、のびのびと、新らしい責めを試みたりなどしてゐた。

今日は智子が友達を一人連れてくる。と、言うので、仕事をいい加減に片付け、火鉢に火をおこして部屋を温めて待つてゐた。何んにも知らずに連れてくるのだから、最初から本性を現わさないでネ。と智子は笑つて出て行つたのだ。私も勿論そのつもりであるし私はまだ一度も実験したことのない、皮膚の剝取りをやつてみたいと思ひはじめてゐた。

墮落には底がない。底の底まで落ちてみる。と、言うが、墮落は地獄穴である。きまりがない。私は墮落する、落ちる。道徳も倫理も私はせうら笑つてかえりみない。こゝは悪の部屋、地獄穴だ。

夕方、街に灯のともる頃、智子は智子好みにスタイルの良い下級生を一人連れてきた。「いらつしやい。こんなむさくるしいところに、よくいらつしやいましたネ」

少女はたゞにこゝろ笑つて、ちらつと智子を仰いだ。

——Sかもしれないナ。

「私は一寸御馳走を作つてきてからお仲間に入れさせてもらうから、何かしていて頂戴なそれとも、御勉強？」

少女は智子と顔を見合せて笑つた。

「いえ。」

「御ゆつくりしていらつしやつて、宜しいんですよ？」

「はい。」

「じゃ、」

私はお勝手へ出て行つた。

「このお部屋、暖いのね。」

「お姉さんが暖めておいて下さったのよ。」

「いいお姉さんね。怒つたことなんか、ない

みたい。」

「こわいわよ。」

「うそ。」

「叩くわよ。」

「うそ。智子さんが叩くんだワ。」

「本当よ。私をキリキリに縛つてネ、それはひどく叩くのよ。」

「私、されてみたいナ。だつて、まだ誰にも叩かれたことなんかなくて。お父さんだつて、めッ、て言う位よ。縛られる、なんて想像もしてみなかったわ。考えると、何だかぞく／＼するわ。どんな気持？」

「痛い。とてもよ。——あなたなんか、とても我慢し切れないワ。きつと泣いてよ。」

「やつて、智子さん、私を縛つてみて！」

「いやよ。可哀そうだから。」

「大丈夫！泣きなんかしないから——」

「本当？」

「えゝ、きつと。」

「そうね、一寸この机の上に乗つて仰向けに寝て下さらない。」

「いいの、お机の上に乗つても」

「どうぞ、」

「私、靴下、脱ぐわ。」

少女は靴下を脱いで、机の上に仰向けに寝

た。それを、智子が巧みに机に縛りつけているところへ私は入つて行つた。

「あら、お姉さんよ。解いて！」

「ダメ。」

智子の声は厳然としていた。

「私、恥かしいワ。」

私は微笑した。

「いかゞ。縛られるつて。」

「胸がどきどきして、よくわからないんです。」

「そう。智ちゃん。もう一寸強くしてやつてごらんさい。わかるかもしれないから。そう。脚を、もつと。」

「あ、あ、痛いッ。」

「痛いでしょう。」

「い、いえ。」

少女は苦しうに笑つた。

私は、少女の頬に一寸唇をつけた。少女は真赤になつてはにかんだ。

「我慢出来る？」

「えゝ。」

それでもまだ、両足と両手を机に縛りつけてあるだけであつた。私は少女のスカートの鍵ホックを外して、スカートを引下げた。

「あら。」

少女は股をすぼめた。が、私は彼女のブルーマとパンツを同時に引下げてしまった。少女は羞恥と驚きで身悶えた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

私は、もう何のこだわりもなく智子に手伝わせて、少女の服を一枚一枚はぎ取つていった。まだ乳房は固く小さい。私は、彼女の全身をこれから料理する獲物を見るように見廻した。

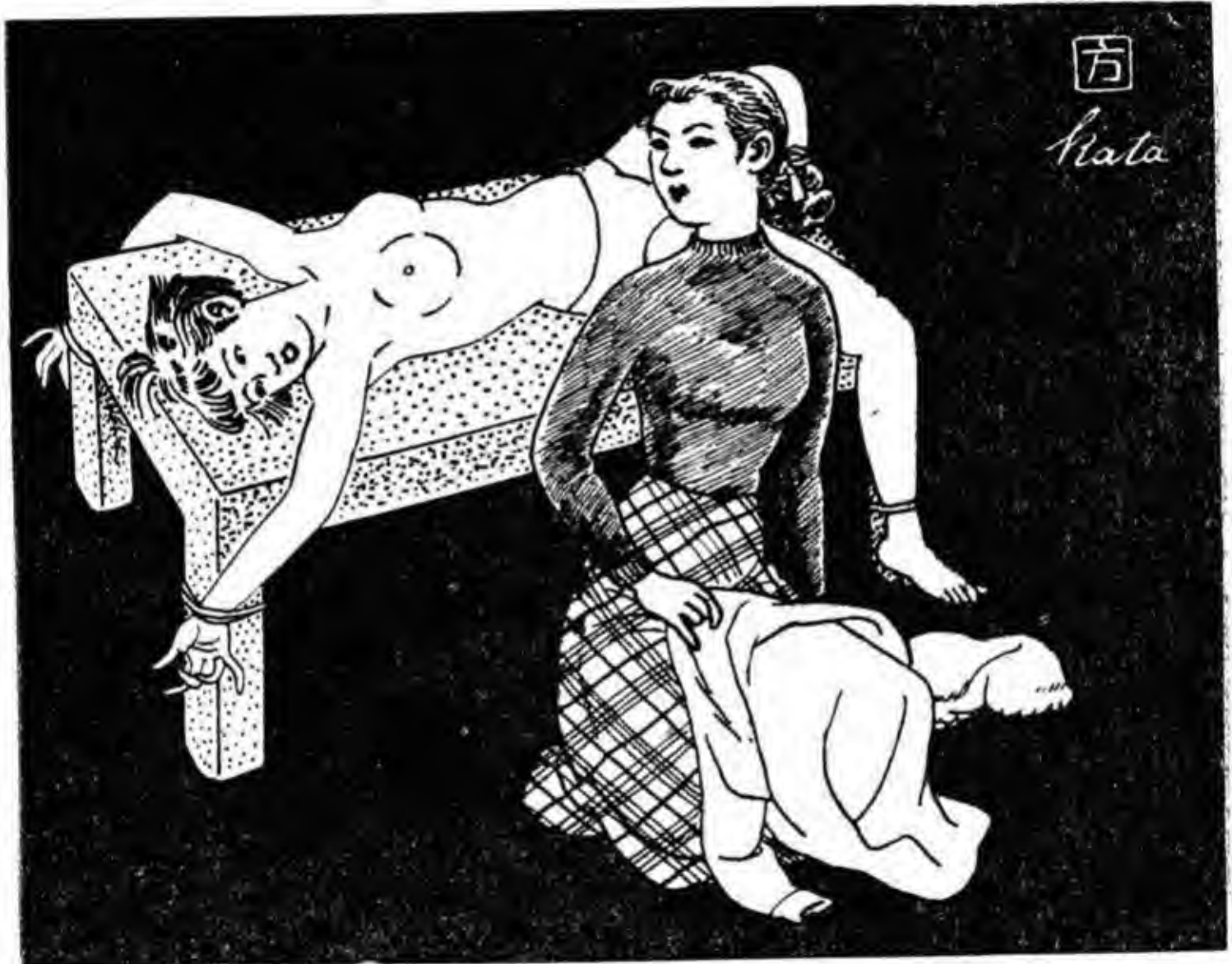
「許して。」

「もうだめなの。私が、あなたのヴァージンを奪つてやるの、ね」

「許して下さい。」

少女は喘いだ。私と智子は、彼女の縄目を解いて、もう一度今度は両手を背後へまわして縛りあげた。

少女はぐつたりして、もう半ば失神もてしまつていた。しかし、用心のために智子に彼女を押えさせて、彼女の右内股の皮膚を小さなハート型に切取つてしまった。それはほんの僅かであつた。



少女は、来た時とは別人のようになつて帰つて行つた。

私のアルバムに、この日の日時と彼女の名前、年令を記して小さなハートを第一号として収めた。

二

三郎はあれから正木とも会わなかつた。毎日仕事をとつてきてはコツコツとハンコを彫つていた。冬になつた。自炊が次第につらくなり、女中兼用に女房をもらいたい。と考えるようになった。妹と一緒に居た頃は、彼女が一切をやつてくれたものだ。彼は、自分が跛であるから嫁に来る者もあるまい。と、半ばあきらめていた。が、大塚智子の居たあとに、自分よりもみすばらしい跛の青年が割合に美人の奥さんと引越してきて朝な夕なに、夜は夜で、甘い囁きが交されているのを見聞して、自分の考えを変えはじめていた。が、さて、女房となると、ふだん人づき合のなかつた彼は、フレン

ドでさえ、探しあぐねた。

——女なんて、男の世帯道具の一つさ。中古品でも結構だ。

だが、その中古品はどこに売っているのだろうか？

彼は、夜になると、中古品を探しに街へ行った。店に陳列してある中古品——売笑婦は一寸試してみるだけで、むしろ、街で拾った女に彼は注意を払っていた。

或夜、彼は女に突当った。いや、女から当つてきたのだ。いや、多分、よろけたのだろう。女は可成り酔っていた。

「ねエ、遊ばない？、ゲルなんか、いらないわよ。私、今夜、ブルチヨワなんだから、ねいいでしょ。」

「よし、」

三郎はタクシーを呼び止めた。

「行先は私が決める。」

女は、三郎も一寸懐を気にするような、まともなホテルの名を運転手に言つた。

「君、大丈夫かい。僕は温泉マークで結構なんだ。そんなホテルに泊るだけの金なんぞ、持つちやいないんだ。」

「ちやちなセリフはよして、黙つて私についでくればいいのよ。たとへ御馳走してあげる

から……」

女は酒臭い息を吐いて三郎の顔を見た。

「おや、あんた、この前の子だね、えーといつだつたかな、秋、いや夏だつたかな。いや春、やつぱり夏だ。どうも、私の頭はどうかしている。えーと、二俣三郎だつたね？。君は」

三郎は、ドキツとして女を見直した。よく見ると、しのぶに似ている。着ている物は上等で、中流家庭の奥様然として容貌も磨かれた美しさを保っているが、その肌の奥が腐敗し、崩れかゝっている感が強い。が、二俣三郎君だつたね。と、ずばり、と言える者は、幾人とも居ない。しのぶに違いない。変つたものだ。いや、もと／＼こうだつたに相違ない。それにしても彼女は少し錯乱しているのではないか。等と思つていゝうちにタクシーはホテルの前に停つた。

女はよろ／＼と自動車から降りると、ホテルに入つて行つた。ホテルのボーイは彼女の姿を見ると、困つたような表情で三郎の方を見た。

一人のボーイが、女のところへ近付いて丁度腰をかがめた。

「生憎、今、お部屋がみんなふさがつて居りますので、又、御ひいきに……」

「いゝえ、お電話でちやんとお約束しておいた筈です。五十三号室よ。」

他のボーイが三郎に頭を下げた。

「誠に失礼ですけれども、あの御婦人は、奥様でいらつしやいますか？」

「そう、少し酔つてしまつて弱つてゐるんだ」「左様でございましょうが、実は、嘘偽りなしに、お部屋は一杯なのでして、いずれ又の御機会に御ひいきにしたいと存じますので……」

女は奥でボーイと争つていた。三郎は、つかつかとその側へ寄ると、女の頬を力をこめて殴つた。ボーイ達は驚いて、三郎を引止めた。女はぼかん、と三郎を見つめていたが、急に笑い出した。

「あなただつたのね。ちつとも痛くない。うん。私は、このホテル以外泊らないことにしているのよ。だから、今夜は仕方がないから駅で夜を明かしましょう。」

ボーイ達は玄関に揃つて、三郎達二人を見送つた。三郎は、本当にこの女と夫婦であるような気がしてきた。ひよつとすると、この女は気が狂つてゐるのかもしれない。と思つた。彼はタクシーを拾つて、女と共に自分の部屋へ帰つてきた。

女はしのぶであつた。彼女は、まじまじと三郎を見つめて、かしこまつていた。

「どうしたんだい。しのぶ」

三郎は、名前をたずねもせず、いきなりしのぶと呼んでみた。がしのぶは少しも心を動かさずに、

「みんな、そう言うわ。最初」

「みんな？」

「えゝみんな。男つて言う男みんな」。

「最近、正木と会つたかい？」

「正木？そんな男、一度も会つたことないッ知らないわ」

「じゃ、僕も忘れたのかい？」

三郎は、しのぶの精神が正常でないことに気付いて言つた。

「忘れた？つて言つたつて、あんたにお会いしたのは、今夜がはじめてよ」

「そうか、そうだったね」

彼は心の底から哀しみに打たれて、彼女にばつを合せた。

「シヨートは五枚よ。汚いわね、このお宿のおふとん。」

三郎は苦笑して、ふとんを敷き直した。

「寒いから、早くしてよ」

しのぶはそう言い乍ら、オーバーを脱ぎ、

服を脱ぎ始めた。

「君、これから、僕と一緒に暮さないか、君を街へ出しておくのは忍びないんだ」

「ほゝ、みんな、そう言うわ。」

しのぶは、するつと、ふとんにすべり込んだ。

「みんなね。でも、男は嘘つきよ。最も正直だと信じられている人も嘘つきよ。嘘つきでない男なんてないわ。」

三郎はしのぶの蒲団へ近づいた。

三

正木は、先刻、自分の靴につまづいて行つた紳士の行方を見きわめておいて紳士が踊り終えてソファに腰をおろしたところへ、近づいて行つた。

「失礼ですが、貴方は何故、何の遺恨があつて私の靴を踏んで行つたのですか。」

紳士は、眉をひそめて彼を見あげたが

「あッ」

と、起上つて正木のネクタイを掴んだ。

「正木、僕の妻をどこへ隠した。諸君、この男は」

「うるさいッ」

正木は紳士を突き飛ばして、出入口へ向つ

て走つた。

——とんでもねエ野郎を、掴えちやつたものだ。奇遇とはこのことだ。まさか、しのぶの亭主とは思わなかつた。

ぱつと、足元に帽子を投げられて、正木は美事に転つてしまつた。が、くるつと起き上ると、追つてきた最初の男の脛を蹴つた。ダンスホールは忽ち混乱して騒ぎが大きくなつた。取巻かれた正木は、じりじりと出入口へ向つた。取巻いている中には三、四、仲間が居ていつでも加勢する。と、目で合図しているので、彼も心強かつた。

——外へ出ればこつちのものだ。

「何んでえ、他人を取巻いて。被害を受けたのは俺の方だぜ。女を寐取られたのは、あんまり自慢にならねエじゃねエか。しかも、手前の女房が押掛けて来てまともな俺をこんなところにまで引ずり墮してしまつたんだぜ。損害賠償はこつちからいただきたいね。やいやい。何故道をふさいでいるんだ」

轟然とピストルの音が響いて電燈が消え、女達は悲鳴をあげて逃げまどつた。誰が発射して、誰が射たれたのか見当がつかないまゝに幾何かの人の群は戸外へ流れ出た。

ネオンの街は雑沓していた。正木は右の胸

をおさえて必死に走っていた。いや、酔いどれのようによるめき泳いで、街角から街角へと折れ曲つて行つた。たとえ死んでも警察沙汰になりたくない。と云う思いが彼の頭にこびりついている。と共に、

——俺の美術品、俺の蒐集物を、仕末しなければ……

この思いは死よりも強かつた。ともすればかすみ勝ちな眼を見開いて、彼はのめつて歩いた。血潮はやがて流れなくなつた。彼は、タクシーを拾うと荻窪へとぼした。運転手は悪酔いをした男位いにしか思わずに、彼を荻窪駅に降した。

正木は蒼白、と、言うよりも土色の顔色をしていた。彼は右胸をおさえ、時々頭を振り、あたりを見廻して方向を確かめた。

四

私が正木を拾つたのは、ほんの私の家の近くであつた。風呂の帰りに、道に行倒れている男の傍を通りすぎようとすると、その男が、かすかに頭をあげて、私の部屋への方角を訪ね、自分は



酔つて歩けないから、若し助ける気があつたらそこまで連れて行つてくれ、と虫の鳴くような声で助けを乞うた。それが正木であつたのだ。

私は、その時はまだ、正木が本当に酔払っているのだと軽く考え、また、今頃、何しに私の部屋へ来るのだろう。と、思つた。が捨

てもおけず、智子を呼んできて、二人で正木を家へ連れ帰つたのである。

彼の生命は翌朝まで保つた。彼はしきりに朝刊を待つていた。が、朝刊が来て、社会面を見てから、張りつめていた糸が切れたように彼の生命も消えてしまつた。新聞の社会面には相も変わらず、キヤバレーでのピストル自

殺だとか、親子心中だとか、まあ、ありふれた社会の断面が映し出されてあつた。

正木の死体？ それは申せませんワ。たゞ届出なかつたことだけは確かです。この悪の部屋で行われたことで、悪でなかつたためしはないのですもの、正木に就いてだつて、声をひそめなければなりませんワ。智子は流石に翌日は気分が悪いから、と、ハイキングに出掛けましたが、まあ、私の言えることは、それ位です。

たゞ、正木の告白によつて、彼の所謂美術品の所在を知り、私は忽ち蒐集家、と、言つてもふさわしいだけのものを手に入れることが出来た。

私は二俣淫房の看板を下した。そして、智子の連れてくる娘や青年達の皮膚にメスを振出した。

しかし、商売となり、相手がすゝんで肌を提供するようになると、急に私は興ざめがして、むしろ、このような仕事は苦痛になつてきた。智子とて同様らしく、何か別の商売はないか。と、言うようになつた。

「そうね。もつともつと徹底した悪魔的なことをね。」

と、私は笑つた。

或日、私は智子を送り出して部屋を掃除していると、兄の三郎が、ひよつこり訪ねてきた。彼は、すっかり憔悴し、悩める小羊の如く痴呆のように黙つて座敷へ上つてきた。

五

「どうしたの？ 兄さん」

「うむ」

「どうかしたの、しつかりしてよ」

「最近、こつちへ、正木が来なくなつたか」

私はどきつとした。

「さあ、あれから、さつぱりよ。」

「ふーん、おかしいな。」

「こつちへ来た、つて言つたんだぜ。」

「へー、いつ？」

「ゆうべもさ」

「何言つてんのよ。夢ね。」

「まあ、はつきり言えば、夢だ。」

「よし、てよ、気味が悪い」

私はいささか辟易した。正木の亡霊が兄のところへ出るのだろう。正木としたら私のところへ出たいのだろうが、この部屋の悪気に気押されて来られないにちがいない。哀れな亡霊である。

「で、参つちやつてゐるのね。」

「いや、そればかりじゃあない。しのぶが本当に気が狂つてしまつたんだ。」

私はびくつりしてしまつた。いきなり、しのぶが、と兄に言われても最初は何のことかわからなかつたのであるが。

「結婚したんだよ。ふとしたことから再びめぐり会つてね。それが、もう毎晩だ。縛つてくれ。と、せがむんだ。初めのうちは興味もあつたが、そのうちにやり切れなくなつてしまつたんだ。そして、しまいには、夕方になると、何もしなくても疲労を覚えるのだ。僕はあらゆる縛り方を研究し、しのぶの満足するようにしたよ。たわしでお尻をこすりもしたさ。縛つてぶらさげたり……あきるね、ところが、あいつはあきないんだ。いくらやつても、いくらやつてもあきないんだ。恐ろしい肉塊だよ。おい、お茶をくれ。あゝ、こゝへ来たたらやつと休まつた。それにしても、正木は本当に来ないかい。」

「えゝ」

私はお茶を入れながら、寒気を感じた。

「二階へ上つてみていいかい」

二階とは天井裏だ。

「えゝ、どうぞ。」

兄は押入れから天井裏へ上つて行つた。私

は、これは燃してくれ。と、正木から言われたノートを急いで取出して読み初めた。

六

×月×日

正木は、机の上に横わっている私の身体を撫ぜまわした。何と電燈のまぶしいことであらう。

「まだ、メスを振うのは惜しいな。ねエ、僕んところへ来ない。」

私はがつくり肯いた。

「ずーつとだよ。」

私はより強く肯いた。

正木は石けん水をつけてからカミソリを私の肌にあてた。

と、刺すような鋭い痛みが、私をふるわせたと。

「だめじゃないか。」

「いたかつたの、少し。」

「この位、我慢しなくちや。」

しかし私は、正木が確かに肉体の一部分を切取つたことを直感した。

×月×日

正木は一日に一度は押入れから天井裏へ上つて、コツコツと何か作業していた。それが

◇告白と手記と体験◇

懸賞募集

賞金

| 佳作 | 秀作 | 優作 |
|------------------|------------------|------------------|
| 一篇に付き 一千円 若干篇 | 一篇に付き 二千円 若干篇 | 一篇に付き 三千円 若干篇 |

規定

- 一、枚数は一篇十五枚から三十枚程度まで
- 一、必ず未発表のものであること
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めませんが、入選作は最近号に発表いたします。
- 一、賞金は入選作品発表と同時に送ります。

匿名は御自由です。

何であるか、あとでゆつくり見せてやるからそれまでの楽しみにしておくように。と、言つて、私の覗くことを許さなかつた。

私はもう夫の家へ帰る気は全くしなくなつてしまった。それは、正木が縛られてくれるからだ。彼は縛られたまゝでもがいた。

私は、彼には不思議と嫌悪感がないのだ。

×月×日

彼はやつと、私が天井裏をのぞいてもいいと、言つた。私は、子供のように、胸をとき

めかしながら、彼にお尻を押してもらつて押入から天井裏へ這い上つた。すぐその後から彼も上つてきた。

何かジュウタンのようなものが敷いてあるらしかつた。目が少し慣れてくると、彼が手を加えたであろう細工が、私にも次第にわかつてきた。彼は、私の手を引いて、そろ／＼と奥へみちびいて行つた。

「一番苦心したところなんだよ。」
「そう？ どんな風に？」



因

kato.

「今にわかるよ」
彼は私から手を離して言った。

「その梁をまたいで！」
私は彼に言われたとおり、六帖から二帖へ
移るべく梁をまたいだ。と、ぐーん、と、衝
撃が私の全身を打って、私は二帖の方へ転つ

た。

.....

兄が押入れから降りてきたので、私はあわ
ててノートを閉じて本箱の中に差込んだ。
「どう？ 何かあつて？」
「いや。」

「私、こゝ、あきちやつたのよ。と言うより
いやんなつちやつたの。商売は繁盛している
けどね。」

「僕るところへ、くるかい？」

「えゝ、兄さんさえよければ。」

「しのぶが居るんでなア」

「精神病院へ入れちやいなさいよ。」

「それも可哀そうに思えるんだ。」

「ふん、あんなこと言つて、惜しいんでしょ
う？」

「それもあるね。それから、しのぶの奴、隣
室へ入つて裸になるらしいんだ。隣りに若い
夫婦が居るんだがね。その亭主の方と僕とを
間違えるらしいんだ。奥さんが泣き込んでき
たことがあつて弱つたよ。だがそれはまだい
い方なんだ。縛つてくれ、つてだがせがむら
しいんだ。」

「ふーん。ひよつとすると、この部屋へ来る
と、しのぶさん、治るかもしれないわ。」

「うん、僕もそんな気がするんだけど、大塚
つて言う娘は？」

「ふゝ、思い出したのね。いけないワ、あの
娘は私のもの。あなたにはあげないワ」

「じゃ、ここに居るんだね。」

「えゝ」

「しのぶと、こゝにおいて、大丈夫かな？」

「勿論、あの娘も、すっかり大人になつたわ私よりもテキパキとしてよくやるわ」

「それから、しのぶのノート、お前のところにあるだろう？」

「ええ」

「見せてくれないか」

「いや、あなたの罪悪のしるしですもの。兄さんの首の根っこを私、ギョツとおさえていたいの。しのぶさん。くわしく書き記しておいたわ。あなたのことね」

兄は弱つた顔をして、目のやり場を探していた。

「兄さんにお見せすると、もう返してもらえないからな」

私は本箱からノートを出して兄に見せびらかした。兄は苦笑して起ち上つた。

「帰るよ」

「そう？ もつとゆつくりして行けばいいのに……」

「いや、そうしてもいられない。しのぶのことも心配だからね」

「そうね、じゃ」

私は部屋の中で、玄関の開閉する音を聞いてから再びノートを開いた。

×月×日

私は正木よりも二俣三郎の方が私にびつたりしていることを、今日つくづくと感じた。

私がこの天井裏に裸のまゝ縛りつけられてから、もう幾日、幾月たつたのであろう。身体の節々の痛みもやつとれ、少しはこの奇妙な部屋にも慣れてきたとは言ふものの、情無いきわみだわ。

二俣がこゝへ来るようになってから幾日だろう。彼が、正木の目を盗んで私の部屋へ入ってきた時、私は、何か正木へ復讐したような錯覚と、二俣の素晴らしいスタイルにうつとりしてしまつた。

私は、いきなり、頭をガンと殴られてノートを持ったまゝのめつて倒れた

「馬鹿、黙つて僕の言うことを聞けば、こんな荒療治をしないで済んだものを」

私は、兄だな、と思つた。が、意識が次第に遠くなつていつてしまつた。

.....

私はまだ起きられない。いや、頭の傷が治つても起きられないのだ。私は裸にされて天井裏につながれているからだ。

ノートは勿論、ないらしい。兄も来ない。

私をこゝへ縛りつけたのは、言うまでもなく智子だ。私の寒さなどちつともかまつてくれない。時に電気で暖めてくれる位なものだ。

下では、智子が何かよからぬことを開業しているらしく、昼も夜も、人間の男と女の話声がひびいてくる。そして、夜半になると、智子は兄のところへ泊りに行き、朝この部屋へもどつてくる。それが毎夜だ。いわば、悪の部屋へ通勤していると言えよう。しのぶのことは噂にも聞かない (完)

【読者通信】

(投稿歓迎)

幼少の頃より自虐的な性向を持つ私が最も好んで読むのは、切腹に関する記事や小説です。殊にバグツリと口を開いた傷口からはらわたのはみ出ているような写真や挿画を見ると、腹の奥深くまでかきむしつてしまいたい様な衝動を感じます。実はこんな異常な性癖をもつ自分を悲しく思い、世間の眼は勿論、家族の眼からもひそかに逃れてたゞ一人秘密な行動をとつていたのでした。ところが奇クを読んでこうした性向を有する人が案外多いことを知り、大変嬉しく思い又一種の安心感すら得ました。奇クのように切腹に関する記事や挿画をふんだんに載せた雑誌は他に絶対ありません。求めて久しく与えられずに悶々とすごして来た私にとつて奇クは当に于天の慈雨にも等しい嬉しい贈り物でした。

(福岡 Y・S 生)

少年矯正院体験記

つりとえび

獄 収 一

少年の頃ふとした事から少年監獄に入れられて数々の苦しい経験をした思い出を度々書かしていたときでしたが、次第に牢内で芽生えたマゾヒズムを味あうようになってからの苦しかった経験を書かしていただきます。

例の釘を拾つてから罰を加えられ、最下級の四級に下された事は述べましたが、その時以来札つきの不良少年とされ、あくまで叩き直さねばならないという事になっていたようです。中でも一番私を憎んでいた、というより一番少年囚を苦しめていたHという看守に目をつけられたのは当然でした。このH看守はとにかく少年囚を裸にして笞打つたり、又

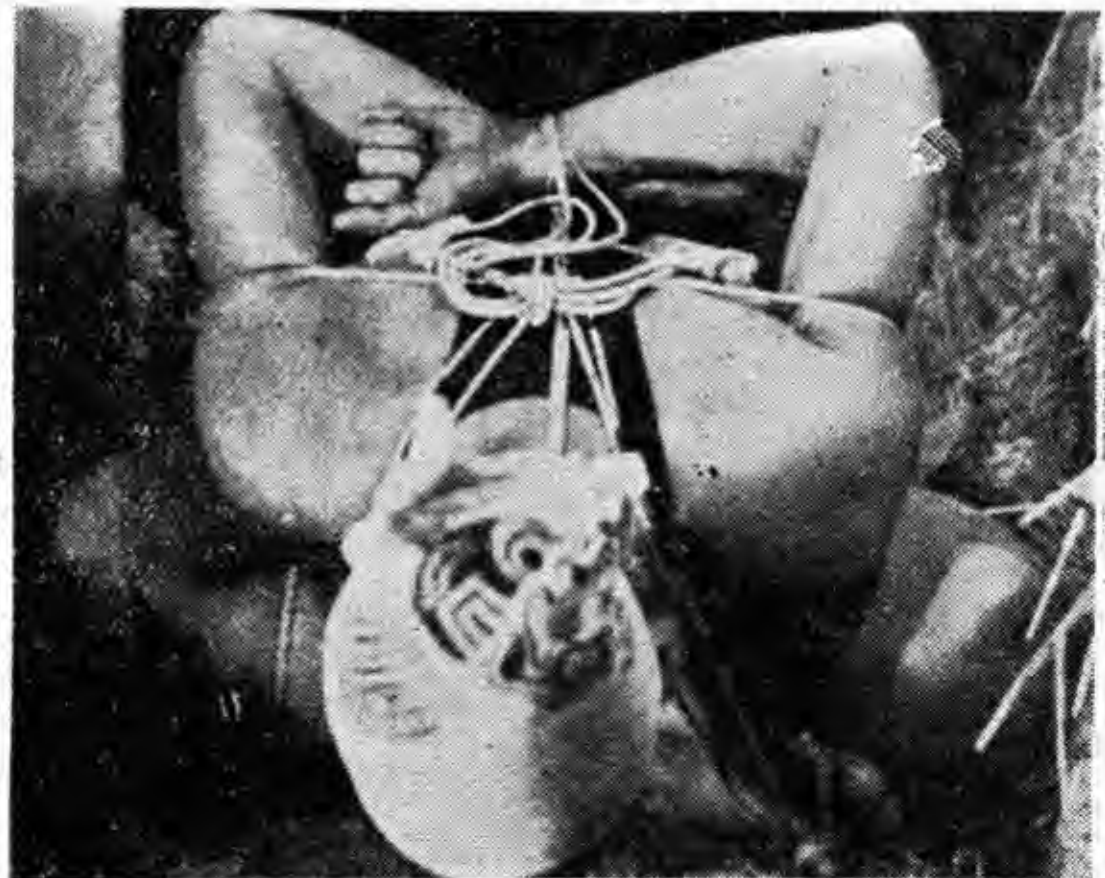
縛つたりするのを好きだと常々云つていたサデイストで、これにかゝる事を誰もがとても恐れていました。

少年囚は屋外作業に出た時は中へ入る時、全裸体にして身体検査をされ、おまけに一本のロープをまたがされ、

絶対に体に何も隠していない事を確かめられてから級によつて別の着物を着せられ、それぞれいましめられて牢に入れられるのです。

釘拾い事件があつて以来二週間目に我々極悪の四級少年の作業服を脱いだ附近に金鋸の歯が落ちていたからたまりません。牢内では釘を拾つてさえ前に書きましたような罰を受け

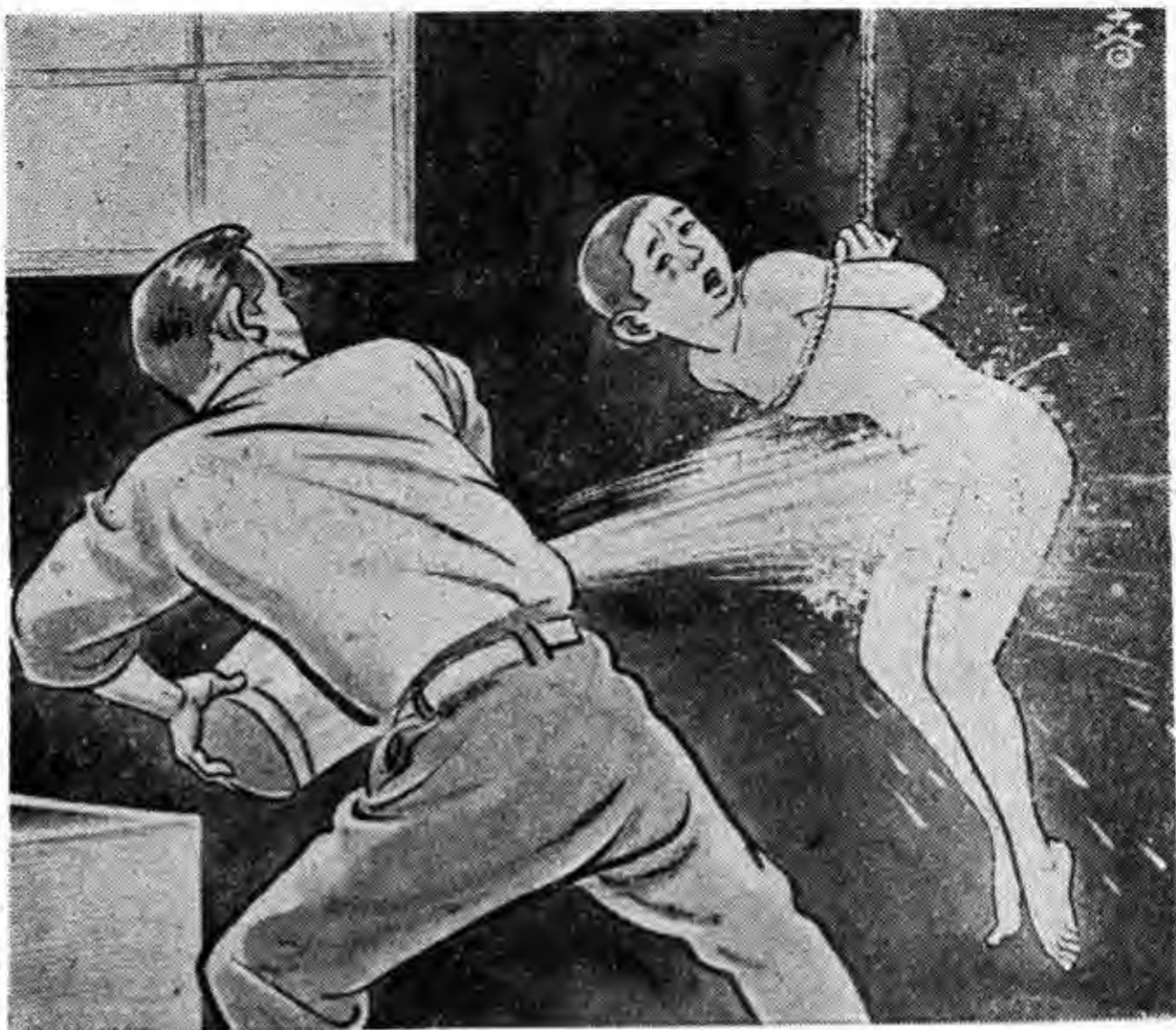
(作者より送られてきた写真)



るのに金鋸の歯があつたのでは、只で済むわけがありません。

金鋸を用いるのは二級少年以上の模範少年の出る鉄工場なので我々四級少年なんか関係のないはずですし、又きびしい監視の下で金鋸の歯を入手出来るはずがありません。それですのにその金鋸のあつた作業服の置き場所

に關係のある少年囚は全部徹底的に調べられ拷問を受けました。この金鋸の齒は後で聞くところによりますとH看守のサディズムを満すために計画されたものらしかったのです。



だから誰が持つて来たのでもなく、H看守自身がそこへ置いたようでした。

翌日関係者は全部作業止めで拷問を受けたのでした。この拷問は三日間行なわれ、毎夜十二時頃まで拷問のうめき声や答打の音等が聞こえてとても寝るどころではありませんでした。三日目にととう私の番がやつて来ました。乱暴に監房の鍵が外ずされ、そして戸をあけた時はぞつと心臓も止るような思いがすると同時に、その反面なんともいえないぞくつとするような感

じにおそわれ、とても複雑な気持ちでした。

「こら、二四号出る！」

と凄いいんまくのH看守の声に「ハイ」と返事して出ますと、直ちに後手十文字に縛り

上げられてしまいました。

H看守はうす笑いの顔で

「おい、二四号、貴様嬉しいのか」

と云いますので

「いゝえ、別に何も嬉しくありません。一刻も早く疑がはれるのを望んでいます」

と答えますと、H看守は左手で縄尻を押さえ、

「うそをつけ、結構、喜こんでいるではないか。どうだ、縛られると嬉しいか」

と云ったのです。右手で叩かれた時びくつとして尻を引いた所がH看守のとても気に入ったようです。暫くして

「おい二四号はつきり云え、縛られると嬉しいのだろう。」

と云い今一度前の動作をくり返します。何しろ四級少年のぶち込まれている所といえは各々独房で極悪少年の収容所ですから他からは絶対に見ることが出来ないのので何をされてもどうする事も出来ません。

「おい二四号、やつぱり嬉しいのだろう、どうだ」

と云われた時思わず「はい」といつてしまいました。後から直ぐ後悔したのですが、もう追いつきません。

「よし二四号、俺は今まで貴様のような奴をさがしていたのだ。今日はうんと可愛いがつてやるぞ、覚悟しろ！」

と云つて気味の悪い笑いを顔に浮かべられた時は一寸ぞつとしました。

「歩け」と尻を蹴飛ばされ、背中をこつき廻されながら長い牢屋の中を通り抜け特別浴場へ連れて来られました。特別浴場とは病氣になつた少年を他の少年に伝染するといけなないので隔離して入れる浴場ですが、その真の目的に使用されることは極くまれで大部分は拷問のため用いられているようでした。

水槽は二人位入れるような小さいもので水が一杯はつてありました。天井からロープが吊り下げられているのが一目で拷問をするという事がわかりました。そこで縄を全部解かれ、その浴場の中央に坐らされ

「おい二四号、この間の金鋸について知つている事をみんな云え、もし云わんと考えがあるぞ」

とおどかされましたが、身におぼえのない事を云えるわけがありません。

「よし、それでは可愛いがつてやる。上のシヤツを脱げ」

と命令されました。シヤツを脱ぎますと、

すぐ後手にきつく十文字縄に縛られてしまいました。

やがて立たされ、後手を天井からのロープに吊られ、足の拇指でかろうじて立てる位まで締めつけられました。そして次にパンツもとられてしまいました。全くの裸です。之は拷問中放尿や脱糞をするのでとるのです。

「こら、二四号、貴様いゝ氣持になるな」

という声と一緒に下腹部へザアと水をかけられてしまい、次に頭から続けて五杯水をかけられました。そうでなくても締つていゝ縄がぐんと締つてとても苦しく、身体が一本の棒の様になつた氣持です。

すると「びしり」という音と同時に尻に焼火箸を当てたような感じがしました。笞打たれているのです。「びしり」と来る度に尻をひつこめるのですが、そうすると足が地から離れそうになるので、その度にロープが締つてきます。H看守は無言のまゝ「びしり」と続けました。そして度々水を「ザア」とかけられ、又「びしり」／＼とおよそ百七十位まで笞打たれました。もう全身汗だらけで、どうにもがまんが出来なくなり

「担当さん、もう苦しくて、がまん出来ません」

と云いますと

「がまん出来なければ白状しろ」

と又「びしり」／＼と笞打たれます。尻は始めは痛いのですが、やがてしびれてしまい痛くもなんともありません。それから三十分位も殴り上げられた頃は、何が何やらわからなくなり急に目の前が暗くなつてしまいました。

ふと氣がつかますと、両手には頑丈な手錠がかけられ、裸のまゝ牢の中に転がされていきました。起きようと思いましたが、一寸体を動かせば笞打たれた所がやけるように痛く、とても動けるどころではありません。

その時、他の少年が笞打たれて呻いている声が聞こえて来ましたが、それが何とも云えない音楽のように聞こえました。何時間経つたでしょうか、やがて牢の戸があいて全裸体のまゝ、頂度私のように両手に手錠をかけられて尻の方に笞打たれた所が赤黒く、くつきりと痕がついている少年が氣絶しているのをまるで荷物でもほうり込むようにどたんと投げ込まれました。その時こちらにぶつかりそうになりましたので、一寸体を動かしますと目ざとく看守に発見され

「おい、二四号、氣がついたか、次のお調べ

が待つているぞ、出る。」

と云いましたが、とても起き上る氣力すらありません。看守は「怠けるな」と靴で踏んだり蹴ったりします。一生懸命起きようとするのですが駄目です。しかし遂に曳きずるよ
うに起こされ、又二人の看守に両方からか
えられ元の拷問室へ連れて行かれました。

「二四号、一寸は体にこたえたらう、も
うそろ／＼申し上げてよよかろう。」

とH看守は薄笑いを浮かべて申しま
す。どうにも返答のしようがありません
ので黙っていますと

「しぶとい奴だ、そんならえびで行こ
う」

と他の看守と一緒になつて全裸体の儘
後手に縛りました。この時はのどには縄
はかけられませんでしたが、いさゝか
楽なように思っていますと、それはとん
でもない考え違いであつた事がわかりま
した。両足をあぐらをかゝせ、そしてし
つかりと両足を縛られました。次に肩と
足とに縄をかけてぐつと前ががみに締め
られた時は驚きました。全く苦しいどこ
ろのさわざではありません。今までと全
く違つた苦しさでした。どん／＼縄を締

めれて、遂に両肩が両足へ附くまで締められ
「よし／＼」という声と一緒に縄は留められまし
た。やがて十分もしたでしようか、腰が苦し
く、又息も苦しく、とてもやりきれません／＼
うん／＼／＼というき呻声が出ます。

そうしますとそれを待つていたかのように
「びしり／＼」と肩を打たれます。とても痛いの

ですがどうすることも出来ません。三十分も
しますと、遂にそのまゝの姿勢で放尿と脱糞
をしてしまいました。H看守はそれを待つて
いたかのように「ザア／＼」と水をかけまし
た。とたんに縄が締つて実に苦しくなりまし
た。今までは苦しさで快さが同時に來たので
すが、今度はこんなえび縛りなど始めてでい



わゆるマゾヒズムのもちこたえられる限度を越していたのでしようか、苦しさばかりでした。

次に糞をしたから尻を洗つてやる」と云つてそのまゝの姿勢でひっくり返されました。もう完全な一個の醜い肉塊でしかない無細工な形です。しかしひっくりかえされた時の苦しかった事、体中がばら／＼になるような気がしました。そして尻を笞打されましたが、その時次第に快感がよみがえつて来ましたのでどうやら持ちこたえる事が出来ました。しかしその快感が来る前に吐き気があり大分吐きました。吐き気が甚だしくなり、全身脂汗で呻き苦しんでいる時「こら二四号、貴様金鍬の齒の事を知つてい

るだろう、白状せい」

とど喝られましたので、苦しさの余り

「おゆるし下さい」と云つたのをH看守は恐れ入りました、と

解釈して

「もつとくわしく申し上げろ」

と／＼びしり／＼と尻を鞭打たれました。今までに曾つてない素晴らしい感覚が全身を襲つて来ました。そしてそのまゝ気が遠くなつてしまいました。

今度気がついた時には自分の何時も入っている牢の中に裸のまゝほうり込まれていました。シャツもパンツも側に投げ込んでありました。したが、とても体を動かす事なんてとんでもないことで、そのまゝ寝ていました。夜になると三八度の熱が出て翌日から一週間病舎へ入れられました。後で病舎で他の少年から聞いたのですが、やはり私が一番ひどくやられたそうです。

病舎へ入れられてから毎日尻と肩を湿布して貰いましたが、五日間は物もろくに食べずにひたすら寝てばかり居りました。之は／＼えびつり／＼というのだそうですが、とにかく一番きつい拷問だそうです。しかし私には前の窄衣の刑より楽だつたように思いました。

やがて一週間目に元の牢舎へ帰るようになりましたが、その時渡された衣類が真赤なラニングシャツとパンツです。

「どうしてですか」

と聞きますと少年囚はその処遇上必要がある時は他の囚人と異なる色の衣類を着用せしめてもよい／＼という規定があるそうで、／＼とにかくお前は極悪の不良少年囚だから之を着ろ／＼と申し渡されました。逆らえば如何なる罰があるやらわかりませんので着ましたが、

当分他の少年が振り返つてみますので、牢内とは云えとても恥かしく、それが又特別の快さがありました。そして出獄の日までH看守のよきおもちやとして取扱われました。

赤の衣類を着せられてから左右の二の腕のくびれている所に細い鉄の鎖を巻かれ錠をかけられたり、その他色々な又と得難い経験をしましたが、その話は又次の機会に譲ります

【読者通信】

(投稿歓迎)

他の雑誌が出たり出なかつたりしている中に貴誌だけは毎月確実に発行されております事は愛読者として本心に心強く嬉しい限りでございます。五月号では私の投稿いたしました拙い作品が佳作として発表して頂きまして本当に恐縮でございます。今迄書店で購入いたしておりましたがこれから一カ年は直接お送り下さるそうで楽しみにいたしております。私の一番愛読いたしておりますのは、吾妻新さんの感情教育です。特にこれは私だけの感じかしれませんが、五月号で結城由紀さんの告白のところ、よかつたように思いました。私も過去にそういつた経験がございましたので身につまされて拝見しました。口絵も毎号興味深く見せて頂いておりますが四月号のハイヒールで手首を踏まれている写真なんか、少しも嫌らしさがなくて大好きでした。今後共御誌の益々御発展遊ばされることを願ながらお祈りいたします。(堀川恭子)

私達は余ほどのひどい病気が、月のさわりでも辛抱出来ない程でなければ、滅多に休むようなことはありません。休めばそれだけ収入が減つて困るのは自分であるということをよく知っているからです。しかし、そうかといつて一夜の歓楽を求めてくる人たちに、心



特 集 告 白

A^ア N^ー U^ヌ S^ス い じ め

沼 田 扶 二 世

からのサービスばかりしておれば一月と身体がもたないのです。

私たちはお風呂へ入った時、自分自身の年齢に似合わない身体の衰えというものを、まざく〜と見せつけられて悲しくなる時があります。それに義務的な営みと荒淫からくる肉体の習慣は、私たちをすっかり或る意味の不感症にしています。私の朋輩のM子さんなんかは、本当に大人しい真面目な人だったのに、お馴染さんの一人にヒロボンの常習者の人があつた為に、M子さんもう〜一日に

三十本も打つようになってしまつて、「もうダメだ、死にたい、死にたい」と云つていましたが、相手の人がヒロボンを打つていると、どうしても、調子を合わせるために、習慣になつてしまふのだそうです。私はヒロボンの恐ろしい事をよく聞かされておりますので、お友達が冗談に打つてあげようか、と云つても、いつもお断りしていますが、M子さんも最初は大変楽しそうに、「ヒロボンつて、こんなにいいものかしら」と云つていた位ですから、無理矢理に最初は打たれても、

すぐ病みつきになつてしまふんでしようね。

美味しいものをお腹が割れる程食べてみたい。大声で歌を唄つてみたい。思いきり痛い目にあつてみたい。刺戟に麻痺してしまつている私たちは何か変つた事に撞けているといへば語弊がありますが、とにかく、変つた事をしてみたいという気持、あらゆる世間から抑圧されている反動が、朋輩に対するリンチのような形になつて表れてきたのだと思います。

若い妓が年増女たちの玩具にされた後ではきつと、私たちはこの次の私的制裁は誰がされるのか、という事を考えるのです。今日は私が自分自身でこの身にうけた体験を書いてみたいと思います。この事は一寸前にも書きましたように、私はアースに対して強い興味を持っていますので、恥しい中にもその思出は忘れられないものでした。但し、私刑を加えた姐さん達は、その時は私のそんな気持もわからずに、只、私が羞恥や苦痛に悶えていたのだらう位に思つていたことでしょう。

それは、私が玉はさみりのリンチを加えられてから間なしです。あれから私は園子とは口もききませんでした。女というものは執念深いものですから、何んとかして仇を打つ

てやる隙はないものかと狙つていたのです。

私と園子の二人きりなら喧嘩をしても負けな自信はありましたが、中々そう思うように機会はありませんでしたし、それに園子の方も、私のそんな気持がよくわかつていますから、一人にならうとしません。そうして逆にお梅と政子の二人を語らつて、私にリンチを加えようとしていたのです。

お梅と政子の二人は以前、さんざん私の身体に悪戯をした面白さを忘れかねなかつたのでしよう。園子の頼みにすぐ承諾して機会を伺つていたらしいのです。そんな事は夢にも知らない私は、梅雨前の午後のひととき、静かたのは皆映画でも見に行つたのだらう。位に思つて、シユミーズ一枚で転寝をしていたのです。そんな、あられもない私の姿を園子が盗見して、あとの二人を連れて私の部屋へ来たのも知らずに私は寝入っていました。

私のはツと気がついた時には、私の頭の所にお梅が立ち、政子と園子とが私の両方の足を片方ずつ持ち上げているところでした。

「あれツ、お前達、何をするんだよツ」

私は両足を畳につけて、二人を蹴倒そうと焦りましたが、その時早く、脛をぎゅつと抱えるように持ち上げていましたので、私の足

は只徒らは空を蹴つて伸縮みするばかりでした。

「何にを、じたばたするんだよツ」

お梅は右足を挙げて私の顔をぎゅつとにじるように踏みつけましたので、私の鼻はのきたない垢じみた足の裏で嫌という程押しひしやげられました。私は両手を畳から放してその足をはねのけましたが、その隙に、足を持つた二人は私の足首へ手をかけて、うんと持ち上げました。シユミーズの裾はまくれて私の顔はすつぽり掩われてしまつたのです。あツと思つて身体力を抜いた瞬間、誰かの手が………のゴム紐に掛つていました。両方の太股を抱えて高く持ち上げられると、私の頭は畳すれ／＼に迄逆立ちさせられてしまいます。両手を伸して立つている二人の足を引つ掻こうとすると、ドシンと私の頭を畳へぶつつけるのです。

私はもう仕方なく、シユミーズの裾をかぶつたまゝ観念してじつとしていました。隙があつたら、二人の足でも掻つさらつて倒してやろうと思つていたのです。然し、彼女達もそういうことには、馴れきつていたのでしよう。両足をふんばつて、両側から私の股をひらくように引つはつていたのでどうするこ

とも出来ません。お梅は私の背中の方へ廻つて立っています。

この時の私の姿勢は、お尻を天井へ向けて逆立ちのような恰好をさせられているのです。私も外の人がリンチを受けている時、こういう姿勢をされているのを見たこともありましたが、内臓という内臓が逆に頭の方へ下るので、頭がぼうとして、もうどんな邪怪にされても抵抗する力が湧いてきません。

こんな風にして、やゝ暫く逆立ちさせられていました。丁度人が立つた目の前にさらけ出されたのですから、若し私の顔がシユミーズの裾でかくされていなかったとしたら、きつと真紅になつていたことでしょう。同性とはいえ、他人の前でこんな羞しい恰好を無理矢理にされていると思うだけでも、私の全身はかつかつと燃えるようでした。そして最初あれ程なんとかして反抗しようと思つていた私でしたが、その頃になると、もうすっかり大人しくなつてしまいました。彼女達も又、それを待つていたのでしよう。

「ねえ、こんなものでどうだろう？」

「そうね、やつてみようよ」

「もつと、足を引っぱつて——」

そんな言葉が聞えたと同時に、私は思わず

「ウウウ、く、クルシイ……」

と叫んで両足をビク／＼と痙攣させるようにもがきました。お政と園子の汗ばんだ手は私の太股に爪型がつく位ぎゅつと握りしめてあります。私は畳の目に両手の爪を立てゝこらえました。全身の皮膚がビリ／＼とするような衝動でした。

火のつくような痛みです。

「さあ、もう

これ位でいい、
だろ？」

私には、もうどうなつて
いるのかわかりません。只
その火のつく
ような猛烈な
痛みが不快な
ものでなく、
ウ、ハ、と呻
めいていなが
ら、もつとき
つくしてほし
い、と心の中
で叫んでいる

のでした。こんな場面を若し男の人達が見たとしたら……とふと、そんな時の事を想像してみたりしました。

苦痛のあとの、去脱したような全身の倦怠感は又格別でした。私は手を離されても、シユミーズ一枚の姿でじつと寝ころがってしまふに思えたからです。



わが心の記

—あるマソヒストの女の日記—

古川裕子

古川裕子が皆様の前に始めてお目見得したのは一昨年の十二月でした。「囚衣」——これが私の最初の告白だったのです。それから「続囚衣」「長期刑」「凌辱の幻想と期待」「猿ぐつわと私」「裕子とお仕置」そして「私を愛して下さった皆様へ」、最後に「慟哭の記」指折り数えれば八篇にものぼります。この間足掛三年——満一ケ年半、私は厭きもせず愚かしい「告白」なるものを発表しつづけて



参りました。

読者の皆様には、もう古川裕子なる特異な女の、すみからすみまですっかりお解りでございましょう。小説ならば「構想を変えて」ということもあります、自分を語るだけのこの告白では、たゞ同じことをくり返すだけなのです。

もうわかつたよ——苦笑気味の皆様の御声が聴えるようでござい

ます。私自身も「慟哭の記」以来精神的にも肉体的にも疲れはて、たゞ呆然と日を送っていました。

義兄が心配して気をつかつてくれますが、何もしたくありませんでした。すべての意欲が身体中から脱けきっていたのです。もし私に何かの意欲があるとしたら、それは「何にもしたくない」ということだけだったのです。神経衰弱というのでしょうか。心の上に重苦しく何か被さつて、虚ろな目をして、たゞぼんやりと外を眺めているだけ、徹底した無意な生活でした。

この頃——長い、いやな冬が終つて春の朝が訪ずれてきた。この頃、私の目にはやつといくらかの生気がよみがえり始めました。暗い冬の闇に水洩れの日が落ちてきたような心の風景でした。どこかでかすかに足音が聴えます。春の前ふれのような雨が糸よりも細くふりこぼれて、柔かい土をしつとりと濡らしている今日、私は何か久し振りでペンがとりたくなつていたのでした。

そこに奇譚クラブ編集部からの義兄を通じて伝言が届きました。何か書いてみせて欲しいと。

どうやら義兄は、私がポツリポツリとこの上もなく面白くもなさそうに洩らした、私自身の自分の体験と彼自身で美化した私の模像とを組み合せて、何か書いて送つたらしいのです。ところが至つて正常な心理しか持たず、又至つて謹直小心な事務員である彼——ごめんなさい。正直に云つていなのです——に大して器用な真似が出来るわけはなく残念至極にも没になつた様子です。いいえ私には、ひたかくしにしていたのですけれど、頭かくして尻隠さずとやら、義兄の部屋の肩籠の書きくずしを御掃除の時に拾い読みをして、私にはすっかり解つていなのです。何ともほゞえましいもので、久し振

りで気が晴れつつあつた私は、それを種にして義兄にとうとう白状させました。彼は白髪のみじりかけた頭を掻き掻き、

「いや裕さんの真似をしたらね。とんだ大失敗さ。面目なくてひたかくしにしていたのだから。とうとうことわられたが、貴方でなくて裕子さんに是非だとき。よつて投手交代願います。日常のこまごました生活や心理について書いて欲しいそうだ」

義兄は自分でもおかしくてたまらぬように、笑い笑いこう伝えてくれました。

「お書きになるとき、私にひとこと相談して下さい、いくらでも御援助しましたのに」

「いやいや大分裕さんの云うことから剽竊したのだからね。それでもだめさ。相談しようとも思つたのだが、テレ臭いのと裕さんが余り憂鬱そうだったので、声をかけかねた。もう柄にないことはやめるよ、あとは頼む」

私は何ヶ月ぶりで声を出して笑いました。そして何はともあれ「自分のために」何か原稿用紙に書きつけて見るかなと思ひ始めました。ですから、これは、重い頭をふりしぼつてポツリポツリと書きためた、古川裕子の心の日記です。皆様が私をもつとよくお知りになる材料ともなるかも知れない——それがたゞ一つこの稿の目的なのです。

×月×日

朝からひとときもやまず雪がふりつづいた今日、今はもう夕昏れて、外は真暗、白い緋のように雪がななめに降つている。

一日私は何もせずに本を読み暮した。この頃は義兄夫婦も私を病人扱いにして、私に触れず。そつと一人にしておいてくれる。そこ

にあの人のいい二人の私への愛情を感じる。それにしても、義姉にとつては、時に私が嫉妬の対象にならないでもない立場なのに、彼女から感じられるのは私への愛情だけ。何だか却つて不自然な感じがする。

簡単な夕食をすませてから、又自室にひきこもる。

ふと亡夫のかたみを出して見る気になる。「かたみ」と云えば時計だとか指環だとか衣類なのが普通なのに——私の云うそれは、いろいろな責め道具なのだ。私には何よりも大切な品々。鍵のかかる箱にキチンとおさめて誰にも見せず、誰にも手を触れさせない。

一つ一つ私は出して見る。手錠の類。足枷、首枷の類、どの一つにも、しびれるような官能の想いが込みついている。精巧で、よくこんなものを作つたと思うものもある。おそらく私の死後、この箱が明るみに出て、人々の目に触れたならば、貴重な変態性欲者の使用具として、精神医学か又は犯罪博物館のようなところに永久に保存され展覧されるのではないだろうか——私はそれらの触覚を樂しむように、まさぐりながら、こんなことを考えます。

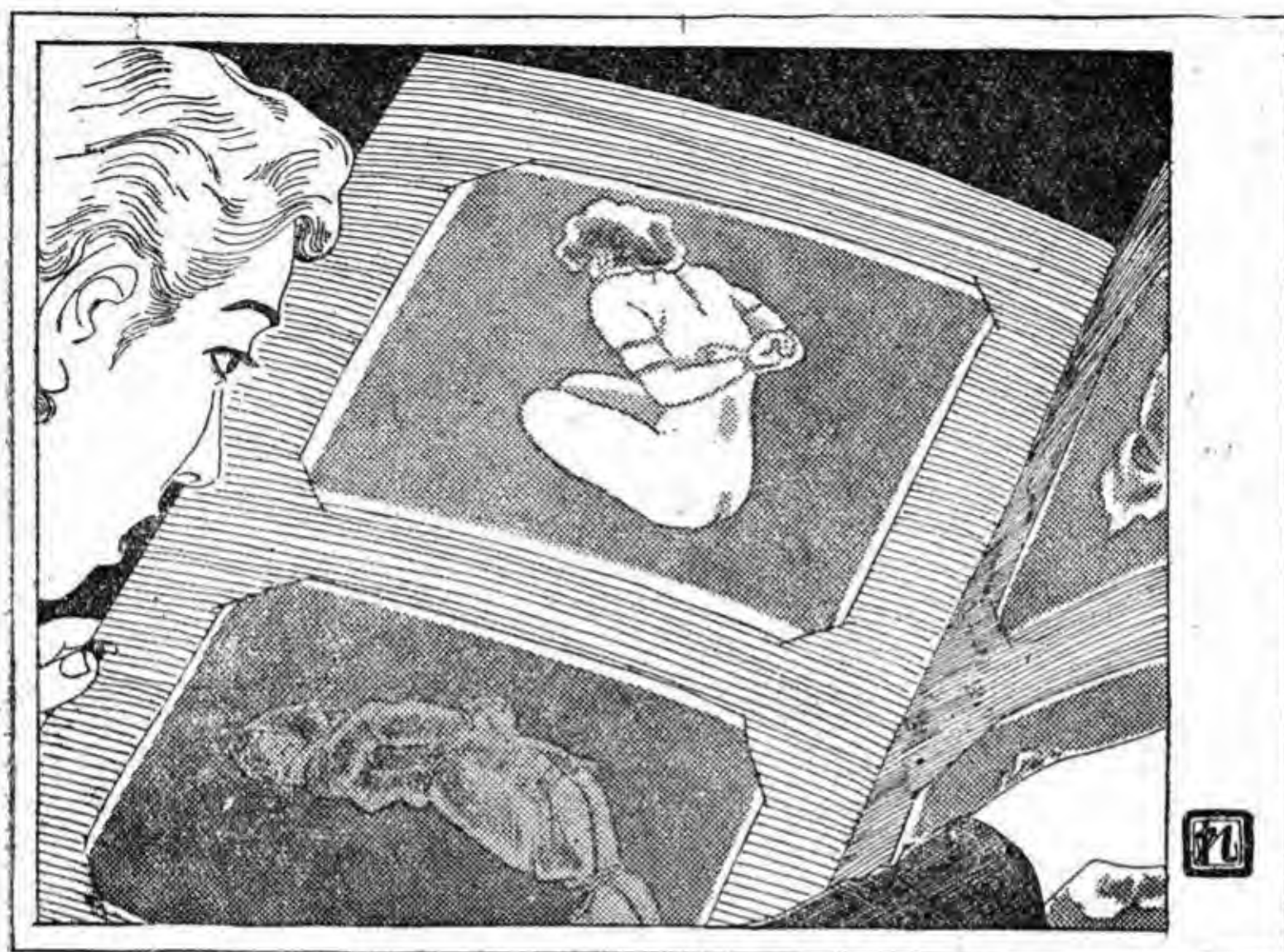
警察で用いる金属の手錠——これを手に入れるために夫は、遠い江東の方の手錠を製作している会社に行つて、大へんな苦勞をしたのです。そのとき余程怪まれたと見え、夫はこの手錠を私の手首に嵌めるたびごとに、苦笑しながら、その苦心談をしきかせたものでした。のみならず、私は何度これを嵌められたまま散歩につれだされたことか。

まるで女囚のように前で手錠をはめられ、マント型の外套を、すつぽりと羽織つて、ある夏の一夜などは、そのうすいケープのような外被の下は全裸であつたことさえあります。こうして緑日の人ご

みをつれて歩かれ、知人に会えば、そしらぬ顔で挨拶をし……。時には徳川時代の手枷の刑のように、二週間もこれを嵌められ放しのこともあつたのです。

いいえ、そんなことよりも、もつと滑稽な——今となつては、滑稽というよりないのですけれど——こともありました。それは私に後手錠にこれを嵌めて、例によつてお互に思う存分楽しみあつて、いざ手錠をはずそうとしましたら、鍵がどうしても見付からないのです。恐らく、夫がたもとの中に入れて外を歩いている最中に落してしまつたらしいのです。合鍵はなし、後手錠であるだけに、これには本当に困りました。いろいろな鍵を合せてみましたが、はずれるものではありません。こうなると警察手錠というものは全く完全で泣いても、わめいても鍵がない限りどうにもなるものではないのです。流石に夫も思案にくれてしまいました。私は私で後手錠のままたんと畳に座つて、うなだれたまゝ、何の名案も浮ぶ筈がありません。とれないとなると手錠の硬さや冷たさ、重たさが、いつそう身にしみて感じられるのです。その頃はまだ、この手錠を手に入れた新しい玩具を珍らしがる子供たちのように、喜んで遊んでいた時です。余計心細くなります。

結局、またも怪しまれるのを承知の上で、かなりの大金を製作所に渡して口留し、合鍵を作つて貰いました。その間一週間、私は後手錠のまま、赤ん坊のように食事を一箸一箸口に入れて貰い、用便をさせて貰い、夫もそのためにロクに仕事を出来ぬ有様でした。夜寝るとき、夫はなさけなそうな顔で、私の後手錠のはまつた手を握り、抱きしめてくれました。合鍵が出来上つた日、私はやつと開放されたのですけれど、その二つの合鍵を手にとると気が強くなつ



て、

「もう二三日、そのままでおいで」と夫は冗談ともつかず本気ともつかず申したのです。でも流石に実行は致しませんでした。

こうやつて見ると、私たちの間の遊戯は、結局あくまでも二人の相互の理解の上にたつた「遊戯」であつて、手錠がとれなくなつたとわかつた時の夫の慌てようは今思い出してもおかしくなる位です。一番慌てたのは、やつぱり夫であつて、手錠をはめられてしまつた私ではなかつたのです。

いま、冷たく重い手錠をしつかり握つてみると、あの頃の生活がまざまざと心によみがえつて来ます。それは丁度正常の人々が甘い二人だけの旅行や愛撫を思い出すように、これが私たちの愛の生活だつたのです。

箱の中には、まだいろいろなものがあります。この中のものを出す時はカーテンを厚くたれ、扉に鍵を厳重にかけ、誰も入れず、誰からもぞかれないようにしてしまわないでは開けないのです。ですからこれは私の大切な秘密、義兄でさえもこれを見たことは絶対がない筈です。

私たちが一番力を入れて、工夫をこらしたのは何といつても猿ぐつわの類でした。

猿ぐつわと申しますと布製の簡単に一時的なものを想わせます。私たちはそれ以上に「轡」乃至は「嵌口具」のたくいを沢山作つていたのです。私の猿ぐつわ好きは、今更くりかえすまでもなくよく御承知のことでしょう。

それだけに私たちの、この類の道具への力のいれかたは大きく深いものでした。

簡単なのは「マスク」の類。これには、私が公衆の前につれられてゆく時に用いられるものと、自宅で御仕置用に嵌められるものがあります。前者は皆様のよくお使いになります普通のものを、相当以上大型にしたものにすぎません。もつとも夜などはガーゼと見せて、白いゴム布製の呼吸孔もないものを嵌められることもあります。苦しそうな息づかいで、夫の後に身を隠すようにして私はよく歩いたものです。マスクの中には、夫の……が……っているガーゼが入っているのが普通でした。お仕置用となりますと「凌辱の幻想と期待」に於て、ちよつと触れましたような厚いゴム製口覆式のガスマスク型のものもありましたが、多くはマスク乃至は猿ぐつわというより完全な嵌口具であつて、多くは西洋式のものでした。これは本誌三月号の口絵に「ギヤグ」六種として掲載されている第二、第三のものが私たちのそれによく似ています。多分夫は、あれと同じ写真を見て工夫したのではないかと、あの口絵を見ました時に、思ひあたりました。金属製の口の中に球を含ませられる馬の轡式のものもあります。これも製作の依頼する時に大へん苦勞したもので部分的に少しづつ作らせて（しかも、いちいち別の店で、時期をおいて）それを一つに組合せたのです。

頭からすつぽりと金属製の箍を嵌められ、口の中に棒のついた金属球を噛ませられるものと、丁度馬のように（あの口絵の第六のような）轡とがあります。これらを目の前にずらりとならべて見えますと、私たちが、いかにこれらの遊戯に打こんだかが、まざまざと感じられます。

これに費したお金もかなりの額です。馬鹿なことをするものだと多くのかたから申されそうですけれど、私たち——いや今は私だけ

——は、このことについて何にも悔いるところはありません。それは立派な行為ではなかったかも知れないが、私たちやは大したことだつた。とそう申すよりほかはないのです。本誌の読者の皆様ならば、きつと私たちの氣持を理解して下さいませう。

紺の、銀茶の、ピンクの、真紅のゴムレインコートもあります。鞭類、縄、鎖の類、箱の中にはまだまだ沢山あります。しかし最後に、箱の一番奥底には、夫と私の遊戯を写した五冊の大型のアルバム。これについては触れますまい。これは私たちの愛の姿であり、閨房のあられもない姿なのですから。

誰にも見せるわけではなく、たゞ二人だけのために、このアルバムは作られました。そこに写っているのは全部私自身。このアルバムがある以上、私は私自らを偽ることは出来ないのです。青春の嵐のような日々。それらの写真は一枚一枚写されてゆきました。私には本誌の代理部で分譲しているような写真は必要ありません。いえ代理部の写真は、私を写した夫の素人写真などより十倍も二十倍も立派なものです。モデル女のかたちも、私など及びもつかぬ見事な身体をしていらつしやいます。従つて写真の出来映えも殆ど非の打ちどころありません。

たゞ——これは私自身の純粹の個人的な理由で——私には私自身の写真が、より以上に大切なのです。それは到底人様にお見せ出来るものではありません。私の浅間しき、私の動物性、私の怪奇なマソヒスム、その全てがこゝに凝結しています。これは私の「もつとも恥ずべきもの」です。そして同時に私の「もつとも正直な赤裸々な姿」です。

私は奥歯を噛みしめ、唇をゆがめてでなければ、この自分の姿を

見ることは出来ません。

私は至らぬ女です。時に増長し、哀れな思いあがりを感じる時がないとは言えないのです。でもそのような時、私はこのアルバムの自分の自分を目に浮べます。すると一切の思いあがりや春の淡雪のように消えてしまうのです。人間は本能を克服し、動物性を昇華するところに高貴さがある。私はその動物性に沈溺し、そこから一歩も抜け出てはいないのです。

しかし私は一生このアルバムを持つて歩きます。私が死んだら、哀れな女の姿として博物館へでも晒して下さい。

私は私の心の全てを、私の肉体のすべてをまじろぎもせず凝視してゆきます。私の本態から目をそらし、自分を自分の価値以上のものと幻覚することを、むしろ恥じます。

こんなつまらぬ「告白」をしたがる私を、他のもう一人の私が絶えず唇をゆがめて嘲笑しているのです。

読者の皆様の中には「また始まった」とお思いになるかたもございましょう。ごめんなさい。でも私は自らに正直に生きてゆきます。私の中の二人の女をはつきりと凝視しましょう。

いま目の前にならんでいるこの責道具——いいえ、楽しい思い出の遊戯の道具——このアルバム、古川裕子の実態はこれ以外のものではないのです。

私はいま、さゝやかな職業を持つています。それは医学の進歩にいくらかでもお手助けが出来ると幻想し得る程度の意義があるものです。私の仕事が本当にそうであるかは解りません。しかし私はこの仕事に、ひそやかなつましい満足と期待とを持つています。「研究生助手」——これが私の仕事です。この仕事にさゝやかなロマ

ンチックな期待を持つなど、いくつになつても女は甘いものです。そして職場では——私は無口で平凡な、すこし齡をとりすぎたラボランティン（実験室助手）にすぎないのです。この私が、本誌へこのようなものを書き、自分の部屋にいま目の前にならべているようなものを持ち、そしてこのアルバム中にまごうかたもなく写されている淫靡な姿態を示している女だとは、誰が想像なさるでしょうか。知っているのは自分と神さまだけ恐いことです。自分のことを思うと、私は人間というものに不信の念を抱かずにはいられません。もつともこれは顧みて池を云う類のことなのですが。

アルバムにはいつたいどんな姿を写されているのか、そこをところを、もつとはつきり話して貰いたい——そういうお声がきこえるようです。でも私にはその勇氣はございません。どうか御自由に御想像下さい。どんな下等な姿を御想像下すつてもかまいません。現実の私は、それ以上なのでございますから。

夜もふけました。雪が小降りになつたようです。窓を開いて暗い外をのぞくと松の小枝に雪が、はらはらと降りこぼれています。

はらはらとゆきのふりける。はらはらとゆきのふりける。かかるひをいかにえたえむ

あれは三好達治氏の詩でございましたでしょうか。

私はゆつくり立ちあがつて窓をしめ、私の本態を示すものどもを又箱の中に閉じこめ、しつかりと鍵をかけました。

おそらくは私の顔も、もとの偽善面にかえつたこととでございましょう。

はらはらとゆきのふりける。

この詩人のように美しい心が私には何故ないのでしょうか。



×月×日

心が鉛のような日があります。心が重く澱んで流れないドブ河のような日があります。心が絶望にみたされてマツチの燃えがらのような日があります。

女というものは男性のかたちよりも、はるかに心理的に変化し

易く惑乱しやすいものではないでしょうか。女の宿命のようなホルモンのいたずらなのでしょうか。それともまた、こういうのがヒステリーの一種なのでしょう。心にいらだちを感じるとめどもない不安と、心にのしかかる云いような不快を感じずる

自分をズタズタに裂いて泥だらけのぬかるみにたゞき棄て、足でふみにじつてしまいたい気がする。

誰かが突然入つて来て、私を鞭で息のとまるまで滅茶滅茶に叩きのめしてくれないだろうか。どうしてそんな人がいま来ないのだ。

ちつとも恐がることはありやしない。私の花婿！ 誰だつていい、この女を足蹴にし、

ぐるぐる巻に縛りあげ、鞭で叩き殺して！ 何を遠慮するの！ あゝ誰か来て、何故来ないの。何故来ないの。

こんな日には一切の分別を失つてしまう。

職場のある男性はこの私を評して「理性的」

だといった。「知性的だ」といった。冗談じゃあない。はばかり乍

ら私はそんな結構なものではない。身悶えて、身悶えて、身悶えているいまのこの私！ これが「理性的」なのですか。これが「知

性的」なのですか。あゝ、誰でもいい。私を無茶苦茶に踏みこみにつて！ 私を娼婦のように辱しめて！ 何だつてするわ。

あゝこんな日、一日が何と長いこと。他人に向つては気が弱くて

何一つ云えない私だけに、こんな日の苦しさは何といつたらいいたろう。

「地獄の日」そう「地獄の日！」

歯を喰いしほり身悶えて嵐のすぎるのを待っている。人にも会わず仕事にもゆかず、ただじつと内心の嵐に耐えている。こんな私を誰が知っているだろう。

冷静な日、自ら皮肉な思いをこめて、今日のような日のことを、
「私の狂乱怒濤」としやれていつてみた。した。

そんな気取りをやめて。こんな日に私はブラブラと家をとび出し札幌へゆき大阪へ行つた。ぞつとするような「狂気の日」

あゝ、私の肩が淫蕩によじれる。下半身が沸きあがるよう！

あゝ誰か来て、誰か来て、私をめちやめちやに叩きのめして！

誰でもかまわない！私をめちやめちやに虐めて！

×月×日

義姉の遠縁にあたる娘さんが遊びに来た。彼女は、おしやれなティーンエージャー、憶面もなく若い。十九才だそう。初対面であつたが、いたつて屈託なく、しよつちゆう口をもぐもぐやりながらよくしやべる。黄色いセーターに紫のリボン、目が大きく顔立ちがハツキリしていて仲々俐口そうな娘さん。もう高等学校は終るそう。大へん面白い。

何でも明瞭に割り切つて、大胆不敵で、小鳥のさえずりのようなそのおしやべりを聴いていると、スポーツ的快感を感じる程。

呆れたことにこの齡で「夫婦生活」だの「奇譚クラブ」だのを時々読むらしい。別にそれを隠しもせず、堂々と所感を述べ、感想をきいてくるには、いささか狼狽してしまふ。

もつとも彼女の話は、流石に現実感がなくその点で話に淫靡な感じや不健康さがともなわないので、兎に角も相手としていられる。ところが談たまたま「古川裕子」の作に及ぶに至つて、私は全く兜を抜いてしまった。彼女の説く所では、

「古川裕子は自分たちとは殆ど無縁な生活感情の持ち主であつて、あれはむしろ歴史的人物だ」そう。

何となれば「いつでも無用な思い入ればかりで、人間はもつと堂々と正面から生きなくてはならぬ」のだそう。

「戦前の遺物、全然興味と共感を持ち得ぬ存在ね」これが彼女の結論。

「でもあんなことつて本当かしら。ちよつと刺戟的だわ」とつけ加えたので、当の古川裕子は、甚だあわてざるを得ない。

「小母さん、どう思う？」

呼びかけられても、私には何の返事も出来ない。やつと

「その古川裕子さんてどんなことを書いているの」おどおどと口の中でこつこつとやくばかり、全くだらしない。

一通りの堂々たる説明をきいて、

「どうもあんまりいいことではないわね。困つた人ね」と辛くも感想をのべると早速

「あーら、いいとか、わるいとかじゃあないわ。道德つて問題じゃあないわ。そう生れついているんだから、その点は仕方がない。良くもわるくもないわ。小母さんも古いのねえ」

ところやられてしまふ。

思うまま私を奔弄して彼女は御帰還になつた。

あとで一人部屋にすわつて、私はつくづく考えこんでしまつた。

私も齢をとったのだ。

戦争というものを境にして好むと好まざるとに拘らず、人の心も変った。それこそ、どちらがいいのか問題ではなくて、たゞ変ったのだ。私は私自身を虐げ、自虐の心に耐えかねる日があるが、この私自身、新しい世界ではもつと堂々と受け入れられているのかも知れない。私は若い人たちに余りつき合いがなく、そのようなジエネレーシヨンの生活感情を知らない。今日、会った娘さんでその片鱗にふれたわけであるけれど、あの娘さんの考えかたが、新しい世代の全部を代表するわけではないにしても、その一部ではあるだろう。

私たち「三十代」というジエネレーシヨンは、あの戦争の影響をまともに受けた、もつとも哀れな世代のように私には思える。「暗い谷間」という言葉は決して「三十代」にとつては無意味ではない私の暗さは疑いもなく私の性癖—マソヒズムという宿命にもとづくものであるけれど、一部はたしかに戦争の翳なのだ。原子爆弾を受けた人の黒い浴衣の縞が、そのまゝ放射能によつて皮膚に沁みついてしまったように、私のマソヒズムも、そして戦争の暗い翳も私の精神に肉体にしみついてしまっている。感受性の強い、一人の女にとつて、世界は余りに暗く、宿命は余りに深かった。私のくりごとは、それらにおしつぶされた女の呻きなのだ。荒れ果てた現代の世界の片隅で、かすかに鳴いている一匹の昆虫にすぎない。うす青い胸窩に、懸命に羽をすり合せて。歴史はやがて、この虫けらをも踏みつぶして先に進むだろう。不健康で、デカダンで、しかも生意気なこの虫——古川裕子はそれ以外の何ものでもない。

×月×日

手もとにある奇譚クラブのバックナンバーを開いて見る。いろいろなかたがいらつしやる。皆夫々正直に自分を告白していらして、しかも陰惨な不健康さにおちついておられないところが立派だと思う。もつともこれは、編集者のかたの良識が強く働いてい

るからであろう。こうやつて一つ一つ読んでいると不思議な感じがする。世の中にはいろいろな性癖があつて、それぞれに悩み、或いは楽しみ、沢山の告白があるけれども、必ずしも全部のかたのお気持ちが私に解るわけではない。

これはかなり個人的なもので、同性愛のかた、サディストのかた私のようなマソヒスト、それから何というのか学術語は私にはわからないが尿や尿をお好みになるかた、フエティズムのかた、これらのかたたちのお互いの間の同志愛的な親近感とは別として、必しも全部、私に共感されるわけではない。

だから、これから私が申しあげることでも私個人の感じを申しあげるので、それ以外に他意ないことを、おことわりしておいて、今日は、本誌にお書きになつてゐる幾人かのかたに裕子の親愛の言葉を申しのべたいと思います。もし万一失礼な言辭がありましたらお赦し下さい。決して決して、悪意を持つて申しているのではないのですから。

まず吾妻新様、裕子が本誌の寄稿家中、誰が一番好きかときかれれば、何の躊躇もなくこのかただと申しあげます。何を仕事にしていらつしやるか知るすべもありませんが、その洒脱な筆致は私の心を奪います。大変知性的なかたであつて、このかたの書かれるもの

には、不思議に脂濃い嫌らしさが感じられない。それに較べると私の書くものなど何といやらしいものでございましょうか。面白いことに本誌上の寄稿家たちの間に、お互いに影響し合うところが現れて、号のすゝむにつれ、それが相融合してきているのですけれど吾妻様など、もつともオリチナルな影響力の大きい方々です。

いつか私の「囚友」について御意見をおのべ下さいましたが、私自身まだ、あれについては半信半疑であります。私たちの生活がそれ程、「サディズムの精髓」なのかと。もつとも以後、私の書きますもので「何だそれ程、とり立てていう程のものではなかつた」と思いかえしていらつしやるに違いありませんけれど。「感情教育」は本当に面白い。面白いといつては失礼かも知れませんが、好ましいものだと愛読しております。フレーフレーと声援を送りたいような無邪気な気になつております。

松井頼子様。このかたはヴェテランです。その筆力の旺盛さに感嘆しております。このかたには（卒直に申しあげて）職業的な筆の慣れと不思議に逞しい線の太さがあつて、その力量の程をしるのばせます。妙な譬えですけど、吾妻様が洒落なフランスの味でしたなら松井様はむしろロシア風だと申しましょうか。

いろいろな作を拝見しておりますが、どれも少しも類型的にならず、むしろ男性的な力をお持ちのようにさえ感じられるのです。本誌の作中、もつとも健筆家と申せましょう。

岡田咲子様。このかたも、沢山のお作があります。岡田様のお書きになるものは、映画のセットか、銀座の小奇麗な喫茶店のようです。（咲子様お怒り下さいますな。決して悪意で申しているのではありません。了解下さいますよう）私はこのかたの西洋菓子によ

うな持味を好みます。時々類型的になるようでもあります。かなりハツキリとした個性をお持ちで、達者な都会的な筆は私にとつても楽しみです。

鬼山絢策様。このかたは悠然とした構想の大きさを持つておられます。淡く、足が地についた作品をお書きになります。おそらくこの方は、人生経験に富んだ中年以上の、かなりの御年配ではないかと想像されます。

羽村京子様。寄稿家と致しましては、たしかに私などと同型のかたです。フィクションの全くない（いつかの探偵小説めいたお作——妖花（心の悪魔）——はむしろ例外的でした。持ち味としてもかなり変つておりました）個性と好みの明瞭な「告白」は強い印象を持つものでした。私自身は京子様のお好みになる性癖は、殆どありませんので、直接的な共感に免れ角として、何か親しい親愛感を、このかたに感ぜずにはいられないのでございます。宿命を持つ女同士の愛情とても申しましょうか、最近ばかりお書きにならないようすが御健康をお祈り致します。

森山美歌様。短かいものをわずか二三度お見せ下さつただけなのに、あなたの影響はかなり強いようです。野性的な印象の強烈なお作は多くの読者の心をうばいました。

そのほか沢山のかたが、夫々の持味を持つておられます。またいつか一つ一つ私の感想を述べてみたいと思つております。

とまれ、皆様にいろいろお教え願いたいこと、お聞きたいことなど山程もございしますが、今日はひとまずこの位に致したいと存じます、どうか皆様も、私の書きますものについても御遠慮のないお話を聞かせていただきとり存じます。もつとも私の「地」のまゝ以

外、何ともうごきのとれない不調法ものでございますが。

×月×日

久し振りで街に出てゆく。田舎住いで、その上出嫌いなので、めつたに出掛けることもないのだが、うららかな春日にさそわれて、たつた一人、人混みの中に出掛けてゆく。

風が強く、ほこりが立つて口の中がじやりじやりとする。少し季節はずれで恥しかったが、マスクをする。それでも沢山の中には私と同じようにマスクをなさつていらつしやるかたも居ないことはない。何だかホツとする。

マスクをかけてしまうと、顔がすつぽりかくれた感じで、孤独な想いがする。市井に隠れる感じというか、沢山の人々の中に自分だけがポツリと離れて、どこか、戸のわずかな隙から世の中の人を眺めているような気がする。これは、いつたいどういうことなのだろう。私の特殊な感覚なのだろうか。多くの人々もやはり、そう感じるのだろうか。

何気なく映画館に入る。何をやつているか確かめもしないで入る「復讐は俺にまかせろ」大分前にこの映画の批評を新聞で読んだ覚えがあるので、セカンドどころか、サードランか、或はそれ以上古くなつた再上映ものであろう。

でも私は始めて。元来私は女のくせに甘い恋物語は苦手である。私自身が泥まみれのリアルに悩んでいるので、ロマンティックな夢に憧れてもいいように思うけれど、それがどうも駄目なのです。映画というものは余り現実感が強すぎて、美しい恋物語には、つい自分自身の現実とひきくらべて、自分にがっかりしてしまうから、私

はいつもみじめな気持を味わなくてはならない。

それで余り映画を見ないのだけど、エヴェレスト登攀の映画は、大自然的な厳しさと、人間の努力とが、心を打つて、しばらくは、ものも考えられない程心をうごかされた。どこまでいつても私という女は不器用に出来ているらしい。

私が本当に心置きなく自分をまかせられるのは音楽だけ。これは一瞬の音にすべてをかけ、終れば何の型も残らない。このはかない芸術がたつた一つわが慰さめなのです。音楽を聴くことは私には「無償の行為」。丁度エヴェレストに何故のぼらねばならぬかと問われて、「それはたゞ、それがそこにあるから」と答えた人のように、私は何故音楽を聞くかときかれたら、「たゞそれが好きだから」と答えるほかはない。

読者の皆様は、もう十篇に近い私の露骨で恥知らずな「告白」によつて、古川裕子なる女が、どんなに動物的で浅ましい女か、よく解つていらつしやる筈です。この女が自らの慰さめとするのは、はかない無型の芸術か、千年も昔から、この世の地獄も知らぬ氣に、「たゞ立つている」仏像や非情な古代の壺の類いしかない。私は勇氣を振り起して敢てこう云います。せめてこれを云うことによつて「誰が見ても、とりどころのない男」が威張つて帰つたのを、寂しいのだろうと察してくれた、あの啄木の持つ感情に甘えたいと思うのです。「古川裕子に何か高貴さがあるとしたら、たゞ美しいものに対する、偽りない感嘆と、そして、はかない憧れだけだ」と。皆様はさぞ、お笑いになることでしょう。

ところでこの「復讐は俺にまかせろ」という荒つぽい映画、これは珍らしく私に面白かつた。

この中に女の手に煙草の火をおしつけて、女が悲鳴をあげて泣き叫ぶのを喜ぶサディストが現れます。いやそれどころではありません。煮えたぎった、コ―ヒーを女の顔にぶつ掛けて、女の半面をおそろしい瘢痕にしてみよう。最後にはこのサディストは、見じめな姿になつてしまふのだけれど、私はこれを見ていて、不愉快になり、このサディストには好感が持てなかつた。勿論映画の筋の中でこの男性は悪者になつてゐるのだけれどそれから切り離しても、この男性の女に対しての愛情は信じられない。愛するが故に女を虐めるといふことは充分あり得る。愛情の表現として、そのような行為をする場合だつて珍らしいことではない。しかしこの映画の場合監督の意図はどうだか、私にはわかりませんが、私のマソヒストとしての「感」は、この男性には愛情がないと私に教



えてくれる。愛情の全然ないサディズムに対して、この私が好感が持てなかつた、この行為について私の「もう一人の女」がそつぽを向いていてくれたと、はつきり信じられた時は、私は危く喜びに叫ぶところでした。私は案外健全なのだ！ 私はこの映画にお礼を云いたくなつた位です。

いつたい、この映画に対して私のような感想を持つものがありましようか。映画館を出ても何か、ほのほのと楽しく、「自分が何だか、善い人のように」思えて、いつになく浮き浮きしていました。私もやつぱり女で他愛もないものだと思わざるを得ません。そして帰りに花を買つて、私の「たつた一日の幸福」を、自ら祝福したのです。

×月×日

ある読者のかたから、お手紙を戴いた。あの世から私に呼び

かけてくれる形式に書いてある。大阪の美章園というところのかただ。「美章園」とはどこかで聞いたことのある名だと、首をひねつて考えましたら、かの日、大阪から堺へ、ふらふらと出掛けた時、郊外電車にのつて、乗つてすぐ次の駅あたりではなかつたかと思ひます。ともあれ、このお手紙は私の心をうごかしました。考えて見れば、私と亡夫の生活は、何と奇異なものであつたでしょう。本当に普通では、とても考えられない。厳しい折檻のほか、殆どいつも何かの形式でお仕置を受けていた有様だつたのです。夫が帳簿をつけているそばに、私が猿ぐつわ姿で縛られ、ころがされていたり夫が食事をしていられるお膳の真正面に、私が馬がはめられるような金属の轡を噛ませられ口を閉じることにも出来ず手錠足枷で正座させられている。夫は、私をじつと見つめながらゆつくり食事をする。こんなことを夫は勿論私自身無上のたのしみとしていたあの生活、今から思えば夢のようです。まるでこの世のこととは思えない。しかしあれは現実の生活だつたのです。

私の書いた「呼びかけ」に対して驚く程多くのかたがたが私に手紙を下さり、その大多数のかたは、私を「妻」にとおしやつて下さつた。私は不思議な気がします。こんな女を、皆様はあんなに望んでいて下さる。申しわけない話だけれど、事の意外に驚いた拍子に、不遜な私は何か自分の売値が一段と高まつたような、怪しからぬ気持を、ほんの一時、味つたと正直に申さなくてはならない程でした。

なかには、「お前のような女は、全国のサディストの垂涎の的なのに、お前がいつまでも自分を売りものにしてるように見えるのは奇怪極まる話だ。お前は男ではないか」ときめつけてこられたか

たもあります。

「自分を売りものにしていく」という感じを一番はつきりと感じ、自虐感に耐え切れずにいるのは、誰でもない、この私なのです。しかし売りものになっている」ということは客観的な事実だというよりほかはありません。私は恥しい。平静の時の私は、自分の書いたものを見るに耐えません。

でも数日すると、私は又破廉恥なことを書きたくなる。身体の中にうづくものは、こうして吐き出さなければ、何かとんでもないことを、してかしてしまふような気がする。私は自分が怖しい。それを通り越すと、そのような私の行動を私自身が規正出来ず、夢遊病者のように無意識に動きまわりそうになる。私は辛くとも、これを字に書くと、理性的な自分が、文章の上に現れてきてくれて、やつと気のちがつた私を抑えてくれる。そうして一定時間すぎると、嵐は私を離れて遠ざかつてゆく。これは私の「排泄物」。ある詩人は「彫刻はわが錬金術、詩はわが安全弁」と云っているけれど、この恥ずべき露出症的告白は、私にとつて「我が安全弁」というよりほかない。その上私はこれを公開の誌上で発表する。何という恥知らず！でも私はそうしないではいられない。こうして発表するため封筒に入れて送り出してしまふと、私は「狐が落ちたように」心が静まつてくる。奇譚クラブのような雑誌には、世上種々な批判がある筈だと思う。でも私のようなものの、安全弁になつていくということは（身をしほるような自分への情けなさを感じながら、敢て云うけれど）動かし難い「事実」なのです。編集者の皆様、御めんなさい。でも私は本当を申さなくてはならない。このような雑誌は残念乍ら私には「必要」なのです。

恐らくは、本誌の読者の皆様の中の幾人かは私と同様な感じを持つていらつしやるのではないだろうか。失礼乍ら私は、そう想像したいと思います。私は、もつと本当を云います。私は、このような雑誌と無縁でありたいと望んでいる。でも今の私には出来そうもない「慟哭の記」(この題名も編集者のかたがつけて下さつたのだけれど)を書いてから、いや「凌辱の幻想と期待」とを書いてから、私は、死ぬ苦しみをして、もう二度と、こんなものを書くまい。こんなものを発表しまいと自ら誓つた。そして神経衰弱のようになつてしまつた。でも何という私の意志の弱さ! 何よりも私は今、又こんなものを書いていく!

この事実を見ると、私は自分を信じられなくなつてしまふ。自分が価値あるものとは思えなくなつてしまふ。私でも人並の虚栄心は持ち合せています。良い人間と思われたい。高貴な精神を持つ女と思われたい。それが女らしい虚栄心にすぎなくても私がそう思っていることは、どう自分をごまかしても事実です。でも私は、ただあるがまゝの女にすぎない。私の中には蜘蛛の絲のように複雑な想いが心を掩うている。愚鈍な私は、それを自ら整理出来ず、たゞあれよあれよと自分の心を眺めているだけなのでございます。

私を望んで下さるかたは、たしかに多い。私はあの六十通のお手紙で、現実感としてそれを感じることが出来る。しかしこの仕様の無い私、もう三十の坂のとうに越えた。お婆さんのこの私、そう簡単に身のふりかたを定められませんか。これを考えると私の中に、さまざまな感情が音をたて、流れるのです。

私はゆつくりと考えて見たい。「実が熟したら」私は、どなたかに私の身をおまかせするだろう。それを定めてくれるのは「運命」

しかない。

私の人生は、生れた時から「宿命」に支配されている。私は少しでも向上すべく努力をしながら、運命に従おうと思ひます。今の私は精神的にも肉体的にもまるで娼婦。世の中には、貧窮のために自分の肉体を売つていらつしやるかたたちがある。私はそんな理由もなく「娼婦」なのです。私がこのようなハメに落ちこんでいるのは自分の意志の弱さ、以外には何の理由もありはしないのです。

世紀末の暗い思想に憑かれた西欧のある詩人はこううたつています。いや「うたう」などというものではない。呻いているのです。

若きわが世は日の光とところまばらに洩れ落ちし

暴風雨の闇に過ぎざりき

鳴る雷のすさまじさ降る雨のはげしさにわが庭に残る紅の

果物とても稀なりき

さらば今思想の秋にちかづきて

われ鋤と鍬とにあたらしく

洪水の土地を耕せば洪水の土地に

墓と見る深き穴のみ穿ちたり

.....

あゝ悲し あゝ悲し 「時」生命を食い暗譜たる「仇敵」独り

心にはびこりて

わが失える血を吸い誇り榮ゆ

本当に私の心をうたつていのではないでしようか。私の青春は「嵐の暗闇にすぎませんでした。そして今は私の心にも「落ち残る紅の果実とても」稀なのです。」「時」は私のいのちを喰い「仇敵」は私の心の中にはびこつて、やがて私自身の墓穴を掘るでしよう。私の牢獄は長く、私の劫罰は深い。古川裕子はたゞボツリとその中に坐つていなのです。

私はいつたい何によつて救われるのでしやう。

(終り)

本誌創刊七周年記念

懸賞入選作品 (三席)

美しい暴君

馬族

保

この一篇は作者の体験を小説の形式で発表するものです。こゝには作者のマゾヒストとしての教訓が骨子となつていますが、もう一つの狙いはこれまで本誌に発表された男性マゾの告白、小説の中にはマゾ趣味に性急なあまりやゝもすれば想像の女性を拉し来つて自己陶醉の対象とし、あるいは誇大に過ぎて女性の魅力さえ描き得ないまゝ鞭打や血なまぐさい残虐を強調される傾向も多いので、これらに抗議する意味も勿論あります。もともとマゾヒズムは本質的には優美なロマンチズムを基調とする性欲の文化であつて、私達がその膝下に跪いて礼拝するに足る婦人というものはそうザラにあるものではないのです。作者がこゝに紹介する細川百合子はそのザラにない女神の一人であつたという点で、発表する勇気が湧いたのです。

これを読んで囁く人はいゝ教訓になつた証左だし、反対に作者をうらやむ人もきつといるに違いない。それらの人達のために作者はこの話をたばこでもくゆらしながらすゝめて行きたいのです。



一、星ヶ浦海岸に

細川百合子を追

いつめること

一人の男が、一人の婦人に隷属し、女性の狡猾な、先天的身勝手な専制下に支配されて生活しなければならぬという現実、身をふるわせながらも、彼女の肉体の魅力の描となりはてた男の身も世もない嘆きと劣等観に、自虐の焰を燃やしつづけながらどうすることも出来ない悲しみを、彼女は傲然と足蹴にふみにじり、陶然と酔う愛慾の世界は、蓋し思わしくも妖しいトゲをもつ花園でもあるのでしようか。女はいよいよ福たけて美しく、男はヒイ／＼悲鳴を揚げながら、床に平伏して女王の爪先に接吻を捧げるのです。

一九三九年の夏、大連星ヶ浦海岸。

大陸の暑気は殊に厳しいのですが、こゝばかりは暑さしらずの避暑地、海浜には派手なビーチパラソルが花のように咲き乱れていました。誰も彼もが海水着一つになつて思う存分季節のレクリエーションを享樂している群の中を、無風流な僕だけは夏の背広を着込み



しかもネクタイまでキチンと締めて、血眼のようになって一人の婦人の姿を追い求めていました。突然、激しい勢で僕は後頭部に何かをぶつつけられました。激しい割に実際には痛みは少なかったのですが、帽子は刎ねとばされるし、不意のことなので声をあげたい程衝撃を受けました。ワツという歓声。しかも僕は頭に投げつけられたボールを丁寧に返してやるほど卑屈な態度を取っておりませんでした。精神状態は決して事象を越えて処理するほど健康ではなかったのですから。妙にムカムカして来るし、一層いらついて来るのでした。

帽子を拾つて向き直つたときです。ギョツとして僕は釘付けになりました。つば広の白い帽子をかむつて唇の紅の色だけは鮮やかに朱い妙齡の婦人が、男の肩車に乗つて如何にも落つきはらつた表情で蔑をくゆらしながらこちらにやつて来るのです。赤外線除けの色眼鏡と高慢そうに見えるツンと高い、格好の整つた鼻から受ける強烈な印象が僕を暫くの間そこに佇ちすくめていました。僕の探し求める婦人、細川百合子だつたのです。

僕は廿四才、岩田修三といへば満洲でも屈指の実業家で、その遠縁に当る僕は、当時流行した満洲熱に取憑かれてしまい、中学を終えると一散に大陸に渡つて行きました。学業よりも実地に年期を入れた方がよいという僕の理想は将来の大実業家を夢みていたのです。岩田洋行は絨氈、綴張、ブラインドの類や椅子、寝台などモケットの高級品を一手に商つていました。南満洲は勿論、華北の各都市に支店を拡張してひと頃はまさに昇天の勢いでした。若造ではありましたが、店主の遠縁に当るといふことゝもう一つには仕事熱心さが買われて顧客先でも僕は非常に信用を得ていました。しかし若気の至りというものは仕方がないので、ややもすると出過ぎが多く店の者も内心苦々しく思つていたでしょう。蔭では僕の悪口も云ついたらしいのですが、一途に自信と野望を抱いていた僕には馬耳東風、反省することもしませんでした。そういう無反省な出過ぎが僕の命取りとなる結果になつてしまつたのでした。

その前年でしたか、満鉄の根岸理事の紹介で十万円ばかりの商品を僕の一存で出したことがありました。綴帳、絨氈の類でしたが、当時の十万円といへばやはり僕などには逆立ちしても出来ない大金です。点数稼ぎに鎬を削つていたときなので、慥に眼が眩んでいた

んでしよう。後になつて根岸理事の云つた言葉を反芻してみると確に僕が勢い込んでいたのです。代金は現品引換に受取るように――善意に解釈するとそれとなく念を押してくれた理事の言葉を思い出したのですが、もうあとの祭でした。その顧客というのが細川百合子だつたのです。初めての取引なので僕も念のために彼女の信用調査ぐらいはやつておくべきでしたのに、有頂天になつていた僕は前後の考えもなく引受けてしまつたのでした。この失策は僕の独善に帰するところ極めて大であるにしても、だいたい常識的に云つて物品代金などというものは、引渡後請求するのが慣例ですから彼女のようになつて白を切られたんではもはや法律の解決を待つ以外には方法がないのでした。実際おかしな話ですが、彼女の場合は現品を買つた記憶さえないという。そういえばたしかに捺印して貰つたはずの物品受領証もいつ紛失したのか見当らないのです。無論現物もどう処理したのかもわからない。何を証拠に代金を請求するのだと反つて抗議する始末で物も云えない。僕はすっかり焦立ち神経衰弱になつてしまいました。昼となく夜となく、邸宅の方に日参しましたが、この豪奢な建物の主は姿を晦まし、まるで風のように飄々乎として掴みどころがありません。が、今日こそ星ヶ浦海浜にとうとう細川百合子を追いつめたのでした。

僕は思いつめた面持で細川百合子の近づくのを待つていました。金輪際逃すものかという緊張した気持で胸が弾みました。僕は帽子を取つて丁寧に一揖しました。

「細川さん！」

百合子は眼鏡越しにジロリと睨目をくれましたがやはり無言でした。馬になつた男の左の耳たぶを引張つて舵を取り方向を転じる模

様です。男の脚も大分ひよろつて来ていましたし、それでなくとも、この異様な風景に眼を見張っている群衆は、僕という青年の緊張した表情から何か恋愛の色彩を強く感じ取っているらしいのでした。当惑してしまつた僕はビーチパラソルの寝椅子に憩う彼女の姿を見屈けてから、ようやくあとを追う勇氣が出て来たのでした。寝椅子に横たわつた百合子の体に連の男がバスタオルを掛けてやつていました。

「僕です。岩田洋行の久野です」

眼鏡を外してその澄んだ眼でじつと睨めていましたが、暫くしてニツコリ笑いました。あゝ、その花のような妖艶な微笑！僕はタジタジとなるどころでした。が、すぐフン騙されないぞ！そんな反抗に似た氣持が動きました。

「僕はもう貴女のあとを追つかけて毎日々々大変なんですよ。お蔭様でクタクタになりました。たいがいにして下さいよ。」

思わず僕はズケズケ、物を云いました。勢い込んでいたのでしよう。すると百合子は、さも嬉しい台詞でも聞いたようにホ、ホ、ホと美しい澄んだ声で笑うのでした。

「家の方に来て頂戴な。今晚の八時きつかり！ね、時間勵行よ。」

二、百合子の術中に陥り愛人の位置から

奴隸の境遇につき落されること

四日後、僕は岩田洋行を辞めました。店主から責任を取るよう云い渡されたのです。つまるところ、誠になつたのでした。こうなつてみて始めて分つたのですが、僕という男は理性の弱い人間でしかなかったのです。調子に乗れば自信いつぱいとなり一たび躓けば

空つきしの意氣地がない。当時の満洲は本人さえその氣になれば仕事は幾らでもあつたのですから、こゝで發奮してもう一度初めからやり直せばよかつたのですが、騙されたという口惜しさばかりが腦裏にこびりついて細川百合子に対する憤りが青白く煙を燃やしていました。こういう執念深さは却つて激しい恋心に豹変し、あの毒のように赤く、蜜のように甘い唇が忘れられなくて、ひたぶるに官能の世界に没却するようになったのでした。

僕という人間の馬鹿さ加減にもホトホトあきれ返る始末です。

その夜、約束の時間に僕は細川邸を訪ねました。偶々百合子は自動車で外出するところでしたが、無理矢理に僕にも乗るように誘ひそれから酒場に案内されて、飲む、踊るの大歓待を受けたものでした。ようやく細川邸に帰つたのは夜中の二時頃で、泥んこのように酔ばらつている百合子の体を抱えて彼女の寝台に運んだときは僕ももう身動き一つ出来ないくらい疲れ果てていました。今から帰る車もないので、女中の貴代に云われるまゝにその夜は細川邸に泊ることになりましたが、百合子の部屋から僕に宛てられた別室に下ろうとしていると、百合子がムツクリ起きあがりました。

「久野さん！どこへいらつしやいますの？」

「お眼覚めですか。今夜泊めて頂くことにしました。あちらの部屋で」

「お待ちになつて！お泊りになるなら、こゝでよくつてよ。そこ

の長椅子におよりになればいゝでしよ」

「はあ」
彼女は水が欲しいと云いました。水差からコップに注いで渡してやると美味しそうにそれを飲み乾しましたが、



「じゃ、この寝台にお眠りになつて。何も遠慮しなくてもよくつてよ」

僕はさすがに顔が真赤になりました。すると突如、身を起して僕

を寝台の上に引倒すなり無数の接吻の雨を降らせました。初めこそ僕は抵抗しましたが、すぐ眼を閉じて柔かい唇の味を心いくまで貪りました。特に唇を吸うとき、百合子の唇は柔かく、啣えた二つの

唇の上から歯の力を借りて咬むのでしよう、痺れるような快い痛みを加えるのです。それは長い時間でした。息が苦しくなつて顔を外そうともがいても、百合子の唇は吸いついたまゝ離れないのでした。

ようやく解放されて、洗面所に這入つた僕はしきりに含漱をしました。何か僕の純潔が汚されたような気がしてならないのでした。おかしい話ですが、確にそのときは汚いものが口の中に這入り込んだような気がしたのです。

翌日、僕は頭がボーツとして一日中、腑抜けた顔をしていました。夜になるともう百合子恋しさに堪らなくなつて星ヶ浦の細川邸を訪ねて行きました。百合子はやはり快楽を求めて夜の灯の街に出かけたあとでした。僕はとても我慢が出来なくて昨夜の酒場を尋ね、そこで百合子を見つけました。彼女はもういゝ加減酩酊していましたが、僕が現われると大層喜んでくれて、乾杯！ 乾杯！を叫びながら酒を飲み、嬉しそうに僕と踊つてくれました。この夜も細川邸に泊りました。僕は火のように燃えさかる激情をじつと押し殺して百合子の愛情を持ちわびました。しかし百合子は先刻

の騒々しさはどこへやつてしまったのか、しんと静まり返つてスヤスヤと豊かな寝息だけが転輾反側する僕の耳に冴え返るのでした。

ついウトウトしかけたとき、百合子の声で眼を覚しました。

「お水頂戴！」

僕は弾かれたように長椅子から飛び上りました。水を飲んだあと百合子は手の甲を唇にあて、可愛いあくびを一つして背伸びをしました。

「久野さん！ その洋服筆箱にパジャマがあるから、着替えさして」

僕は早速パジャマを取つて返しましたが、驚ろいたことに彼女はドレスを脱ぎ捨てブラジャーとパンティだけの姿になつて長椅子に身を投げていました。

「靴下を脱がして！」

僕は床に跪いて絹靴下を脱がしてやりました。その位置から始めて百合子の姿態を眼のあたり眺めることが出来ましたが、その素晴らしい美事な肉体は眼も眩むほど豊満な均整のとれたものでした。第一こんなに美しい皮膚をもつた女をいまだかつて見たことがありません。靴下を脱がしてやつたあとタオルに水を浸して足を拭くように呟附かつたのですが、水色の電燈の光線の下に、僕の掌に置いた百合子の輝やくばかりの足の白さ、しかも薄桃色の皮膚の美しさその皮膚の柔かさ、すくすくと伸び切つた脚全体の臨たけた妖しさは、もう僕の視覚を奪い、血液が一遍に逆流しました。

「百合子さん！」

僕は思わず両脚を胸に抱きしめて熱情にうなされたように百合子を見上げました。百合子は花びらのように妖艶に笑うと僕のアゴを

掬いあげてじつと見据えていましたが、僕の抱擁を邪慳にふり解きました。

「パジャマ着せて。」

僕は鞠躬如としてパジャマを着せてやりました。あなた、純情ね……。百合子はいきなり僕の頬を両掌に挟んで接吻してくれました。舌を差入れられたときは吃驚して顔を外しましたが、接吻はそれを咬わなきやいけないと教えられたのでそのとおりしました。

「久野さんは、まだ恋愛の経験ないでしょう。」

僕は赧くなつてうなずきました。

「フ、フン。童貞なのね。童貞——たのもしいわ。」

百合子はコップの残りの水をふくむと僕の唇に当て、口移しに飲ませるのです。苦しさにむせながらゴクゴク咽喉を鳴らして飲み込む僕の顔を、さも面白そうに眺めていました。

読者諸君の中には、若い人も多数いるでしょう。僕はその人達のためにこゝに書いておきたい。男は真面目さや純潔だけを最高の誇としてはいけないということ、僕がいゝ例なのです。男と生れた以上は必ず恋愛の技術ぐらゐは身につけて置くべきです。少くとも女性をリードするくらいは技術なり心理は秘に研究し、会得しておくべきです。僕の知っている男で、同性から見ると軽蔑されるような詰らない人間でしたが、女からはワンサと騒がれ、彼の周囲の十指にも近い女性を夢中にさせ、競争させて、結局最も美しい女性と結婚してしまいました。彼は実に逞しい心臓と恋愛のテクニクを心得ていたのです。

恋愛に素人であつた僕など、百合子のようなラブハンターには物足らなかつたのに違いないと、あとになつて思い当る節がありまし

た。百合子は始めから僕を彼女の術中に落とし入れようと計画していたことはたしかなんです、がこんなに脆い男だとは当の百合子自身思つてもみなかつたのでしよう。

恋愛に自信のない男——女性に取つてそれはメツキの指輪ほどの魅力も価値もないものです。

岩田洋行を辞めてからというもの、僕は寝ても覚めても百合子への恋慕の念でいつばいでした。が、僕のエゴイズムは、所詮は百合子にも半分の責任があるのだから、こうなれば、彼女だつて本気に今後の僕の身の振り方について考えてくれるだろう、そう信じて疑いませんでした。実に甘い考え方だつたのですが、僕にしてみれば彼女の家に転り込むこじつけとして唯一のチャンスでもあつたのです。ところが、事實はどうでしょう。僕は毎夜百合子のあとを追つかけて廻してしました。一ヶ月もすると百合子は明らかに僕を避けるような態度を取り始めたのです。いつだつたか、僕は最初から酒気を帯びて例の酒場に行つたことがありました。百合子は僕の方を見ても知らぬ振りして他の男と踊つていました。一時間ばかりも待つてみましたが、僕のテーブルに近づきもしないのです。業を煮やした僕はヨロヨロと百合子の方に歩いて行きました。

「おい！ 僕と踊つて下さい」

僕は強引に彼女の肩をつかんでひき戻しました。百合子はシロジロ僕の顔を見ていましたが、

「ボーイさん、この男を外につまみ出して頂戴！」

あつという間もなく、二三人の男に腕を吊しあげられて文字通り表に抛り出されてしまいました。さすがに僕もムラムラと来て自制心を失つていました。起きあがるなり取つて返すと百合子の頬へパンパ

ンと平手打ちを食わしてしまつたのです。四、五人の男がドヤドヤ集つたと思うと再び表に抛り出され、蹴つたり踏んだり、僕は長い時間死んだように伸びていました。

僕は泣きました。無念の涙がボロボロとこぼれて仕方ありませんでした。その夜は近くのホテルに一夜を泣き明しました。しかし百合子に対する恋慕は火に油を注ぎこそすれ、一向に鎮まりそうにもありませんでした。街に灯が輝きはじめるときはもう立つてもいてもいらなくなり一散に細川邸に駆けつけました。呼鈴を押すと、女中の貴代が出て来ました。彼女の表情にもはつきり冷たさが漂っているのが敏感に感じ取られました。

「何か御用ですの？」

他人行儀に云われると僕はすつかり逆上してしまいました。

「昨夜たいへん失礼しちやつたのでお詫び申上げたいのです。どうぞお取次ぎ下さい。お願いです」

多分、深刻な表情をしていたのでしよう——その顔を面白そうに挑めていた貴代は、僕の真剣な態度を認めたのか取次ぎのため引込みましたが、暫くして引返して来ました。

「百合子さまは。とても御機嫌斜めなのよ。あなた、何かなさつたの？」

僕は眼を伏せました。胸がキリキリ痛みました。

「もう一度、どうぞお願いして下さい。本当に謝りたいからつて」

「あなた行つて、直接謝つたら？」

そうだ。僕はたゞきに靴を脱ぎすてるようにして、廊下を大股に歩き、彼女の寝室兼居間に這入つて行きました。百合子は長椅子の一つに体を横たえ、鳥の羽で作つた支那扇をゆつくり動かして風を

入っていました。僕は床の絨氈の上に座り両手をついて彼女の前に低く頭を下げました。

「百合子さん！　昨夜は失礼しました。どうぞ許して下さい。貴女の気の済むように打つなり蹴るなり、何をされても結構です。だからどうぞ……」

「――」

謙虚な態度を示そうとして僕はそう云つたのです。が、僕の腹の底にはきつと百合子は許してくれるだろう、散々じらして虐めぬいて、許した上で僕を可愛がるつもりなのだろう。そんな甘えた期待が絶えず動いていました。

「その言葉に嘘はないわね」

百合子はすつと身を起しました。

「本当？」

「本当です」

「そう」百合子はいきなり僕の頬に平手打ちをくれました。慌てゝ閉じた眼から火花が飛び散りました。僕の顔からサツと血の気が引いて見るみるうちに蒼褪めてゆくのがよく分りました。

「昨夜のお返しよ」

「……………」

「こゝへおいで。私の足もとに。坐るのよ。そう両手を突いて、さつきのように額を床に擦りつけるのよ」

僕は云われるとおりにしました。百合子の上履

を穿いた足が、僕の頭をグツと踏みつけました。眼が真暗くなりました。

頭の上で、フ、と笑う百合子の声が、勝ち誇つたように、さも気持よさそうに聞えました。



三、奢り驕ぶつた女の足下に

平伏し忠誠を誓うこと

僕の運命は急転直下、奴隷の位置に墜落してしまいました。一人の婦人の足下に跪いて、その足跡にされながら僕はこゝを去ることも出来ない全く意気地のない弱い男になり下つていました。哀しみと女に対する憎しみで、五体がバラバラになるほどでした。本当に骨がボキボキ軋む思いでした。それでいて手も足も出ないのです。傲慢不遜な表情を浮べて、私の足に奴隷のキスをおし、と云われると僕はすつかり卑屈な気持ちになつてしまい、命ぜられたとおりその雪のように白い足にうやうやしく接吻するのです。

百合子は毎週一度牛乳風呂を焚てるのですが、その日は朝から四回も五回も入浴するのでした。そのたびに僕は彼女の全身マッサージに奉仕しなければならませんでした。身につけるものはブラジャーとパンティだけで、液状クリームを全身になすりつけて指の腹をあて、ユルユル揉んでゆくのです。特に腿から足の爪尖に至る縁は念入りに揉まされました。百合子の体は彼女が云うようにあらゆるものが完璧を極めていました。足の小指の爪までが水晶のように綺麗で本当に鑲めたという形容が似つかわしいまで磨かれ透き通っていました。足の小指の爪はうっかり剪むのを忘れていた間に靴を穿いたりしていつか変形するものですが、小供の頃からよく手入れがゆき届いているのでしよう、それは格好のいい光沢のある一粒の宝石の価値さえもつていました。

この足がやがて僕の顔をふみにじり、礼拝させ、なめることを命じるようになったのです。朝夕祭壇に君臨してその美しさを誇つた

暴君の足なのです。

こうして僕の第二の生活は、細川邸に起き伏して驕慢無礼な一人の婦人の私有に属した奴隷の境遇の中から始まつたのでした。自然細川百合子の個人生活にも直接間接触れ得たのですが、彼女の蠱惑戦術は実に天才の域に達していました。昼間の来客もひんばんで応接の忙しさも相当なものでしたが、その洗練された話術、清水のように美しい声音、にじみ出てくる琥珀色の媚態にはたいがい男がひと堪りもなく参つてしまふらしいのです。次々に有力な後援者を作り金蔓を引き出しては百合子らしいやり方であらゆる事業にその資金を分けて注ぎ込み、そこから上つてくる利潤をサツと掻き集めて贅沢の限りを尽し湯水のように使うあたり誠に眩しいばかりの美事さをもつていました。酒場、ホテル、美容院、喫茶、割烹というふうには彼女の注ぎ込んだ資本も相当額らしく、しかし満洲という植民地の好景気に煽られて成功を納めているのでした。

当時の満洲に細川百合子ほどの美人も少かつたのですが、第一彼女の魅力は何から何まで謎に包まれていたことです。その上品な言動、かと思ふと豹のように奔放な性格、緋牡丹の崩れるように色気をふり撒くかと思ふとサツと身を引く敏捷さは目にもとまらぬ早業で、彼女のこの蠱惑戦術に眼を奪われた男は数限りありませんが、細川写真館の浜本技工もその一人です。彼は星ヶ浦海岸で当の百合子を肩車に乗せて歩き廻つていた男ですから読者諸君はすでに御承知のはずですが、百合子に猛烈な恋をしたばかりに甘心を買おうとして貢いだ揚句が逆に写真館を抵当に百合子から金を借りた。彼女は易々と写真館を所有したのでした。今は百合子の一使用人に落ちて仿いでいるのでした。これも僕の前にあつた話ですが、百合子に失

恋したある青年は、苦悶の果てに胸を患い療養所生活を続けていたのですが、百合子に対する恋心はいよいよ灼熱する一方なのに、彼女は氷のように冷たく、一度も見舞の手紙さえ出さなかつたそうです。青年は狂恋の末、どこで手に入れたのか彼女の靴下の片方を胸に抱きしめながら死んで逝きました。靴下はボロボロに破けていて恐らくは噛み破つたらしく、その話を聞いたときも百合子は同情どころか反つて彼女の肉体の魅力の凄まじい結果に満足したらしい会心の笑を浮べていたということでした。

百合子は根岸満鉄理事には随分お世話になっていましたが、やはり根岸理事さえ男性として敬視していたようです。満洲至るところ満鉄の傘下にあつたのですから治外法権撤廃後と雖も満鉄の援助なくしては手広い仕事というものは出来なかつたものです。鞍山、錦県牡丹江は百合子の財産を数倍に膨脹せしめた都市の代表的なものといわれていますが、何れも根岸理事の政治、経済両面からの助力があつたからで、一番当つたといわれるホテル経営は勿論、ある時は理事の紹介状一つで物を動かし数十万円の利潤をあげたこともあるのでした。そんな根岸理事さえも危く人生を誤らせようとしたのですから彼女の奢りたかぶつたところの隅には哀れな犠牲者の姿を眼のあたり見て始めてと快しとする悪魔がひそんでいたのでしょうか。僕はこの美しい魔女の祭壇に捧げられた人身御供だつたのです。そういえば僕という童貞の奴隷を得てからは、百合子はきわ立つて輝きを加えて行きました。心理的内面からくる自信の強みと丹念に磨かれる肉体的美容法からくる膩あぶらの乗つた妖麗さでした。

けたましく鳴るベル。

私はウツラウツラしていました。跳び起ると大急ぎで百合子の部

屋に伺候しました。

シャンデリアの光線の下でブラジャーとパンティだけをつけた百合子が安楽椅子に深々と沈み、羽団扇を使いながら僕の出仕を待っていました。僕は恭々しく絨氈の床に跪き、羽毛のついた上履を穿いた足の甲に恐る恐るキスしました。

「久野、私を拝むんだよ」

「はい？」

「何をボヤボヤしてるんだい。下郎、お下り！」

「はいっ」

僕はおもわず両手を床に突いて平蜘蛛のように額づきました。

「フン、そうよ。それでいゝの。私を拝むのよ。私を生きた女神としてあがめ祭るのよ。わかるかい。そこに額づいて私を伏拝むのよ私のこの裸の全身をお前に拝まれてあげるのよ。お礼をお云い」

「はい。ありがとうございます」

「お立ち！」

僕は立上りました。

「両腕を伸して上にあげるの。掌を前にして。そう。その姿勢のまゝで膝をまげて床につくの。やつて御覧。次に顔を床につけるの。もう一度。……違つたら。人間が神様を拝む姿勢をとるの。――」

「ばかつ！」

いきなり頬へ平手打ちが来しました。眼から火華が散るほど鋭い一撃でした。

「何て不器用な奴隷だろう！」

百合子は青白い怒りを眉宇に集めて僕を睥みしました。その眼のキラキラ輝く凄艶さは僕を圧倒してしまいました。怒るといよいよ美



しさを増す百合子の神秘的な魅力に僕は僕の宿命を観念しました。

「じゃ、両掌を合せて御覧。もう少し手をあげて額のあたりまでもつてゆく。そう。顔を床につけて手は合掌したまふ頭の上に置く。今度は体を起して。手は拝んだまふの姿勢で。そう。続けてやつて御覧。こゝろの底から私を礼拝するのよ。わかつて」

一時間近くも僕は伏したり体を起したりしてこの神を礼拝する動作をつづけました。額には汗の玉が粒を作りやがてタラタラ流れ始

めました。が、拭うことも出来ないのです。その間、ゆつくり羽団扇を動かしながら百合子の眼はうつとりと僕を見降しておりました。僕が解放されたのは一時を過ぎていました。百合子はお慈悲に唾を飲ませて上げようと云い、僕に口を開けさせてチュツと吐き込んできました。

四、女王さま御命令の

「愛の奉仕」にう
き身をやつすこと

百合子がサジストの本領を発揮し出したのは例の絨氈緞帳の代金支払請求を岩田修三が正式に民事事件として提訴し、当然、僕は証人台に立たされる破目になつたので百合子の要求を拒否する意から一度逃避したことがありました。すぐつかまつてしまいましたが、それ以来のことで、百合子の僕に対する虐待振りにはまさに暴君そのものでした。裁判所から訴状が送達された夜僕は全身マツサージに奉仕したそのあとで、百合子に足をなめるように命ぜられたのでした。それまでにこの足舐めは、二度やらされたのですが、この夜は二時間近く続けても解放してくれませんでした。百合子の足舐めの好みはこの夜を契機として本格化しましたが後には僕にこの作業をさせながらトロトロ眠る時の気持は何ともいえない快感をさそうらしく、ときどきピクリと足に痙攣が起ること

がありました。指の一本々々を丹念になめてゆき、次は足の裏に移り唇で皮膚を舐めるようにして舌を使つて静かに柔かく愛撫するのです。つまり舌のマッサージです。これは百合子も大変気に入つたらしく、脚のマッサージの場合、少しでも揉み方が下手だったり痛みを感じたりすると忽ち足蹴にするか平手打ちを加えられるのですが、足舐めには技術的にも気分的にも満足らしい表情で、そのトロンとした眼付をみてもわかるような気がしました。舐めているうちに唾がコンコンと湧き出てくるので絶えず飲み込むのですが、百合子の足が唾で濡れるので、僕はガーゼのハンカチを十枚ばかりいつも準備しておき、濡れた足の部分をよく拭き取るようにしました。

「どう？……クイーンのおみ足の味は。おいしい」

「はい。とても甘いです」

実際乳液で化粧した足は適度に甘いのでした。

「お前は運がいいのよ。私の肌に触れることは勿論唾さえ吐きかけて貰えない男が沢山いるのに、お前は私の体を揉ませて貰つたりこうして足を舐めさせて貰うなんて感謝しなくちゃいけないよ。仇おろそかに考へたら承知しないよ。いゝわね。——どう、これ？」

組んでいた脚をひいて、彼女はつくづく足首から甲にかけてのなだかなすき透るような肉付を、さも感にたえたように惚々と眺めていました。

「水もしたゝると云いたいくらい。こんな蕩けるように瑞々しい足を舐めさせて頂くお前が羨しいくらいだわ。ありがたくお舐め！」

「はい」

百合子は思い知つたかというように気儘に私の顔をグツとふみます。私は畏まつて彼女の放埒にふくらんでゆく気持を煽情するよう

に唇に愛技をこめるのでした。

「私のためだつたらお前は命だつて捧げるかい？」

「はい。」

「久野！ 岩田洋行が私を相手取つて民事訴訟を起したわよ。けさ裁判所から送達されたので、灘岡弁護士のところに行つて口頭弁論に必要な書類を提出する手筈を決めて来たの。ばかなやつ！ 何を証拠に執念深く被告扱いするんだらう。これもお前のお蔭よ。責任をお取り！」

「——」

「お前は証人台に立たされるだらうから、そのときはあの代金についてはお前が全責任を取るのよ。いゝかい？」

「——」

「フ、フ、フ。私の肥料におなり！ もし、いやだと云つたらふみ殺してやる！」

やにわに爪を咽喉もとにかけてキリキリふみにじるので危く僕は息がとまりそうでしたが、百合子はその身もたえするさまをニコリともしないで興味ぶかげに見降していました。

解放されて部屋に引取つてからも、僕は中々寝つかれませんでした。この悪夢のような耽溺した世界から這いあがろうと足掻く気持でいつぱいだつたのです。大恩ある岩田洋行を裏切つてまで百合子の肉体の薫りにむせび泣けない感情が今はつよく動き出しました。百合子に対する激しい反逆の感情がウツボツと湧いて来ました。するとつかしい岩田修三の寛大な温顔が切ないほど胸を締めつけるのでした。

第一回公判の当日、僕は細川邸を脱け出してかねて懇意にしてい

る許斐という友人の下宿に転がり込みました。許斐は僕の不甲斐なさを手厳しく説教もし、哀れな姿には同情してくれて日活館という映画館の会計の仕事を探し出してくれました。一週間経ち十日を過ぎたある日、僕は館主のお伴をして或る宴席に列しましたが、宴たけなわに隣席の青年達が昨夜行つた酒場の話に花を咲かせ、談話たま細川百合子の噂が出るに及んで僕は思わず聴き耳を立てました「細川百合子つて、何者だい？」

「さあ？僕はよく知らないけど、大した金持だつて云うじやないか第一あの肉付はどうだ。僕は本当のところフラフラしたよ。」

「独りものだつてそうじやないか？」

「幾つぐらいだろうね。」

「さあ！ 二十三かな？ 四かな？」

「いや、案外あれで二十七、八つてとこかな。もしかしたら三十？」

「まさか？」

「フーン。だけど処女じやないだろう。」

「わからないね。処女だつたら、君どうする。」

「正にブルブルだね。僕はもう一コロなんだ。頼むから何とかしてくれよ。」

「僕はあんなヴァンプ型、嫌いだな。」

「うそ云え！こいつ。」

ワツという大変な騒ぎなんです。僕はシンとしてしまいました。

火のように燃え立つ塊りがグツと胸につきあげて来ました。

大陸は本格的な冬型を迎えて、地面は凍えつき、零下の気温が続きました。が、一步家の中に這入ると、スチームの利いた室内は浴衣

がけてビールの飲めるくらい暖く、乾燥防止にスチームの上には水を貯めておくといった具合でした。戸外旬間というのがあつて、部屋に籠り勝ちな僕を許斐はスケートリンクに引っぱり出したりしましたが、僕も出来得る限りそういう機会を作つて、ともすれば堰を切り兼ねない気持を制御していました。しかし運命は決つていたのです。その日は眼も痛むほどの雪暗れで僕はスケートの帰り、雪の街路を快速で走つて来た自動車に刎ねられて倒れたのでした。

担ぎ込まれたのが附近にあつた遼東病院。こゝで図らずも僕は写真技士の浜本に出会つてしまつたのです。彼は扁桃腺手術で入院していたのですが、経過もよく退屈している折も折、僕が担ぎ込まれたのですから、すっかり飲んでしまつて僕の病室に入り浸りの有様でした。

三日目午睡からさめた僕の視野に豹の毛皮を着て、黒に大きな白線をあしらつた帽子を冠つた百合子の姿がバツと飛び込んで来ました。胸のバラの花が匂うように揺れていましたが、東郷青児の絵からぬけ出たような悪魔をひそめた女の顔は微笑一つしません。

「すぐ家にお帰り！」

「はい。」

恐る恐る這入つて来た浜本に百合子は僕の顔をじつと見据えながら宣言するのです。

「浜本！ お前もすぐ退院おし！」

タイル張りのバス。

牛乳を湛えた浴槽から白い湯気がゆるやかに立昇つていました。

ザーアツと湯を切つて百合子のほてつた全身が湯槽を跨ぎ、そこを

台にして腰を下しました。パンツ一つの姿で待機していた僕は畏ま
つて女王さまの足下に跪きました。

「四つ這いにおなり！」

すぐ眼と鼻の先に薄桃色にほてつてまだ湯気をあげている脚が二
本ニューツと伸びて来ました。僕は思わず手を差し伸べて足を額に
押した。ききキスを捧げ
たいシヨツクに胸が躍り
ました。とたんに、百合
子の脚が奴隷に一撃を加
えていました。

「女王さまの唾をのませ
てあげる！」

チュツと唾が眼の前の
タイル張の床に落ちて来
ました。

「お飲み！」

一瞬、ためらつていま
したが、そういう屈辱が
頬を赤らめるほどの刺戟
を覚えました。興奮で眼
がくらむ思いで唇をタイ
ルに近づけました。とそ
の時はもう百合子の一方
の足が唾の上をふんづけ
ていました。二、三回ふ

みにじった足を僕の鼻の先につきつけ、

「さあ！」

僕は眼をつむつて命令に従いました。その作業中に、別にチュツ
と吐きすて、もう一方の足でふみにじりながら、
「こちらも。」



僕の熱心な奉仕は足の
裏についた唾をていねい
に口中に吸い取りました
が、百合子は一度

「あゝ、いゝ気持！」

とつぶやくように云つ
て溜息をもらしたことが
ありました。僕には嬌婦
の激しいよろこびが手に
取るように分りましたが
それにしても快感が高潮
したとき溜息が出るとは
一つの新しい発見でし
た。

「今度は拝むのよ。私の
膝より上に頭をあげない
で。」

二の腕はたちまち二つ
の足の下に押えられてし
まいました。その姿勢で

僕はこの美しい裸像に礼拝の儀式を行いました。かなり永い時間でした。突如、暖かい噴水が湧き出すように一条の雨が背から首筋にはては頭にかけてサアーツと降りかゝつて来ました。

「顔をあげて御覧。」

顔をあげると噴水の滴りが髪を伝つてタラタラと顔中を濡らしました。

「フ、フ、フ。奴隷の洗礼だよ。お前はこれから私一人の生きた道具として使つてやる。お礼をお云い。」

「はい、ありがとうございます。」

「ホ、ホ、ホ。これから私のことを女王さまとお云い。」

「はい。女王さま！」

「そう。お前は私に足でふみにじられるために神様がお作りになつたつてこと、よく知つてお置き。」

許されてからシャワーで全身を洗い清め、衣履をして女王さまを待つていますと、百合子は乳風呂にゆつくり浸つたあと浴槽から出て来ました。皮張の椅子に悠然と凭れた彼女の体を僕はバスタオルで拭きあげ、黒地に草模様のある、銀糸で縁取りしたガウンを着せかけました。

「お前はこれから髪を長く伸して私に仕えるようにおし。顔はいつも綺麗にお剃り。それから髪には油をつけないこと。いつも洗つておくこと。いゝかい。私がバスから上つて、マツトの代りに私の足をお前の髪で拭くのだから。」

僕の境遇は見る見る奈落の底に落ちてゆくのを脳裏にぼんやりと意識していました。

「これ、つけて御覧。」

それは軽便な鞍でした。鞍を背中にして立つたまゝ紐を胸と腹に結いつけ、四つ這になると百合子は鞍に跨りました。膝と腕に彼女の重みを支えながら廊下を歩きました。百合子は美しい声で囁きました。

「お前が留守の間に、用意しておいたの。これからは何処にゆくにも、家中馬を使うことに決めたの。そのためにお前の背骨がボキボキ音を立てゝ軋んだりしたらさぞいゝ氣持だろうね。」

その夜、僕は彼女の全身美容に一時間余も奉仕した上、香水の匂いが消えるまでという無茶な条件で足毟めを命ぜられました。スヤスヤとさも氣持よさそうに眠る百合子の寝息とカタコトと鳴るスチームの音を聞きながら、作業中、僕は幾度か睡夢にさまよいましたが、いやというほど頭を蹴られて跳び起きたのは朝の九時を過ぎていました。

百合子の傲慢をゆする甘美な刺戟は次第に増長し、サジズムにまで発展していきました。僕にしろ、彼女と不即不離の関係にある以上マゾヒズムの配剤は避け難かつたのです。今でもハッキリ記憶にあります、百合子はフェルトの底の高い上履を愛用しましたが、それを穿せるときは僕は手を使わずに口で啣えて差出さねばなりませんでした。いつでしたかうっかり上履を口から落して手を使つたばかりに百合子は上履をつかんで僕の頬を三つ四つ続けざまに撲りつけました。そのときの生ま生ましい感覚が彼女の体内で一つのキツカケを与えたらしく、その後ちよつとした僕の失策を取りあげて床に座したまゝ長椅子のクツシヨンに顔を伏せるように命じ、ドンと頭の上に跨がり、上履を取つてお尻を連打しましたが、慣れないものですから痛みにあたえかねて身もだえながら許しを乞う僕の肉

体から一つの快樂がたしかに彼女の感覚に電波となつて伝わつたようでした。その証拠に百合子は興奮剤がわりによくこの手を用いたのでもわかります。

人間椅子！ 江戸川乱歩の探偵小説にも、そんな題名の作品がありました。僕の場合は正座して首を垂れた裸の肩をクツシヨンにして百合子は使いました。本を読み、手紙を書き、又あるときはホテルの出納報告書を水色の電気スタンドの下で目を通したりしました。脚が痺れて少しでも動くと、ペンのあただがコツンと来るのです。こういう習慣は次第に百合子の羞恥心を減ずる結果となり、僕の性癖も加速度に珍奇な責めを求めて行きました。

僕がマゾツホの「毛皮を着た女神」を読んだのはずうつとあとのことですが、あの作中にはワンダ・ヅナエフという悪魔のこゝろをもつた美女が出て来ます。彼女の肉体の神秘の震源地はその毛皮であるとマゾツホは説く。マゾツホから毛皮を除けば彼の文学は全く精彩を失います。というのは、実は百合子が僕に愛の奉仕を強要するときは毛皮を素肌に着るようになったのですから、もしかしたら彼女はマゾツホの作品を読み、ワンダにあやかりたい気持ちから思いついたのではないかとの疑念が今もつて解けないからです。しかも毛皮の効果は際立つていました。

さきにも書いたように百合子の玩具であつた僕は、俯つ伏せのあたまたに彼女のお尻を戴せられて苦しみながら、そこには甘美な恍惚境が開けていたのです。俯つ伏せをひつくり返せばあお向けになる。その顔に百合子が跨がったことはすぐ想像出来ることです。毛皮から彼女の豊かな真白い腿が花のようにこぼれるとその下に組み敷かれて苦しみ呻めく僕の感激はたちまち天国に登つて行く

のです。

「奴隷のキスをおし！ 女王さまのお顔を見上げながら私に虹の夢をみせるのよ。」

百合子は眼を閉じました。僕の奉仕が始つた瞬間、百合子の全身にははげしいよろこびが走りまわりました。

「お前は童貞！ お前のおやじやおふくろはお前に手も当てなかつたというが、私は私の魅力でお前を奴隷にすることが出来た。私はお前の顔をぶつことも足でふみにじることにも出来る。お前の二十五年の生涯は私の快樂のために捧げねばならなかつたのだわ。あゝ、この気持ち！ この気持ちをきつと天国というのだわ。こゝろをこめて御神体にくれるのよ。——もつと静かに。そおつと、柔かく。」

五、作者結びの言葉として 蛇足を附すること

この物語はこれで終ります。

ついでに補足すれば作者はこゝで浜本技士を本篇から閉め出してしまつた点をふかくお詫びしなければなりません。彼は作者とともに百合子の夜の閨房を飾つた主要人物であります。僕と百合子の演技を助ける傍役にすぎなかつたので故意にそうすることを許してもらいました。他意はありません。そう、もう一つ。裁判事件は僕の一方的証言によつて和議に終りました。岩田修三の寛大な計らいには涙が出ます。沼正三氏のいう神酒ネクターについても、百合子の香水を使つての饗宴には充分読物の価値をもつて居るのですが、余韻のない話は一切閉め出す主義を採りました。幸に御賢察下されば作者のこの上ない喜びとするところです。



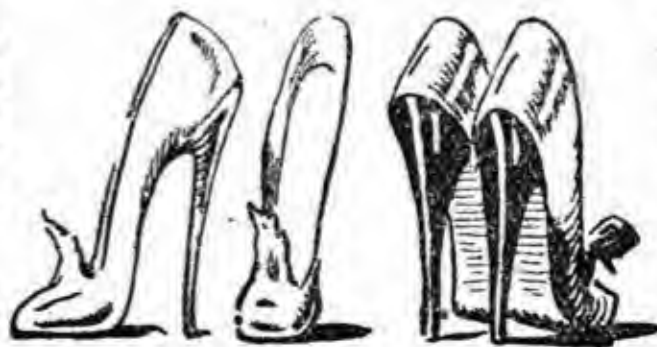
〔海外サディズム雑誌〕

服装の利用

(上)

吾 妻

新



よろめくスカート

サディズムは立場を変えればマゾヒズムになります。加虐被虐の男女関係をかいた物語も、男と女とはまったく逆の見方から興味をもつてよむこともできます。

これから述べる服装もそうなので、女が不自然な窮屈な恰好をすることは、その現象だけをみれば女の自由意志といえますが、現象の背後にそれを好み要求する男の意志がはたらいっているかぎり、真の女の欲望とはいえません。ふるい中国の纏足一つを例にとつても

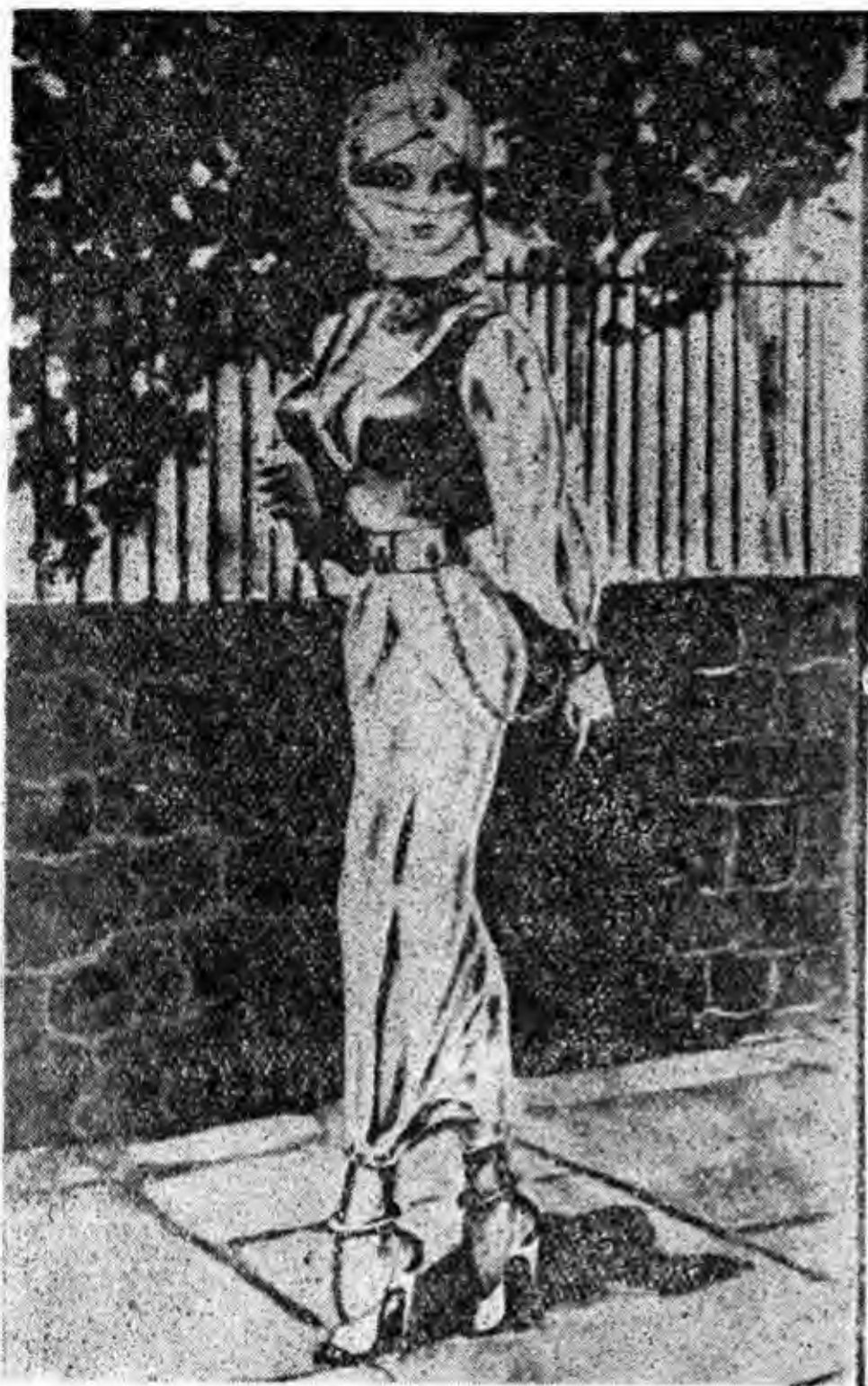
わかるように、不自然な女の服装はほとんど例外なく男の欲望がつくり出したものです。

ヨーロッパ、とくにアメリカで流行しているタイト・スカートの丈が短くなると同時に細くなるのは自然の勢いですが、階段や自動車のステップに足をかけるとき不自由をかんずるようなスカートは、もう活動的でも解放的でもない。序でながら、服飾雑誌などで解放的という言葉は、肉体の露出を意味しているだけで、自由とか活動性になんの関係もなく使われていることも注意しておくべきでしょう。

つまり、女の服装にかんする、かぎり、すべてが男本位のみかたであり、ただ女自身が意識するかしないかだけが問題として残っています。タイト・スカートの発展は、女の欲望というよりも、女にそれを欲望させるようにした男の「眼」から生れました。したがって男のサディズムがこのスカートを利用する傾向をもつのも当然です。言いかえると、女のスカートの発展の原因を、もつともするべく、典型的に打ち出してみせてくれるのが、サディズムの要求にしたがつて生れた極端な種類のスカートなのです。

hobble skirt (ホブル・スカート) は正にそれです。かりに、よろめくスカートと訳しておきましたが、それは、こゝでは一般的な膝のあたりを詰めたスカートでなく、もつと特殊な意味をもっているからです。むしろ両脚と一緒に縛るといふ原義にちかいです。もちろん歩かせるためのものでなく、弄ぶた

めの拘束が目的です。だから、これを提唱したアメリカ人(こゝに掲げた挿画の考案者)は正しくもこうかいています。「キツチリからだに合つた服装は肉体の線を見せる。だがホブル・スカートはなにもみせない!それはただ、よろめくばかりだ」報告されているホブル・スカートの一例を



よろめくスカートをはく女の図

あげると、くるぶしのところで裾につけた紐を結び、巾のひろい縞子でつくつたボウでそれをかくしてある。したがつて、両足はほとんど縛られたという恰好になります。それを着た女は歩こうとすると倒れそうになるので、召使にソファまで連れていってもらい、そこで客を迎えてお茶やお菓子をもてなしました。

ガーティという名である雑誌によせた投稿によると、シヤイロツク・ホームズでなくても次のことは保証できる。即ち、大部分の女(こゝではアメリカの女)は心ひそかに奴隷になりたい欲望をもつていて、そのはけ口が足枷のような服装に向うのだ。そして、非常に不愉快なことだが、苛酷な流行に盲目的にしたがうのだ、とのこと。では、その文章を引用してみよう。

「編輯者さま

過去をふりかえると、私たちはホブル・スカートのようなものを着て、じぶんを責め苛むことに甘んじてまいりました。

おぼえています! 私は二十才の娘時代にこの畸形物を着たのです。私たちはよく、「ちんば歩き」とか「間抜けたステツプ」などと言われました。——足枷です! もちろん

んこれを着れば、歩きかたが間が抜けるにきまつています。うつかりヨチヨチ歩きを忘れて普通に歩こうとすると、たちまち足を取られてひっくり返つてしまうのです。

電車などへ乗ろうとすれば、この残酷な拘束物を持ち上げるなんて思いもよらず、当惑してしまいます。それは、くるぶしの周囲が最大で三十インチです。そしてもつと窮屈であればあるほど、流行に適つてゐるのです。

このスカートは、ドレスメーカーに補強用として、特別のバンドを縫いこませないかぎり、二時間も着ていると裾がたいてい裂けたり切れたりしてしまいます。

これが、踵の高いくるぶしまでの靴や、また、何にもまして男や、けだものの眼から防ぐための木綿やライルの長靴下の時代の産物なのです。

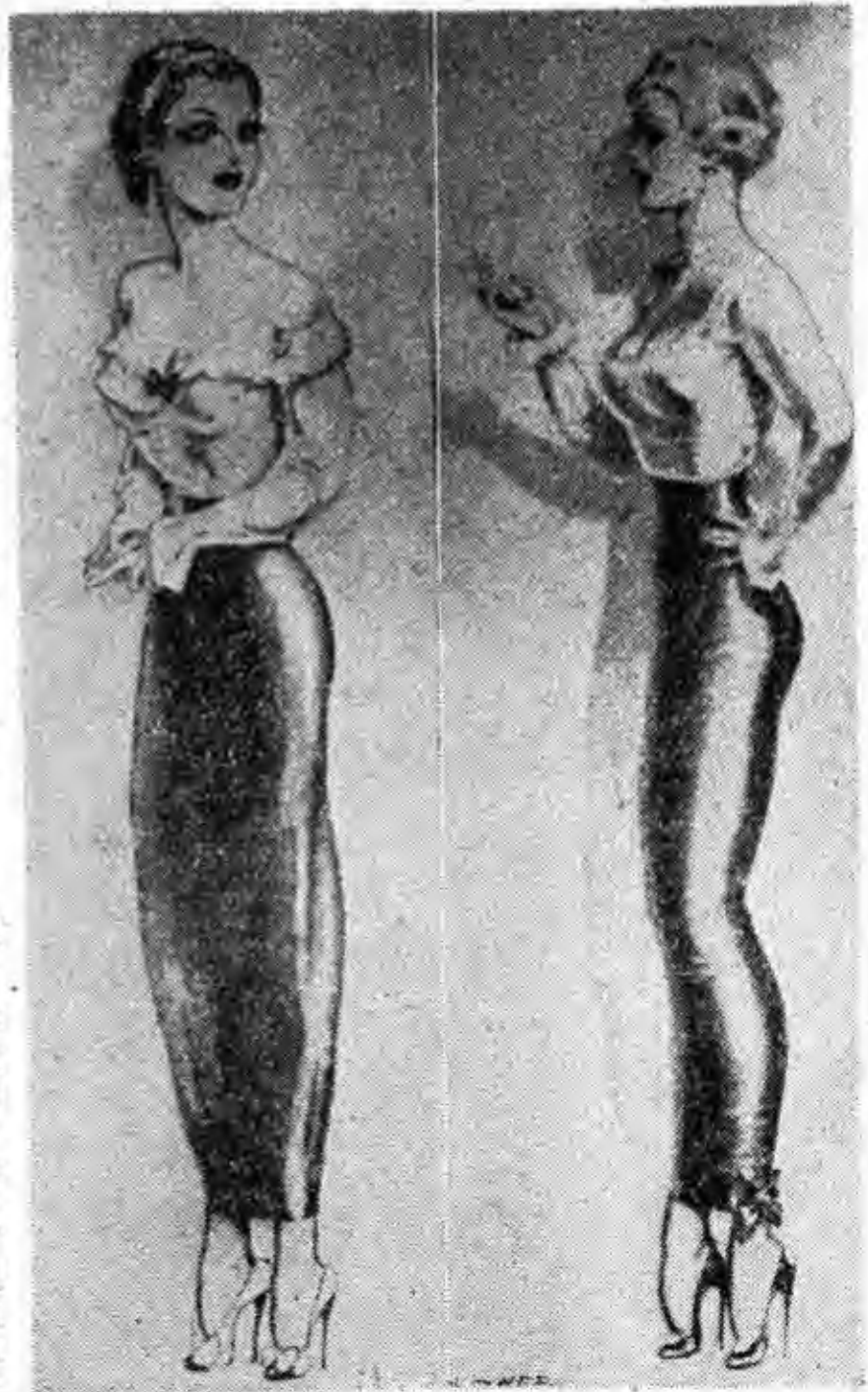
砂時計時代の衣裳学には無力な女らしさがありました。脚を「おみあし」などと言つたものです。だが、そんなことにだれが注意を払うでしょう。ホブル・スカートは彼女たちをよろめかせ、男の眼から隠してしまうからです。

ある娘はダンスにゆくとき、母親の上等の鉄をそつとポケットに忍ばせました。そして

よろめくスカート

(1)

(2)



踊るとき、狡猾にも裂目を入れました。それから数年ならずして、いわゆるスリット・スカート（裂目のあるスカート）が生れたのです。

こうした一切が、いまではあるシーズンだけに限られて、「流行おくれ」の隠れ家から戻つてこないことを、神に感謝いたします。ねがわくば、流行服の忘却の辺土にいつまでも眠らしめよ！

ところがホブル・スカートは亡び去つたのではなく、べつな形で再生しています。つま

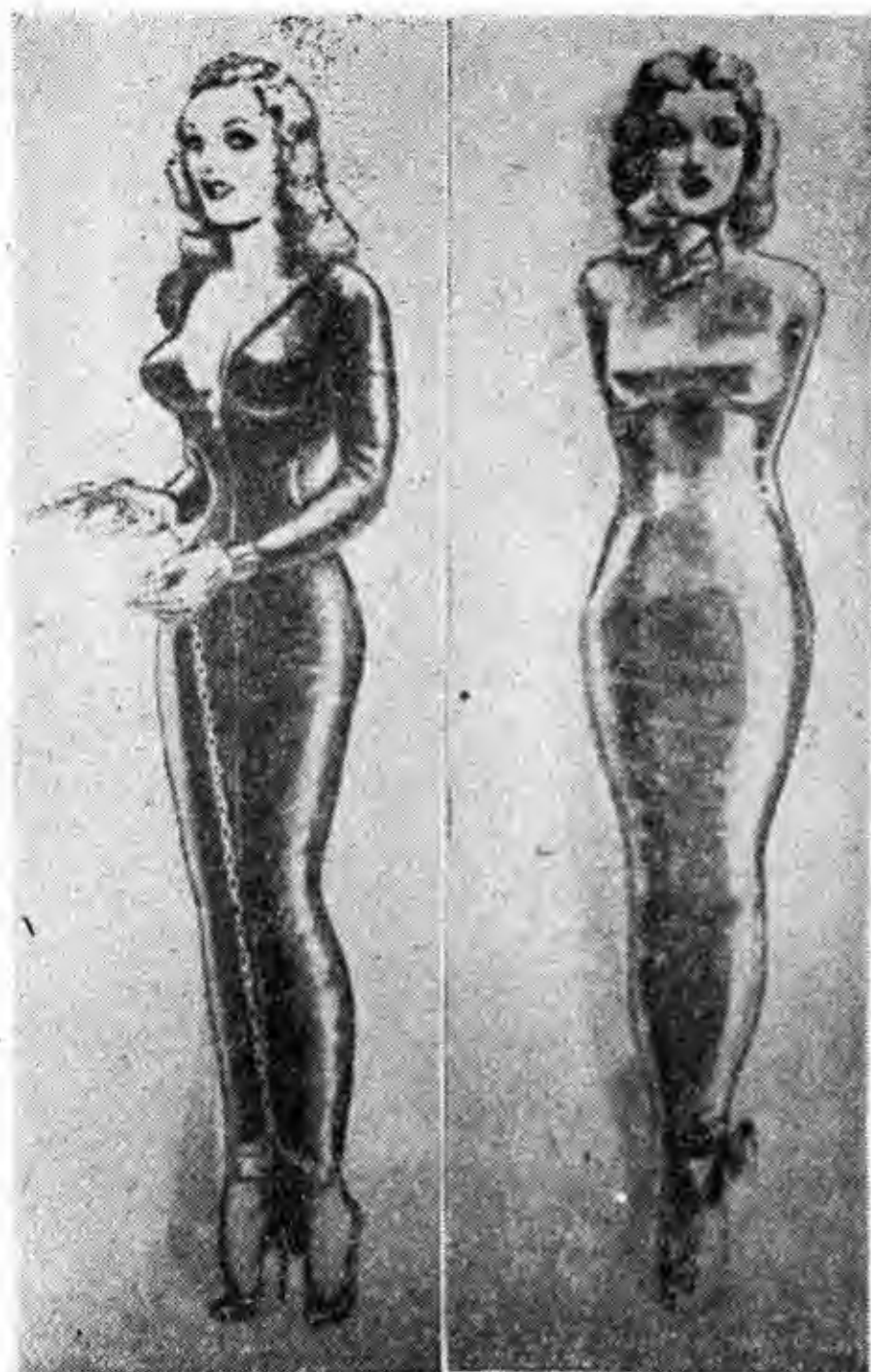
り、スカートは一時解放的となり、現代はその反動で、長いタイト・スカートに戻りつゝあります。それは足首でなく膝をつめるのですが、男のサディズムに利用されて、極端な形のものが考案されています。

挿画の1は一九一二年当時、2は一九三二年頃のホブル・スカートです。1は膝に多少余裕がありますが2はほとんどありません。ところが3と4になると、完全に実用をはなれた享楽の目的のもので、3に一九五二年型4に一九七二年の「完全型—ミイラ型」など

よろめくスカート

(3)

(4)



と名づけたのは、もちろんホブル・スカート
の発展とか進化とか称する一種のカムフラ
ージュです。これはサディステイックな服装、
サディズムの道具なのです。3は、たださ
えほとんど歩けない服に、さらに足枷をはめ、
今まで自由だった手に手錠をつけ、それを鎖
で結んでいます。したがって逃げだせないの
みでなく、背面と腰から上の攻撃にたいして
はもはや防げません。

4は完全拘束型で両脚はびつたり一つに合

せリボンで結ばれ、両手はうしろに廻して密
着した服で動かさせません。もちろん立つてい
られないから、転がされる外はないわけです
縄や紐で別箇に縛らず、一枚の布でくるみあ
げたところが変つているので、からだの線も
裸体とはべつの味が出ています。

なお、形が似ているので、図を省略しま
すが、ゼナナという仮名（実際は男です）で発
表された夜会服に「なめくじ」というのがあ
ります。これも両手を背に廻して動かせぬよ

うに、咽喉から足首までびつたり包み上げた
もので、わずかに裾の前を下方で割つてあり
ますが、膝を締めであるのでヨチヨチ歩きも
怪しいものです。しかも頭はなめくじの触覚
を偲ばせる二本の角のある帽子をかぶせ、そ
れが眼の下まで掩つているので、視覚を奪つ
ています。もちろん夜会服といつても特殊の
夜の集りに用いるので、これをきた女はいか
なる攻撃にたいしても無防備です。

次に掲げるのは、「ハレム・スカートの再
生」と称するもので、ズボンを裾近くまで縫
い合せて歩行の自由を奪つたもの。腰に鉄の
ベルトをつけ、鎖で両手をつなぎます。東洋
の女のズボンをサディズムに利用したもので
単純な裸体よりも衣服を用いていかに変化を
楽しめるかの一例です。

コルセット

コルセットが全ヨーロッパの歴史を通じて
果たした役割や、女の衣服のなかに占めている
意義などは一切省略します。ただここでは極
端な型——つまりアブノーマルな面だけに触
れます。その場合のコルセットは、女が意識
しようとしまいと関係なく、明白に、男のサ
ディステイックな要求から生れたものです。

なぜかという、いわゆる「蜜蜂の胴」の追求は初期においても単なる美の追求でなく男性支配の潜在的なサディズムを含んでいるのですが、それが極度にひどくなつたときは、美感よりもコルセット教育に耐える女の忍従がずつと重要視されてきているからです。男の興味はその点に刺戟されたのです。一八九四年の「Tit-Bits」から、ある女の告白を引用してみます。

「私の経験してきたような訓練を強いられただつたら、あの締めつけに心からの憎悪を抱かないものは百人中一人だつてないと思います。だから私は、おなじ体験をされた方々にかぎりなく同情するのです。私はじぶんの不幸の全部を、わかくして孤児になつたことに帰します。両親とも、私がやつと十才になつたとき亡くなりました。父は、友人のある紳士に私の養育をたのみ、十分な教育を授けてくれるよう望んだのですが、残念ながらそのひとは死にゆく父の懇願をみたしては下さらなかつたのです。」

父にはほとんど遺産がありませんでした。そこで私の保護者——もしもそう言えるとするれば——は、できるだけ手数をかけずに教育するには「娘の家」に送りこむのがいちばん

だと考えました。

十三才のとき、私はまず「娘の家」にやられました。そこですぐ分つたことは、バラ色の寝床をのぞいた一切の経験にぶつかったことです。最初の一年間は厳密に規定された食事を命ぜられました。それから、最初のコルセットのために寸法をとられました。それは強靱な構造で、絶対に延びないのです。はじめは二十三インチに締められました。ものすごくビツタリしました。私はそれほどにも思わなかつたのですが、数ヶ月たつと、少しづつコルセットを、毎晩縮めてゆくのです。

私は泣事をならべ出しましたが、女主人は、わかい娘は誰しもやるのだからいまに馴れると申します。たしかにそう悲鳴をあげるには及びませんでした。というのは、まだそれを着けて走つたりできたからです。また、夜は外すことを許されました。

半年たつと、胴廻り十九インチのコルセットをされました。と同時に、絶対に外すことを禁じられ、夜だろうと昼だろうと着けたままです。ただ夜に一時半だけ弛めてくれましたが、それもホンの一時で、すぐ十九インチに締め直されます。週に一回だけ外してもらいました。

私はこの扱いに耐えがたく、幾度もこのことについて保護者に手紙をかきました。だがその手紙の受けた運命は、火の中に投げこむのと同じようなものでした。間もなく私は、他の娘たちもほとんど全部、そうした境遇にあることを知りました。

私の胴は一月ごとに細くなりました。そして、ほんのちよつとした手落ちでもあらうものなら、罰として平常よりも一インチ締められ三週間又は一カ月もほつておかれました。私は一度ならず、気絶するまで締め上げられたのです。

三年間訓練を受けて、胴廻りは十五インチ以下に達しましたが、さらに容謝なく締めつけられてゆきます。パーティや催しに出席するときは一層無慈悲に扱われ、十三インチに締められるので、はじめはほとんど息もできませんでした。すでに申したように、最初締めつけられるときは息も絶え絶えですが、しかし、それにも拘らず、コルセットをつけるとき快感をかんじたことは言わなければなりません。

五年の訓練の結果、私は病気で三ヶ月もコルセットを外さねばならなかつた後でも、十四インチをホンの少し越す程度のウエストに

なりました。とはいえ、私よりもつと細い娘たちも幾人かおり特にそのうちの一人ときたらウエストが実に十三インチ以下なのです。

この頃保護者から、もうこれ以上面倒をみることができないという手紙が来、同時に女主人には私に適当な地位をみつめてやつて欲しいと言つてきました。彼女はさつそく、ある大きな地方都市のもつとも有名な婦人帽とコルセットの店に私を奉公に出しました。私はその店の「着つけ部」に入れられたのですが、もつと強く締める必要があると絶えずやかましく言われました。

そして、二カ月後には、小さな錠が前にある金属性のバンドつきコルセットをあてがわれ、その鍵は女主人が取り上げて持つてゐるので、またもや私は夜ねるときもコルセットから逃れられなくなりました。

この店の娘たちの数人は、私よりも胸が細く、ひとりの娘は確実に十三インチ以下でしたが、その子が私に語つたところによると、彼女は数年間というものの一度に三十分以上外したことなく、その全

期間を通じてコルセットを十六インチ以上に弛めたことはないそうです。

着つけ部の主任となつた現在でさえ、私のウエストは十四インチ以下です。ただ、いまでは地位がありますから夜はコルセットを外すの特権を持っております。

十三インチのウエストがいかなるものかを知つて頂くために、写真を一葉お目にかけます。このおそるべき畸形を生むために、右に引用した血と涙の訓練が必要なのですが、蜂



ウエスト十三インチのコルセットをつけた女

の胸を熱望する男は例外なくその苦しみを知つており、「ロシア宮廷の踊り子」に出てくる男たちが異常に発達した臀部から鞭打の歴史を想像するように、悶絶したり泣いたりした歴史を想像して刺戟をうけるのです。

したがつて、サディズムを取扱つてゐる欧米の雑誌には、コルセットをつけたスリッパ姿の女の絵や写真がザラにあり、くびれた胸を強調しています。また、それがいかにわれわれ男性の熱望するところかという煽動的記事も珍らしくありません。コルセットは拘束具として、しかも長年月の苦しい訓練を伴う拘束具として、彼等に大きな意味をもつてゐるのです。

次にコルセットと歩行の束縛と結びついた例をあげます。これは雑誌の編輯者に対する手紙です。「私は第二号に掲載された、肉体訓練に関するあなたの記事をよんで非常に興味ふかく感じました。私は十九才のころ、夜の舞踏会に出る日の午後は休息をとる習慣でした。休息のときは特殊な肉体訓練用コルセットをつけるのです。

それはやわらかい革製ですが、きわめて強靱な骨（鯨骨？）が入つていて、胸から足首までつづいています。両足は特別につくつた婦人靴に二本一緒に押しこまれ、靴の甲の裏でコルセットと革紐で結びつけられます。

コルセットをかける小孔は、前についていて、背面で締め上げるのです。——この上もない無慈悲な姿です。手は自由ですけど、扶けを借りなければ身じろぎもできません。こうして私は、本をよんだりウトウトしたりして二時から四時十五分まで過します。そのころになると、女中が午後のお茶を運んできますが、コルセットは外してくれず、晩餐会や舞踏会の衣裳の仕度がはじまる六時までほつておかれます。

私はいつもそれを享受しました。あなたは過去を掘り下げることが好きのようですから、ふるい、そして楽しい思い出を私に呼び起して下さったことに定めし興味をお持ちになつたろうと思います。あなたの、パトリシア

編集者の添えた画がありますが、省略します。

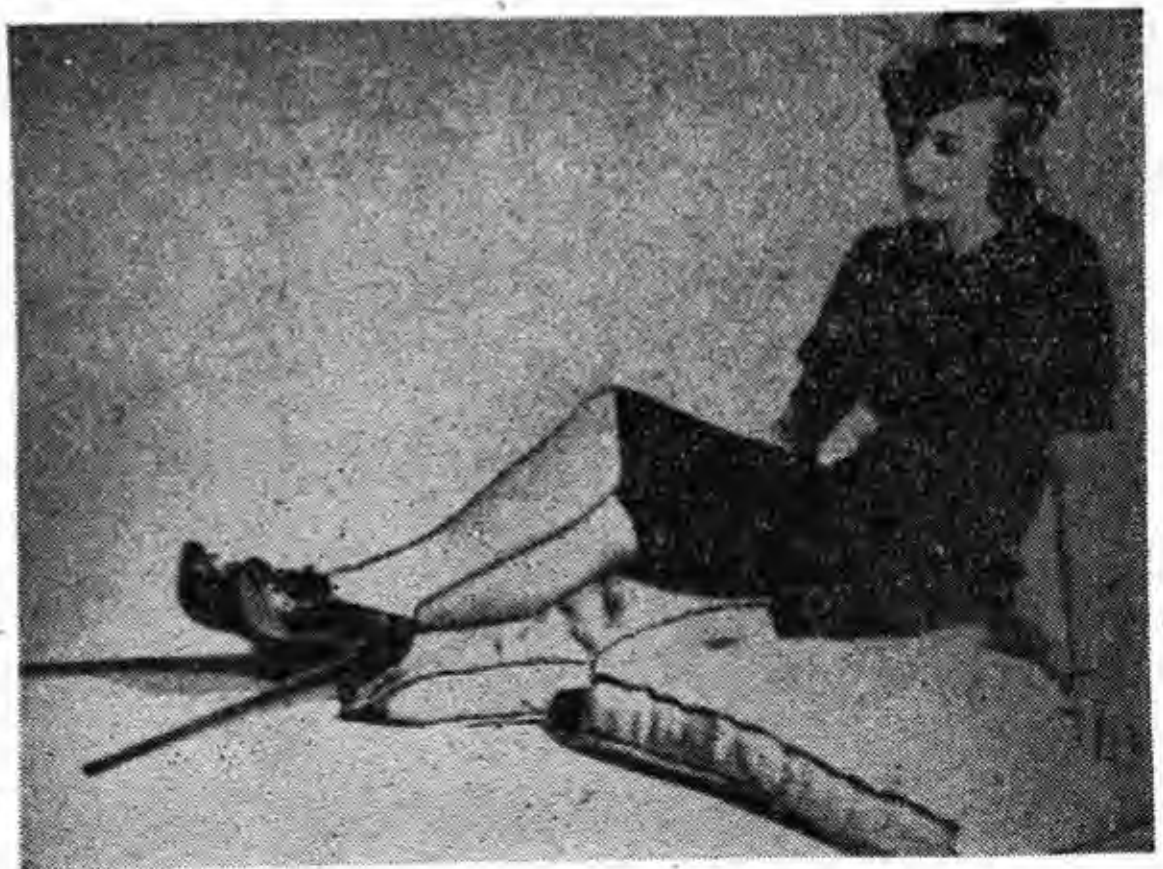
ハイ・ヒールと長靴

これは、マゾヒストの方々から抗議が出る

かもしれませんが、欧米とくにアメリカで流行している踵の高い靴は、女権どころか女の隷属を物語っています。それは一種の纏足であつて、コルセットや、華美な衣裳などと共に、解放されない女の意識の象徴です。通俗的に言つてしまふと、男は女に活動しにくい不自由な服装をさせ、その弱いたよりない姿を楽しみます。それを誇つたり楽しんだりしているわけです。甘やかされおだてられて自由だと感ずることと、解放された事実とは一致しないどころか、殆んどが正反対です。だから、女が男と対等になれば、まず、決してハイ・ヒールは穿きません。

コルセットと同様に、通常は意識されないこうした事実が、サディズムの世界では、そののもつてゐる拘束的な性質が強調されるために意識的となります。アチラのサディストは例外なしと言つていい位、ハイ・ヒールを女に穿かせることを好みます。虐待されている女の写真や絵をみればおわかりでしょう。

もし彼女が運動靴だの、踵の低い活動的な靴などを穿いていれば、それだけ解放感が邪魔をして感興を削ぐからです。反対に、ハイ



一フィート以上もあるハイヒール

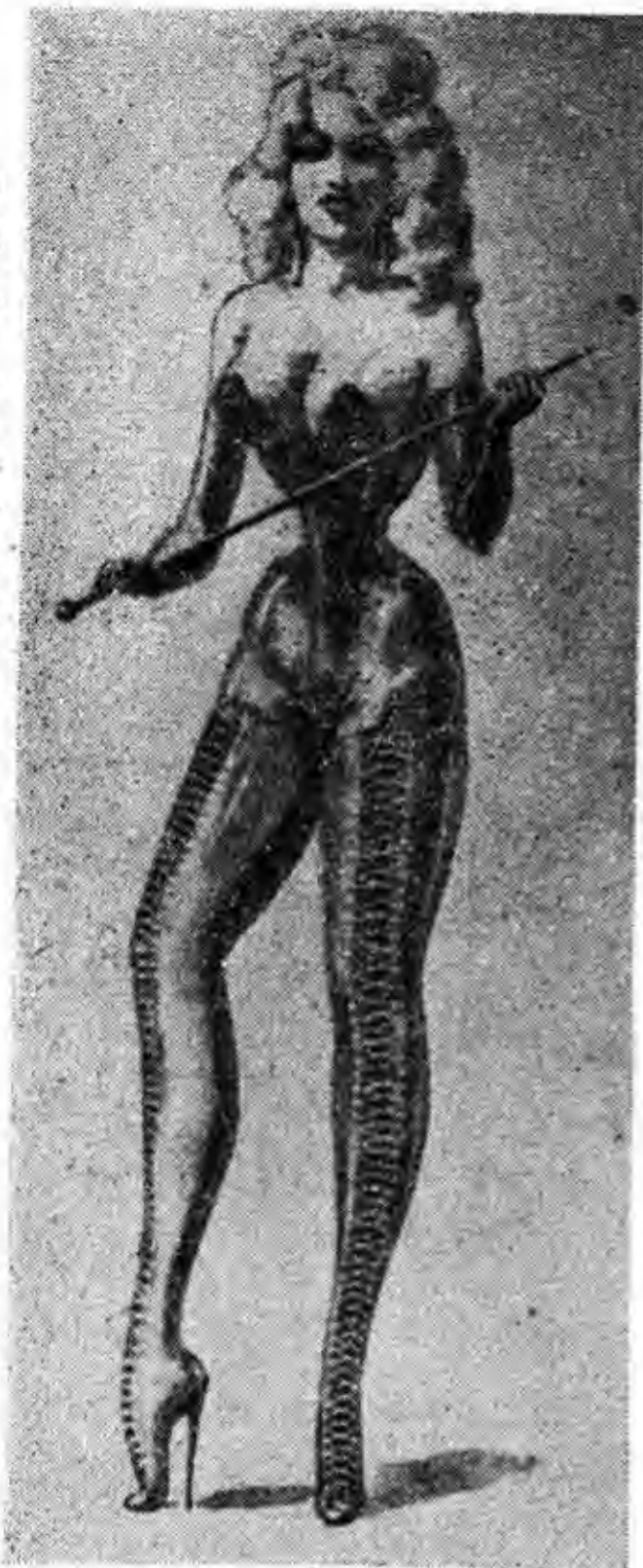
・ヒールは不自由さ、弱さ、歩きにくさ、もろさ——ひつくるめて女らしさが、近代的なスマートな形で訴えます。

ハイ・ヒールの話や、宣伝や、写真は間断

なく出ます。六インチの高さは普通とされています。こうなると歩くのは軽業であり、よほど訓練しても自由には走れません。つまり見せかけの自由によつて拘束を課したわけであり、さきのホブル・スカートとおなじ効果をもつてきます。

その最も極端な例が、挿入した写真にみるような一呎以上のハイ・ヒールです。もちろん立つこともできません。これだけを見るとバカけているようですが、添えてある説明に「この上なく完全な……」とあるので、ハイ・ヒール一般が内包する拘束性の意識的な利

用だということがわかります。言いかえるとこの靴をはいた女は両脚の自由を奪われたも同然なので男のサディズムに役立つのです。次は長靴ですが、こゝで言う長靴はもちろん実用的のものでなく、ほとんど腿の附根まで達します。それは柔軟な上質の革製で、前方を上部まで紐でかがり、かたく締めつけるのです。しかも、それはハイ・ヒールですから、皮膚をしめつけるコルセットの役と、運動を奪う目的とを二重に果たした上に、下半身を視覚にさらすという点で刺戟的です。すぐれた写真がたくさんありますが、誇張された



「女鼓手」と題された長靴をはいた女

絵画のほうに性質をよく現しているの、その一例をあげます。(棒をもっているのは女のサディズムの意味でなく他の四つの画とともに「女鼓手」と題されているからです)裸体をただ縛る、という曲のないやりかたと異り、服装の利用にはまだまだ無限の変化があります。特にその重要な点は、それ自体がサディズムの一要素となつてゐることです。

また、このような工夫は、すでにサディズムが遊戯化してきたことを語つています。野蛮な暴力衝動が昇華されて、手のこんだ、相手の合意にもとずく、危険性のないあそびです。それに物足りなくても不満でも、文明社会で、もしもサディズムが生き延びてゆくとすれば、こうした方向を取らなければいけないし、またそうなつてゆくと思います。

(つづく)

◎四月号より連載いたしました海外サディズム雑記は、大好評にて毎月皆様から待たれておりますが、洗練されたサディズムを提唱される吾妻先生はお忙しい作家生活の余暇をさいて素晴らしい贈物をドシ／＼お出し下さるそうですから楽しみに致しましょう。(編集部)



○アブニストの記○

痴迷

(ちめい)

鬼山 絢策
方金 三・画

私はふとしたことから、三木という四十男を情痴の迷路に踏みこませた。

その迷路は、私には知悉した道筋なのであるが、私の妻のきよ美と言う女性に眼をふさがれた三木は、きよ美の体臭を慕って、私の思う通りに歩かせることが出来るか、私の指示に依つてきよ美が三木をそこ迄導くことが出来るかどうか……

二十四 魅力のテスト

「あらあらあら、仕様のない人ねえ。」

きよ美は押入の中のグツシヨリと濡れた蒲団を見て、仰山

に叫んだ。

「だつて我慢出来なくなつちやつたんだよ。まこと止むを得ざるものであるんでね。」

「皆蒲団へ透つちやつたわ。大洪水ね。あゝ臭い。」

この百年の恋も醒めるようなエゲつない事態が生じて私達夫婦にとつては大した醜態にも感じないのだ。二人の幼い子供を抱えて毎日小さな洪水に見舞われて居るきよ美には、少し位大きな洪水に遭遇してもそれ程ひんしゆくはしないのだ。勿論これは私の想像だが、私はきよ美が、思うさま私が汚した後始末をすることに快感を覚えた。斯う言う所は私にサチズムの気があるのかも知れない。

「どうだつた？ ウフ、フ、」

「ウム！ スゴイ。お前の言う通りだつたね。あゝも簡単に



三木がお前の命令に服従するとは思わなかつたよ。」

「二度目ですもの。割にやりよかつたわ。」

「三木のあの顔はみものだつた。三木のおかみさんが見たらどんな顔するだろう。」

「アハ、ハ、ハ。一べん見せてやりたいわね。」

「まるで酔っぱらつたように、知性がなくなつてしまつて居るね。虚脱したような顔つきだよ。」

「あれでとても興奮してるのよ。妾その証拠を見たもの、あなたも見たでしょ。」

「サア、そんな方迄眼が行かなかつたよ。だがあれで結構彼は満足して居るらしいね。」

「そりや矢つ張り、もつと突込んだ慾望の方が強いよ。何度も妾に要求したわ。」

「小声で聞きとれなかつたけど、彼がときどき口を離して喋つたのがそれなんだね。」

「堪らなくなつたんでしょ。」

「バカな奴だ。亭主の俺が見て居るとも知らないでそんな事言い出すんだからな。」

「でも罪ね、あんなに迄してからかうの。」

「そんなことはないさ。彼のいやがることを強いた訳ではないし、あの行為自体を彼が望んで居たんだから、彼の悲願を或る程度叶えてやつたようなものだよ。」

「どうだか、妾が喜ぶと思つて、妾へのサービスのつもりでやつたんでしょ。」

「イヤそうじゃない。彼自身も好きなんだ。それでなければ

あんなに一時間近くも続けて居ないよ。」

「フ、ハ、ハ。こんがいうわね。」

「お前だつて満更、悪い気持じやなかつたろう。」

「別にそんな事もないけど、あなたのためにやつたのよ。」

「そりや嘘だ。只俺へのサービスだけのつもりならあんなになくやる筈がないじゃないか。」

「そりや男を自由自在に征服したと言う方の快感の方が強いわね。」

「お前にそう言う気持があるならもつと徹底的に征服してやればいいんだ。三木がどこ迄お前の難題や苦しい命令に服従するかテストして見ればいい。」

「でも考えて見りやあんな男征服して見たつて意味ないわ。」

「俺には意義があるんだ。お前の放つ魅力がどこ迄あの男を迷わすことができるか試して見たいんだ、そして一応記録にとつておこうと思つてるんだよ。」

「あなたも随分変態ね。」

「イヤ変態ではないと思う。自分の妻の魅力のテストをして見たいと言う気持はどんな夫にだつてあるもんだと思う。」

「私自身、内心自分のこの企劃がアブノーマルだと思つて居る。だがそれを何とかして意義あるものゝ如く理由づけようと言う気持が私のきよ美に対する体裁をつくらう心から出て居るものであることを自覚して居た。」

二十五 憎悪誘発

私は日記をつける傍ら、今日の出来ごとをありのまゝに、



忠実に記録した。

いまそれが斯うして活字になつてゐる訳である。

世に四十代の年齢を「不惑」と言う。

四十にもなれば世の中の一通りのことは味わつて大抵のこととは感わなくなると言う意味かと思うが、その感わざる年齢に達した分別男を迷わせて白痴の如く、奴隷にした妻の魅力に、誰よりも私自身が一番満足して居るのだ。

私のこの計画はアブ行為ではあるがそのうらにはそのような心理が仿らいて居たのかも知れない。

それから三木は暫らく米なかつた。

あれから急に米なくなつたので、まさか「へきえき」したのではあるまいと思うが、あの時あまり時間が長すぎたので後になつて、後悔してゐるのかと思わぬでもなかつた。

実はあの翌日も私は押入の中で待機して居たのだが、そんな訳で待ち呆けを喰わされた。

私にはそれが無性



に癪にさわり、益々きよ美をけしかけることに務めた。

だが、それは私の思い過して、五六日後に私の留守に来て相変らずきよ美にサービスして行つたことを知つた。

その時、彼は私の愛用して居たカメラを借りて行くと云つて持つて行つた。

きよ美の話に依ると、彼は近頃例の代用炭の方が思わしくないのので、秋田県の金山を見つけて、金鉱熱にうかれ出したようである。

何でも昔、秋田の佐武侯が藩の金山として金を掘り出しその後住友の手に依つて相当掘り出された鉱山が廃坑になつて居るのを復活させる仕事にのり出したところでその鉱山の地形を写真に撮るのだと言つて、私の愛用して居たセミ・イコンタを持つて行つてしまつたのだ。

私はきよ美が軽々しくカメラを貸したことを叱つた。

セミ・イコンタが当時いくら位したか知らないが、独逸からの輸入が止つて



居るのだから、容易に手に入らぬ品物であることは確かだった。

「あのカメラ、そんなに高いものだつたの。」

きよ美はカメラの知識がなかったからテツサ一の三・五のレンズがついて居たなんて言つても分らなかった。

それとアルコールランプと局方の酒精燭を一本持つて行つてしまった。山で金をより分けるのに使うのであろう。

それきり一ヶ月ばかり姿を見せなくなつた。

「彼奴、妾をだましてカメラとつてつちやつたのかしら。」
「まさかそんなことはあるまい。いくら三木がおちふれてもそんなことはしないよ。」

時は真夏に向い、カメラのシーズンだった。

私達一家で浅虫温泉へ海水浴に行つた時も、お盆が来て、夏祭の風景を写したくても、カメラがないのに、私よりもきよ美の方が憤慨した。

「直ぐ持つて来ますなんて言つてもう二ヶ月になるわ。彼奴ほんとにひどい奴だわ。きつと質屋に入れるか売とばしたかも知れないわ。御免なさいね。」



私は彼が横領するような男ではないと思つて居たが、これをタネにして、きよ美の憎悪を煽り立てることは忘れなかつた。

そのうちふどしたことから彼の消息が分つた。

私の石鹼の得意先で、その主人の父親が鉱山師で、その親爺の所へ三木が山から堀り出した金鉱を鑑定して貰いに来て、爺さんと二人で鉱山に行つたこともあり、今も一生懸命山を調査して居るのだと言うことが分つた。その爺さんが三木の鉱山に相当乗気になつて居るらしかった。

「お会いになるんでしたら御案内しますよ。彼は山男みたいに山に住んで毎日あつちこつち堀つてるんですから……」

とその爺さんは言う。確かに金がいくら出るらしく、川で砂金を洗つて町へ売りに来たこともあると言う。

きよ美は責任を感じて三木の家へ行つて彼の消息を聞いて見た所、秋田の山へ行くと言つてもう二ヶ月以上も帰らないと言ふことだった。

彼の細君が一銭も仕送りをしていないと言つて怒つて居たそうである。



やはり私の想像通り彼は嘘はついて居ないので、カメラもきつと手許に持つてゐるだろうから、そのうち返しに来るだろうと思つた。

彼の噂を聞いた翌日の晩おそく、十一時頃に表の戸を叩く者があるので出て見ると三木だつた。

「暫らくでしたね。どうしました？」

「イヤ御無沙汰しちやつて、今、山から下りて来たところなんですが、いつぞやお借りしたカメラをお返しにあげりました。」

彼の顔は陽焼けして真黒になつて居り、思いなしか憔悴して居るように見受けられた。

兎も角家へあげて山のもようを聞くと、彼一流の弁舌で、

非常に有望なようなことを言う。

「ときに済みませんが、晩飯がまだなんですけども一ぱい御馳走して頂けませんか」

と言ひ難くそうに言う。カメラも風呂敷包みの中から差出した。私は一応調べて見ると、シャッターの具合が一寸つかえた。

「シャッターが変ですね。落したことはありませんか？」

「サア、別に落つことしたことはないんですが……」

「レンズも大分曇つちやつたなあ……」

「どうも済みません……」

私も一寸癪にさわつたが、きよ美も傍で聞いて居て明らかに怒氣を顔に現わして居た。

「きよ美、何かおかずあるだろう、ありあわせのもので御飯

をあげなさい。」

「御飯なんかないわ。」

「イヤ少しあつたらう。三木君、まだ晩御飯を食べてないそうだから……」

きよ美は不承不承に支度して、香の物だけつけて出したのを、三木はうまさうに食べておはちを空にした。

「済みませんが、今晚一晚泊めて頂けますか？」

「えゝいゝですよ。もうおそいから、そんならお前、此処へ蒲団を敷いておあげ、私も今日は疲れていますからお先に失礼しますよ。」

私はさつさと寝てしまつた。それはいろいろ計画があつたのことだつた。

二十六 掃き出された亭主

きよ美は三木を泊めるのが面白くないらしく、私が次の部屋へ引下ると、入つて来て「自分の家があるんだから自分の家へ帰ればいゝのに。飯を喰わせろの泊めてくれのつて、まるで宿なしみたいだわ」とブツブツ言つて居る。私は無言で眼で合図した。

「フン、あなたはそのコンタンで泊めたのね。」

「おい、聞えるよ、そんな大きな声を出して——」

きよ美が蒲団を敷き終ると三木がきよ美に話しかけた。

「済みませんね。実は今夜家へ帰つたんですよ。だけど家内と喧嘩して来ちやつたもんですから——」

「久し振りにお家へ帰つたのに奥さん、喜ばなかつたの。」



「喜ぶどころか顔見るなり金持^{かね}つて来たかと言うんです。金持^{かね}は持つて来ないけど金^{きん}を持つて来たからこれを明日売りに行くんだと言うと、金^{かね}を持つて来ないのに家へ泊める訳に行かない。母さんも兄さんも怒つてゐるつて言うんです。そりや仕送りをしなかつたのは悪いけど今、大事業が成るか成らぬかと言う大切な瀬戸際なんでしょう。その位のこと理解があつてもよさそうだと思うのに、だめだと言つて箒を持つて来て私を叩き出したんですよ。そりや兄やおふくろが傍で見て居る手前もあつてそうしたんでしょうが、蔭に廻つておむすびの一つもポケットへ入れてくれる位の思いやりがあつたつていゝと思うんですがね。家内はまるで鬼ですよ。今に見ろ！成功したら此方で家に入れてやらんから……」

私は蔭で聞いて居て危うくふき出しそうになつた。三木が細君に箒ではき出される姿を想像したからである。

「でも、奥さんには親切にして頂いて、ほんとに僕は嬉しいです。今に成功したらうんと御礼しますよ。」

それから、今の仕事がいかに大きなものであるか、と言うこと、会社が出来れば自分が重役になれるとか、そしたら東京に家を買つて自動車置いて乗り廻すとか、例の空想談がとりとめもなく続いた。

私は一たん寢床に入つたが、ソツと起き出して境の櫓の一番下の所の破れめから三木の部屋を覗いて見た。

きよ美は三木のシャツを脱がせて綻びを縫つてやりながらフンフンと三木の空想談を聞いて居た。

一わたり見廻して、この破れ目からどの程度迄視野が利く

かを確かめると、私は又寢床に戻つて隣室の気配を耳で探つて居た。

(蒲団の敷き方がまずいな)

と思つた。三木が此方の部屋へ足を向けるように敷いてある。何故頭を此方向けに敷かなかつたんだろう。この前、泊まることがあるかも知れないと思つて言つておいたのに――

「これが金ですよ、奥さん。」

ガサガサと新聞紙の音がする。私は又ソツと覗いて見た。

三木が上半身を蒲団からのり出して、枕元の汚れた風呂敷包みを開いて新聞紙に包んだものをきよ美に見せて居る。

「これで二万円位はタツブリあるんです。明日売るんですけどね。家内の奴は見もしないんです。私の二ヶ月の汗の結晶をね。」

きよ美は針を動かしながら横眼でチラと見ただけで

「二ヶ月でその位しかとれないんですの。」

「いえ、これは仕事の片手間にとつたんですよ。大体鉾山の調査が主な仕事なんですからね。ほん気で堀れば、一人で堀つたつて三万や四万位稼げますよ。でもそんな細かいことばかり関わり合つて居られませんからね。」

三木の身体がかなり蒲団からはみ出して居る。きよ美の眼は砂金を見るよりも三木の身体の方にとどき注がれた。

きよ美が膝を稍くずして裾前から赤いものがこぼれ、丸い膝小僧が見えて居た。

が三木は砂金の包みを大切にしようと、仰向けに蒲団の中に潜りこみ、



「あゝ、早く分析の結果が知りたいなあ。ほんとに有望なら国家が何千万でも補助金を出してくれるんですからね。」

三木の眼は天井をみつめ、空想家特有の遠くを眺めるように眼を細めて居たが、やがてその眼を閉じてしまった。

きよ美は睨むように三木の顔を見下して居たが、

「出来たわよ。」

とシャツを傍へ置くと、そゝくさと立上つて、私の部屋へ入つて来てしまった。

きよ美は私の顔を見ると無言で首を振つた。そして耳許に口を寄せて

「だめ、今夜は……」

「これからでも、いゝじゃないか」

「イヤよ。何だか気分が出ないのよ。それに疲れているし、明日にするわ」

二十七 醜 景

私はあけ方の五時頃眼が覚めた。もうすっかり明るくなつて居た。私は暁に眠りが深くなる型だから、これはいつになりことだった。

ぐつすり眠つて居るきよ美を小突いて起した。きよ美は睡がつて不気嫌だったが、頬に接吻してやると

「へんたいとうちやんね！」

と小声で私を睨みながら、乱暴に私の眼の前で片膝立てゝ起上つた。赤い腰巻が割れて肉つきのいゝ内股が私の顔すれすれに露出した。

（これから責める「武器」なのよ）

と言わぬばかりにきよ美の姿態は示威的だった。一瞬、私は三木に代つて私が責められて見たいような衝動が起つた。

きよ美は長襦袢姿のまゝ隣への襖をあけ、大きな音を立てゝ閉めた。

私は後を追うように寢床から這い出して破れめへ眼をあてがつた。

きよ美は三木の枕もとにしやがみ、三木の鼻をつまんだ。

三木は眼をあけてきよ美を見上げ、ニヤリと笑つた。

きよ美の態度は昨夜と違つてひどく積極的だった。私に先程しめした示威を三木の顔の前で、いとも無難なポーズで平然とくり返して居た。

三木の眼は直ぐそれに釘づけになつた。

きよ美が何か小声で囁いた。三木は蒲団から裸の腕を出して私の部屋の方を指さした。

「大丈夫よ。よく眠つてゐるわ」

その時三木の視線がサツと鋭く、私の覗いて居る破れ穴へ注がれた。

ハツとして私は首を引込めた。畳に顔をつけたまゝ耳だけで隣室の動静に神経を集中した。

約五秒位たつてから、私は恐るゝ破れめに再び眼をあてた。その間に隣室の光景はガラリと變つて居た。

（失敗つた……眼を離すのじゃなかつた！）

と後悔した。私には現在の光景に到る迄の過程を見たかつたのだ。



私は女の便所覗きをして居るような気分になつた。

私は女体には人一倍憧憬し、窃視慾はあるのだが、便所覗きだけはする気が起らない。仮にその行為が、法律に触れなくとも、恥かしい行為でないとされたとしても、恐らく私は便所覗きはしないだろう。何故なら便所における女の姿体と云うものは醜惡極まるポーズであるからだ。

便所で勢いのいゝ放射の音を三木も私も聞いた。三木は仰向けになつたまゝで眼を閉じて居たが、その口は半開にだらしなくひらいて居た。そのかま首が急にムクツと持上ると私の方へ又視線が来た。彼の視線と会うと、ハツとして本能的に首をすくめなくなるのだが、今度はそのまゝ彼と視線を合わして居た二三秒睨み合いが続いた。

三木はそのまま首を仰向けにして眼を閉じてしまつた。

たしかに三木の視線は、破れ穴に注がれ、私の視線とピッタリ合つて居たのだ。だが私の部屋の方はカーテンがおろされて、かなり暗くなつて居る。

三木の表情に大きな変化が見られなかつたところを見ると三木の方には私の眼が見えな





かつたのかも知れない。

ガラ／＼と大きな音をたて、便所の戸を開けてきよ美が台所の方を廻つて私の部屋に入つて来た。

私達は顔を見合せて笑つた。

きよ美の眼は男を征服した快感に美しく輝いて居た。

彼女は私の枕もとに坐り、立て膝をして、傍のタオルをとつた。そして私の顔の上におゝいかぶさるやうにして耳に唇をつけて

(どうだつた?)

と囁いた。私は無言で唇に人差指をあて、首を振つた。

きよ美は長襦袢を脱ぎ捨て、薄暗い闇の中でシユミーズをつけ、スカート、ブラウスを着て三木の部屋に入り仰向けに寝て居る三木の顔の上へタオルを投げかけた。

二十八 暗示と連想

それから一時間ばかり私は眠つて、九時近くになつて、三木と末の子供ときよ美と四人で朝の食卓を囲んだ。

私は三木の態度にそれとなく注意を払つて居た。先刻視線を合わせたことにまだ疑惑があつたからだ。

三木の素振りはいつもと少しも変らなかつた。

「お家へは帰らないんですか?」

「ええ。家内の仕打ちがあんまりひどいものですから、家へは帰りません。済みませんが二三日泊めて頂けないでしょうか」

「ええ、うちは構いませんが、それでも一度は帰つてあげた方

がよくはありませんか」

「いえ会社が成立する迄は家へ帰りません。家内にしても、その家族にしても、ちつとも協力してくれないんです。今にびつくりするような大きな会社をつくつて鼻を明かしてやります。二三日で又山へ行きますから、それ迄御迷惑でもお願い致します。」

「はあ、お構い出来ませんが、御悠りどうぞ……」

三木の顔には安堵の色が見え、きよ美は不服そうな顔をして居た。

「今度とてもいゝ脈を発見したんです。金の他に銀も出るんです。とても大掛りなものになると鈴木さんも言つてましたから恐らく一億円以上の資本金の……」

言いかけて三木は口をモグ／＼させて居たが、指を突込んで飯で一ぱいの口の中から一筋の毛を引っぱり出した。

私はその毛を見た瞬間、異状な性的衝動を感じた。その毛は細く長い毛で三木の唇の中からズル／＼と五六寸も引張り出された。私はそれが太く短かい縮れ毛であつたら面白いと思つた。私はその毛からいゝ／＼の妄想や連想が發展し、あのフランスの有名な小唄し迄思い出した。御承知の方が多いと思うが、それは或る未亡人が愛玩して居る犬が原因不明の病気で死んだ。未亡人は非常に哀しんだが、せめてその死因だけでも知りたいと獣医に解剖を依頼した。解剖した獣医が「奥さん、あれでは死ぬのも当然ですよ。あの犬の胃袋の中は毛で一ぱいでしたよ」と言う、ハツとした未亡人が「まあ!、そうでしたか。それで亡くなつた夫の死因もやつと判



りました」と言うのである。

三木は私の眼が異常に光つたのも気がつかずに

「……大会社になりますよ。私も今度の事業が一世一代の大仕事なんですから一生懸命頑張つて見ます」

三木の眼は野心に輝いて居る。この顔が、きよ美にかゝると痴呆の如くトロ／＼に濁されてしまうのだと思うと私は言ひようのない優越感を感じた。

(もしも万に一つ、この男が成功して大会社の重役になつたとしても、この優越感が消えないだろう。いや彼が出世すればする程、優越感の価値は増大するのだ。)

私は彼の事業が成功するとは思つていないが、成功すればよいと願わぬでもなかつた。

また、彼が現在のような窮境を持続して行くなら、それでもよい、それならそれで文字通り、彼をきよ美の奴隷にしてやろうと考へた。

彼の理想と現実とは、天と地程にかけはなれたものであるのに、腹がくちくになると又例の空想を果しもなく拡げ始めた。

この男が日本で一番えらい人間になつたような気で喋りまくる妄想を、フン／＼と聞いて居る私は、心の中ではこの後どう言う方法でこの男を責めてやろうかと言ふことばかりを考へて居た。だが同じことを繰返す三木の話にも聞き飽きたので、私は用事を見つけて三木と共に外に出た。

(次号完結)

(読者通信)

久しぶりに日本を訪れた一外国人の切なる願いをかなえて下さい。僕は今年二十四才の独身者、平凡な人間ですが困つた性癖を持つています。恥しい事なので勿論誰にも云わず又態度にも現わさずに過していたのですが時にはタマライナイ程に思ひ出され悩まされていきます。所で昨日偶然に或る人から奇譚クラブ一九五四年五月号を見せて貰ひ本当にビツクリしました。何故なら僕が心秘かに夢み、そして憧れていた事がそのまゝ写真に絵にそして文に現れていたからです。昨夜眠れなかつた事は無論、もう矢も楯もたまらずパンを取つた次第です。具体的に申し上げれば、女性特に若く美しい女の足にたまらない魅力を感じます。女の足を舐めること、足で踏まれる事(主に顔)足で蹴られる事(これも主として顔)特に女の足の裏を舐める事は僕に無上の恍惚感を与えてくれます然し靴下とか足袋とかを穿いていたのでは気分が出ないし

靴に対しては別に興味はありません。そんなわけですから五月号のマゾヒスティックな頁の「足舐め」の写真には本当に参つてしまいました。この写真の女の足の裏を舐めている男が若し僕であつたらどんなに嬉しく素晴しかつたでしょう。然し「乗馬靴の裏をおなめ」は好きません。若し乗馬靴を脱いで素足だつたら勿論何時間でも飽きる迄舐めますが。又「これ犬奴、早く歩かないか」「人間馬」も女が素足で顔を蹴つていたらどんなに素晴しかつたでしょう。又「二百字讃歌」特に九二頁の下段「ホホホ」から九七頁の下段「階下へ引下るの」です。迄は実にたまらない文章でした。おまけに九五頁の挿絵、つまり写真「足舐め」と九五頁の絵は、日頃の僕の夢の各部分です。然し男の足は嫌いです。もう一つは若く美しい女に思ふ存分殴られる事です。それも女の素手で頬を殴られる事で、換言すれば平手打であつて、鞭とか道具は嫌です。下略(一外国人)

非小説

性

液

(五)

伊藤晴雨

豊吉が細野と二人で旅に出ようとして喜ん

だのはチャチな旅芝居では大抵は楽屋泊りである。楽屋泊りというのは太夫元が旅宿賃をカナジム為、俳優を旅宿に泊めずに芝居の楽屋へ泊める事を云う。昔は大劇場の役者で楽屋泊りをさせ様としても承知しなかつたものが今は役者の方から楽屋泊りを望んで、楽屋へ泊つて一等の旅館の費用を太夫元へ請求する様になつたのは変れば変わるもので、我儘で知られた六代目尾上菊五郎でさえ楽屋泊りをして旅宿料を松竹から貰つて居たという咄しが事実であるから一寸面白い。それもこれも

時代である。旅芝居には俗に「お化け」というものが附き物になつてゐる。

「此度の旅は「お化け」は何人で御座いますか」

と太夫元の方から聞くという始末で「お化け」というのは事実不在の人間を實在の人物にして其費用だけを頭取りが不当利得するのを「お化け」と云つて、これが大一座になれば「お化け」の数も従つて殖えるのが当然の事とされて居たのは芝居道という不思議な世界にのみ存在する不文律である。(併し現在ではこんな事は無くなつた事と思う)

豊吉の一座は小人数丈けに「お化け」の数も少いので、加之太夫元は役者自身である丈けに地方の太夫元は大助かりで函館から出て来た水野という興行師の手で東京を出発したのは明治四十年の十一月の末であつた。

中里介山の大菩薩峠で有名になつたお銀様の住居と明治大帝の行在所の横を入つた処に「やまと座」という小屋がある、田舎芝居の例として僅か二日宛の興行であるから粗末な辻番附の他は絵看板も無く況んや初日前に大道具を新調するのでも無く所謂「ありとこ」でどんな芝居でもやつて仕舞うのだから舞台装置などという言葉が一般に称えられて居なかつた頃であるから(舞台の装置という名称は維新前からあつた)大道具と云つてもいゝ加減なもので腐れかゝつた辻堂に松の木の本もあれば、地方の小芝居では大道具の方である。(マサカ)

東京本郷新派大一座細野豊吉一座と書いた幟を先頭に半分皮の剥げかゝつた大鼓を人力車に乗せ一行僅に九人が乗り込み、初日の町廻りに出掛けた。此上野原という街は戦後の現在でも遊廓が四軒残つて居て娼妓の数も十数人居るそうである。町廻りを了つて小屋に帰つて、一番目の「北海熊」という芝居を終

装をした勝次と豊吉は夫婦同様の面白さで、こうした場面は実際を見た者で無ければ恐らく想像も出来ないであろう。

私の筆は大衆小説家の様に迂余曲折を為し得ないので手ツ取り早く此光景を写す事にす。勝次はまず女形の化粧にかゝる。生白粉を溶かして顔一面に塗る牡丹刷毛で叩く、それから羽二重で目釣りをして眉を描く、口紅を塗る。島田のかつらを冠つて一寸シナを作る。此処が女形の特色で、

それからツケ半襟を掛けて衣裳を着る。帯を締めて仕舞うと一人前の娘になり切つてしまふ、此時間約三十分余、これをチビ／＼呑み乍ら眺めて居る亭主(?)の豊吉の眼は濡れる様な妙な感情をたゞえて居る。これからの二人の動作は云わぬが花で翌朝二人が目醒した時は勝次の鼻の先の白粉は剥けて其白粉は豊吉の頬に残つて居る。二人は流石に座員に顔を見られるのを恥かしく思つて急いで顔を洗い落した。日は三竿に昇つて

楽屋の窓から百姓家の淡柿を吊したのが見えるのだが昨夜から徹宵の……疲れ切つた二人には太陽が風も無いのに黄色に見えるので、其処へ座主から一同へ朝飯を運んで来た。凡そ何が粗末だといつてドサ廻りの三食位粗末なものはない。よくもあんな粗食で栄養が取れると思われる程の食物で兵となるには衛生を打捨てよと云つたナポレオンの言葉を其儘其容器の不潔さも亦驚く可きもので

縁の欠けた井に豚の食いそうなめしを入れて其上に沢庵が二タ切れ乗つて居る丈けで箸といつても真ッ黒に汚れたものが添えられて居て気の小さい人間には一寸手が出ないのが普通である。朝は味噌汁に沢庵が二片、昼は野菜の煮付け、夜は矢張汁と沢庵、めしも井一杯の盛り切りである。地方廻りの役者はこれで満足して居るのだから彼等の身体はよくこれで生きて行かれると思う程の粗食である。

二人の前へ連んで来た朝めし、味噌汁はバケツに入れてあるので間違々すれば汁の身の菜ツ葉が無くなつてしまふ恐れがあるので二人は白粉が虎班になつて居る顔を楽屋のれんから出して欠けた茶碗に味噌汁をよそつて居た。

「東京からお客様で御座いますよ」

と、頭取りが一枚の名刺を持つて入つて来た。名刺には浅草向柳原町一三番地、井野利助と印刷してある。二人はハツと顔を見合せた、井野というのは細野のヒイキである



舞台以上のヒイキで此男も亦女形に扮装させて座敷に呼んで抱擁するのを楽しみにして居る男で、柳盛座で聞いて細野の跡を追つて来たという事は豊吉のアタマにピンと来たのである。

「始めてのお座敷だ、行つて来たらいゝじやあないか」

「でも、あなたに悪いもの」

「何悪い事があるもんか、商売だもの」

「アラ非道い、商売じやあないわよ」

「役者がお客に呼ばれるのが商売でない事があるものかね、でもあんまりヒドイ事をされるのはおよしよ、あの

旦那は強いんだそうだから」

「大丈夫だよ、そんなに長くされては、おたまりこぶしがあるもんかね、精々……さ」

「頭取さん、少し楽屋の外で待たせておいて下さい、今直きに行きますから」

意味のわからない事を云つて、少し汚れた楽屋浴衣の上へマントを着て烏打帽をかぶりそれでも女形のたしなみに白足袋を穿いて細野はソ、クサとして、豊吉を一人残して出て



行つた。細野と入れ替つて、又東京から此の部屋へ女客が来た。それは開盛座に入つてまだ間もない中村友江であつた。

「豊吉さん暫らく、此小屋随分遠いの木、駅から歩いちやつたの、だつて坂道で傳が無いんでしよう。あゝ草臥れた、御免なさいね」

友江はダル相に膝を崩して座つた。

「妾七軒町をドロシて来ちやつたの、あんなに使つて貰うつもりで来たの、入れて頂戴ね」

「何んだつてドロシたの、佐野屋の旦那が怒りやあしなかい」

「よしておくれよ、あんな助平爺いまともに相手にしてくれるんじやあなし、毎日々々舞台化粧をさせちやあ妾を縛つて人を玩弄にして喜んで居るんだもの、それも当り前の事をするんならまだ我慢も出来るんだけどあすこへお灸をすえさせたら百円やろうの何のつて変な事斗り云うんだもの、妾怖くなつちやつた。其辯名代の〃赤にしや〃と来て居るんだらう、いやになつちやつたから中野先生や宮古先生には悪いけどドロシちやつたの」

友江は、もう一ぱしの女優氣質になつて居る。女の進歩(?)は男より速いと豊吉は内心舌を巻いた。

「静かでないわね、細野さん居ないの」

「ア、お座敷さ、直きに帰つてくるだらう、帰つて来たら一応話して見るからまあゆつくりおしな」

「これお土産の印よ、これツぼつちだけれどあんたの好きな近定の芋羹よ」

と友江は包んだものを旅カバンから出して豊吉の前へ並べた。

「今どんな芝居して居るの」

「どんなつて一口に云えない芝居なんだ、とても凄え芝居サ」

「お化けが出るの」

「お化けも出るサ、併しお化けよりもつと怖い所があるのサ、お前さんが初役だった七軒町でやつた責場のもつとヒドイ奴をやつて居るのさ」

「アラいゝわね、縛られて責められる芝居、マア素敵是非やりたいワ、演らして頂戴よ、ネエ妾あんたに思い切つて責められたいワ、天井の梁へ吊し上げられて思い切りグル／＼独楽の様に身体を廻されて打たれる芝居をして見たいワね、細野さんにもあんたからは非頼んでね」

「ア、それはいゝが君が此座へ入るとなると責められる女の役を今細野君がやつて居るんだから困つたナア」

「いゝじやないの、一日替りにすれば」

「細野も君と同じに責め場を売り物にして居るんだから、君に役を譲るかどうか判らない

んでね、僕の一寸で決める訳に行かないんだよ」

「そう、いゝじやないの、一日替りにする様にあんたから細野さんに話してよ」

友江は自分で両手を後ろに廻す形をして豊吉の膝に崩折れる様に倚りかゝつて来た。

.....

上野原の町にある甲州屋という田舎料理屋の二階で差し向いで酒を呑んで居るのは井野利助と細野勝次で半分はアイマイ屋の料理の事でロクなものは並んで居ない、すしの大皿にはまぐろは姿を消して居て、海苔巻の隣りには干瓢の帯の無い稲荷の鮓がガン張りおぼろの代用品としてホグシ鱈の色附けの握り寿司が幅を利かせて蒲鉾の代用品としてオ、ラミンで色を附けた沢庵が落語の長屋の花見と同様見た日本意に並んで居て甲州名物の鮑の醤油漬という不思議な料理がチャブ台の上へ王座を占めて居る。

利助は細野へ盃をさし乍ら不味相に地酒の辛さを我慢して呑んで居るのは、シラフでは云い出し難いからである。

「今日は是非君の責場を見せて貰おうと思つて勝沼へ用があるといつて家内をゴマカシて出て来たんだがね、余ッ程ヒドイ責場なのか

ね」

「えゝソリヤ大変な責場です。島田に結うなと云われているのに高島田の鬘に結つたといふので継母に鬘を掴んで舞台中を引き摺り廻される役で昨日なんどは舞台を引摺り廻されて居る内、大道具が釘を散らかして置いたと見えましてね、コラ此通り股を疵にしてしまいましたよ。両手を本当に縛られて居るのでどうにも仕方がありませんや」

「ソリヤ大変だつた痛かつたらう、併し責められる感じはよく出たんじやあないか」

「えゝソリヤよく出ましたとも、旦那是非今夜御見物願いますよ」

「今日はこつちへ泊る事に仕様、そしてハネてから皆んなと久し振りに一杯やると仕様」利助が細野の耳へ口を当てゝ何か云つて居るのを気取つたのか暫らくして入つて来た女中が

「あの、旦那、あちらにお床が取つて御座いますよ」

——未完——

× × ×

特 集 告 白

私の偏執記録

— 植 村 幾 久 —

奇術に於ける磔刑と絞首刑



何れも生々しい体験によるものであり、各人の胸奥に程度の差こそあれ、人間として、必然的に存在する心理の止むに止まれぬ発表であることは、何人といえども否定することの出来ない事実であると信じて居ります。

従つて特異なものには相違はないが、御誌は、息苦しい社会の息抜きの一つの窓として、存在する価値が充分あるものと思います。

異性の責めや緊縛に特異の興味を感じる事に就いては、諸先生の論議研究の好題材で、

御誌は入手毎に大いに興味をもつて拝見して居ります。所謂道学者達は、どんな風に考えるか知りませんが、御誌御所載の各編は、

我々はそれらの発表を拝見する側に立つて居る者であります。私の狭く浅い経験に於ても次の様な事がありましたから、何かの御参考にと思い御知らせ致します。私は戦前、大阪で小さな工場を経営して居りましたが、戦災で焼失した為、各地を転々した後、現在ある工場に勤務している一老人であります。大阪の日本橋二丁目附近で少年時代を送つた関係上、明治の末期より大正の初期にかけての、千日前の移り交りは、まだ、記憶に残つて居ります。

其の当時の千日前は、常設の興行場はほんの僅かで葺や天幕で囲つた見世物小屋が軒をならべて居りましたが、其の中の一つの小屋に時折り奇術の興行がかかることがあり私も時々友人達と見に行きました。

其の小屋の様子は、乱歩の踊る一寸法師に描き出されている奇術の見世物小屋と同様に怪奇なもので、表の間口一杯に掲げられた女が磔刑になつてゐる処や、大きな組板に縛られた女の腹を、日本刀で貫らぬいてゐる処を始め、其の何れもが縛られた女と鮮血に彩られた地獄画さながらの看板の下をくぐつて場内に入ると、土間の三方に柵を設けたまゝの平土間を舞台として、小手先の小奇術の間々に、女が十字架にかけられて槍を以て胸を貫かれる奇術や、美人の解剖と名付けて女を大きな組の上に縛り付けて、其の腹に日本刀を突立てる奇術を始め、女が絞首刑になるものや、斬首や銃殺など、何れも縛つた女と、流れる血潮と、断末魔の苦悶と叫喚とに充ちた見世物でした。

当時十二、三才の少年であつた私は、其の異常な光景に生れて始めて味う興奮に好奇の目をみはつたもので、不思議な興味に物の怪につかれた様になつて、夜も懐しい演技の思出に、なかなか寝付かれなかつた経験を持っております。

以来、こうしたものに対する興味が、私の半生をつきまといきました。

殊に私が最も興味を持ったのは、美人の磔

刑というものと、絞首刑という奇術でありました。

それは何れも、白衣を着た女芸人を舞台の中央に引出し、目かくしをした上で、磔刑の時は十字架に厳しく縛り付け、長い槍を以つて其の胸を突くのですが、槍に仕掛があつて女の胸を突くと同時に槍の穂先が柄の中へバネ仕掛けで押し込まれる様

になつていたものと思ひますがキラキラと鋭く光つてゐる穂先が、槍を突き出すにつれて柄の中へ這入てゆきますので、見物人からは全く胸の中へ突きさつて行く様に見えるばかりでなく、槍が胸を突いた時に、上げる女芸人の物凄悲鳴と仕掛けの血糊が、白衣の胸を染めて流れる有様とは、実に真に迫つたもので見物人を驚かすに充分でした。



絞首刑の時は、鳥居型をした絞首台に、後手に縛り上げた女芸人を立たせて、上から垂れた縄を頸にからませて、踏台を取り払うと、女芸人の身体は、一本の絞縄を頸にまゝのまま宙に吊下ることになるので、が、当時は断髪の水は居らなかつた時代でありますから、女芸人も豊かな黒髪を背後に長く垂らして、縛られて居ましたから、恐らく頸の後方で、其の髪にかくれて、身体に仕掛けした宙吊りの装置に、絞縄を連絡させてあつたのだと思われませんが、見物人からはこの仕掛は全然見えませんから、全く頸を絞められた様にしか見えなのです。其の踏台を取り払う時の奇術師の、真剣な顔色と、後手に縛られたまゝ、全身に波打たせて苦悶する

女芸人の巧妙な所作とは、今なお、私の眼底に残つて居ります。

其の当時の、演劇に於ける殺し場の凄惨さは今からは想像も及ばないものでありましたが、私としては、この奇術の方が長く印象に残りました。

演劇の殺し場に就ては、各先生に於て、充分研究し尽されて居りますが、こうした奇術の方面に於けるこの種の研究の発表は未だ無かつた様に思います。

さて、こうした奇術は、其の後上演されなくなりましてので、私としては淋しく感じて居りましたが、後日私が大阪府の警察官になり、不思議な廻り合せて、警察部保安課に警部補として在勤中、興行の検閲官として、府下一円の興行の取締り（今から思うと嫌な言葉ですね）に当つた時、古い例規を調べますと、「爾今、死刑執行に模したる演技は禁止する様にせよ」という意味の通達が、警察部長から府下各署に出されていた事を知りました。

また、大正十四年頃、多分堺市卯の日座だつたと、記憶して居りますが、映画興行の余興として、或る奇術師によつて、美人の銃殺という奇術が上演されたので、前に申しまし

た例規によつて、其の興行を差し止めた。という堺署長からの報告に接した事がありました。

其の後、警察の方針が、どの様に変つたのか知りませんが、大戦末期に私が要用の為京都に滞在中、新京極の色物席で、この美人の銃殺という奇術を、昔の通りの状況を以て上演していたのを、なつかしく思われて、見物した事がありました。其の時の女芸人は三重天勝と名乗つて、なんでも三重県津市の人だつたと覚えて居ります。

長々と書きましたが、私としては、少年時代に見た、この奇術によつて感じた経験が、長く影響しまして、今に於ても目かくしされ

た女が、十字架に縛り付けられている姿には特異な興味を忘れ得ないのです。

従つて、女体緊縛の写真にしても私の好みとしては、必ず眼かくしをしている事が必要であつて、たとえそれが如何にいゝポーズであつたとしても、眼かくしされていなければ興味を半減します。眼かくしをされて十字架に縛りつけられているといった構図は最もびつたりしたものです。

又、活動写真（なつかしい言葉ですね）及脚本検閲官や、司法警察官として、實際経験して来たお話も相当ありますが、余り長くなりますからこれで筆をおきます。（終）

の め 責 アイディアを募る

本誌に発表する口絵の責め写真や縛り絵、或は代理部の分譲写真について、こういった構図やポーズ、或は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら何卒御遠慮なく編集部宛御申出下さい。万難を排して御希望のものを作成の上、御送付申し上げます。貴方のアイデアによつて誌上を飾りたいと思います。採用分、並に優秀なる企画に対しましては、写真或は画稿を差し上げます。詳細なる説明の外に、必ず略画、若しくは説明図を添えて下さるようお願い致します。機会を見て責めのアイデア・コンクールを催したい考えです。

部 集 編

る。

その代り私をしつかりととらえていたものは異性に対するサジスツクな願望だった。女を心ゆくまで縛つて見たい。猿轡をはめ鞭で叩いて見たい。真白な豊満な皮膚、喰いこむ縄目、鞭のあと、そういつた幻想が私をとえらて放さなかつた。多くのこの種の雑誌もあさつたし、そのようなシーンの出る映画演劇など、千里を遠しとせず見に出かけた。

昭和二十七年、東京の某大学部をやつと卒業して、ある写真会社につとめるようになった。それから、私の性癖は一層強まり、自分でも制禦し兼ねる程になつた。大した給料ではないが、兎に角自分で細々とでも食えるようになる、親がかりを離れた自由感も手伝つて、一人アパート住いをし、妄想にふけつた。一人寝床の中で考えることは異性を縛ることばかりであつた。アパートの隣りはベットが三十ばかりの外科病院で、その二階の廊下の窓と私の部屋の窓とは、ものの三米も離れていない。そして終日、その廊下を白衣の看護婦たちが忙しそくに、ゆききしていた。私は会社から帰ると部屋の窓からそれらの看護婦たちの一人一人に自分の妄想をあてはめて、自分だけの秘密の楽しみとしていたのだ。

現実に女を縛つたことは一度もない。私の嗜虐はたゞ私の頭の中にだけの妄想となつてくすぶつていたのだから、余計気がいらだつわけである。そんなに自分を持てあましていながら、遊里に足をふみいれなかつたのは、要するに私が臆病であつたからにすぎない。会社にも若い女事務員たちが居たが、銀座に職場をもつサラリーガールたちの派手な姿はどういうわけか、私の妄想に結びつかなくつた。会社では私はごく平凡で、実直なサラリーマンとして通つていた。多分、長い間東京で暮していながら、根が田舎ものの私が、銀座ガールの都会的な会話や、しやれた服装に無意識のうちに、一種の気おくれを感じていたのかも知れない。とまれ、会社では謹直な精神を持ち得たし、又実際、真面目ではあるが、大して有能でもなさそうな男と評価されていたらしい。いや現在でもこの会社に私は縁をはんでいて、私への上役たちの目は、それ以外ではないような気がする。

ところが、毎夜（日曜は朝から、）自室の窓越しに見る看護婦たちには、不思議に親愛感を抱いた。皆一樣な白衣姿、いかにも庶民的な彼女たち、野づらを吹く風のような素朴さと健康さとを顔かたちに残している彼女た

ちに私が同階級的な親しみを感じたとして不思議とは云えないかも知れない。

アパートに移つて一ヶ月もしないうちに、私はこの小さな外科病院の看護婦の名と年令と故郷とを、全部知つてしまつた。手段はいくらでもあつたのだ。附添の婆さんに聞くことも出来るし、アパートの管理人の細君は近処のことは何から何まで御存知だつた。

よくしたもので、そこは若いもの同士、私はそれらの看護婦たちと話をする機会を得た。そして幾若もなくして、彼女たちの全部を、代る代る非番の時に遊びにこさすことに成功した。私は彼女たちを歓待したけれど、今考へて見ると結局得をしたのは私の方だつた。女らしい心づかいから私の部屋の掃除、洗濯時には田舎からきた餅まで、御馳走してくれたからだ。このような交際（一人と複数との）が約一年つづいた。私もいつかこの中から私の配偶を求めざるを得ないような心境に陥つていた。

しかし私の欲望はサディズムである。普通の女では到底生涯をともししてゆけそうもない。風俗雑誌の通信欄に交際を求めても、多くは女名前が本当は男であつたり、手紙を出しても梨のつぶてであつたり、幾度か失望さ

せられ、そのような手段は諦めていた。

人間の縁というものは不思議なもので、私は何の理由もなく、この看護婦たちの中にこそ、私の望む女が居るといふ、一種の勘をしきりに感じた。それが彼女たちの誰であるか解らない。私はそれを探し出そうと決心し計画にとりかかった。

第一に私は私自身を出来るだけ平凡な、固苦しくない人間と思われようと努めた。事実私は学問や思想などよりは、現世の快楽を大切に思う人間なので、このことはわけはなかったのである。そして彼女たちの前でも適当にワイ談もしたし、風俗雑誌なども別に隠すことをしなかった。

むしろ本誌などをわざわざ机の上に放り出して置いてそれに対する反応を、綿密に観察していた。この中に掲げられている写真に対して特別に反応する女はいないだろうか。私は網をはつてまづ獵師のような思いで期待した。しかし結果はすぐには現れなかった。看護婦は八人で年令は十八才位の見習嬢から三十四才までに渡っていたが、若い娘たちは一見「まあ嫌」といったまゝ再び雑誌に近づこうとしなかった。三十才を越した二人の看護婦は、じつと見たまゝ「富永さんこんなもの

好きなの」と揶揄する

ように云つた丈であつた。でも私は失望しなかった。そのような試みを毎月新しい雑誌が手に入るごとにつづけた。おかげで彼女たちの中には「富永さんは少し変態がかつている」といふ噂がひろまつたことも私の耳に入つた。しかし私は驚きはしなかった。その通り私は私の地のままで自分の配偶を見つけるだけだ。片々たる評言何するものぞと強がつていた。

次に第二の手段として、私はこの病院の若い医師と仲良くなつた彼から看護婦の気質や

行動を聴くためだ。いつたい若い医者と若い看護婦位お互いをよく知り合っているものはない。職業上の協力は、彼らの間にかんりの



お互いの了解をもたらす筈だ。——これが私の考えだった。

私は若い外科医Fに、言葉巧みに世間話を

持ちかけた。根氣よく彼に気づかれぬように注意しながら看護婦の勤務ぶりに対する彼の感想を読みとつていった。これもしばらくの間は大した収穫はなかつた。私は段々、私の非科学的なカンを嚙みたい様な気になった。

しかし遂に時が来た！ 忘れもしない昭和二十八年六月の中頃、外科医Fと例の如く世間話の最中、私は話を腸閉塞の手術に持つていった。それは数日前の夜中にそのような患者が、この病院にかつぎこまれたことを知っていたからだ。Fは容易に話にのつて来た。そして夜半の手術に自分は兎に角、看護婦たちを起して手伝えなければならぬ苦勞を述べ、大がいに嫌々起きてくるが、Tという若い小柄な骨細の大人しい看護婦だけは手術というに進んで仕事に出てくることを話した。彼はTの職務熱心と人柄の大人しさを賞讃した。私はこの話を聴きのがさなかつた。というのは、数日前同僚の看護婦が嫉妬まじりに「Tさんは手術となると夢中よ。妙な目つきをするのよ」

と悪口を云うのをきいたことが、不意に頭に浮んできたからだ。同僚たちの言葉は、自分たちが怠けられぬための悪罵にすぎないとうっかり聴きのがしていたのだつた。

これはモノになる！ と私は思った。それから以後私は、全力を二十一才の色の白い細面の看護婦Tに集中した。そして最大の注意をはらつて彼女の性癖を観察した。

しかしこれは案外容易だつた。八月のある日曜の夕方、彼女は私のところに遊びに来た。私は胸に一物あつて本誌の口絵を机に開いたまゝ彼女を部屋に一人おいて、外に出ていった。村田嬢の猿ぐつわの写真だつたと覚えてゐる。それからひそかにとつてかえして戸のすきまから、彼女の行動を監視した。するとどうだろう。彼女は本誌を手にもつて燃えるような目で見つめている。今日は普段着に黄白い兵児帯、まるで十代の少女のように素朴な服装の彼女、パーマノントさえかけず長いお下帯を編んで両肩にたらしめている彼女の白い頬に血がのぼつて、指で写真の上を、しきりにこすつて見つめている。たもとを口に喰えてまたたきもしないでページをくつた。新たな感情のうごきが、明かに身体全体に現れた。

私は思わず、「うーむ」と心の中でうなづいた。殆ど無我の境にいる彼女の横顔は美しいT子こそ俺の妻だ！ 私はハッキリそう感じた長く探しもとめていたものが、見る、今、

目の前にある！

私は廊下にひきかえし殊更に足音を高くして部屋に入つた。勿論その時は彼女は本誌を机上に返し、そしらぬ顔で外を眺めていた。

私はゆつくり彼女の背後に行つた。そして窓のカーテンをしめ、電燈をつけた。まだそれ程暗くはないのに。電燈をつけたのはカーテンをしめる口実だつたのだ。そして仕事にとりかかつた。私は本誌をとりあげた。そして縛り写真を彼女の目の前につきつけた。

「ねえ、これを見てどう思う？」

彼女はチラリと写真を見て、

「いや、いや」といった。そうして小さい声で「富永さん、こんなもの好きなの？」と私にきいた。

「すくなくとも刺戟的だね」私は、彼女から目を離さず、ゆつくり答えた。

「僕は見ていたよ。君はこんなことが好きだね。手術にも特別な感情を感じるね？ 僕が縛つてあげようか」

私は少し早すぎたかと思ひながら、こう聞いた。彼女は全身に動揺の色を見せ

「いやよ、いやいや」と激しく首を振つて、私の部屋から飛び出して帰つてしまつた。

それから二、三日彼女は顔を見せなかった。病院の廊下も私が部屋に居る時はなるべく通らぬようにしているらしかった。

私は流石に心配になつて、少し早まつて大魚を逸したのではあるまいかと思つた。しかし彼女の心の動きには自信があつたので、自分から彼女に会いに行くことはしなかつた。

数日後の夜おそく、突然彼女が何かボンヤリした表情でフラリと現れた。私は「来た！」と思つた。その日私も妄想が強く起つていたので前後の分別を失つた。

私はいきなり彼女を抱きよせた。彼女は夢から醒めたように、もがいた。私は彼女をねじふせ机の引出から用意の細引をとり出して彼女の手首にかけた。そして両腕を後に廻し首繩を締めて手早く縛りあげてしまつた。自分でも手際の良いのに驚いた位だつた。彼女は呆然として声



をあげるのも忘れたようだつた。縛りあげてしまうと彼女の白い頬に、圧しつけられた畳の目があざやかについていた。胸の高まりが心の動揺につれてあえいでいる。それが一層私をおどした。私は手の平で彼女の口をしつ

かりおさえながら「驚かなくてもいい。何にもしないよ。僕と結婚しよう。君はこんなことが好きなのだ結婚しよう。承知ならうなづきなさい」

彼女は、私の手の平の上から閉じた目を見開いて私を見つめ、すぐ又目をとじてうなだれた。そして私は自分の手の掌の下の口と鼻とが動くのを感じた。

彼女がうなずいたのだ！

私はかくしてこの娘を手に入れた！

次の日から私は宇頂天であつた。彼女の故郷へ出掛けて彼女の父母にあつた。見るからに貧農で、十人に余る弟妹たちがいた。彼女の両親はむしろ喜んで私の申し出を承諾した。ひよつとすると「玉の輿」にでもものつたと思つたのかも知れない。間もなく彼女は病院の休暇をとつた。残念乍ら共稼ぎでなければ二人の生活を維持して

ゆくわけにはゆかなかつたのだ。

でもさ、やかな結婚式ののち、私たちは人並に新婚旅行に出かけた。新婚旅行といつてもたつた一泊の奥日光への旅。

戦場ヶ原は高山植物の盛りだつた。白根男体の山々がもう秋色近く黒くそびえていた。初夜は硫黄の臭いの濃い奥日光湯元温泉の一室であつた。勿論初夜の晩から花嫁の身体には麻縄がまきつき、頬には猿ぐつわが喰いつた。しかし二人とも満足であつた。私は私の望むものを手に入れた。彼女はマソヒストとしては勿論未完成である。しかしその素質は疑いない。私はこの妻を自分の思うように教育して二人の楽しい生涯をきずくのだ。私の胸は希望にふくらむ思いだつた。

夜があけると旅館の窓の外には、湯の湖が寂然と静まつていた。男体山の黒い影が大三角形をなして湖面に不気味にうつつていた。湖は濃く碧くそれは動物の瞳のような蠢惑をたたえていた。心に青さが沁みるように静かだつた。

霧がかかつては晴れ、かかつては晴れ山の湖はさまざまに感情を変えた。私は新妻をつれた。そして湖畔の道から、原始林の中にわけ入つていった。少し冷え冷えした風が

吹いて、日があたつてきた。森の木洩れ日に私の新妻は生き生きしていた。誰も来ない。

誰にも見えない場所にくると、私は新妻をしつかりと白樺の幹に括りつけた。木の間から湖が一層神秘的な瞳をして私たちの行為を見ていた。私は完全に自由を奪つてしまった妻の白い柔かい頬に私の顔をつけた。やわらかくそして冷たい触感が私の心臓にまで沁み通つた。十分も二十分も私は縛られた妻の頬に自分の頬をよせていた。喰べてしまいたいような愛情が心の中に波打つた。気が狂つたように私は彼女の唇に唇をつけた。唇もやつぱり冷たかつた。冷たいものが私の頬にさわつた。彼女の涙だつた。しかしその目は優しくうるみ、そしてほゝえんでいた。私は彼女のやわらかい咽喉に噛みついた。彼女はもたえて、かすかに悲鳴をあげた。そして彼女の白い柔かい咽喉の皮膚に私の歯型がくつきりついた。

湖面が暗くなつて来た。風が出て来て男体の頂上あたり雲のゆきかいが激しくなつた。

私はだんだん激情的になつた。そして木の枝を折つて彼女のかほそい肩を打つた。彼女にむしやぶりついた。原始人のように。

心は愛情と勝利にうちふるえていた。

私は妻の首に縄をかけて更に強く白樺にむすびつけ、めちやくちやに妻の頬に噛みついた。

これが私たちの新婚旅行であつた。

(終)

口絵 縄の四十八手について

辻村 隆

本誌昨年の十二月号に、那須不二夫氏が、「縄とマソヒズム」と題して日本式な後手の縛り方について図解入りで詳解されているが私は大分以前から、こういった正式な縛り方をモデルを用いて写真に撮つてみたいと、かねがね思つていた。幸い伊吹真佐子嬢を煩して一日、那須氏の図解を参考に、それより分派する各種の縛りを実施してみた。

本号口絵に掲載のものは、その一部であるが誌面の都合で順序を追つた連続写真の発表を許されなかつたのは残念であつた。こゝに掲載の代表的な四例について正面、背面、側面と三方からの写真を同好者の御参考に供したい。この基本の外の縛り方についての写真は、何れ今後の誌上に発表の機会を与えられる事と思う。本誌十二月号、五七頁以降参照の上御覧下されたい。

私の求めた男 (六)

松井 籟子

瀧 麗子・画

【松井籟子自伝的小説】

後へ廻した手に縄がふれた瞬間、何ともいえない感じが体を走つた。そーつとするという言葉は、大むね厭悪感を表す場合が多いが



そーつとする快感もあるものだということを、私ははじめて知った。

「きつくしちやあ厭よ」

私は言つた。何かだまつていることが不安だつた。そして、心と反対のことを口にしてゐるのだ。

緒方勉は無言で私の手首にぐるぐると縄をかけて、ぎゅうと結んだ。そして、その縄の残りを私の胸へ廻した。

「罪人じゃあないのですもの、後手だけでいいのでしょう？」

私は又、心と反対のことを口に出す。

緒方はそれを知つてか、知らずか、だまつている。どんな顔をしながら私を縛っているのか、私は見たいと思つたが、恥しさで顔をあげることが出来なかつた。

たとえば、芝居の稽古とはいへ、私の奥底に残つていた長い間の願いがかなえられようとしているのだ。私はそれをごまかす為に心にもないことを口に出しているだけだ。

緒方は胸に廻した縄を後手に結んだ所へかけて一と巻きすると、右と左の二の腕へぐるぐるとまきつけて、引きしほるように、ぎゅうと締めた。私は乳房を前へとがらせるようにして、胸を縦に二つに折られたような痛さをやつとこらえた。そして、後手の位置を出るだけ下へさげた。そうすると、胸へかけた縄が少しゆるんで、締めつけられる苦しさ、いくらかでも薄らぐのだつた。

すると緒方は縄尻をぐつと上へあげて、私の首へかけた。

「ひどいわ、そんな……。いやよ、首はいや、胸だけでいいじゃないの」

私は言つた。縄を首にかけられるということは、罪人になつたよ

うなみじめさが、感情的に倍加された。

緒方は終始無言で、自分の思い通りに私の上半身を縛りつけると「さあ、僕が縄尻をとつているから、つまづいて転んでみたまえ」というのだつた。

「ひどいわ、こんなにひどく縛るなんて……。舞台でもこうするの？」

「そりやあ、いろいろやつてみてからきめたらいいじゃないか。さあ、つまづいて転ぶんだよ」

緒方はいいながら、私の肩を押した。私は一寸よろけたが、転ばずにふみとどまつた。

「駄目だよ、転ばなければ……」

「だつて、このまゝ膝をついたら、靴下が破れるわ」

私は言つた。この頃はまだナイロンの靴下はなかつたが、腿の所でガーターで吊つてある絹の靴下は、不意に膝をつけばピリツといくのはめにみえていた。

「私、靴下とるから、一寸縄をほどいてよ」

「じゃあ、このまゝで僕がとつてあげる」

「いや、縄をほどいて」

靴下をとるには腿の所でガーターをはずさなければならぬのだ。それにはスカートを太股の所までまくらなければならぬ。

「そんならこのまゝでいいわ」

私は靴下一足犠牲にしてしまおうと思つた。男の手で太腿にさわられるよりまだましだ。

「いいよ、とつてあげよう。靴下を気にして転んだまねをするんでは稽古にならないもの」

緒方は私のスカートに手をかけた。

「いやよ、いやよ」

私は緒方の手をのがれようとした。けれど上半身縛られている体は思うように、彼をさえぎることが出来ない。まして、縄尻を彼に握られているのだから、ただ両足をばたばたやつて抵抗するだけにすぎなかった。

「そんなにあばれると、靴下が破れるよ」

「いいわ、破けてもいいわ」

「とつてあげると言つたんだから、とつてあげるよ。無理することないよ、僕の劇団は絹の靴下なんて買つてあげられないからね」

緒方は縄尻をぐんぐん引つばつて尻もちをつくように、私をどしんと椅子に腰かけさせてしまった。そして椅子の背に縄を結びつけると、前に廻つて、私の靴下をぬがそうとした。

私がどう二本の足をバタバタさせても、手は後手に椅子へ縛られているのだから、緒方が片方の足をかかえこむように押さえて、片方の靴下のガーターに手をのぼすのを、とめようもなかった。スルスルと足をむくように、絹の靴下が私の足からとられた。私はもう観念してしまつたようにあばれるのをやめた。夏の海辺なら、平気で人目にさらす太股なのだ。靴下をはいていて、それをとるからこそ恥しいのだ。何でもありはしないと、しいて私は私に言つた。

「ほらこうしてぬいでおけば破けないで済むじゃないか」

緒方が言つた。

「いいのよ、靴下なんか、破けてもかまやあしなかつたのに……」

私はへらず口をたたいた。

「いいわ、だつて、どうせ電車で一寸ひつかけたつて破けるんですもの、芝居の稽古で靴下が破ければ靴下も本望よ」

私は負け惜しみを言いつけた。椅子に縛られて、無理やり靴下をとられたのが癪にさわつてならなかつたのだ。

「そんなに破けてもいいなら、破けるようにしてあげよう」

緒方はいうと、手の中に片方の靴下を丸めて、いきなり私の口の中へ押しこんだ。

「あつ！」

と、私ははき出そうとしたが、もう片方の靴下をその上に廻して頭の後できつちり結ばれてしまつた。絹の長い靴下は一足で充分とつきの猿ぐつわに間に合つてしまつたのだ。

「ああ、ああ！」

と、私は叫んだがおそかつた。自分で自分の靴墨くさいような靴下をきしぎしと歯でかまされる結果になつてしまつた。こんなことは約束になかつたと言うことも出来ない。第一緒方が何をするつもりなのか、私は身が引き締まるようなおそれを感じた。

二

「僕のいうことにちゃんと返事をしたらといてあげるよ」

緒方はいう。返事をしろといつてもどう出来るのだ。

彼は私に猿ぐつわをかませると、私の足を別々に椅子の脚に縛りつけたのだ。

「いいかい、今日は君は容疑者だよ。僕は劇団の秩序の為に君を責める権利があるのだ。本当なら、皆の前で君を責めてもいいのだけれど、君の名誉を重んじて、僕が劇団の責任者として君とさして質

問することにしたのだよ。ついでに今後の役で縛られた時の苦痛をリアルに体験してもらえば一石二鳥というわけだろう。ねえ、そうしていたつて一寸も苦しいことないだろう？」

薄ら笑いさえ浮べながら言う緒方に、私は本当に怒つていいのかどうか戸惑った。何かしらん、子供っぽい冗談の様に思われたのだ。

緒方勉はその劇団の主要人物だったが、小太りの体は愛嬌があつて二枚目よりは三枚目に向く人だつた。私が二人きりの稽古に、あまり警戒する気持もなく縛らせたのも、緒方の円満な人柄を信じていたからだつた。まして、そこは緒方の家で、廊下をへだててはいても、奥には緒方の家族もいるのだ。まさか、自分の靴下で猿ぐつわされてしまおうとは夢にも思わなかつた。

私はとにかく何とかして手足のいましめをほどこしたいともがいた。緒方の言つていることは半分ぐらいしか耳に入らなかつた。

椅子はただぎしぎしときしむような音をたてるばかりだつた。

それでも、足が床についていて、腰はきちんと腰かけさせられている形でいれば、もがきようもあつた。どうもがいても、ほどける縄ではないにしても、力を入れるところみぐらいは出来た。

それなのに、緒方は私のあばれるのを面白そうに見ていたが、いきなり、私の縛られている椅子に手をかけると、それを横倒しにしてしまった。私は椅子ごと、不安定な形に横にされてしまった。私の腿に、靴下をはずしたガーターのとめ金がかいこむように押しつけられて、私は思わず

「ああっ！」
と呻いた。

「この間の晩、君は入江と何をしたの？」

緒方は言つた。

「研究会へ二人で一緒におくれて入つて来たろう？ あの時、何をしてきたの？」

私ははつとした。そして急に悪いことを見つけられたような恥しさを感じた。それはあの晩入江から接吻をいどまれたという恥しさではなく、私が、さつさと入江から逃げてしまえばいいものを、牡猫をからかう牝猫のように、入江に思わせぶりの態度をしたのを、第三者に見られたような恥しさだつたのだ。

「ほら、君の目がちゃん和白状している。やつぱり何かあつたんだね」

緒方は笑うような泣くような表情をした。

「君の口から答えられなくても、君の目を見ればちやんとわかる。公演前に恋愛や情事は禁物だよ。それより、君はもつと君の役のことを考えるべきなんだ。御所車に鎖で縛られて、火をかけられたらどんな声が出るか、研究してみたことあるかい？ 僕が今日それを研究させてあげよう」

緒方は又、椅子に手をかけた。

「ああっ！」

という私の悲鳴も空しく、私は椅子ごと仰向けにひっくりかえされた。

「どんなポーズが、どんな風に苦しいか、よく味うんだね」

緒方は平然という。

私はもう緒方に対して、親しみ深い気持も何もかも失つて、ただ憎悪と恨みしか感じられなくなつた。何とかして縄をゆるめたいと

思つたが、はじめから、そうするつもりで縛りあげた高手小手を、さらに椅子へぐるぐる巻きにされているのだから、私は緒方の生にえに等しい。

椅子ごと下を向けられれば、まるで椅子を背負つた蟹のように床へ這いつくばり、上を向けられれば、天井の電燈の光にまぶしく体中を射られるように、私はビクビクと手足を動した。そして不思議なことに、自分が常日頃夢想した状態に、私をおいてくれている緒方に好意を感じず、はつきり好きだと思わなかつた入江寛二郎のことがしきりと思われた。

（入江さん、あなたの為に私はこんなめに合わされているんだわ）
そう心の中で叫んだ。

そして、そう思うことで、緒方に玩具のようにされても、緒方に対する憤りが消え、不思議な快感が身内にひろがつていくのだつた。

三

戸外は星が降るようだつた。



駅まで送るという緒方をふり切るように私は別れて来た。休中がしびれているように、痛さの余韻を残し

ていた。

緒方は一としきり私を椅子ごと玩具にしたが、急に泣くように訴え出したのだ。

「僕は君が好きなんだ。好きで好きでしようがないんだ。こんなひどいめに合わせておきながら好きだなんておかしいと思うだろうけれど、好きだからこんなことをしたんだ、わかつてくれる？」

私はだまつていた。答えたくとも、まだ靴下の猿ぐつわがはめられたまゝだつたのだ。

「僕は今日どうかしているんだ。ねえ、縄をとく前に一言聞かしてくれよ。僕が今君にしたことを怒らないつて言ってくれないか。無理なことはわかつている。こんな目に合わせておきながら、虫のいいことと思うだろう。だけど、もし、君が怒つてもう僕に口をきいてくれなかつたら、僕はどうしていいのかわからない。ねえ許すと言つてくれ。うなづいてくれたら猿ぐつわをはずすよ。ねえ許してくれるだろう？ 僕を好きになつてくれなんて頼まない。ただ、今、したことだけでも許してくれよ、ね」

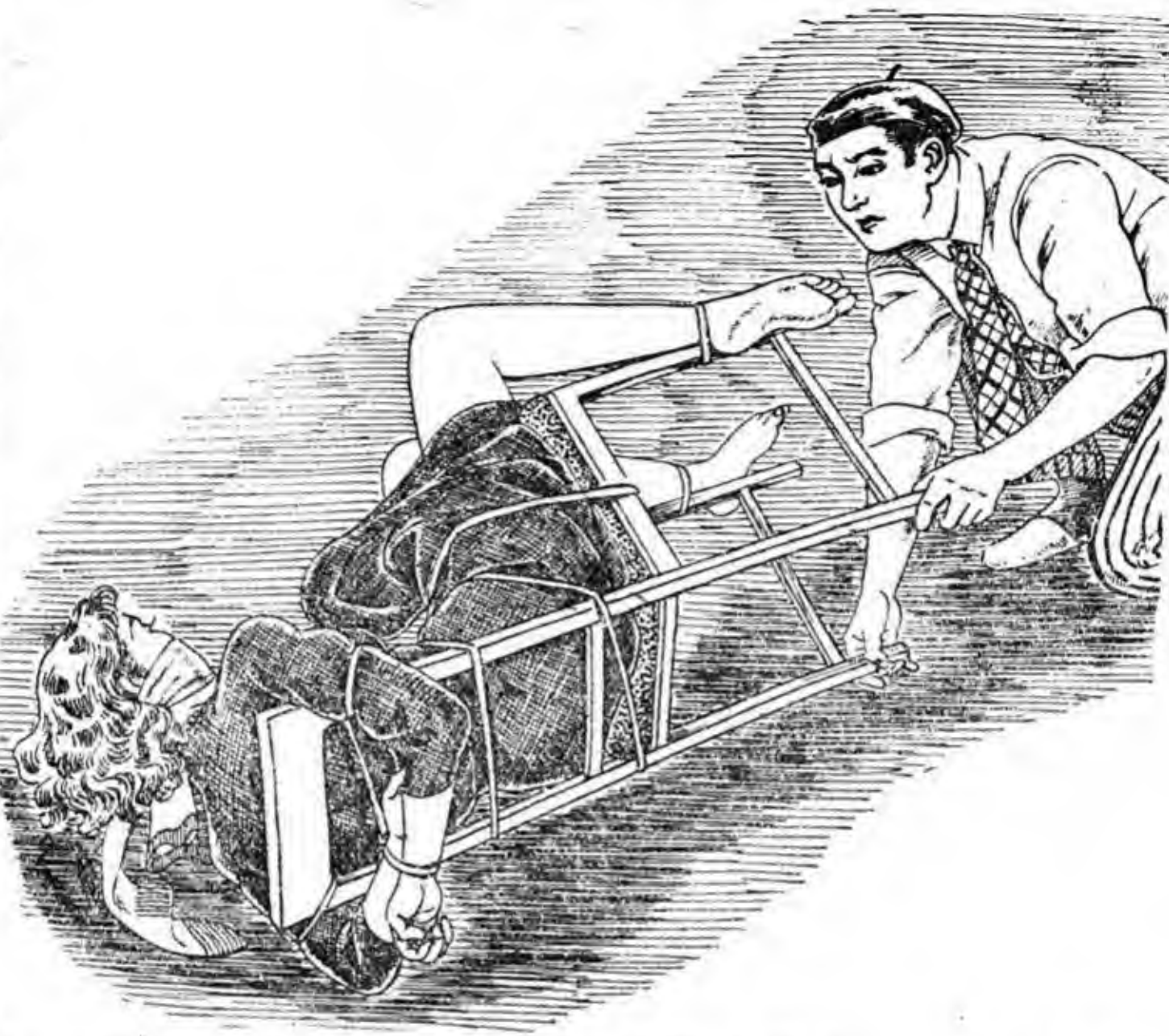
緒方は言うのだ。

私はふと、つぼみのまゝで死んでいつた竹野清を思い出した。もし今、私が緒方勉を許さなかつたら、彼も竹野清と同じ運命をたどるのではないだろうか。人と違つた性癖は本人が考える程、罪悪ではないのだが、それを自虐の材料にしがちなのだ。私は私の秘められた性癖を知っているから、彼等の気持も理解出来る。緒方を憎む気持は失せていた。

私は緒方にうなづいた。

「許してくれるの、怒らないね？」

そう言う緒方に強くなつた。けれど憎む気持はなくてもそれ



が緒方への愛情に変わるわけのものでもなかった。私の肉体の奥底で、求めていたはずの男なのに、ただ苛められたというだけで、その男に愛情を傾けられないことを私は知った。

「許してくれるね、僕、本当にどうかしていたんだ。劇団の仕事つゞけてくれるだろうね、たのむよ、悪かつたな、僕……」

くどいようにくり返す緒方は、私の縄をほどくと、奥から紅茶やお菓子や果物を次々にはこんで来てくれた。私の手首に縄のあとが残ってしまったのを、蒸タオルを何回かとりかえてくれたりした。けれど、ふとまぐつてみたセーターの下の二の腕が、赤紫の痕でうろこのようになっていたのを見た時、私は私の体を自分で抱きしめたいような奇妙な自己愛を感じた。私はその痕を緒方に見せたくなかった。そして、それよりも

「こんなにされてしまったの」

と、人江に見せてやりたいような気がしたのだ。

一緒に戸外へ出た緒方に

「私ひとりで帰えるからいいわ」

という

「まだ怒っているんだらう？」

と、しつこくくりかえす。

「本当に怒っていないからひとりにさせて、お願い。明日、ちやんと稽古場へ行くわ。約束するから……」

と言ひ、それでも曲り角まで送つて来てくれた緒方と別れると、私はいつも乗る電車の駅とは反対に、バスの停留所の方へ

歩いて行つた。

そして途中の公衆電話から私の家へ電話をかけたのだ。

「今日は目黒へ泊るわ」

そう私は母に言った。目黒とは私の実父の家のことだった。私は月に一度か二度、目黒の実父の家へ泊ることを許されていた。表面きは母の従妹の家へ泊るということで、祖父や養父は知つて知らない振りをしている。母と私だけの秘密だった。

養子であつた私の実父は、私がまだ満一才にもならないうちに、私の家から不縁になつていたので。その後二度目の父がむかえられたが、私の乳母が私を実父に会わしてくれていた。「目黒へ泊る」というと、私は娘の身で外泊が許されるのだ。

けれど私は今まで「目黒へ泊る」と嘘をついたことはなかつた。嘘をついても母は二度目の夫への義理をたて、私の実父に会うこともなかつたから、どこへ泊ろうと嘘がばれるようなことはなかつた。けれど嘘をつく必要もそれまでには生じなかつたのだ。

その時、公衆電話を見つけて、母に「目黒へ行つて泊る」と告げた時、私は心の半分では、本当に目黒へ行くつもりだった。手首についた縄のあとと直に消えたが、二の腕に痣の様にひろがつた痕はすぐに消えそうもなかつた。私は母の慧眼をおそれたのだ。

（今日はうちへは帰れない）

そう私は私に言った。そして、それはまるで待ちうけていたように次の言葉を引き出したのだ。

（家へ帰えらなければ、目黒はどうせ夜おそくまで起きている家なのだから、急いで行くこともない。その前に、一寸入江さんの所へよつてみよう、それから目黒へ行くのはどうせ道順なのだから……）

私は公衆電話をかけ終えると、暗いバスの停留所に立つて空を見

上げた。降るような星の中に、入江寛二郎の顔がくつきり浮んでいた。

四

コツコツコツと、廊下を歩く靴音がアパート中にひびきそうなきな音をたてた。私は悪いことでもするように、足音をしのぼせた。すると、それにつれて、入江に会いに行くということが、何かしらん後めたいように胸がどきどきした。

トン、トンとノックすると、すぐに中から

「どなた？」

と入江の声がした。

私はそれに答えず、もう一度、トントんとたたいた。

私がひとりで入江のアパートをおとづれるのはそれがはじめてだった。おそらく彼はノックしている人が私だなどと想像もしないだろう。彼がドアをあけて、そこに私を見た時、どんな顔をするかそれが見たかつた。

「あけて下さい、鍵はかゝつていないから……」

中から又声がした。立つて来ようとしないう精気に、私は一寸癪にさわつたが、入江が私に来たとは考えもつかないのだろうと思つて、よけいに不意打ちの楽しさに心が浮き浮きした。

私はスーッとドアをあけると、体をすべりこませるように、せまい靴ぬぎに入れた。そして、後手にドアをしめた。

靴ぬぎから中の様子は一目で見える。

それは四畳半程のせまい部屋だった。お鍋や洗面器がおいてあるかと思つと、本や雑誌が山になつてゐる。背広と外套のぶらさがつ

ている壁に、手拭と箒と劇団のポスターと、カレンダーが重なりあっている。

入江は机に向つていたが、その机はおそらく食卓を兼ねるのか、上びんにお茶わんにコーヒー茶わんに紅茶の罐にミルクの罐、お茶こしに砂糖つぼが、灰皿とインクと煙草の罐とパイプとシガレットケースと目覚時計と同居している。まるで記憶あそびの課題のようなあんばいに、四畳半の部屋中に、最低限度の生活必需品が置かれているのだつた。

入江は紺がすりの着物に、つい羽織を着ていた。

私は入江の和服姿に、いつもと違つた情感を感じた。湯上りなのか、髪には油気がく、ハサツと額にかゝつていた。

入江寛二郎は、その髪に指を櫛のはのように立ててかきあげながら

「やあ！」

と、驚きの声をあげた。

そして、すぐに立つてくると

「どうしたの？」

と、声をはずませるように言つた。手をとつて導き入れようとするような声の調子だつた。

私は靴をぬいで座敷にあがると、ペタンと座つた。急には言葉もなかつた。

「どうしたの？」

重ねて入江が聞いた。

「どうして今日稽古に来なかつたの？」

私はなじるように言つた。

「どうしてつて……今日は休みだつて緒方から速達が来たんだよ、君の所は来なかつた？ 君、稽古に行つたの？」

私はだまつてこつくりした。

「いいものを見せてあげるわ」

私は言いながら、セーターの腕をまくつた。子供の時分にわざと縋帯をといて怪我の痕を見せるのに似ていた。

白桃のようにすべすべしている二の腕の半面が、夕焼の空のような色に變つてゐるのだ。そしてその夕焼の中にくつきり二本の線が赤く腕輪をはめたように残つていた。

「どうしたの？」

入江はそれより他の言葉を忘れてしまつたように、同じ問いを、立てつゞけに繰返した。

「入江さんが悪いんだわ」

私は言つた。

「ほら、こつちも……」

私は片方の腕もまくつた。右の方がひどかつたが、左の腕にも紫色の痕がひろがつていた。

「地獄変の稽古をしたの。それでこんなに……」

「緒方がしたの？ 稽古つて君、緒方に縛らせたの？」

「ええ」

「そんな……。だつて、そんな君、無茶な……」

「でも、こんなにされたのあなたに責任があるんだわ」

「僕に？」

「ええ、そうよ、この間の階段のこと、緒方さんにしつこく聞かれて……」



「それで緒方に何をされた？ 変なことされたんじゃない？ 君……ばかだなあ、君、どうして緒方に縛らせたりしたんだ。君は……」

入江は私の腕をぐつとつかんだ。

「痛い！」

私は思わず悲鳴をあげた。

「痛くたっていい。君は緒方に何をされたの？ ねえ、君はまさか……」

入江は私の腕をつかんで引きよせると、じつと私の顔をみつめ

た。私は腕をつかまれている痛さを忘れて、彼の瞳にすいこまれるように、彼の顔を見た。

「入江さん、私、そんな女じゃないわ、いくら縛られたからつて愛してもいない人と私……」

「君は緒方を好きだったんだろう？ だから縛らせたりしたんだろう？」

「うそよ、私、緒方さん好きじゃないわ」

「そんなら何故、此の間の晩、僕に恥をかかしたの？ 君は、僕や緒方をからかっているんだ」

「そんなことないわ」

「そうじゃない証拠がどこにある？」

「証拠なんかなくつたつて、私、決して、あなたや緒方さんをからかつている覚えはないわ」

「じゃあ、何故こんなおそい時間に、僕の所なんかへくるんだ？ 緒方をからかいそこなつて僕の所へ来たつてわけだろう？」

入江の言葉は、縄や鞭を用いない言葉のサジズムに似ていた。私はだんだんに言葉の遊戯的サジズムの中に陶醉していつてしまったのだ。

「君のいうことなんか絶対に信じない。君は男の気持をもてあそぶ女だよ」

入江はいう。私は私自身、私の誠実さを信じていたから、そう言われて腹を立てそうなもののに、何とかして、自分をわからせようとやつきになるのだつた。

「僕や緒方だけじゃないよ。いつか君は恋をしてもすぐ飽きると言つたじゃないか。君のは恋じゃないんだ。ただ男心をもてあそんで面白がつているだけなんだ」

「違うわ、随分ひどいことをいうのね」

「本心をつかれたもんだから怒ることも出来ないんだろう」

入江の毒舌はつきる所を知らなかつた。それはまるで、私を針でついたり、竹の棒で打つたり、抓つたりするのに似ていた。私の血がだんだんくすぐられ、ゆすぶられ、音をたてて体中に狂い出した。

私は入江の私を罵る口を、いきなり私の唇でふたとすると、彼につかみかゝるように抱きついてしまったのだつた。

五

私はその時まで、接吻というものは、ただ唇と唇を合わせるものだと思つていたのに、入江は私の唇に唇をふれると、それ以上のことをしようとした。私は驚いて、すぐにはそれを受入れられなかつた。

「ほら、やつぱり君は僕をからかつているんだ」

入江は言つた。

「自分から唇を近付けておきながら、そうやつて逃げてしまふ、君という女はどこまでひとを馬鹿にするんだ。僕はなにも不真面目な気持で君に接しようとしてるんじゃないんだ。それなのに君はまるで娼婦のように僕をからかう。いいかげんにしたまえ」

「娼婦だなんて、あんまりだわ」

「僕は君と浮気するつもりはないんだ。もつと真険な気持でいたんだ」

「だつて……」

あんなことするんですものと私は言いたかつた。私はもつと接吻というものをロマンチッククに考えていたからだ。

「私、帰えるわ」

「帰えるんなら帰えりたまえ。そういう人なんだ、君は……」

「じゃあ、どうすればいいの」

私は入江に腹を立てる気になれなかつた。入江が怒つて私に邪慳な口をきくにつれて、私の中から入江への好意が引きづり出されていくのが妙だつた。私は今までこんな風に男から怒られたことがなかつた。むしろ、私がブンブンするのをなだめてもらう方が多かつた。

た。それが入江のようにとげのある言い方をされると、だんだんに私自身それ程悪い焦れていたわけではないのに、入江を好きだと言わなければならぬようになってきた。娼婦のようだと言われな

い為には、本当に入江を愛しているのだと言いたくなってくる。

「君は緒方の嫉妬心をあふりたてて、面白がつて縛られてきたんだらう。なにされてきたかわかりやしない」

「もしそうだったら、私、わざわざ此処へ来やしないわ」

「ところがそれが君は面白くて、今度は僕の嫉妬心をあふりに来たんだよ。僕はお望みどおり嫉妬しているよ、ああ、たしかに嫉妬している。いつたい緒方に縛られて何をしたんだ？」

「何もしやしないつて言っているじやないの」

「どうだかわかつたものか」

「そんならあなただつて私を縛つたらいいじやないの。こんなせまいしめ切つたお部屋で、私を縛るぐらいいけないことじやないの」
とうとう私はそう言つてしまった。そう言わなければならなかったのだ。

「よし縛つてやろう」

入江の言葉は縄が私の手首にかゝつたような戦慄を私の血管に走らせた。此の時の戦慄も決して不快な思いではなかつたのだ。嬉しさというのと又違う。私はこの感じを文字に表わそうといろ／＼考えたが、適切な形容がないのだ。しいてたとえれば、夏の夕方の重苦しいむし暑さの中で雨を待つていて、顔にボツンと雨がかゝる、ああ、とうとう降つてきたと思う時の気持に似ているとでもいえるかもしれない。

私が手をさし出したので、そのまゝ入江は自分のしめていた兵児

帯をといて、私の手を前で一つに縛つた。私は入江が私のさし出した手を後へねじ上げて後で縛つてくれるかと思つた。前で縛るとは思わなかつた。

自分の目のとどく所で、兵児帯がぐるぐる、と手首にまかれているのを見てみると、後手にされるのとは又べつな感じがした。それは何か悪いことをして縛られたような屈辱感があつた。後手に縛るのは、縛る方が悪人の場合もある。けれど前で縛られるのは、手錠をはめられるのに似て、罪のきまつた時が多い。私は入江にこれから仕置きされる罪人のように思われて来た。それは何かしらん、入江に自分の身をなけ出すに似た快感と共に、私は私が入江に愛情をもち出しているのを知るのでつた。

入江は私を縛つた兵児帯のさきを、手の中であぐらのようにしながら、部屋を見廻した。どこかへ縛りつけようと考えているらしい。しかし、前にもいつたような雑然としたアパートの一室は、床柱もないし、椅子もない。机のあしは低いし、本や雑誌をかたづけなければ結びつける余地がなさそうだ。

入江は壁にかけてあるハンガーに目をやつた。何もかゝつていないハンガーが一つふらさがつていた。

彼は立ち上ると、そのハンガーのズボンをかける所へ兵児帯をとおした。引かれるまゝに私は壁ぎわへにじりよつたが、なおも手を引つぱられるので立ち上つた。すると入江は丈の高いのを利用して背のびすると、ハンガーをかもいの上の額でもかけてあつたのか柱に五寸釘が打つてあるのにひつかけた。私は自然、両手を頭の上につばいにのぼして壁にはまつた柱の前に、はりつけのように立たされてしまつたのだ。

私が力一杯手を引けば、そんな釘ぐらい抜けたかもしれないし、或いはハンガーのズボンをかける所が折れたかもしれない。けれど私はされるまゝにじつとしていた。入江がそうしておいて、私をどうするつもりか、何かしらんそれが待たれた。

「君が本当に僕をからかっているのだから、僕のする通りにおとなしくするんだよ。おとなしくしなかつたら、僕は君があくまで僕を馬鹿にしているんだと思うから僕にも覚悟がある」

「どんな覚悟？」

「君をふみにじつてやる」

「いやよ、そんなの、おとなしくするわ、ねえ、おとなしくするから、こわいことしちやいやよ」

私はあわてて言つた。はりつけの様な形でそんなことを言つていることが、いつもの私の男みたいで強気をどこかへ失わせているらしかつた。そして、多分入江もこんな私を可愛く思つてくれるのではないかしらとうぬぼれた。すると私は私自身の性格まで変つてしまつたような感じで「可愛い女」の役に入りこんでいつてしまうのだ。それも私の芝居気だつた。考えようによつては、私という女は実に鼻もちならない厭な女なのだ。そしてもう一つしまつの悪いことに、「可愛い女」をよそおっている自分を、自分で「厭な奴」とつばはきかけたいもうひとりの私がいるのだ。その私の中の二人の性格の違う娘がどつちも役になりきろうとして争い出すと、私は縛られているという罪人のような恰好に僅かに心の安定を得られるように思うのだつた。

どこか遠くで電車の音がした。

(何時だろう)

私はふと思つた。

(もう目黒へ行く電車はないかもしれない)

終電車にはまだ間のある筈なのに、私はそう自分で自分に言いながら、手を頭の上に高くあげたまゝ入江がどうするつもりなのかとお仕置きを待つ罪人のように、不安そうな顔で、私に背を向けて煙草に火をつけた彼のうなじを見おろした。

(次号完結)

〔編集部通信〕

◎責絵画家招聘

躍進に躍進を続ける本誌は、更に内容の充実と刷新を企てるため、広く自信ある画家を招聘したいと思ひます。条件其の他詳細は御照会次第御返事いたします。照会には略歴並に試作品の添布を願ひます。

◎マゾ・フオートに出演の

男性モデル募集◎

今回編集部に於て、サジスチツクな女性の全面的な協力の申出を得ましたので、読者有志の

中からマゾ・フオート出演の男性モデルを募ります。年令二十五才迄の健康なる男子、御希望の方は身長体重記載の上御申込み下さい。謝礼其の他詳細は、直接御返事いたします。

◎内外資料を求む◎

本誌の内容を更に価値あらしめるため、アブノーマルに関する内外の文献的価値ある資料を求めます。御都合により貸与下さるも可、謝礼は出来るだけ十分にさせて頂きます、何卒御協力下さるようお願い上げます。

×

×

| | |
|---|---|
| 特 | 集 |
| 告 | 白 |

孤

児

院

の

折

檻

野々村由紀夫

孤児収容施設の職員は慈愛に満ちた人々であつて不幸な子供達をなんとか一人前に育てたいと考えている人が、戦後は大部分だと思ひますが、私が在院していた戦前のある、国立孤児院の職員は、お世辞にも人徳高い人だとは云い切れません。どうしてかと云うと、それは他の官庁や役所ではどうにも勤められそうにもない人で、何んの失敗もないのに止めさせる事も出来ないで、何処でも押しつけて置かなければならない様な人を孤児院の職員にしてしまう傾向があつたのです。しかし、中には立派な人格者も、いたことは云うまでもありません。

子供のなかには、学業の秀れた者もあれば低能児に近い者も少くありません。柔順な子

もいれば、イタズラ小僧もいる。十人寄れば心も十色。この様な孤児を折檻する方法も、又いろ／＼あります。職員の中には、どの役所も食いつめて来た最下級の役人もいるので随分変つた、折檻をする人もいました。では次の様な折檻の方法で、比較的多く行われた方法を紹介しましょう。

座つていろ

職員に座つていろ、と言われたら職員室の板の間に座つていなければなりません。これは一番多く用いられる方法で、それはあまり苦痛の様ではないと思われるかも知れませんが長時間になるとかなり苦痛を覚えます。

サラ板

サラ板と云うのは、洗濯板の事で孤児院ではサラ板という用語になっています。単に板

の間に座つていろ事より苦痛の多いことは云うまでもありません。

指かんまし

なにか子供に、白状させる折によく用います。人差指と中指との間の付根に、エンピツ或いは、筆をさし込んで二本の指をぐつと握り、エンピツ又は筆をぐる／＼廻すのでその肉体的苦痛に、大抵の子供は声を上げて泣きます。

縦一文字

逃亡をした子供に対する折檻で、頭髪を鼻の上にあたる所からツムシへ。更に後頭部の背骨の上に至る所まで、バリカンで一文字に刈り取つて、他の部分の頭髪は残しておくといった方法で以後の逃亡予防の為に考えられたものです。

靴がなる。

サディズム的なS職員が考案したもので、向う脛を暗れたみ空に靴が鳴る、コン／＼と歌いながら靴をはいたまゝで蹴り飛ばします。この時のS職員は、よほど嬉しいらしくいつもここに笑っております。

尻たゝき

夜尿症の子供に行う折檻で、男の子ならズボンとパンツを、女の子ならスカートをまくり上げズロースを脱がせて、座らせ頭を押えつけて臀部を高くさせて、そこを手の平又は常習の子供には縄で叩くのです。もう卒業に近い大きな子でも夜尿症はあるものです。特に女子の大きな子の豊かな臀部を叩く事に、興味を持つている職員もあつた様です。

ヤイト

お灸の事をヤイトと云う地方もある様ですが、孤児院のヤイトと云うのはお灸のことではありません。盗みをした子供に行う折檻



で、子供を全裸にして、後手に手拭又は縄で縛り、うつぶせに寝かせ、お尻にロウソクを立て、火をつける方法です。ロウソクのロウがとけて、肌流れて落ちた時等、お灸どころのあつさ騒ぎではないそうです。

大体以上が普通一般に行われた折檻の方法で、ビンタとか、立たされる方法の折檻はまだ序の口なのです。さて次に、一風変つた折檻を私は孤児院で経験しましたので、それを紹介することにしましょう。

二

夕食後の自由時間の時です。私は宿直のS職員に呼びつけられました。私はその日、炊事場でおかずにする、がんもどき、コンニャク等のおでんの種を盗み食いしていたので、思わずドキンとしました。私はそのとき、誰にも見られていないと信じて居りましたが、運悪くS職員に見つかつていたのかも知れません。おず／＼宿直室に入ると、S職員は、机に向つて何か一生懸命に書いておりましたが、私の姿を見ると、すぐにペンを置いて立ち上りました。

「野々村、おまえ今日、炊事場で何をしていた？」

「何もしていません」

「嘘をつけ、先生は見えていたんだぞ」

しまった、見られたか。と思いましたが最初に何もしていません。と答えた以上、黙っているより仕方ありませんでした。

「おい、本当に何もしないのか？」

「はい」

「フン、痛いめにあわさないと白状出来ないのだな、よし、こつちへ来い」

S職員は、私の手首をつかんで、衝立の蔭に引っぱり込みました。

衝立の蔭には、宿直員の仮眠用のベットがあります。そのベットのの上に、シユミーズ一枚の女の子が仰向けになつて寝かされているのです。顔の上には、ハンケチがかけられていました。しかし私には一目見てそれが、誰だかわかりました。それは逃亡して、つかまつた良子なのです。彼女は逃亡の常習者でした。逃亡をしてつかまるその折檻を、彼女は楽しみにしておられますので、多くの職員達はあきれて、折檻もしない様になつたのです。良子はその時、十五才で高等科の二年生でした。十五才と云つても、それは戸籍上の年令で実際の年齢は、わからないというのが孤児の不幸の一つでしたから、この良子も十五才といつても、事実はそれ以上の年齢だといふことを、ベツドの上の彼女の肉体がはつきりと、物語っております。

良子は、両手、両足は縄で縛られその縄の一端は、ベツトの四本の脚に固く結びつけられ、文字通り身動きも出来ない様にされてい

るのです。

さてS職員は私を、衝立の蔭に引っぱりこむと、今度は書類の入つた戸棚から一木の羽箒を取り出しました

「おい野々村。

俺のやる通りにやるんだぞ」

そう言つて羽箒の先で良子の足の裏を撫でるのです。

「あ、あゝゝ」

その度に良子

は、身をくねらせてわめきますが、どうする事も出来ません。私はじつと見ていますと、

「さあ、やれ」

S職員は私に羽箒を渡しました。私は躊躇しました。

「さあ、早くやれ」

と今度は、前よりも大きな声でいいます。「やらないかッ」



S職員はその時の顔は、まるで酒を飲んだ時の様にすすんでいます。それでも私はためりました。

「よし、やらないのだな」

そう云うが早いか私の片手をつかみ、後手によじつたのです。

「あゝ」

私は思わず声を上げました。

「静かにしろ」

私はまたたく間に後手に縛り上げられてしまいました。

三

私は小倉のズボンを脱されて、ベットの脚に後手に縛りつけられました。

良子は反対に縄をほどかれて、ジューミーズ一枚のまゝで私の傍に立っているのです。彼女のそのすつきりとよく伸びた白い脚が、私の眼の前にあります。

「良子、野々村のほつべたをなくつてみる」
S職員に命令された良子は、少しためらいましたが、すぐに軽くなでる程度に、私の頬を叩きました。

「もつと強く、そんな事ではいかん」

と再三云われて、その度毎に強さを増すのでしたが、それでもS職員は満足しなかつた様です。私の頬はほんのりと紅潮してきました。すると今度は、

「良子、野々村を足で蹴りとばせ」

良子は頬を打つ手をとめて、又もためらいました。するとS職員は良子の傍に行つて、いきなり体を持ち上げ、私の肩の上へ良子の足を乗せてしまったのです。

「さあ、蹴つて……」

抱き上げられながら良子は仕方なしに、私の頬を足の裏でべたべたと叩くようにしました。その度にねつとりとした良子の脂足が私の頬に触れました。

「もつと強く」

S職員は、良子を床の上へ下して言いしました。彼女は両手の掌を壁へもたせて私の頬を蹴りました。

「もつと／＼強く」

そう云うS職員の声が、良子の足の裏と私の頬とが激しくぶつかり合う音の間に聞えしました。私は歯を喰いしぼつて声を出さない様に我慢をして居りました。

経験のある方は良く知つていられると思いますが、頬をたたかれた時は最初にカッとして、熱くなります。その時の熱さを通り越しますと、それほど痛さを感じなくなります。まして相手が女であれば、その力もたかがしれております。私は頬の熱さを通り越してそれ程の痛さを感じない段階になつていたのでしよう。私はそうつと良子の顔をみました。

良子は、すっかり髪を乱しておりました。目はまるで夢中になり血走つています。そして足で私の頬を叩くのが、何かリズムに乗つて踊つている様に体を動かしているのです。

その体も最初に見た時は美しい白肌だったのに、今はもうすっかり、薄桃色になつて、まるで油絵の裸婦の様になつていました。

傍ではS職員が両手を腰の上へ挙げて、はいえんで見ていました。私は良子が体を動かす度に感じる何とも云えない心持の良いのに酔つていました。良子は足をふるう度に、ぐら／＼と揺れる私に興味を覚えたのか遠慮なくピン／＼と蹴り上げます。

S職員は折檻をしている人。私と良子はされている子供、その三人が三人とも共に各々の立場で楽しんでいたので、この時の状態です。常識で考える折檻は、する方もせられる方も決して気持ち良いものではない筈です。ところがこの時のS職員が行つた折檻はする方も、される方も楽しく、(あんな折檻なら毎日されても良い)と思つた位、全く夢心地の愉快なものでした。

それから、私はその時の折檻の楽しさが忘れられず、何とかしてもう一度、良子のねつとりした脂足の裏で叩いたり蹴つたりして欲しいものだと思いましたが、そんな事を口に出してS職員に頼むわけにもゆかない中に、良子も高等二年を卒業して、住込みの女中になつて、出ていってしまいました。

変性男子の告白

特 集 告 白

篠 原 幸 雄

私が女になるために、先ず最初に習つたのは化粧をすることでした。
「一寸ね、お前が外へ出られるように、いろんな物を買ってくるから、おとなしく待つて
いるんですよ」

と云つて小母さんは出て行つてしまひました。私は何かそわ／＼した落着かない気持ちで、小母さんが隣のおかみさんから借りてきて私の頭に巻いてくれたネツカチーフが中途半端で、気になつて仕方がなく、頭へ手ばかりやつている中、鏡の前へ行つて恰好を直してみたりしました。

「若し、他の人が入つてきたら、どうしよう?——、私はおしつこが近くなつたようないらだたしい気持ちで、立つたり坐つたりしていました。夕方になつて、小母さんが帰つて来られた時はホツとしました。小母さんは買物包を揺るげて畳の上に並べました。口紅、眉墨、アイシャドー、練白粉、パニシングクリーム、パフ、粉白粉、等が美しい包装で次々と飛び出してきたのです。私は愉しくてたまらず、本当に女の子のように美しくなろうという期待で胸をふくらませたものです。

しかし、何といつても生れてから二十年近く、ずつと男性として暮してきたものですから、どうしても日常の起居仕草がきちこなく女の風をしていながら変なところが目につくらしく、その都度、随分小母さんに虐められました。別に折檻をしたりするようなことはないのですが、どちらかといへば、小母さん

は口やかましい方ですから、口先でずけずけと云われて、私は思わずうろ／＼になつてしまふのです。きつと、あの交通事故で死んだという娘さんもこの様にして仕込まれたのでしよう。

私が最初、こゝへ厄介になる際、小母さんは涙ぐみながら、娘に八ツ当りした為に一人娘を失つた事を後悔していましたが、その娘さんの代りに私が養女?のような恰好で面倒を見て貰うようになつてしまふと、やはり、生来の性質が出てくるのでしようね、でも、もともと女でない私が、女として生活してゆくのですから、不自然なのは当たり前です。それが又、小母さんにとつては恰好の小言の種類になるのです。そして、いつの間にか、私も小母さんの意地悪に慣れて、小言を聞かないと淋しくさえ思うようになつていました。

その中、小母さんは誰に聞いてきたのか知らないけれど、私を医者の方へ連れてゆき、それからずつと二年間ばかり、女性ホルモンの注射をうちに通わせられました。いつしか私の頭髮も美しくのび、身体も若い女のように皮下脂肪がついてむちむちと弾力がついてきました。それにひきかえ、私の男性的機能はすつかり衰えてしまつて、気持ちえ女のよ

うになつてしまいました。女性としての生活がすっかり板について、今ではどこへでも大手を振つて出かけますが、誰一人として疑うような者はありません。

この間も小母さんと一緒に映画を見入つて背後から若い男に手を握られたのには驚きました。そして不思議なことにそんな時の自分の気持が余りにも女性化しているのにあきれます。やはり、こういう生活を続けていると心まで女になつてしまうのでしょうか。

なんといつても一番困るのはお風呂です。

でも、アパートには内風呂があるからいゝようなものだけれど眠むい時でも晩く迄起きていなければならぬし、いつも汚いお湯にばかり入らなければならぬのは閉口です。

二

お風呂の外にも大変困つたところがありました。余りブラブラ遊んでいるのも退屈だし、世間へ出てみるのもいゝだろうというので、流行の波に乗つたパチンコ屋へ勤めに出たことがあります。



香彦 女

勿論、平常女として暮している私ですから女店員として勤めました。困つた事といゝますのは、通つて来られるお客様の途中で、福田という自転車店の息子さんが、私に目をつけられ、映画やダンスに誘つて下さいました。最初はなんという事なしに、お断りしていましたが、余り熱心に言い寄つて下さいますので、自分の女としての魅力をためしてみる気で三度に一度はお供して、いそいそと出掛けるようになりました。

今から考えても、その時の自分の心理はわ

かりかねますが、そのうち、だんだんその方に魅かれてゆくのをどうすることも出来ませんでした。夜晩く帰つてくる事が続いたりしたので、小母さんも心配して

「パチンコ屋をやめたらどう？」

と迄言つて下さいましたが、折角勤めに出て主人や朋輩、お客さん達からも喜んで貰っているのに、とそのまま勤めていました。本当は内で小母さんの小言を聞いているより外で働く方が愉快でした。小母さんは私が夜晩く帰つてきたりすると、淋しいものですから

いろいろ嫌味を言つたり、あてこすりを言つたりしました。

「あら、今日も来て下さつたの」

福田さんが見えたと、私はそわそわし初めました。女になつた私を初めて思つて下さる方、そんな事を思うと羞しさに思わず顔を赤らめるの

でしたが、自分の男性である身体の事を思うと、面白半分に深入りしてはいけない、今の中に理由を話してお別れしなければと、思いつめたような真剣な顔つきでタマを弾いている福田さんの側へ寄つていつて、

「あ、今日ね、早仕舞なんですけど、角の喫茶店で待つていてくれない？ お話したいことがあるの」

と言いますと、彼は

「実は、僕の方にも話があるんだ」

とおうむ返しに返事しました。私は

「じゃ、きつとね」

と言つて仕事場へ引き返えしました。その日は何をしてもうわの空で、彼と別れる事を考えると、自然と涙が出てとまりませんでした。

彼の話は、案のじよう、私と結婚しようというのでした。私は来る時が来たという思いで、自分の身の上話をしました。彼は半信半疑で、いやむしろ私が冗談でも言つていように思つたらしいですが、私の方から旅館へ誘い、一緒にお風呂へ入りますと、彼もよう

やく納得しました。

それ以来、私はパチンコ屋をやめてしまいました。小母さんは私が突然お勤めを止めたので一時げん顔をしていましたが、今では余り小言も云わず仲よく暮しております。

その他、同じアパートに住むストリップの方に、トレーニングのお相手をさせられたりいろいろと変つた事がありましたけれど、又別の機会にゆづつて、これ位にしておきます。

(おわり)

誰でも恥しい所に、たとえ同性であつても視線を感じるといふことは嫌なものです。しかし、それがやむを得なかつた時、その恥しさに満ちた姿は美しいものです。そして此の様な姿に興味を感じ、そして本能的な喜びを感じる人々……私もう、その中の一人になつてしまい、そして奇クを知つたのです。

それは次の様な事から始つたのでした。私は今年二、四才になつた中央線沿線のあつた御屋敷に勤めているメイドです。此の御屋敷には私の外にもう一人、十七才になつた貞子さんと

子さんというメイドさんが住込んでいます。二月の雪の降つた寒い朝でした。何にか顔色のすぐれない貞子さんに、

「顔色が悪いわよ、どうしたの？」と聞きますと、貞子さんは顔を上げて

「おなかの具合が悪いのよ」と一言言つて又皿洗いを続けていました。

いつもピチピチと健康な貞子さんが、二日ばかり、何となく沈んでいるのは、どうした事でしょうか、私は一寸心配でした。それで仕事が終わつて女中部屋へ帰つた時、

「おなかが悪いつて、どこ？ 胃？」

と聞きますと

「こゝ、三日程、お通じがないのよ、今迄こんな事なかつただけで、どうしたんでしょ、何にも食べたくないし……」

というではありませんか、便秘、下剤、習慣になつてはよくないと女学生の時に習つたことがある。そうだ、浣腸がいゝわ、姉が持つていた本に、イチジク浣腸の広告が載つていたつてと思い出しました。貞子さんに「私が浣腸してあげるわね、一寸待つてらっしゃい、今晚買つてくるから……」

私は彼女が「浣腸なんて、イヤよ」とい

ているのを振り切つて表へ飛び出しました。

「さあ、すぐスツキリするわよ」

私は買つて来たイチジク浣腸の紙袋を破りながら貞子さんをせかせました。

「こんなの効くの？ 浣腸なんて嫌だわね、でも効くかしら？」

そんな事を言いながら、私の取り出した説明書を読んでいた。私はそんな事に一向かまわず、先に穴を二つあけ、滑りをよくするため、コールドクリームをぬりました。

「私、新制中学を卒業する春ね、やつぱりお通じがなくて、お医者さんで浣腸されたけどあんな姿勢すんの、いやよ」

ようやく浣腸することを納得した貞子さんは、まだ駄々をこねています。私は畳の上にビニールの風呂敷包をしいて「こゝへお尻をのせて横向きになれば、いゝでしょう。」

とせかしましたので、貞子さんは仕方なく

特 集 告 白

浣腸願望

山田芳枝



スカートとジューミーズをまくり上げて、「これでいゝの？」と横になりながら、もう顔を赤く染めています。私が貞子さんのブルマーを膝の所まで引き下げると、貞子さんは慌てゝ顔を手で覆つてしまいました。私は膝をおなかにつく程曲げさせて、イチジク浣腸をとり上げました。

やがて、お薬がきいてきたのか、「もうお手洗いへ行つてもいゝでしょう」と盛んに催促するのへ、「少し、がまんするのよ」と言つて、顔を真赤にして我慢しているのを快く眺めていましたが、とうとう辛抱出来なく

なつたのでしよう。「まだ、もう少し」と私が言うのを押しきつて「もう、いゝの、いや」と言うなり御手洗へ走つていつた恰好に、おかしくて心の中で思わず笑つてしまいました。貞子さんが、お手洗へ行つてゐる間に、私は今の光景を、「人間の羞恥に満ちた情景がこんなに素晴らしいものだろうか」と思い返えしてみるのでした。

私が初めて、浣腸に対する興味を抱いたのは、女学校の三年生の頃、お友達が盲腸炎で入院して、その附添で看病していた時です。手術のあと、お友達はやはりお通じがつかず看護婦さんが時々浣腸なさいましたが、イリガトールで石鹼水を注入されていた姿に、胸の鼓動を早めたことが想い出されます。その時私は「若し、自分があんな事をされたらどんなだろうか」と思つて居りましたが、最近、貞子さんの事があつてから、私は同性のしかも若い娘に対して浣腸してやりたいという興味は増す一方です。

先日、新宿で見た奇クに、羽村京子さんのお言葉が載つているのを見かけ、遂に買つて帰り、こつそり読んでは楽しんでいましたがたまらなくなつてペンをとりました。

感情教育

【八】

吾妻
栗原

新
伸・画

招かざる客

章三郎の小説がはじめて単行本となつて、ある新興出版社から出たのは、結婚してから五年めだつた。文壇ジャーナリズムに縁のない彼は、その後もそうだが、師弟関係も情実関係ももつていなかった。ただサインをして、めぼしい作家や批評家に二十冊ほど送つてみた。はたして、若手の無名作家にハガキ一本の返事をよこすものはひとりもなかった。

ところが、しばらくたつて、新聞に批評をかいてくれたものが二人出た。一人は幸徳秋水や片山潜と同期の著名な社会運動家で、それも三段ぬきに、ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」と比較論評してくれた。もう一人は女流作家で、その新聞にたのまれた雑誌月評を無断ですつぽかして、彼の作品だけについてかいた。そのために提灯記事ではないかと疑われたことまで、あとでわかつた。それまで不遇でさつぱり認められなかつた章三郎が、他人には取り澄ました顔をみせていても、これに平気でいられる筈がない。ま

して学生時代に父とケンカして一時家をとびだしたときも、「ジャン・クリストフ」だけは肌身はなさず持つて歩いた位だから、内心宇頂天だつたことは察するにあまりある。いや、その得意ぶりはときどき顔に出た。友人の私などはそれが苦々しくて、「日本にロマン・ロランなんかいやしないよ。冗談じゃない、そう簡単に出るもんか」と毒づいてやつたことがある。

ただ、これが章三郎の青春の記念碑だつたことだけはひとめてやらなければならぬ。この小説は三部作の長篇だが、最初から終りまで恋愛はひとつもなく、欠点だらけの若い精神が俗世間とたたかいながら生長する過程を描いたものだつた。そのときは第一部だけが本になつたのだが、すでに思想統制がきびしくなつて、親や教師に反抗するこの種のは危険だつた。出版社は発禁をおそれた。それで作者の彼が内務省の検閲課に足をはこび、課長に会つて陳弁これつとめながらやつと禁止しない言質をとつたりしている。

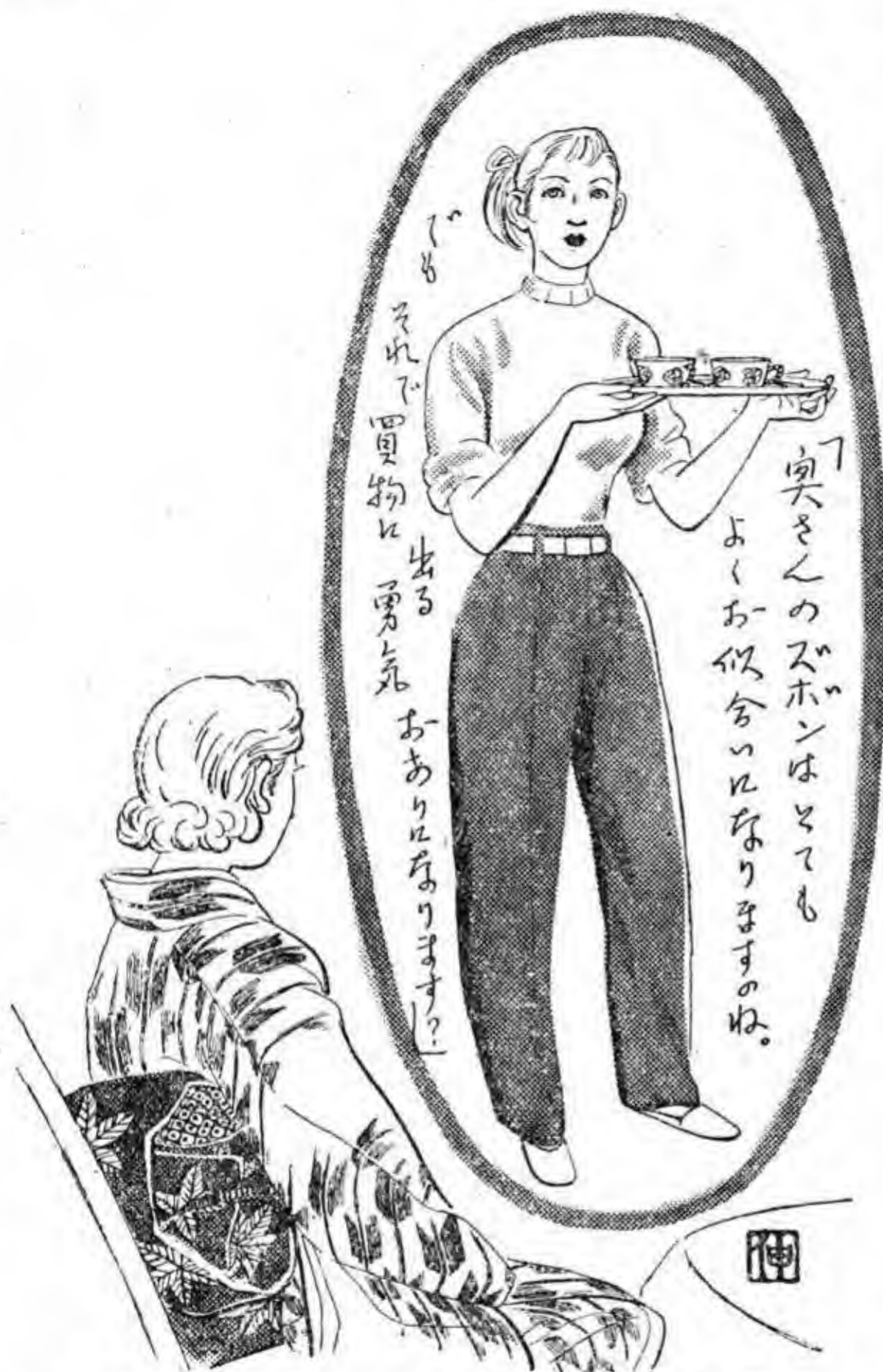
この本は章三郎のその後の著書全部を集めたよりも売れたが、それはずつとあとの話で、第一部初版の出たころは売行き香ばしくな

く、三千部が半分ちかく残った。が、そんなことは出版社の頭痛の種にはなつても、かれの知つたことではない。はじめて本が出たよるこびと、もういつぱしの作家になつたような錯覚とに酔っている（彼はすぐ酔うたちなのである）。それに、情ない話だが、印税三百六十円の収入が大事件である。結婚以来、これだけまとまつた金

を手にしたことは一度もなかつた。「どうだい、船は港を出たろう？、あとは帆をかけて走りやいいんだ。ちつとは僕の真価もわかれよ」いまから思えば歯の浮くようなセリフだが、妻というものはなんと信じやすく、ありがたいものだろう。眼に涙さえうかべて答えるのだ。

「奥さんのズボンはどうもよくお似合ひになりますのね。」

「いも
それで
買物に
出る
おありになりますか？」



「そんなこと、前からわかつてるじゃないの。私、ずつと信じていたのよ。ただ、あなたは運がわるかつたのよ。……でも、もう大丈夫ね」
「疑うのかい？ホラ、これ、みんな君と僕のものだぜ」
彼は、銀行で換えてきた現金を——もうわかりきつていゝるのに——また持ち出してきて、彼女にわたした。

手の切れるような百円札三枚と十円札六枚。のんびり暮らして半年分だ。由紀はそつとそれを取り上げ、ふぎけて胸にかき抱く恰好をしてから返してよこした。

「私いや。あなた持つてて」「なぜ？」

「なぜでも。……私が持つてると、使いたくなつちやうんですもの」

「使つたらいいじゃないか。金は使うためにあるんだぜ。君にも苦労かけたよ。だから好きなものあつたら、ジャンジャン買えよ」

「だめよ、そんなことしちゃ。子供だつて、大きくなつてきたんだし、あと二三年たてば学校よ。これから私たちも少しは大人らしい堅実な生活をしなければ、ね」

「二三年もさきのことを考えてるのかい、バカだなあ！」と、彼はおどろいて言つた。

「僕は一冊本をかいただけで死ぬんじゃないんだよ。あれは出発点だよ。これから僕の人生がはじまるんじゃないか。そりやあ今までには貧乏だつたさ。だが、もう憂愁夫人とはおわかれた。取り越し苦労すると頭が禿げるよ」

「わかつているのよ。でもね」と、由紀はやさしくほほえんだ。

「あんまりいいことがあると、あとがこわいんですつて。私、なにか反動でもありやしないかと思つて、かえつて不安になることがあるわ」

「そういう理窟にたらん不安で、女は一生をせまくする。現実を直視して、もつと自信を持たなくちやいけないな」

なにが現実の直視かしたものでない。彼こそ未来に虹ばかり描く男だつた。そのために由紀の青春は貧乏に縛りつけられたのだ。反省すべきは彼だつた。だが、わかい美しい妻は男の楽天的な熱情にひきずられ、不平も愚痴もこぼさず、その後もアスファルトの道にあるくかわりに、峻しくはげしい激動の浪にもてあそばれた……。

そのころ売り出しの筑摩書房と好敵手だつたその出版社は、絶え

ず読者層をつかもうとしてあせつていた。その一つの試みが、愛読者カードという形であらわれた。いまでも盛にやつている、感想をかかせるハガキを新刊書に挟み込む式のものだ。章三郎は社にでかけて、それをよむのが楽しみだつた。ふしぎと彼の著書の反響は多く、それもほとんどがわかい男女の青年層だつた。

「この調子だと、尻つばねする可能性がありますね。ひとつ、第二部を早くかいてくださいよ。あ、あなた宛ての手紙も来ている」

こう言つて、社長は一束の手紙をわたしてくれた。読者からの熱つばい通信なのだ。

大家と名がつくものは、こういうファン・レターに返事を出さないのだろうが、なにしろ彼は無名作家である。文壇と縁がないだけに、直接の読者のたよりはうれしいのだ。それに彼は直接の声を無視する日本文壇の大家にたいする反感を少年時代からもつていた。トルストイが中学生のロマン・ロランに返事をかくため三日も客を辞したことや、当時無名だつたガンヂーと文通したことはふかく印象にのこつていた。それで生田長江が彼の手紙を黙殺したとき、「あなたはダンテの神曲の訳書の序文になんとかいたか。語りうる相手は青年のみだと云わんばかりの調子だつたではないか。それも売名の殺し文句だつたのか」という激越な手紙を送つたこともある。

そういう気持もあつたし、それ以上に俗悪な子供つばい自己満足もあつて、とにかくその中からまじめそうな数人に返事をかいた。これがキツカケで文通がはじまり、やがてある人たちは彼の家を訪ねるようになった。

彼等はわかい娘や青年で、みんなまじめであり、年齢も気分もあ

まりちがわない章三郎と打ちとけて文学論などやつた。そのなかには妻となり母となつた今日でも交際をつづけている人もあるが、この話には関係がない。ここで問題になるのは、伊東京子という女だけである。

この女は廿三で、当時のグループではいちばん年上だつたばかりでなく、既婚者だつた。痩せ形で色が白く、ちよつと不健康そうにみえるが、言うことはハキハキしていた。それに家庭を持つていてという意識のせいか、一種の馴れ馴れしさをもち、文学以外の話を好んでやりたがつた。たとえば洋間に由紀が、黄色いセーターに紺のズボンといういでたちで紅茶など運んでくると、ほかの連中は固くなつたりはにかんだりしたが、彼女はいつこう平気で、

「奥さんのズボンはとてもよくお似合いになりますのね。でも、それで買物に出る勇氣、おありになりますか？」

などと言つて、年は上だが世間なれない単純な由紀の頬を紅くさせたりした。

五月初旬のある日、結城夫妻と伊東京子は書齋の小さなテーブルをかこんでいた。時刻は昼に近かつた。借りた本を返しにきたのだといつて、例によつてしやべりこんだ京子が、そろそろ帰り仕度をしていると、玄関があいて、低い男の声がした。

洋間は玄関のすぐとなりだから、応待はなんとなく耳にはいる。耳をすますと、どうも客らしくない。ぶつきら藤な調子と、妻の口ごもるのを感じて、章三郎はてつきり押売りだと思つた。

「ちよつと待つてくれたまえ」と言つて、彼はすぐ席を立つた。玄関に出ると、人相の悪い男が三人、それも、勝手に靴をぬぎかけている。

「君たちはなんだ？」

腹を立てて、彼はどなつた。

「結城さんですね」

眼のするどい小柄の男は無頓着に訊ねかえして、さつさと式台にあがつた。

「裁判所から来たんです。ちよつと、押えさせてもらいますよ」

さしおさん

さすがに面くらつて、章三郎は口がきけなかつた。貧乏してきても差押えを受けるような借金をした覚えがないのだ。だが、小柄の男はわかり切つていと言わんばかりに彼の横をすりぬけて、縁側伝いに奥に進んだ。引きとめようとすると、肥つた背広の男が薄笑いを浮かべながら、

「こういうものです」

と、名刺をさしだした。弁護士高柳秀夫とある。

「田代さんの代理ですよ。じつは遠田君が姿を消しましてね……」

その一言が章三郎の胸を刺した。やつと彼には真相がわかつた。

遠田はW大学時代の友人で、親友というほどではないが、ふるい付き合いだつた。卒業してつとめていた会社がつぶれ、自分で事業をもくろんでいた。そして彼のところへ持ち込んだのが、新案マツチ函の話だつた。従来のマツチ函は木でつくり、紙を貼るのでコストが高い。また受函と外函が完全でないから、ポケットでマツチがこぼれたりする。遠田の考えたのはマニラボール製で、じかに印刷ができるからコストがずつと安くなる。しかもそれにはゴムがついていて、函を押してマツチを出し、手をはなすと自然と元に戻る

ので絶対にこぼれない。

「これは君、マツチの革命だよ。いま特許を申請してゐるが、おそらく工業化される前にマツチ会社が権利を買いにくるだろう。しかし何万円でもこの権利だけは売りたくないんだ」

遠田は雄弁だった。この発明はただ金儲けでなく、パルプ資源の節約にもなるしかもコストは半額以下でマツチは絶対必需品だ。大地を打つ槌は外れてもこのプランだけは外れようがない。ついてはごく小規模で始めようと思い、すでに出资者もついているのだが、先方では保証人を要求している……。

「もちろん無担保な位だか

ら、ただ形式的な保証人さ。君に金のないことは分っているし、先方は調査もしないんだからね。ただちよつと判さえついてくれればいいんだ……」

金銭に未経験な章三郎は、新案マツチの話にすっかり酔つてしま



つてその話にのつた。全く、ただちよつと判をついたのであつた。それきり遠田は来なくなつたが、のんきな彼も忘れてしまった。だが、忘却とは忘れ去ることなりどころの話でない。弁護士の話だと遠田は一銭の利子も払わず、廿日ほど前にとうとう住居をくらまし

てしまった。その尻が彼に廻つてきたのである。

「ねえあなた、一体どうなるのよ？」

由紀は声をひそめてささやいた。

「押えに来たものはしかたないさ。なんとかなるよ」

平静を装つたが、絶望的な悔恨がひしひしと胸にせまつた。彼はだまつて、茶の間に入つた。

三人の男はわがもの顔に家じゆうを歩きまわつていた。小柄の執達吏がなにか言うのと、もう一人の男が手帳に書きとめている。タンス、ラジオ、由紀の衣類……。弁護士はさきに立つて、なに一つ見落すまいとしていた。父からもらつた大島圭介の貴重な軸も押えられた。

最後に書斎にはいつた。帰りそびれて度を失つてゐる伊藤京子にはおかまいなく、机、椅子、テーブル、安もののカーテンまでよみ上げられた。

「それから本だ。……ずいぶんありますね。……この本全部！」

高柳は凱歌をあげるようにさげんだ。壁の二面を掩つてゐる書物は、たしかにこの貧乏世帯の唯一の財産なのだ。章三郎は齒をかみしめた。そのとき由紀が泣き声を出した。

「本だけはやめて！　うちの商売道具ですから」

「商売道具？」と、おかしい言いかたに笑いながら、弁護士は由紀の姿をじろじろ眺めた。

「本は大工道具と違うんですよ奥さん。商売道具にはならないや」「いいえ、要るんです。だから、それだけはやめてください。おねがいですから……」

一座はしんとした。きらきら涙に光る由紀の眼を、執達吏はふり

かえつてじつとみつめた。彼は咳払いして、低い声で言つた。

「本は一々題名を書かなきゃならない。大変だよ」

「でも先生、やつてもらいましよう」

弁護士は頑張つた。

が、なんの返事もないのをみてとると、彼は急に態度をかえた。

「じゃ奥さん、こうしよう。本は助けてあげるから百円出しませんか。そうすれば……」

「なに」

それまで耐えていた怒りが爆発して、章三郎は前に進みでた。

「きさまは脅迫する気か」

「なにを言うんだね？」

「黙れ！　俺は人に欺されてこんな目に会つてゐるんだぞ。一銭だつて、きさまに頭を下げるおぼえはないんだ。百円出せとはなんだ」

「本を助けてくれというから百円で……」

「金の話をしちやいかん！」と執達吏がどなつた。

「ここで金銭の取引はゆるさない。……これだけの本を一々かいてる閑はないよ、君。わしは忙がしいんだから」

かれはそう言い切ると、書記に命じて、それまでの品目と査定金額を謄写用紙に書かせはじめた。

章三郎ははじめて執達吏というものを知つた。それは鬼どころかこの弁護士よりもずつと暖かい人間だつた。

一行がひきあげて、もとの書斎に戻つたとき、彼の眼についたのは、もじもじして視線のやり場に困つてゐるような伊藤京子の姿だつた。この女はどう思つただろう？　一冊本が出ただけで鬼の首でも取つたように気焰を上げていた大先生が、いまや青菜に塩とい

つた顔つきでぼんやり突立っているのを、きつと腹のなかで嘲笑しているにそういない。——ええ、勝手にしやがれ。

「腹が空いちやつた。おい、ソバでも食おうか」と彼は虚勢をはつた。

「失礼ですけど、借金はどのくらい？」

「ことわつとくが、僕がつくつたんじやないんですよ。千二百円だつてさ。一軒家が建つよね、ハハハ」

「あたん、お立て替えしましょうか」

そう言つて、京子はじつと男の顔を見上げた。

樂アレバ苦アリ

おどろくべきことに、この女はその翌日、金をもつてきた。

金は夫の了解の下にお貸しするのだという。章三郎がこれを返すには、急いで第二部を書き上げ、印税を前借して、虎ノ子のようにしてある三百六十円と足しても到底足りない。本が売れて版を重ねてくれるのを神だのみするしかない。つまり、なんら成算がないわけだ。だが京子はまるで年上のような言いかたをした。

「そんなご心配しなくてもいいんですの。いま私たちに差迫つた金じやなし、先生のお役に立てば結構だつて夫も言つてくれたんですから。それに、きつと御本も売れますわ」

「へえ、あるところにはあるもんだなあ！」

皮肉でなく、感嘆した。そして心から感激しながら、こゝども無邪気に、つつしんで借りてしまつた。

これが彼の子供っぽいところで、さきの保証で金の恐ろしさは身に沁みている筈なのに気がつかない。かりに伊東夫妻が好意をもつ

ているにしても、これほどの大金を貸すには夫が立ち会ふ筈だとう常識すら浮ばなかつた。貧乏のくせに鈍感なのだ。これは由紀もそうだつた。彼女は京子の親切に涙をこぼしてよろこんだが、便箋一枚の証文でやすやすと事が運んだのを疑おうとしなかつた。

「私たち、運がいいのねえ。それともあのひと、あなたに気があるんじゃない？」

「冗談じゃないよ。夫が承知して出した金だせ。第一、モーションもかけずにさきに金を出す奴はないよ。……いや、あるかもしれんな」
「いいわよ、もう。すぐしようんだからきらい！ それよか、いつ払うの？」

「競売は十日さきだから、ギリギリまでほつといてやろう。ひとの借金をすぐ払うなんて、あんまり癪にさわるよ」

「その原因はあなたよ。やつぱり私たち、いつまでたつても楽にならないのねえ」

由紀は溜息をついた。それから五日たつた夕方、伊東京子が玄関に立つていた。

もう夕飯の時刻で、章三郎は仕事に没頭していたが、今までの愛読者とちがつて救いの親であり債権者でもあるのだから、明日来てくれと言うわけにはいかない。さつそく茶ノ間に通して、食事の用意をたのんだ。

明るい電燈の下で向いあうと、いつもの彼女と様子が変つている。顔色は青いし、おどおどして落ちつきがない。いつも着てくる紫地に白の矢羽根のお召（彼女はキモノ一点ばりだつた）が、気のせいにか皺になつてゐる。

「どうしたんです？」

と訊ねると、待つていたようにわツと哭きだした。

おどろいて、由紀も台所からとびだしてきた。

「まあ、どうなすたの？」

「哭いてちやわからない。話してみなさい」

だが、京子は袖で顔をかくしたまま、いつそう激しくせぐりあげた。宥めすかしてやつと落ちつかせ、ぼつぼつ言葉を引き出してゆくうちにたいへんな話だということがわかった。

彼女の夫、伊東雄吉は東中野と阿佐ヶ谷に二軒も喫茶店をもっているが、彼女たちの家は中野にある。だから昼間は用がないので、留守番にあきると鷺宮くんだりまで遊びに来られるわけである。また、夫がいないので銀行の金も無断でおろそうと思えばできる。じつはこの間用立てた金も承諾を得ていないというのだ。

「なぜそんな、バカなうそをついたんです」

と、章三郎は少なからず興奮した。

「子供じやあるまいし、すぐ分ることじゃないか」

「あとで話すつもりだったのが、つい、見附かるまで言いそびれちゃつて……。私、先生ご一家があんな目に会うのを見ていられなかつたんです」

「同情は有難いですよ。だけど、そんな無茶をされちや困るなあ！」

「で、みつかつたんですね」

「え。それで、こちらの事件を説明して、あんまりお気の毒だからつい融通したと言つたらひどく怒りだして……」

「そりやあ、あたりまえだ。ご主人にすれば、みずしらずの僕に大金を貸す理由はないんですからね」

「そして、こちらの住所をどうしても教えろと言うんです」

「うん」

「主人はあんな店なんか経営しているのでひどく気が荒いし、もしや失礼な真似でもされたらたいへんだと思つて、私、ずいぶん頑張つたんですけど……」

口吃り乍ら語るところによると、京子はひどい折檻をうけた。殴つたり蹴つたりされた。それでも口を割らないでいると、隠す以上はその男と怪しいという理由で、二重に責められ、半殺しの目にあつた。それは一昨夜から初まり、昨日の朝まで続いた。昼ごろ店へ出かける時には、逃げるといけないと言つて、手足を縛り猿ぐつわをはめ、押入のふとんの間に押しこんで襖を釘づけにして出ていつた。夜かえつてきて引き出されたときは欲も得もなく、とうとう白状してしまつた。それでやつと許されたのだが、今日はこちらに廻ると言つていたので、いそいで知らせに上つた、というのである。

「死ぬ苦しみでしたわ。ほら、こんなに」

袖をまくつてみせた二の腕の瘦せた白い皮膚には、なにをどうしたのか、青い痣と火ぶくれのような傷があつて、それが電燈の光りで眼に泌みた。のぞきこんだ由紀は顔いろをかえて、眼をそむけた。

章三郎はだまつていた。沸々とかみあげてくる嫌悪と不快さをどうしようもなかつた。

自分たちのためにそんな目に会つたのだから、本来なら同情したり詫びたりすべきなのに、なぜかそういう感情が湧かないのだ。彼はじぶんがエゴイストなのかと思つてまごついた位だつた。しかしせつかく安心した金策がこれでフイになつたという極めて現実的な腹立たしさのほかに、この女が無知と言いたいほど安価な同情をし

たおかげでまたあたらしい災難を受けるといふ不愉快さや、まるで彼の責任みたいな残酷な話や、これみよがしに——そうではないのかもしれないが——見せつけられる傷痕などは、重苦しい気持ちで彼を押しつつんだ。なにか押しつけがましい心理的圧迫をかんずる。ことに、夫が気が荒くて心配だから注進に駆けつけたなどというのは、これも親切なのかもしれないが、いやな気がする。

「これじやお返しする外ないわ、ねえあなた」と、由紀が沈んだ声で言つた。

「わかつてるさ。借りろつたつて、借りられやしないよ」「すみません。かえつて、ご心配をおかけして……」

と、京子がまた涙ぐんだとき、玄関のドアがあいて、「御免、御免」と男の声がひびいた。

「あ、主人ですわ、どうしやうかしら？」

京子は顔いろを変えて中腰になる。章三郎はそれを眺めて、腹立たしげに両腕を組み、「どうするもないでしょう。来るといふお話なんだから。



「中央公論の

青白い虱

という小説に」

おい由紀お通ししろ」

と、いつになく乱暴な口をきいた。

青白い虱と京子

「夜分あがつて、失礼します」

片隅にちぢんでいる京子をじろりと見、結城夫婦を鋭い眼で一瞥してから、伊東雄吉と名乗る男は座布団にあぐらをかいた。革のジャンパーをきた大男で、顔も手もぶよぶよ肥っているが鬚はない。色も白くて、口唇もうすい。

「いろいろ女房がご厄介になつてゐるそうで……」

「用件に入りましたよう」と、章三郎はさえぎつた。「あの金、もつてこい！」

由紀が立つて次の間から二重封筒をもつてくるまで、だれも口をきかなかつた。章三郎はそれを受けとると、男の膝の前にさした。した。

「あなたの御承諾があつたと

「いう話で、お借りしたんですが、そうでないことが分つたので、お返し致します」

「ああ、そうですか」

ちよつと沈黙が落ちた。ふたりの男は睨みあつた。

「それだけですか？」

しばらくして、相手は言った。

「それだけです」

「私あこいう無教養な男だから伺いますがね」と、急に男は声をはりあげた。「うちの京子はどうしても、私に無断でこの金を貸す氣になつたんでしようね？」

「そいつは僕に訊いたつて分りませんね」

「分らない？ 分らないで、あんた、千二百円もの大金を平気で借りるのかね」

「こつちはあんたの承諾があると聞いたから借りたんです」

章三郎の声も荒くなつてきた。

「話がちがうから返すというんだ。それとも、利息が欲しいとでも言うのですか」

「なんだと」

男が片膝を立てたので、彼はとつさに拳を握つた。その腕にしがみついた由紀は声をひそめて必死に「やめて、お願い！」とささやいた。一方、京子は膝をにじりだして、金切り声を立てた。

「なに言い掛りつけるのよあんた！ いい加減にして頂戴」



な目に会つてやつたんじゃないの」

「ふうん、じゃあ、またあんな目に会わせてやろうか」

初夏のしづかな部屋は騒然となつた。由紀の手が幽かに震えているのが、章三郎の腕に伝わつた。それはまるで、離せば飛び立つてしまふ鳥のように、力いづばい彼の腕を握りしめているのだ。

だが、彼の心は引き緊まり、眼は燃えた。それは由紀の危惧とまつたく別のものを見ていた。この大男が本気で争う意志も口実もなくなつたことは見抜いている。それよりもつと重大なことが起つている。無意識のうちにかれは作家本能ともいうようなものに支配されていた。男の絡みかた、女の抗議、——さつき涙を流していたときと矛盾するその語気や、アクセントや、言葉のニュアンス。かれはひとつも見逃さなかつた。

「ようし、こいつ！」

幾度も猛り立ちながら、ときどき男は視線を配つた。が、章三郎がおなじ姿勢でじつと見つめているのを感じるたびに、女をのしる声は間が抜けてきた。とうとう彼は手を延ばして、ひよいと封筒

「お前はすつこんでろ」

「いやよ。だれが引込むもんですか。私が勝手にやつたんだつてこと、あれほど責めていわせたくせに、今さらなに、男らしくない！」

「そんなことを口にする、と、

一切合財、お前の責任だぜ」

「責任をかんじたから、あん

を拾った。それから一段と声高く、「米い、ちくしょう。帰つたらどうするか。お前の責任だと言つたな」ときけんで、手首をつかむと廊下にひきずりだした。「かえるから、はなしてよ」という京子の声と、もつれあう足音がした。

ドアがあき、足音が遠去かり、すべてが郊外の静寂に戻つたとき由紀はやつと手をはなした。

「京子さん、大丈夫かしら？」

最初の言葉がこれだつた。章三郎は返事のかわりにキスした。

「きつとまた、ひどい目に合うわよ」

「そうかもしれない」

「私たち、責任ないかしら」

「あるだろう」

「いや、そんなこと言つちや」

由紀は情ない声を出した。彼はほゝえんで、眼をつむつた。

「責任があるというのはべつの意味さ。僕は中央公論の『青白い風』という小説を思いだしたんだ」

「なあに、それ」

「二人の女を酒場で偽かせて、それを食い物にしてる男の話だよ、

一人は昼、一人は夜のつとめなんだ。名前は忘れちやつたが、ユリと登枝だつたかな。男はいまの奴みたいに色のなま白い大男で、郊

外の一軒家に三人で住んでるんだが、女たちの下着からズロースま

で洗濯するんだよ」

「いやあねえ」

「それでいて女を食いものにしてる。宵のうちにはユリの寝床に入

つていて、登枝が夜おそくかえつてくると、そつちの床にもぐりこ

む。その日のチツブの貰いが予定より少いと、折檻がはじまる。声を立てないように頭からふとんをかぶせ、尻を鞭で打つんだ。それで女たちのからだは生傷の絶間なしさ」

由紀は顔をしかめた。その表情を見落すまいとしながら、章三郎はつゝけた。

「逃げ出そうとしても、そうすればあとに残つたものは半殺しの目に会うから、決行できない。登枝はお人よしの女で、一度なじみの客と逃亡を企てたが、男の搜索のカンが鋭いのと、同輩のユリがどんな目に会つているかと思うと、たまらなくなつて戻つてくる。そして逃亡の罪で死ぬような折檻を受けるんだよ。ところが、こんどはユリの客で、もと彼女を愛したところのある暴力団みたいな男が、義憤をかんじて救い出してやると約束する。その手引を登枝にたのむんだ。かならず君も救い出しにゆくからと約束してね。そして自動車でその一軒家に取りつけ、大男を目茶目茶になぐりつけて家探しをする。そのとき、ユリは素ツ裸で縛り上げられ、猿ぐつわされて、押入のなかに入つていたんだ。男はユリを助けだし、待たせておいた自動車につて去つてしまふ。するとその晩ね」

「まだあるの？」

「まあ聞きたまえ。哀れな登枝は胸をとどろかせながら帰つてくるんだ。留守中にユリが助け出されたのを知っているから、男の怒りが怖いんだ。それで、同僚から借金して、うんとチツブを稼いだことにして、おすおすと男に渡すんだ。すると、男はゆつくりそれを勘定してしまひこんでから、ユリの行く先を知っているだろう、白状しろと責めにかゝる。折檻は一晩じゆうつづく。いつか自分も助けに来てくれると信じているから、さすがに登枝は白状しない。そ

して、薄れゆく意識のなかで、男が器用に傷の手当をするのを感じながら、ああ、明日からは夜も昼もこうして責められるのか、いつまで頑張り切れるだろうかと不安になつてゆくんだ」

「だれが書いたの？」

「細田源吉だつたかな、源吾だつたかもしれん」

「作者の名も忘れてるのに、ずいぶん内容はくわしいのね」と由紀は皮肉つた。「それが、どうだつていうのよ」

「つまり、伊東夫婦にはそういうところがある」

章三郎は妻の肩を抱いてひきよせた。彼女は素直にもたれかゝつた。

「細田の小説はもちろん青白い虱、女の血を吸つて生きる男の悪を描いたものだが、登枝が逃亡しては戻つてゆき、ひどい目に会うのを承知で足の家に向ける心理は、作者の意図を超えてべつたものを現わしている。そういう女と男の関係を君はどう思う？」

「私にはわからないわ。それに、……そういう男はぞつとするわ」

「よし」

彼は強く強く妻を抱いた。そして酔つたように口唇を押しつけた。

「僕の推測を言つてやろうか。京子はそういう女なんだ。そして、青白い虱があつた男だ。京子はあの男に苛められたために、僕らを利用したんだよ。千二百円を貸す意志なんかかつたのさ。ただ、そういう筋書をつくつて、興奮を楽しみたかつたんだ」

「だけど、まだ持つていたからいいようなものの、払つちやつたらどうなるの？」

「さあ、僕が返すまで、いつまでも口実がつづいたろう。そうなれ

ば千二百円も安いもんだよ。どうせ当分返せつこないからね」

「じゃ、損したわね」

ふたりは顔を見合せて、寂しく笑つた。

章三郎はこの話をしている間じゆう、妻の顔いろの反応に注意していた。それは、じぶんたちの遊びと「青白い虱」との間にどの位の距離があるかを知りたかつたからだ。度重なる遊戯の結果が、愛する妻を伊東京子のような女に追いこんでゆくとしたら、一切の夢は破れるだろう。なぜなら、あの腕の傷痕が示すように、刺戟の追求は度を越すにつれて、生きた人間像の価値を必要としなくなるからだ。刺戟をみたくしてくれさえすれば、青白い虱でも吸血鬼でもかまわない。縛る手がみにくかろうと、犯罪の血でよごれていようとおなじことになる。極端に言えば、自動鞭打機でこと足りるわけだ。

ひとかどの文学論を口にし、ツルゲネエフがどうの自然主義がこうのと語る伊東京子が、あの豚のような無頼漢と一緒にくらす秘密は解けた。愛や信頼や、感じたり考えたりすることに共通の地盤をもたないですむのは、彼女が性のよろこびをひろい生活から切りはなし、単なる刺戟、単なるテクニクとして求めているからだ。それがいかに悲劇かということ由紀に知らせるのが、章三郎の目的だつた。

章三郎と由紀はしずかに運命にしたがつた。競売はふたりの結婚記念日に行われた。裁判所の道具屋からそれを買戻すため、かれらは印税を全部はきだした。そしてまた平和な、相も変らぬ貧乏生活にもどつた。

特 集 告 白

責めの自画像

越 野 義 夫

（本誌昨年九月号所載の「責めの自画像」の
續きとして読んで頂ければ結構に存じます）

母はどちらかというと、古風な細面の顔立ちの淑やかで奇麗な人でした。身体は中肉より多少細い方でしたが、衣類などは余り厚着はしませんでしたので、殊更着ぼそつて見えませんでした。話は余談ですが責苦には、余り太った肉付の女より、やせ方の女が、よく耐えられるのではないでしょうか。

僕達母子は、その後一月程して、他国のN町に流れてゆきました。（母の両親は早く亡なり一人きりの兄も先年病死して誰も身寄りはありませんでした）そしてN町の町はずれの長屋の片隅を借りて、母は和裁の内職、僕は納豆売り、夕は豆新聞配りをして高等科へ通いました。然しその頃でも、一ヶ月六円

の家賃を払つて母子が細々ながらにでも生活してゆくのは、中々容易なことではなかつたのです。しらずしらずの中に家賃も三ヶ月程滞り、母の細腕の内職と僕の納豆売りや、新聞配りでは、口糊をしのいで行く事だけでも大変だつたのです。

僕達の長屋は、五軒長屋で屑やの藤さん、下駄の衛入れやの加助さんと、按摩の繁さん、子供達相手の駄菓子を売るお常婆さんと、孫娘のとし子ちゃん、それに僕達母子が住んでいましたが、大家さんは骨董屋の（六十五才位？）柿田元治郎と云う老人で、この長屋の住人達にも良く面倒を見てやり、昼間はとても良い好々爺なので僕などもよく可愛がつ

て貰いました。母も時折仕立物を頼まれては大家さんの家にも行きましたが、或る夜、仕立物を持つて行つた母は仲々帰つて来ませんでした。其の夜十一時半すぎになつて帰つて来た母は涙乍らに、僕の前に告白したのです。大家さんのこの老人は、二年程前老妻に先立たれてからというものは、耳の遠い勝手婆さんと二人きりの生活をしているのですが、僕達がこゝへ移つた時から母をねらつていたらしく、親切で情けのからめ手から母はついこの老人の前に、身体を提供する事を忍ばねばならなかつたのでした。然し、この哀れな母はどこまでも責苦のきづなから抜けられない運命にあつたのでしよう。この老人も空闊の悶えに加えて商売柄か、又その個性からか母にそれはそれは、ひどい折檻や責苦に会せるのです。

ある時、学校から近い所でしたが汽車での修学旅行がありました。僕は家の事を思い母には黙つて居りましたが、それで当日は学校に居残り自習をしていましたが、僕と同じ様な境遇の仲間二人と少し早い日に家へ帰りました。

すると土間に男物とすぐわかる大家さんの下駄が脱いであります。そして母も老人も姿



僕が今の今まで、肌身離さずに持っていた母の若き日の写真です。

が見えません。僕はすぐ察して外へ遊びに行こうとしました。と奥の部屋（と云つても二間しかない長屋ですが）の破れ襖の向うから母のむせぶ様にして泣く声がします。僕は驚いて、そつと足を忍ばせて其の襖の破れ目へ指を差し込んで片方の目をあてがつて中を見ました。どうでしょう、母は赤い燃える様な湯文字一枚で、ガン字ガラメにむつちりした乳房の上まで無残に縄をかけられ、乳房が縄に喰い込んで二つに割れています。両足も細引でギリギリ縛られて其の縄尻は、老人の左手にしつかり握られ、うち転つてゐるではあ

りませんか。

其の母の体に、四ツ五ツと何か黒い物がたかつています。僕は何んだろう、と思つてよく見つめますと、あつ！ネズミではありませんか。母の一番きらつてゐるネズミです。よく責絵や小説等では見ましたが、現実にこうしてネズミ責を見るのは始めてです。それが母の白い肌の上を、胸に腹にと自由のきかない女体を弄ぶ如くあちこちチュウチュウ鳴きながらかけ廻るのです。あの薄気味悪い動物が、真白い肌の上を自由に飛び廻るのです。母はその度に、ヒイヒイうめきながら自由の

きかない体をのた打たせて苦しんでいるのです。そのうち一匹のネズミが母の湯文字の跳けた膝頭にのりました。あの寒気のある動物の毛触りを、直接肌に感じて母は増々恐怖に悶え苦しみます。美しい顔を歪ませていた母はその時、ヒイと大きく泣き叫びました。この時僕は、思わず体に力が入つて襖を音立てゝしました。今迄、この責めの遊戯に堪能していた為に、僕の覗いていた事を知らなかつた老人は驚いて襖を開け恐い顔をしながら「何んだ見ていたのか義夫」と向うに行けと手を振ります。母の視線が、ちらつと僕を見ました。恥しそうな、苦悶に歪んだ美しい顔。すつかり母の姿を間近に見て老人の言葉も聞えぬ振りをして、そこに立ふさがりました。すると老人は急にニヤニヤ笑いを浮かべて

「何んだ義夫も、お母ちゃんがこないされるの好きか」

と云います。僕は黙つてコツクリしました。そうかそうかよしも入れそしてお母ちゃんを虐めるのを手伝うかと聞きます。それから二人して、又母をネズミ責めです。髪の毛の中に赤い湯文字の中に、さんざんネズミはかけ廻ります。僕はこうして虐められる母の

姿を見ていると、又たまらない衝動にかられました。それからと云うものは、老人は母を責める時は必らず僕に責めの手伝いをさせました。

長屋では、皆んな老人と僕達母子の事を知

つていましたが知らぬ振をしていま

した。が二日、三日と仕置を受ける

時は、前以て近所の人達に母子共、

郷里に行つて来ると云つて置き、夜

遅くなつてから母と僕は老人の家に

行きます。身寄り子供の無いこの老

人は、先に申しました如く耳の遠い

姿やと二人暮しで、母屋は店を加え

て三間、二階が二間、石堀で囲つた

庭が広く十坪程あり、池、築山、隅

に土蔵と釣瓶井戸があり、釣瓶井戸

のまわりは大きな、玉石を敷きつめ

て流れになつていました。

老人と老婆の二人暮しのせい、

この広い屋敷が気味悪く感じられま

した。或る晩、又も僕達母子は、こ

の家に連れ込まれた。早速僕に老人

は氷を買いに行けと云います。真冬

の木枯しの吹く中を、僕は氷を買い

に行きましたが、五貫目の氷なので

二回に運ばねばなりませんでした。身を切られる様な寒さです。帰つて見ると、もう母は燃える様な湯文字（お腰）一枚で、ギリギリに縛り上げられて敷きつめた釣瓶井戸の玉石の其の上に、引き据えられて、竹割れでビシ

ビシ打ち叩かれ縄尻は長く釣車を通して釣瓶井戸の鎖に結びついていました。

帰つて来た僕を見ると、老人はその氷を物置きの中に入れておけと云います。云われた通り僕は物置きの戸を開いて驚きました。物

置きの中は、木格子太く水牢になつて

いるのです。小さなクグリを開く

と、中はコンクリートで固めた二坪

程の水槽です。僕はその水槽の中に

氷を投げ込みました。母は散々に打

ち叩かれて、ヒイヒイ泣いて苦しみ

悶えています。僕がそばによると老

人はその釣瓶井戸の水を汲んで、母

にうちかけると云うのです。僕は力

リカリに氷りついた鎖をたぐつて、

桶に水を汲み上げます。井戸水とは

云え木枯し吹き荒ぶ庭で頭からザア

ザアかけるのです。髪から胸へ腹へ

と流れ落ちる水はすぐに氷ついてし

まいます。

老人はこの水をかける間も休みなく打ち叩くのです。それに片方の桶をたぐり上げる時は、まだ良いので

すが、その反対の桶をたぐり上げる時は、縄尻がひかれて母の体は後に



引張られて、玉石の上にとりと打ち転びます。そこへ水と割竹が情け容赦なくとぶのでした。このお仕置きが済むと縄尻をとられて、引かれていく先は、先程氷を投げ入れたあの物置きです。針を射す様な膝まである水牢の中に投げ込まれて、縄尻を木格子に結びつきます。初めの中は格子に体をもたせて立つていますが、散々の責苦にたえられなくなつてヨロヨロと体が崩れて、赤い湯文字一枚の体はその針の様な、中に打ち倒れてしまうのです。水槽の中に捕われた人魚が赤い湯文字をゆらゆらと藻の様にまとわせて、まるで地獄の錦絵の様です。絵や写真で見る様なあんな大仕掛けなのではありませんが、石抱きの責めにも遇いました。雪の庭の晒の仕置きにも遇いました。

(父や小母さんに責められた時を、思えばこの老人の責め等は、子供の遊戯的サディズムに過ぎない様なものですが)それでも降り積つた雪の中に、湯文字一枚の裸身を打ち叩かれて、責められればさぞ辛かつた事と思ひます。又老人は其の他に、いろいろ変つた責め苦を考へては母の体に加えました。だから母の白い肌は、いつも細引の喰い込んだ痕と、赤紫の蚯蚓腫れが痛々しく残つて、銭湯などには行かれませんでした。

或る時は、老人の命令で例の如く赤い湯文字一枚の母を縛り上げさせて、そして老人は母の白い肌をつくつく見ながらにつこり笑うのです。母は荒い息を吐き悶えるのを老人は何んとも云えない衝動にかられるのでしよう。僕はこんな自虐的な役目もつとめました。然し、どうかして内心は早く自立して、母を僕一人で独占して責めの上にも、一人占めがしたかつたのです。だから僕が高等科を卒業すると、間もなくこのN町を去りました。

そしてM県のK市に移り住む事にしたのでした。僕は或る商事会社の給仕として勤めに出ることになりました。この頃から、母とは別に僕は腹巻に対する異常な、欲望が燃え広がって行つたのです。これは、稿を別にして申述べることにします。

○四月号

口絵 サークス責め

龍鷹子・画

新吉原さらし 伊藤晴雨・画

美しい小馬の囃売り 外国誌より

強達・ベットの縛られる

學殺 群亭数久・画

龍鷹子画集 美容体操・縛責め

松葉責め

都築峰子画集 奇妙な曲芸師

外国の縛り写真・腰を下す女・これで行くの・鞭打つ女と馬になる男・高小手・二態・さるくつわの掛け方・柱しほり・引廻し・残酷なる女性達・捕物の舞

台写真

論稿 縛をめぐる随想 久留木 栄

告白 被虐少年期 三根 耕二

告 私切腹の記 古川 裕子

通信 願書通信 岸田 映子

記 長煙管のノスタルジア 由利 瑞江

手 初めと縛られて 西 貞雄

休 ドレイ・ボーイ 村田 那美子

海外サディズム雑誌 川端 多奈子

女性切腹断想 長谷川 洋

蘭雲博士の回想 吾妻 新

マゾヒストツクな境地についての座談 田谷 敬生

特別寄稿 絵は芸術品なり 辻村 隆

爛れた花 伊藤 晴雨

スカタロジという語について 川合 伊都子

変態美論 沼 正三

或る同性愛者の告白 鬼山 紬

切腹研究夜話 小田 雅春

○五月号

口絵 棒杭を用いた縛り方

龍鷹子・画

安房の北向き地蔵 伊藤晴雨・画

女性の切腹幻想四態 群亭数久

アメリカンスタイルの責め 群亭数久・画

戯文 黒髪 群亭数久・画

都築峰子画集 奈落の戯夢

龍鷹子画集 土蔵

群亭数久画集 通り魔

車を轢くボニー(小馬)

後手足首縛りと一本縄・床柱・後手縛りの二態・足舐め・犬奴早く歩かないか・人間馬・靴の裏

少年切腹の夢 三根 耕二

奴隷加虐 溝口 龍夫

或る同性愛者の告白 小田 雅春

変態美論(二) 鬼山 紬

二百字歌 真砂 十四郎

軍作家 淡 美一郎

海外サディズム雑誌(二) 吾妻 新

ダイアナ夫人の憧れ 重田 貴代子

統一・女装への憧れ 中谷 正和

M.S.・ブレイ 林田 真樹

半公刑 吉野 朝夫

元憲兵の手記 北野 幸雄

北国湯場哀話 妻木 満三郎

変性男子の告白 菅野 悠三郎

私の悦楽ノート 菅野 悠三郎

眼帯に憑かれて 菅野 悠三郎

終りなき敗北 菅野 悠三郎

京子の浮ぶくろ 菅野 悠三郎

昭和二十七年十月号より昭和二十九年五月号まで若干在庫、二十七年度の分は一部送共九十円、二十八年以降の分は一部送共百円にて急送申し上げます。

臍窩への省察

特
集
告
白

私の女体偏執記録



須藤律夫

私には昨年十二月号の奇クの発刊が例月のそれよりも、とても待遠しいものだつた。それは多山皓氏の「お臍の魅力」を前月号の予告で知っていたからである。

誌上同氏は「私のこういうお臍偏執は極めて変つたケースだと自任しているが、然し奇クの数多い愛読者の中には私と同じ趣味の人もきつと居られる事と思う」と述べているが確かに同氏の言われる様に、私もその一人に違いない。行脚のコースに多少の相違こそあれ、私の女体偏執、臍窩への執着も仲々に根強く、然も現在も猶激しいものがある。

前記「お臍の魅力」を読んで、私には感じられる様々の事があつたけれど、就中同氏の中学生時代（昭和十一年頃の様）に記されている）よりのお臍を求めての遍歴、そしてその歎びと労苦こそ私には身につまされて切実に感じられるのだつた。私のアブな遍歴に就いては奇クの昨年六月号より四回に亘り「我が告白の断章」と題して拙文を連ねているが（勿論その中にも片鱗を窺わせてはいるのだが）私は努めて重複を避け、多山氏とよく似た回想の絲を手繰つて見度い。

私がお臍に興味を持ち始めたのも軌を十つにして矢張り小学校を卒える頃からであつた

時代にして大正十五年頃、従つて多山氏とは約十年の時代の隔たりがある。私も同じ様にその頃は別段異性の臍とのみ限つた事もなく銭湯等で機会ある毎に、千差万別のお臍を眺めたり、或は年少の男の子のお臍の穴へ指を入れて撥つたり、或はゴマを取つて泣かせたり等して秘かに自分の慾望を充していた。ペドフィリアとでも言うのだろうか、そうした経験は實際数が多かつた。

考えて見るとそんな時代が約三、四年も続いて十七、八の頃からは次第に異性の臍窩に魅きつけられて行く様になりそれと同時に私のお臍に対する好みも判つきりとした輪廓をとる様になつて行つた。お臍の容姿には実に様々なものがある。恰度各人の指紋にも似て色とりとくであり、又臍紋こそは永久不変、然も万人不同の説すらあるのだ。或る人はお臍の容姿を大別して次の十種類に別けている即ち――

- (一)、大きな深い臍。
- (二)、小さな深い臍。
- (三)、大きな浅い臍。
- (四)、小さな浅い臍。
- (五)、円形のもの。
- (六)、縦長のもの。

- (七)、横長のもの。
- (八)、正面を向いたもの。
- (九)、上を向いたもの。
- (十)、下を向いたもの。

尤も以上の中お臍の穴の深い、浅いは腹壁に於ける皮下脂肪の沈着が大いに関係するのだが、多年の研究により私には強ちそのみとも考えられない。免に角私の好みに合つたお臍――それは円い又は縦長のグツと奥深く引つ込んだお臍である。殊にゴマを含んだ真黒な深いお臍など見ると私は堪らない衝動に駆られるのだ。従つて其の頃からは出臍は勿論の事、平べつたいお臍や、小さな疵跡の様な恰で有るか無しかのお臍、或は浅い下向きのお臍など見ても私には何の感興も湧かないのだつた。

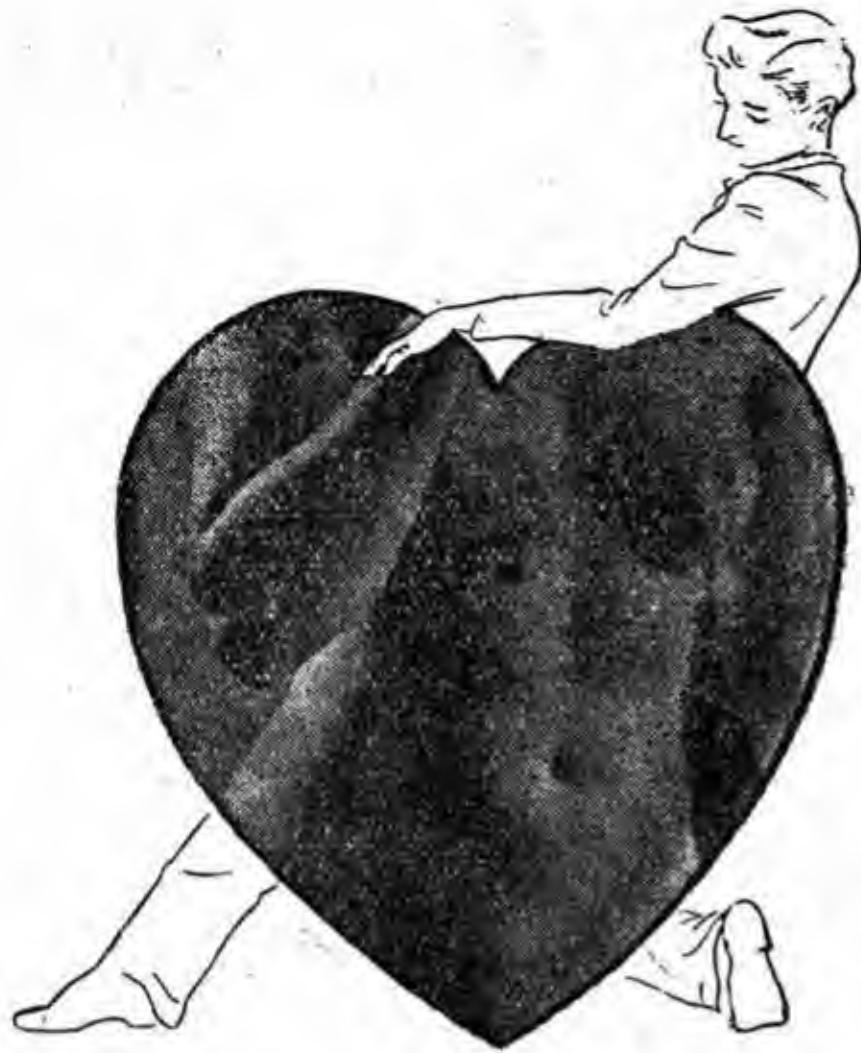
現在と違つて「ストリップショウ」などいつての外のその頃、たとえ映画にしる女性の臍等見られる機会はどうざらには無く、私が初めて見たのは確かフランスのレビュー映画「ダンス・パリ」だつた様に記憶している私はその宣伝スチールを毎日の様に映画館の前に見に行つたし、又映画誌の切り抜きやその映画のプロマイド、プログラム等現在も猶アルバムに納められ、書架の一隅に置かれ

ている。

然し何と言つても映画には実演程の迫真力が無い、そんな訳で、昭和九年三月一日より東京丸ノ内日本劇場で公開されたアメリカの本格的レビュー「マーカス・ショウ」等、公開を待ち兼ねた私は小躍りして見に行つたものである。百余名の金髪人魚、陸の龍宮に乱舞跳躍！ そんな看板が掲げられていたが、免に角世界四大ショウの一つだけあつて元氣潑潑たる金髪美人のお臍！ お臍！ お臍！ 私は充分に堪能させられるのだつた。

中でもシルバーゴツドデス（全裸の女性が全身に銀色の塗料を施して踊る）等現在では別に珍らしくもないが、その頃としては斬新なものゝ一つであつた。又踊り子の中で一人恰度盃をお腹に飲め込んだ様な大きな漏斗状に深く窪んだお臍が今も私の脳裡に刻まれている。

アメリカの裸レビューはその後も浅草大勝館、新宿の某劇場（パラマウント・ショウ）だつた様に憶えている。等々五、六回見る機会に恵まれたが、ストリップ全盛の現在とは比較にならぬ程僅かの機会でしかなかった。私の一風変つた偏執は、然し飽くところを知らず――と言うよりもそれは私の本能であつた



のであろう——少しも絶ゆる事なく、或は温泉に、角力場に、夏は海水浴場にと、私は憑かれたものの様に、暗き臍窩への幻想を追つて行つた。それと並行して絵画、写真、文芸等お臍に関する能う限りの蒐集趣味も続けられ、現在では相当の蔵書、アルバム等も集められている。

又私のこの趣味も段々と濃度を加え、たまさか女体に接する機会があると、私は何時も彼女のお臍を探ぐるのだつた。私の今迄の経

験では、然しそう好みに合つたお臍ばかりには巡り合わさない。率から言えば五人に一人乃至十人に一人位のものであろうか、黒々とゴマを溜めた深いお臍に巡り合つた時こそ、私は無上の法悦境に溺れ込むのだつた。それは何故だろう？ 私は時々自問して見る事がある。

そしてその回答は？茲で私は又一つの告白をしなければならぬ。否、告白と言つては少し大袈裟かも知れぬけれど私の偽りなき卒直な述懐なのだ。想い出すのは二十八年四月号奇ク所載、信太蓉子氏の「開花の契機」の事など、そしてその中の描写に次の一章がある。

——両掌でなめらかなお腹を撫ぜ廻してから三宝の上の腹切刀を右手に確かりと握りしめ、そして切尖をお臍の上にピッタリと当てがいます。ひんやりと冷たい切尖の素敵な感触、左手を添え、稍前屈みの姿勢で刀をゆるやかに突込みます

始はチク／＼と痛みを感じますがその中にお臍がジーンと痺れるような気持、スタンドの赤い豆電球がお餅のようなお腹をくまなく照してあります。切尖に押されて私のお臍はその周りに皺が寄る程、きゆうと深く窪んで仕舞います——（後略原文のまゝ）

嗚呼！固く引き緊つてグツと奥深く窪んだお臍を見ると私は何時もこの蓉子さんの行つたと同じ様な状景を想い浮べるのだ。正直に言つて私も切腹マニヤの一人なのだろう（この点奇ク二十九年四月号に於ける中康弘通氏の私の事を述べられた御意見に同感である）免に角この二つのものは私の倒錯の世界に於ける限り確乎たる連繫を保っている。円く窪んだお臍は美しい、然しそれは単なる私の審美慾の為めばかりではないであろう。そして臍窩に刃を突込んだと仮定するならば真黒なお臍のゴマこそ噴き出でる血汐にも擬せられるのだ。そんな事が私をこそケルパーフェティシズムス？ ならしめ、涯知れぬ女体遍歴の旅をさせるのかも知れない。

妖しくも戦く私の女体遍歴の回想、その中でも終生忘れ得ぬ二、三の想い出がある。それは自分の錯倒した慾求を心から満足させて呉れる対象に巡り合つた時、本能の命ずる儘に

網膜に映し、指頭に探ぐる感触、それ故にこそ印象は永く消え去らぬのかも知れぬ。そして東神奈川の或る街で、時は何年か前の仲秋名月の前夜だった。先輩に連れられて初めて花柳の巷に誘われた、私は偶然にも自分の瞬時も忘れ得なかつた女体に巡り合つたのだ。

彼女の名はK子、年令はその頃、廿歳位だったろうか。淑やかな、然し明るい物腰、お椀を伏せたような両の乳房、海棠の蕾を想わせる様な二つの乳暈、鮮やかな陰桃色の乳頭は何か堪らない郷愁を誘うのだった。

——随分立派なお乳だね——

——えゝみんないゝお乳だつて言うわよ——

K子は上眼使いにこぼれる様に微笑むのだった。眼を走らせれば乳房からの柔らかな曲線は美しいカーブを描いてお臍の穴に注がれふくよかな皮下脂肪の漲つたその腹部はこんもりと息吹いて、皮下脂肪に包まれたそのお臍は深く窪んでいる。何時か私の指先は臍窩に滑り込んでいるのだった。

——余り奥の方に入れないでね——

恥らい乍ら彼女が言う。一寸深過ぎてお臍の奥迄はよく見えないけれど暫く探ぐつていた私の指先に連れてポロリと転り出た黒いゴマ、それにすら激しい愛着を感じるコブロー

グニーの私なのだ。

——あら駄目よ、入れて置かなけりや、お臍のゴマを取るとお腹が痛くなるのよ——

K子は、そのゴマを取り上げてお臍の中へ詰め込む。

——大丈夫だよ、そんな事述信なんだよ、それはね——

腹部の皮上脂肪組織の中、臍の周囲は沈着も豊富で殊に婦人の場合はそれが著しい。之に反して臍は皮下脂肪組織を持たない（臍窩の存する所以である）従つて臍輪、及び臍乳頭などに刺戟を与えると局部的な腹膜炎を起す事がある。私は簡単に以上の理由を説明するのだった。

——でも貴男変つてらつしやるわね、之が病で田舎へ帰れないんじゃないの——

憶えば多形倒錯の多い幼年期から何時とはなく中性期を経て成年期へ。——本来正常なるフイルター性器統裁の濾過器にかけらる可きを、その儘、異状性慾に溺れつゝ然もその為めに何の劣等感をも感じまいと強いて努めている私である。そればかりではない。性格的にも大きなハンディを担う身は、人一倍のエネルギーを必要とするのではないだろうかともすれば陥り易い灰色の劣等感を克服して

社会構成の一員として生きる為めに、より良き向上の生活を続ける為めに。——

お臍の魅力は、然し私にとつて大きかつた。K子との逢瀬は私の時間と経済との許す限り続けられて、私はその街に度々通うのだった。何時しか足も遠のき、約六年を経た或る秋の夜、私が横浜転任を機として訪ねた時には、既にいなかった。聞く処によれば風の如くに流れて行つたK子、私には忘れ得ぬ一人である。

幾山河越えさり行かば寂しさの

はてなむ国ぞ今日も旅ゆく

この牧水の歌の様に私の倒錯した女体の歴訪は続けられて行つたが日支事変の進展と共に世情は大きく変転。殊に太平洋戦争に入るや物心両面に於ける様々の枠は次第にせめられて、時には個人の自由すらも失われ勝ちになつた。そんな初夏の或る一日、一枚の薄桃色の紙片が舞い込んだ、召集令状である。慌しい幾日かの後、私は横須賀海兵団の門を潜つた。

其処で激しい訓練の後兵課も決り、旬日余りを経て神奈川県戸塚のK部隊に配属され、更に烈しい教練と厳しい罰則とが与えられた恰度横浜の大空襲があつた頃である。毎朝五

時の「総員起し」そして朝礼、けれどその後で行われる海軍体操が私には楽しいもの、一つと交つて行くのだった。見渡す限り緑に燃ゆる山野と、風吹けば砂塵を吹き上げる兵営、無味と単調との生活の中にあつて海軍体操こそは私に仄かな喜びを感じさせて呉れたのである。

心身の爽快、勿論それもあつたけれどそれよりも演台に立つ若い教官の肉体に、私の心は強く魅かされて行くのだった。彼は二十四五歳位だつたらうか、身長五尺五、六寸位声量も豊富であり、語尾の抑揚には快い厳しさが潜んでいた。上半身裸体となると若手の関取を想わせる様な美事な肉体、こんもりと盛り上つた双つの乳頭は心持桜色を帯びて餅肌とも言おうか、ほんとうに軍人には相応

重ねて高橋鉄氏に

沼 正三

本誌四月号に於て私は高橋鉄氏に対し、その「scatology」なる語について教示を乞うた。これにつき、氏は「週刊タイムス」四月四日号「性科学講座」において触れておられる。何しろ私の文を読まないで書いたと称するしるもので、真面目な教示、返答とも受取れな

しくない位美しい裸身だつた。殊に私が最も魅かされたのは躍動につれて見え隠れする彼の美しいお臍である。最前列の私の目の前、而も咫尺の間に、円くして大きい深くくびれた彼のお臍が跳躍する。男でも惚れくすると言う言葉があるけれど、海兵団以来異性の姿には全然接せず無味乾燥な環境にあつた私そして真面にお臍の穴を見せられるより隠見して見せられる方が、何故か私には却つて蠱惑的に感じられるのだつた。

切、戸塚での生活もそう長くはなく、旬日余りで再び岐阜県下へ転勤、そして三転して三重県下の或る僻村で私はあの忘れ難い終戦の日を迎えたのである。もうその頃は勝敗の帰趨も殆んど決定的なものであつたし、広島長崎の両県下に投下された所謂新型爆弾なる

ものは少からず国民の士気を喪失させたかに見えるのだつた。そうした渾沌とした世情の中を私達海軍O部隊は残務整理に専念、私もトラツクに揺られて、龜山、四日市、桑名、名古屋、一ノ宮等々と廻つて歩き、愛知県瀬戸市の近く挙母の町に着いた時にはもうくたくに疲れていた。

久方振りに町の旅館に投じ入浴の後の浅酌それ迄張り詰めていた長い間の緊張は、終戦と共に跡方もなく消え失せて、兵の誰もが解放された様な自由さと、然し何処か絶望的な空虚さを持つていた。微醺を帯びて誘われる儘、戦友と共に訪れた町はずれの紅燈の灯火、その夜は又懐しい女体への郷愁に咽んだのである。

(未完)

いが、その文の終りに、「まずまずこんな次第である」などと得意そうに書かれているので、これで四月号の私の文に答えたつもりになられては迷惑だから、氏の文を読まなかつた読者にその論旨を紹介する意味も兼ねて、こゝに簡単に取上げておく。

氏の文の要旨はこうである

(1)この頃の刊行物「発禁」の報道には誤りが多い。

(2)然し奇ク四月号の発禁は確実である。

(3)だから氏自身は私(沼)の文を読まず、人から聞いただけである。

(4)人から聞いたところでは、私の文の要旨は氏の「scatology」という語の誤綴を指摘しているだけである。

(5)ブルケの著書の独訳が右の綴りの点を証するため引用されている。

(6)然し氏の友人なる万能語学者の調査によれば J.B. Bourke は米人で、右の書は原タイトルは「Scatalogic Rites of All Nations」

であることが分つた。

(7)私の調べた辞書は中学生用のものなのだろう。その程度の辞書には *scatology* という語や、*scatology* という語の排泄物狂崇という意味は載せられていないのだ。

右の各段に一言宛で答える。(1)は正しい(2)は誤りである。(3)は疑わしい。(4)は曲解である。(5)も誤りである。(6)は正しい。(7)は何のことも分らない。

もう少し詳しく答えよう。氏の論は(4)を前提としている。しかし四月号の文を読んだら分るように、私は、*scatology* が *scatology* のつもりで使われたのであれば、人の認めぬ異綴で誤りであることを指摘しつゝも、エリスの用語なる点を顧慮して、「もし氏が、エリスの用いた綴りであるからと抗弁されるならば、その点は深く追求しまし」と断つた上「この語に排泄物狂崇の意味があるだろうか」と問うたのであり、後段においては、誤綴であるよりはむしろ新造語であろうとして、氏に教示を乞うたのである。それを単に誤綴の点のみに拘泥するもののようにいうのは故意に曲解しているのである。

(5)はその曲解の上に立つ。私は独訳で読んだだけだから独訳を引用したが、それは綴りを示すためではなく、スカトロジョーという語の意味、用法を示すためであり、そのためには定評ある独訳で充分用は足りる。(6)を氏は鬼の首を取ったようにいわれるが、この書名はエリスの「性象徴」(引用書はすべて原タイトルが掲げられている)中に類出するもので、エリスを一読した人は誰でも知っている。万能語学者(一)からの通信をまつて始めてこの英語のタイトルを知ったといわれる氏は、性学

者でありながらエリスの基礎的な著書さえ通読してないことが図らずも語るに落ちたわけだ、バカなことをいわれたものよと氏に對し気の毒でもあり、いささか滑稽でもある。このタイトルは「汚物に關係する儀式」という程の意で、四月号の文で示した研究社新英和の訳語の中、民俗学的意味にあたるものである。尚フロイトはこの書名を *Scatologic Rites* と書いている。

(7)に至つては何のことも分らない。倉大なる N・E・D が中学生用の辞書だというのは氏一流の「放言」として聞き流すことにしても氏自身が *scatology* を *scatology* の異綴と主張しているのか、全然別の普通辞書にない高級学術語と主張しているのかが曖昧である。*scatology* という語を示すなり、*scatology* に狂崇の意味を与えるなりした大学生用の辞書があるのなら、後学の者として是非その詳しい書名を伺いたい。文献の明示は四月号でもお願いしたことである。

私は四月号の文ではこの語について氏と一見よく似た用法をしている著書をわざと伏せておいた(例えばウィリーの「娼業」)。そういう文献を氏が捜し出して私を論駁されることをこそ期待していた。それによつて氏がこの語を用いるに當つてどの程度に学問的手統を履まれたかも分ると思つたからである。ところが氏は結局私の問には答えることをせず、論旨を曲解して的外れの矢を射たに止まつた。

四月号の文を読んだ人には明白だ。氏も気がひけたかして、この曲解を讀者に對して尤もらしくするために、(3)の理由を持ち出した四月号を自分は読んでいないというのである。そしてそれを更に尤もらしくするために(2)の

理由を持ち出した。四月号は発禁になつたからというのだ。しかもこの(2)の理由を信じさせるために長々と(1)の事情を書いている。手の込んだやり方だ。成程誤報が多いのは事実である。現に四月号が発禁になつたと一部の新聞には誤報された。しかし誤報が多いのをさんざん嘆いたあとで、さて「そのK誌がこれこそ事実間違ひなく発禁になつてしまつた」と氏が書く時、事情を知らぬ人がこれを読めば「そこまで誤報に敏感な人が断言する以上は本當に発禁だつたのだらう」と信じるに違ひない。氏一流の錯覚的文章だ。ところがこれは全くのウソで、本誌四月号に對しては何等の刑事的処分もなされなかつた。店頭には姿を見せなくなつたのは押収されたからではなく、売切れたからだ。注文すれば入手できた。読むことができた。だから私には(3)が信じられないのである。邪推はしたくないが(2)のようなウソの理由で類冠りされると、さでは正面切つての返答ができないので、読んではないと逃げるために発禁の事実を虚構したのではないか、と疑いたくなるのである。

だが、読んでないという人に、いや読んだらうと争つても水掛論だ。それよりも私は、四月号の一冊を氏宛に直接郵送するように奇ク編集部にお願ひすることにしよう。そうすれば、もし氏が本當に発禁を誤信し、私の文を読んでおられなかつたとしても、氏の良心は「K誌四月号発禁の記述は誤りでした」と訂正を謹告すると同時に、私の問に對する正しい教示を改めて与えられることであらう。その時には *scatology* という語の出ている大学生用辞書の名前も教えて戴けるらしいので私は甚だ期待している。

まずまずこんな次第である。

あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第五十五 手 紙 (その四)

親愛なる奥様！ 女主人さま！ 私は貴女に飼養されたいと夢想する一匹の醜い黒犬です。

私はシエルシエル（註、北アフリカの仏領土アルジェリの地名）に商人の子として生まれました。私は学校で教育も受け、友達の多くが長じてフランス人に使役される勞務者になるしかかった時、父は莫大な遺産を私に残して呉れ、私は今日まで自由にやつて参りました。然し、奥様、私は果して同胞よりも幸福なのでしようか。私の暗色の皮膚は、私達アルジェリ人が貧富を問わず、その皮膚の故に白き皮膚の人々に隷属すべきことを教えてないでしようか。私は皮膚にふさわしい地位にいますのでしようか。いいえ！

私は富裕の家に生れたことを後悔しています、何故なら、もし貧しければ私はもつと私にふさわしい地位にもつと早くから就き得たでしようから。私の今迄の人生は虚妄でした。私は自分にふさわし

い人生として、あるフランス女性の奴隷となる途を選びました。私はこの新しい人生を生きたいと思っています。そして（そのフランス女性とは）それは貴女なのです。奥様、私の体内に潜む暗色の奴隷の血を湧き立たせ、今迄の人生を捨てようと決心させた貴女なのです。半年前のある朝、ダノワ（註、グレートデン犬）を綱で牽きつつ公園を散策する麗人を見かけた時、私の人生に一の天啓が訪れました。私はアルジェリ人の本来の使命は支配者なる白き皮膚の人々に仕えることにあるのだと悟り、特に私個人の使命は彼女に仕えることにあるのだと悟りました。けれども私の地位と私の臆病とは、以来毎朝彼女とダノワ（あゝ私は彼を羨んでおります！）とを見ながら、今日まで私を躊躇させて来たのです。

もうこれ以上私には我慢ができません！ 彼女の威厳ある眼、ぼら色の頬、金色の髪、きやしやな手、そしてダノワに命令して指図される時の口調、彼女の一切のものをもつと私は身近かに感じない

では、生きておられません！ 私は躊躇を捨てて私の正しい生き方に入るべく決心しました。奥様、私は敢て貴女に「愛しています」と告白します、そして私を犬のように受け入れて欲しいとお願いいたします。

奥様、私は矮人です、そして醜い侏儒^{ボス}なのです。這えばダノワより大きくない位です。私は彼よりずっと醜い黒犬に過ぎません。私は世の中の誰よりも深く、秘書官殿よりももっと、貴女を愛しています。しかし私は自分が貴女の前にダノワ以上のものでないことを知っていますから、彼以上のことは敢て望みません。貴女から軽蔑され嘲弄されるのであつても、私には嬉しいのです、軽蔑も嘲弄も無関心より優つています。私は貴女の一切を身近に感じ、貴女を愛するために、貴女の前に現れるので、貴女から愛されるためではないのです。私はモデストに対するビュツチャア（註、バルザックの「モデスト・ミニヨン」に出てくる矮人。いづれ紹介しよう）のように、女主人から軽蔑されつつ彼女に献身的に奉仕する使命と衝動を感じるのです。

奥様、私の夢想の中では、貴女はブレフエート総督夫人として豪華なサロンで長椅子^{カネ}に倚つて客人達と歓談してらつしやいます。その足許には右にダノワが臥せ、左に私が跪いているのです。私は奥様以外の誰からも馬鹿にされたいと思いません。然し、もし貴女がそれを望まれるなら、私は甘んじて皆様の玩具（*souffire-douleur*）となり、道化た仕種で皆様を笑わせましょう。そして私が余計な口をきいて、貴女から「お黙り、奴隷！」と足蹴の一撃で御注意を蒙ります時には、天にも上る心地で、その御足を抱擁するでしょう。「黒い侏儒」（*Black Dwarf*）は貴女のサロンの名物として評判

になり、彼を持つことは貴女の名を高めるでしょう。

彼は貴女の名を高めるでしょう。彼は貴女の愛に値いしません。彼はそれを期待していません。然し、もし貴女が彼の矮小な身体がどの位ダノワよりも人間に近いかに興味を持つて、彼を愛するからでなく、只気紛れから、彼を玩んで慰もうとなさるのでしたら、それも御意のまゝであります。私は「チユニス風」に貴女を喜ばせることができます。私は決して貴女を不義にお誘いするものではありません。不義^{アドルター}とは男たる愛人^{オム}を愛することです。ところが私は、男（人間）でなく犬なのです。私は愛されることを求めず、貴女の愛人でないのです。私との関係を生じて、それは不義ではありません。貴女はダノワを愛されるように私を愛することができ、又私はそれだけを卑しげにお願いするのです。「ダノワに許されるだけのことを私にもお許し下さい」と。

黒い侏儒は貴女に幸福をもたらすでしょう。彼は貴女は贈物をしようとし、貴女がその贈物をお受け下さることを望んでいます。貴女の最も忠実なる犬として

（署 名）

×

×

×

侏儒の手紙ともいえるので前項との関係で、こゝに出したこの手紙は、一寸珍らしいものである。今迄の独文のは皆職業的女主人に宛てたものだが、本項のは仏文で、あるアルジェリ人が着任後半年度の総督府の秘書官の新妻に宛てたもの。一種の恋文^{ラブ・レター}ともいえるが、空想的部分を含め全体を貫く自己卑下の色彩は、「マゾヒストの手紙」として珍重するに足る。一九一〇年代に書かれ、フレーネルの「性の周辺」中に紹介されている。



原文は句切りが短く、特有語法がなく、一寸朝鮮人の日本語といった感じの文章で訳し易い。「黒い侏儒」は英語になつてるので、スコットの同名の小説の主人公を指すのかと思うが、読んでないので確言できない。「チュニス風」とは性技の一種であろうが、具体的内容は分らない。御存じの方は教示されたい。

この手紙の筆者の自己卑下は三つの理由から来ている。第一に娼婦たる職業的女主人公に宛てられる場合と異り、真の恋愛に基くのであるから、恋人に対して自分を卑小に感じる通常の恋愛心理も一

役買つてゐることは確かである。然し、これは、本来ノーマルなものだからここでは省略する。あとの二つは体格と皮膚の色である。次項に述べるように、この男は實際矮小なアルジェリ人であつたのだ。

矮人に生れて見なければ本当に分らぬが、身体の小さいということが劣等感を持つ契機たることは当然である。かりに才能によつて常人に互し、進んでリードする地位にゆけるとしても、感情生活はどこかひねくれているのが多い、という趣旨のことをアドラーがいつている。そしてもし環境に恵まれていると、常人と競争する苦勞が少い代り、人格形成はそれだけ強靱さを欠き、劣等感はそのまゝ弱点として残る。これがマゾヒズムの媒体になることは比較的容易なのではないかと考えられる。この点は矮人以外の不具畸形でも似たような事情があろう。読者中この点に資料を提供できるお気の毒な資格ある方があつたら、御意見を聞かして欲しいと思う。

皮膚の色の方は私にもよく分る。私の「白人崇拜症」(手帳第二十四)の概念は日本人について立てたものだが一般に、この手紙の場合のように植民地人に起りうる。理由は簡単だ。被支配者は支配者に対してマゾヒスティックになるものであり、ならざるを得ないものである。ところで十九世紀末アフリカの分割によつて、世界中の土地が残りになく「本国」か「植民地」かに分類され終つた時、前者の住民は殆んど白人種であり、後者のそれは全部有色人種であつた。後者にとつては支配者に対するマゾヒズムとは白人種に対するマゾヒズムと全く同義であつた。これが白人崇拜となつた。(だから白人及び白人文明の世界制覇前には白人崇拜などは問題にならな

い。)皮膚の色はこの際支配被支配の象徴なのである。中国人のよ

うに中華意識の強い民族に少いのもそれから説明できよう。

この場合圧制が著るしいほどの効果が上る。アルジェリーに対するフランスの圧制はイギリスの印度に対するものに劣らなかつた住民の二、三人が盗みをしたため一村全部虐殺したり（一八三一年ロヴィゴー侯爵）、無辜の良民五百人を洞穴に追込んで、穴の口で火を焚かせ皆蒸焼きにして鬻殺したり（一八四五年、ブリシエー將軍）、てんで土民を人間扱いにしてなかつたのである。フランス人全体にその気持がある。ルブランのアルセーヌ・ルパンは絶対人間を殺さない、ヒューマニストの俠盜として描かれ、フランスの大衆の人気者だ。ところが「虎の牙」であつたか、彼がアルジェリ土人を何人も殺すところがある。このフランス人にはアルジェリ土人は人間として考えられないから平生の主義とは何の矛盾もないわけなのだ。（乱歩はこゝを利用して、「黄金仮面」実はルパンに日本人を殺させている）。そういう植民地的サディズムがマゾヒストを生み出す（手帖第二十六項の末尾参照）。支配者から人間として取扱われない被支配者の中からは、進んで支配者の意を迎えて自ら人間であることを放棄しようとする畜生志願者が出現することにもなるのだ。

最後に、この手紙のもう一つの特色は、良家の女性に宛てられたものであること。これは昭和二七年六月号の本誌に「人間便所の妄想狂」者N君の手紙を紹介された二宮忠一氏もその解説で書かれた通り、ごく珍らしい。勿論実際には職業的女主人に宛てられる以上の数が花形スターや名流夫人に宛てて書かれているのであろうが、多くは闇に葬られ、文献として載せられる機会が少い。この手紙は次項に迷えるように警察沙汰になつたため、その内容が学者の手に入

る機会を得たのである。

附記。歌手や女優の所へ、使用済みの鼻紙でもいいから送つて欲しいなどという手紙が来るといふことをよく聞くし、右に解れたN君の手紙の例などもあり、彼女等の所にはいわゆるマゾヒストの手紙が相当数行くのではないかと思われる。学問的にも意味のあるものだから、捨てずにまとめて何かに発表してくれる奇特なスターはいないものか。本人の宣伝にもなる事だが。

第五十六 人間は動物である。

フレイネルの伝えるところによる、前項の手紙を受けた秘書官夫人はこれを夫に見せ、彼は一読してこれは妻に不義をすすめているというので、警察に連絡して男を逮捕させた、男は手紙に住所氏名を書いて来ていたのである。逮捕が簡単すぎるようだが、これはアルジェリ人相手だからかと思う。捕えられたのは市で屈指のアルジェリ人の豪商で、年齢二十八才、家族はなく、^{ボス}侏儒ではなかつたが、たしかに矮人というに近い醜い小男であつた。

取調べに対して、彼は手紙が本心に基くこと、不義云々も決して自分からどうこうするつもりでなく、自分のすべてを彼女の決定に任ねるといふ気持であつた書いたと弁疏した。秘書官は醜い彼の姿を見、彼が自分の夫の地位を脅かす心配の全くないことを知ると、彼を釈放させたばかりか、彼が妻に対して持つ盲目的な崇愛を可哀想に思つて、自分の家庭への出入りをも許してやつた。男は深く感謝した。

彼は間もなく手紙の最後の一節を実行した。これが面白いのである。西洋では夫婦は別々の財産を持つのが原則であることは多くの

諸君もご存知であろう。この男は自分の全財産をこの夫人に贈与したのだ。唯負担附贈与

(donatio sub modo) といつ

て、贈与を受けた方が一定の行

為をする義務を負うのだつた。

公証人の所で彼はこういつた。

「自分は年に何がしの利子を生む何がしの財産をもっている。

もし彼女がそれを拒まぬならば

私はその全部を何某夫人に贈与

したい。贈与を受けて貰う際の

自分の唯一の条件は、後に自分

が指定する一匹の動物を彼女が

引き取つて、それが死ぬまで飼

養し、且つそれを仕込んで彼女

の役に立たせること、それだけ

である。その飼養は並の程度又

はそれ以下でよく、贈与財産か

ら生ずる利子のほんの一部で足

りる筈である……。」

彼女は拒まなかつた。夫も拒

まなかつた(よく分らないが、妻が受ける贈与を夫が拒みうる規定

があるのであろう。)証書が作られた。平凡な勤め人(植民地の官



K.S.

更だから威張つていたろうが)

の妻に過ぎなかつた秘書官夫人

は、思いがけずこの富豪の全財

産を譲り受けて、俄か分限の夢

に酔つた。夫も勿論勤めをやめ

ただろう。今は百万長者夫妻だ

さて、一年余り経て、事業を

すつかり整理し終つたアルジエ

リ人は右の一匹の動物として自

分自身を指定したのだ。さあそ

こで騒ぎになつた。飼養すると

か仕込むとかいつてる以上当然

家畜 (animal domestique)

のことで、それを単に動物

(animal) といつてゐるに過ぎな

いと思つてたこの夫妻は仰天し

た。フレーネルは、この指定行

為は有効であるという説。指定

行為は無効であつて、男が有効

な指定をやりなおすだけのこと

贈与は依然有効という説。指定

行為の無効のみならず贈与自体

の無効になつてしまふという説

し、諸君にも興味がないであらうから省略することにし、結論だけ

いうと、結局この夫人はこの男を「動物」として引取ることを承知し、承知させられたのであつた。人間も亦動物の一種であるというわけだ。dog (禽獣) という語と異つて animal は人間をも含むものとして使われるときが多いこと、贈与の時の負担の意味から要するに、死ぬまでこの男の衣食住を見てやればよいので、家畜という点に強いて拘泥して無効としなくてもよいことなどが理由となつたようである。

フレーネルはこの男が自らを畜生として指定した心理を探究して本来始めから自分自身の扶養を条件として贈与したかつたろうが、それでは拒絶されるかも知れない、そこで一旦贈与を受けとつてしまつて、金満家としての意識を生じてからは容易に返還する気になれないという心理を利用して、とにかく受けとつて貰うために家畜の飼養のように見せかけたのであらうと説明している。これは一つの見方ではあるが、前項の手紙などから見ても、私はやはり自分を畜生とすること自体に相当目的があつたのではないかと見たい。殊に動物であるとして契約に従つて飼養され(訓練され)る場合のマゾヒスティックなスリルと、人間として扶養される場合のそれとは実際の給与はかりに同様であつたとしても心理的には格段の相違でなければならぬ。

動物としては引取られて後、男がこの夫人から果してどのような取扱われたか、これについてはフレーネルは何の語る所もない。日本人の意識からは、男は大恩人であるから、一生大切に扶養すべきであると思えるが、夫婦も別産といった割り切つた法意識の持主たる西欧人であつて見れば、果してどうだらうか。贈与された以上、その財産をどう使うかは全く彼女の勝手である。男が元の持主だか

らといつて一文も恵んでやる義理はない。条件通り家畜並に「飼養」さえしてやればよい。それがいやなら初めから「扶養」を条件にすればよかつたのだ。「彼女の役に立つものに仕込む」というのも、恩人意識という不純物を除けば、嚴重に履行してよい——いや履行すべきなのである。

結局この男にどのような運命を蒙らせるかは、女主人たる人の思ひのまゝなのであるから、私達はそれをいろいろに空想して見るこゝとができる。私のその空想は、しかし、今ここで書いては長くもなるし、又本項のフレーネルの学問的報告の意義を曇らせる恐れがあるから、ここでは割愛しよう。

百万長者として楽に暮せる一生を自分から棒に振つて奴畜になり下つた痴人と見れば人は彼を嘲笑し嘲笑するだらう。しかし空想を空想で終らせず、容易に送り難い珍らしい人生体験へ臆せず勇び込んでいつた非凡な人と見ることだつて出来るのだ。愛する女性に全財産を捧げた彼こそ本当に財産を有意義に使う方法を知つていたとはいえないか。自己の死命を制する権力を愛人に与えるのが、献身的な愛情の極致であるとすれば、裸一貫になつて引取られることを辞さなかつたこの男こそその極致を味つた類稀れな人ではないか。というべきではないか。

それにしても世の中は広いものである。正に小説よりも「奇」なこういう人生を送る人が時々出てくるのだから。

〔次号〕

五十七「デュボン博士とその妻」

五十八、日の丸ズロース、五十九、肉台盤

懸賞【告白と手記と体験】入選

佳作

屍 夫 人

木 村 美 智 子



私の夫は工学士の技術者で、或る鉱山会社
につとめていましたが、たま／＼坑内での勤

務中、落盤のために不慮の殉職を遂げまし
た。昭和二十七年の春で、夫は三十九歳、
私は三十四歳の時の出来事でした。

子供はありません。亡夫は常々子供を望
んでいましたが私の我儘から、いずれ其の
内にと押しやつて、十二年の夫婦生活をい
となみながら遂に一子も儲けずに、人生、親
子の情愛を知らさなかつた事は亡夫に対し
て、かえすがえすも相すまなく思っており
ます。

会社から思いもよらぬ大金を支給され、
それに生命保険の契約金まで受けましたの
で、現在の私は生活に困っておりません。世
間の大部分が気の毒な暮しをしていられるの

に、子供もない未亡人一人には勿体ない位の
生活を送つて居ります。

私は意地つ張りで我儘者なので、未亡人になつたからといって夫の郷里に行つたり、実家に戻つたりして、日蔭者のような生活はしたくありませんし、また親類や知人のいるところは何かとうるさいので、適当な時期に社宅を引き払つて現在のY市郊外に小さな借家を見つけて引越しました。

金があると言つたところで限りがあることですし、坐して喰らえば山をも空しとの諺にあることです。第一何もせずにく／＼して暮すのは良心にとがめますし、世間体にも感心出来ないので鶏を飼うことにしました。ま

だ娘の頃、実家の父が養鶏をやつていましたので私も見知り聞き知りで、まんざら自信がないわけではありませんでした。

家の裏手の菜園の一部を潰して小さな鶏舎を作り、三十羽の白色レグホンの雛を飼いました。白い可愛い鶏の友達が出来ると、一変した生活の中に新しい希望が湧いて、孤り者の暗い淋しい気持ちなどいさゝかも感じることなく、閑を得ては好きな絵など描いてつましいながら平和な日々を送るようになりました。

丹精の甲斐があつてか、其の年の秋も深くなる頃にはすっかり成鶏に成長して玉子を生むようになりました。めんどりばかりの無精卵です。私は鶏の世話をしながら、いつしかおんどりの居ない彼女達が可哀想になつて来ました。それで立派な堂々たるおんどりを一羽買つて彼女達に一夫多妻の花婿を配してやることにしたのです。

それから朝毎鶏舎をあけるとおんどりは勢よく彼女達を追い廻します。或るめんどりは逃げて逃げて逃げ廻りながらもやつぱり身を捧げ、或るめんどりはモーシヨンをかけられるとすぐにうずくまつてしまいます。にわとりにも好き好みがあるらしく、一番とさかの

赤いめんどりが頻繁に餌食となりました。おんどりは精力旺盛で疲れる事なく、こけこつこうと満足の歌を歌います。私は鶏の生態を見るのが何よりも面白くて其の有様を注意深く観察する事を怠りませんでした。

或る時こんなことがありました。一羽のめんどりが病氣になつてとさかの色も褪せはてゝ首を縮めたまゝ、歩くことも出来ずに目をつぶつて、餌にもつかず水も飲まずに弱つて立ち上る力もなくうずくまつたまゝ首をたれています。それで私は、仲間のもの達と別にしてやろうと思つて此の鶏を抱いて行こうとしましたら、おんどりが逆毛を立てゝ猛然と私に襲いかゝるのでした。私は怖わかつたので、牝鶏をその場へ置くとおんどりは、またもや重態の牝鶏に襲いかゝつたので其のまゝ目を閉じ、口をあけたまゝ死んでしまいました。無惨な牝鶏の最期でしたが、私にはおんどりの加虐が何だか私自身に加えられたような不思議な氣になつて息のつまる思いがしたのでした。

その夜、私は夢を見ました。おんどりが燃えるような眼を見はつて私にせまつてくるのです。逃げようとし、一生懸命になるのですが、どうしたことか、身がすくんで動けませ

ん。私が思わず泣き声をあげると其の声で目がさめました。

私はおんどりを恐れながらも、そんな夢を見ると言うのは、心の隅でそのような被虐的な行為を無意識のうちに望んでいたからでしょうか？

亡夫との十二年間の夫婦生活は、子供こそ生まなかつたけれども、思えば満ち足りた生活でした。夫に死別してからは、これから自分一人で生きるのだと言う精神の緊張もあつた為か、性のなやみをおぼえたこともなかつたのに、あんな夢を見てからというものには急に女の本能が萌え出して押えることが出来なくなりました。

自分のことを言うのはおかしいですが、私は幾分小柄ながらも日本人には珍らしい位、均整のとれた引き緊つた体で殊に臀部に魅力のあるスタイルだと自負しています。容貌だつて一寸垢抜けしていて自惚れではありませんが、いさゝか自信もあります。それに子供を生んでいない為か年齢より、はるかに若く見えるのです。つまり、そんな女らしさに富む女の一人暮らしを、好色な男達が見逃すわけがありませんでした。移り住んで長くもありませんのに色々と誘惑の手が差し延られまし

たが私はそんな手に乗ることなく、或る時は柳に風と受け流し、或る時は断乎とダムダム弾を喰らわせました。私は一生一人で暮す決心でもなければ、再婚を望んでもいません。信頼するに足る男性に愛情が湧けばいざ知らず、そんな男が現れない限り、性のけ口だけの器械にすぎない男などは考えてもみませんでした。それでも一人の生活の淋しさに耐え難い時は、一人ひそかにそれなりの夢を求めはしましたが、これは境遇上致し方ないことだと思っています。

鶏舎の後の小溝境に隣りの家があつて、私と同年配位の紳士が独身で住んでいます。奥さんに先きだたれて三年になるけれども未だ再婚もせずに、たつた一人で暮しているのです。Sと言つて日曜日など会社の休みには小溝を飛び越えて鶏を見に来ます。おだやかな気品のある紳士で私は好感を持つておりました。玉子を生むようになってから、このSは玉子を買つて帰ることも度々です。

其の年も暮れて昭和二十八年、亡夫の一周忌の供養をすませた頃には、Sと私はもうたゞの隣り同志の間ではなくなり、二人は映画にも連れだつて行けば一緒においしいものを食べにも行きました。こうして二人の仲は急

速に接近してしまつたのです。

Sの男世帯がわびしいものであつたので、つい私はそれを見てはいられなくなり、家は別々でありましたけれども家族のようにならざるをえませんでした。Sは私の家に食事に來ます。又彼の身の廻りは万事私が世話をし、二人は未だ体の関係こそありませんが夫婦同様でありました。

Sは私のお尻の形を愛しました。ナイヤガラと言う映画を見てから、マリリン・モンローの様にお尻を振つて歩けと注文しましたので、出来るだけそのような歩き方をして彼を喜ばせました。

五月の風がザボンの花の匂いを吹き送る、或る晩餐の時、二人は僅なウイスキーにそこ



はかたない酔をおぼえて私は彼と結婚の約束をしてしまいました。

私はその夜、彼から異様な告白を聞いたのでした。

彼が語るのを聞くと次の様なことでした。彼は子供の頃、飼つてある鶏がお尻をぶる／＼と顫わせるのを見ると何とも言えぬ異様な気持を抱いたというのです。

長じて人並みに異性を妄想しましたが、それはふくよかな女のお尻の魅力であつたのです。彼は町を歩いていても電車の中でも、それが美人であるか否かよりも後からお尻の形を鑑賞して、きりりと吊りあがつた大きなお尻でも見つけることがあれば、何処までもついて行つて悩ましき思いをしたのだそうです。大学に入つてから悪友に誘われて、売笑婦の居るところで遊びました。相手の女は、みどりと言う大柄な女でもり／＼とした偉大なお尻の持主でした。

それ以来彼は度々この女に通いましたが、彼女は彼に好意を示して（或は好奇心から）こんなお客様は珍らしいと、言いました。

間もなくそれから事情あつてみどりは他国に去るというので、彼女は一人の婦人を紹介しました。素人で年増ではありますが、万事話してあるので、遠慮はいらないと言うのです。そこはごみ／＼した裏町の日当りの悪い二階で、暗い電燈の下にやつれてはいますが目の澄んだ色の白い四十歳前後の婦人で内職の袋はりの手をやすめて彼を迎えました。

彼は、この小母さんが余り美しいので恥かしくてもじ／＼していましたが、小母さんは如才なく話をしかけてくれました。みどりが

彼の趣味を何でも話しているとみえて、小母さんは自ら進んでお尻を見せたのでした。上品な中肉の白い大きなお尻です。彼はその時年増ではあるがそこに何んともいえない風情を覚えました。

この小母さんは身よりのない未亡人で、紙袋を作つて極貧の暮しをしていました。

彼は小母さんに学費の大部分を入れあげたので、彼女の生活はいくらか楽になり、同時に今までと違つて、ほんのりとお化粧をするようになつて別人の様に、いき／＼と美しさが増してきました。この婦人とは二ヶ年近く親しくして彼は大学を卒業したのですが、職を得て任地に去るため、とう／＼別れてしまいました。

学生服を脱いで新調の背広を着て会社づとめがはじまると、待つていたのは結婚の問題でした。彼のようなアブノーマルな性格の持主に正常な結婚が出来るでしょうか？ 彼は言を左右にして結婚を避けることにつとめました。だが、どうせ結婚するなら何としてもお尻の魅力ある婦人を、選らばねばならないと懸命になりやつとこれならと言う婦人が、郷里の小学校の先生に見つかつて、結婚式を挙げたのは彼が二十八才の時でした。

花嫁は彼の求めに驚きはしましたが、従順に言うことをききました。だから妻とは言え処女であつたのです。子供が生れる道理もなく不幸な妻はかりそめの病を得て世を去つてしまいました。

私はSのこの様な話を聞いて嘆息しましたが、

「良いのよ、私を自由にして」と言つてしまいました。

私は生まれて初めて不思議な気持ちを知りました。慣れるに従い度を重ねる毎に、工夫をこらして今では二人共その喜びを分け合つています。

二人はこのような奇怪な肉体関係を一年続けて昭和二十九年の春を迎えました。Sは三十五歳で私は三十六歳です。

二人の間は精神的にも肉体的にも愈々睦み深くなつて、もう離れるにも離れることの出来ない仲になつてしまつて居るのです。

こうした二人が正式に結婚式を挙げるのは五月の予定でお互に希望をもち続けております。

特 集 告 白

女性の鼻及鼻腔

の美に就て

眞鍋 四十六

(一)

自分の書いたものが活字になる、という事は仲々嬉しいことです。ただ活字になつたという喜びに加えて主観の客観化という意味に於て、私は貴誌の三月号に小生の駄文を掲載せられた好意を感謝し、併せて読者各位の御批判を願つてやまないものです。

同好の士、特に女性側に於ける同じ傾向の

人にて是非知己を得たいと望んでいます。小生はすでに四十六才の中老でありますから、決して若い人と言うのではなく、むしろ年令なごに關係のない人間と人間との気の合つた趣味の交わりを得たいと思つております。くだらぬ前書きが長くなりましたが、三月号に掲載されたことに自信を得て、更に小論を詳しく述べさして戴こうと思つて筆をとりました次第です。

尚三月号に記載した主題を左記に摘出して置きましょう。

一、女性の美貌の主なる要素はその鼻、特に鼻腔の美しさに存する。

二、その実証は欧米の映画、流行誌の写真に明示され、やゝ上向きの形よい鼻及び鼻の穴とかるく開かれた口唇は美貌の標準であり、その意味においては日本の女性は殆んど及第し難い。

三、例えば、ロレッタ・ヤング、ロザリンド・ラツセル、エリザベス・テイラー、日本では僅かに京マチ子。(これ等の人の鼻の穴は素晴らしい)

四、次に鼻、鼻腔の美に対する評価は、進んでそれに触れ、それをもて遊ぼうとする。美しい上向けにした鼻の穴を露呈せしめようとする。この事が動的慾望へと転化する。この転化の第一要素は、手を触れようとする慾望即ち所有慾望である。

五、前項に触れた転化の第二要素は、鼻に集中している性的神経の知覚作用である。(谷崎「痴人の愛」参照)

(二)

次に掲載した写真のモデル獲得並に写真



撮影の経緯に就て申述べます。それは「モデル獲得」「顔のみの撮影」「鼻を上向けさせハリツケでの撮影」「同じくそのままの全裸写真」「全裸緊縛」漸次六ヶ月にわたつて私の、実現して来た経験記録を以下その順序に述べてまいりたいと思います。

この女性は大阪北の、キャバレーEのステイチ・ダンサーでした。折に触れこのEに入っているうちに、この子の鼻と鼻の穴の美しさに私は強く心をひかれ、毎日の様に通い続けているうち、思い返せば、二十八年の四

月私は偶然にも、この女性と個人的に話をする機会をつかんだのでした。

それは同じEにいたダンサーが、小さなバアを経営する様な身上になり案外客筋もよかつた。もちろん私はそんな事は知らなかつたがEの帰りがけに酔を味う意味でその店に入っていた。すると突然

ドアを開けて入つて来たのがまぎれもなく、彼女だつたのです。私はどんなに驚喜したことでしよう。マダムの紹介に依つて、二、三の冗談を交し彼女の舞台を絶讃して、私は極力この彼女に信用を得る為に努力しました。

言い忘れましたが、私は四十六才の会社員、課長をつとめながら例のサイド・ワークと云うやつで、月収約五万円の中級サラリーマンであります。唯暫く外国生活をしたこともあり、独身主義を以つて自任、思想的には、スチルナア、ニイチエの系列に属するという点

で少し、普通の人々と異つていというだけです。ともかく四十六才という年令では確かに若い女性達にとつては興味もうすいだろし、又他方に於いてはそれ故に、安心感もあるようでありました。

「気のおけない小父さん。」

という言葉に私は全力を尽して気持に合う様に努めた精か、最初のこの機会は成功に終り、その後二、三回同じこのバアで顔を合せています。

ある日の事、私は彼女の顔について美しいと評価の言葉を与えてから、彼女に写真を撮らして貰う快諾を得るに到りました。期待に胸を躍らせて友人の写真屋で行いました。五月の半ば頃のことです。明るいライトの下で、しかも近く、私の讚美して止まない彼女の鼻の穴を、心ゆく迄眺めることの出来た喜びは今も、到底忘れることが出来ません。私は充分に注意して、最初は普通に正面から——だん／＼に顔を仰向かせ、ライトの下からあて、鼻の穴が黒々と見える形の撮影に移行して行つた訳です。そしてこの時私の驚喜した事実、上向きにされて下から撮される事を意識した彼女の瞳は、一種の甘い感情に走りつつある事を認めたことであります。

第一回はこの程度に終り、かねて用意してあつた観劇の席へ彼女を案内し、夜のキヤバレ―出演時刻迄、私は接待にこれつとめました。私はその間に女性の鼻の美について、彼女の誇るべき鼻を力説したことは勿論です。鼻、鼻腔、そして上向きに開いた唇、この一連の美に、最も彼女の理解を早めるのに役立つたのは、映画雑誌の外国女優のポートレートでした。試みに、有名なマリリン・モンローを始めイット・ウムフ、ビン・アツプと呼称される性的魅力女優の写真を手にとつて御覧下さい。その十中八迄はやゝ上向きで、しかも唇はひらいた角度からうつされていきます。彼女は漸く私の美的感覚を理解し始めました。そしてとうとう第二回目の撮影を自宅で行う事にしました。私の家は阪神間の住宅地に坪三十ばかりの小住宅を持つており、老夫婦に世話をさせて気楽な独身生活をしておりますので、こうした条件には誠に都合なのです。六月の初旬で私の心は子供の様に、はずんで居りました。お茶を出したり、果物等をすゝめて彼女の気持をやわらげてから、私はお化粧する様に命じました。濃くひいた眉とくに、口紅をきつくぬる事はこの場合、更に興味を大きくする要件があるのです。二、

三枚は例に依つて上向けにした顔を下からのぞく角度でとり、それから私はいろ／＼と細工をほどこす事を申し出ました。

細工というのは、ビニールのテープを用い（勿論透明）約四寸（鼻からヒタイ迄）の長さで切り、次にガーゼで鼻の先端と穴と穴の中央部、それからヒタイの中央の白粉をよくとる様に努力しました。こうしないとテープがつかないからで、私はこの行為に対して、猛烈な衝動を与えずにはおられません。彼女の息が少し変調を起して鼻の先、鼻腔のあたりに私のガーゼが触れ、ゆるくこすりあげる度に、何とも云えないなやましい感覚を起し始めてくるのです。実に私にとつては年来の願望で全く夢の様でした。

これ迄に何度か、特に海外生活をしていた頃、私は勿論こうした経験を多くやつて来ましたが、今の様に純粹にとり上げ而も、理想的に実現したのは今が始めてでした。そう思うと自分も年の老いた事を自覚します。

白粉と油をとり、いろ／＼なテープを用います。一端を鼻の頭に越して鼻腔の中間位迄持つて行き、ゆつくりと鼻にハリツケるのです。二本の指でテープの上から、二つ鼻の穴を下からつまみしばらく押えつけることに

よつて、ようやくテープははりつきます。次に他の一端をヒタイに、はるのですが私は先ずほんの少し、ビンとヒツパル程度にかるくはりつけます。二つの穴は正面に上唇は、少しつり上つて白い歯が見える様になります。この時の私の心中は快感に満ちあふれて居りました。こうしてあらゆる角度から、五、六枚とり

「もう少し引張り上げてもいいでしょう。痛ければ痛いといつて下さい。」

と私はおだやかに云いながら、一端をはずして除々に強くあげました。すると彼女の鼻は思いきり上にあがり、形のよい鼻の穴が見え、口唇は勿論きつく引き上つて真白い歯並びが、否応なく現れました。そして眉と眉との間にしわが生じ眼のふちの皮膚はタルンで、一種の倦怠感を示し、そうして瞳は何とも形容し難い屈辱感をたたえるに到りました。

この時の写真が掲載のものであります。それから後半ケ年の間にわたつて、全裸、緊縛と考へ及ぶ限り撮影して来ましたが、その記録は次の機会に申述べたいと思います。

（終り）



稚兒兵士幹部候補生

——特集告白——

龍田 信 二

するウラ山が聳え、コンドル、メリケン、両ラマ廟を除けば一望千里の大平原で、殊に西の方は、はるか地平線をなしている。

辺境と云われる蒙疆の中でも、可なり辺鄙な所で、五、六軒づゝ固つて散在している民家の中心に周囲二キロの城壁に囲まれた城がぽつんと点在しているばかりである。其処が私の初年兵として、入営した中隊になっていた。

此処には以前は、蒙古の貴族が住んでいたのであるが、日本軍に接収され、兵隊が貴族部落と呼んでいる城の、直ぐ隣りの民家に移つて行つた。普通の民家は所謂、土色をした粗末な土造りの小屋だが、貴族部

落だけは白壁になつていた。城の周囲には戦車壕が掘られ、その外側五十米位には鉄条網が縦横に張りめぐらされ、表門の前だけにちやうど日本の城の大手の様な通路があり、表門横の城壁の上には望楼が聳えていた。

私の入隊した昭和二十年の正月頃は、昼でも零下二十度より昇る事はなく、夜明け前には零下三十度位にまで降つた。見渡す限り土色というより、むしろ灰色一色。水を汲むにも湯を沸して井戸に流し、釣瓶の入る程の穴をこしらえて、汲み上げねばならない。又燐寸が極度に不足して、煙草は自由にのむ事が出来ないばかりでなく、ストーブは朝の点呼までに、焚いておかねばならぬ初年兵にとつては、仲々ゆつくり煙草をのむ時間もなかつた。これが毎日の事であるだけに随分つ

フチャカトウ——これは、北京から出てくる京包線の終点、即ち包頭よりトラックで、三時間位かかる奥地の部落名である。ゴビの急渾の入口で黄河に臨み、後方には雲母を産

らしい思いをした。

小便は放尿して地に着くか、着かぬうちに氷柱となり、便所掃除には湯を持つて行く事が常識になつていた。大便是寒さの為に痔になる者が多くて週に数回しか行かぬ有様で、風呂に至つては月に二回。水汲みが困難なため、洗面も毎日洗う事が出来なくなり、清潔好きの私には最初耐えられなかつたが、次第に慢性化して行つた。

四月に入ると、日中やつと零度近くにのぼり、暖くなり始めると、その速さは又格別で此処彼処に、緑の草木が目映える。その頃には名物の黄塵が視界もさえぎるようになる。冬の内は川も凍つてゐるから、野も川も区別なく演習には都合がよいのであるが、春になると川は流れ始め、畑には農作物が繁つてくるから仲々やりにくくなる。

尚、寒い冬の間に大便を鶴嘴でおこし、箆で畑に運んでおくのであるが、その為便所は何時でも分解し、組立てる様になつてゐます。その糞塊が解けて農作物や農夫にはよいのであるが、臭気は大したものである。

初年兵も一期の教育が終り、私は幹部候補生に合格する事が出来た。ちょうどその頃、部隊が中支に移動することになり、行先に落

ち付いてからでなければ、集合教育が出来ないので、それまで中隊におらねばならなくなつた。

中隊内部の再編成、数十名の転属、移動準備等に約一ヶ月も費やした。中隊幹部転属者以外は、実にのどかな日々であつた。

その頃、蒙疆には日本の航空兵力はなく、従つて敵機も滅多に襲撃することはなくなつた。

私の班長は応召前は、小学校の先生をしてゐた人で初年兵には、何くれとよく面倒を見て呉れた。特に私には格別だつたらしい。というのはある会食の後、班長は私だけを舎外に連れ出した事があつた。月は皓々と照り、城壁上の動哨が下げてゐる銃剣が、きらきらと光る。兵舎には使用してゐない空屋の、建物の中へ導いて行つた班長は、障子の破れ目から洩れくる月光を背に受けて、

「龍田、お前何か淋しい事があるのか？」

「いや、ありません。」

「本当にないか？」

「はい」

「わしが見るのに何かあると思うね。」

「……………」

「お前、他の初年兵に除け者に、されている

のと違うか」

「いや、そんなことはありません。」

「おい、そんなに固くなる事はない。お前がよくやれば、それだけ他の者は面白くないんだ。」

班長は私を、土台に坐らすと、自分もその横に腰を掛けた。

「しかし、他の初年兵がお前に冷たくとも、わしは、お前の味方だぞ。」

「はい。」

「わしはお前が、好きでたまらないんだ。」私は班長のその言葉を、聞いてから次第に気分が楽になつて来た。私は生れつき、色は浅黒いが、入営してすぐに撮つた写真を見た人の殆んどが、陸幼の生徒の様だといつた。入営後、演芸大会の時、女装して二等をとつた。その時すれ違つた老婆は全然、兵隊さんだと思わなかつたといつたくらいだ。しかし柔弱というのではなく、剣道は二段、甲幹を中心とした技術部隊（将校、下士官）の剣道大会の折に有段者五名（最高三段）もいるのに優勝した事があつた。

「実はどうも他の者と、気が合わなくて困つて居ります。」

「やはりそうか、古兵には努力しても同輩に

まで手が廻らぬのだなあ。」

「はい」

文科を卒業して、甲幹に合格した私は、集合教育を受けて帰ってくる時は、将校だといふ前途が同年兵の嫉妬を、招くらしく事々に皆から辛らく当られていたのは事実だった。

班長の片腕は何時しか、私の肩を抱き、他の腕で体を引き寄せた。

間もなくその班長が指揮班に移り、部隊の移動も間近かに迫った或る夜。その時もやはり会食の後だった。私が便所の帰途、ばつたりと班長に出会った。指揮班は二人づつの部屋で、生憎他の人が、包頭に出張中の事として班長は大胆であつた。未だ食べていなかった夕食を私に進めた。空腹だった私は、夢中で食事をたいらげた。その間、酒の相当廻つた班長の眼はするどく私の一挙一動を、じつと凝視している様であつた。

「龍田、お前Sで知っているか？」

「いや存じません。」

私は班長の眼を窺いながら返事をした。

「うん、そんな事はどうでもよいが、もう少し経てば、お前は、集合教育に行くが、帰つて来る時は将校だなあ。」

「はあ。」

「いやだいやだ。さあ、今晚は此処で寝よ。今日こそは帰さないぞ。」

班長は立ち上ると、上衣袴を脱ぎ始めた。

私は指揮班には関係がないが、仕方なく布団を敷いた。敷き終つて私は慌てゝ七間に飛び下りると「帰ります」と叫んで敬礼をした。

しかし此処は軍隊である。

「待て、龍田ッ」

ロイド眼鏡をかけた班長の色白の頬が、赤らんでいるのは酒の為ばかりではなかった。

やせ型であるが、割合がつちりした骨組みの右手を伸ばして私の左手を握つて引き上げ、様にした。

その夜、龍田信二の団布の中は遂に空であつた。

(終)

世にも不思議なヨタ記事

——高橋鉄氏へ訊す——

高橋鉄氏は「週刊タイムス」4月4日号「誌上に『さる雑誌に「高橋鉄氏に問う」という呼物記事が出ている。実はその記事が出るらしいことは、同誌先月号の予告にデカデカと「高橋鉄批判」という「呼物」を掲載する由を宣傳していたのでオヤオヤと思つていたそのうち、いつのまにか今月号が出ていて、しかも、そのK誌がこれこそ事実間違いなく「発禁」になつてしまつた。そのため私自身はまだ実際に読んでいないのだが——云々——」と書いています。

いう迄もなく沼正三氏の「高橋鉄氏に問う」を掲載したのは奇譚クラブ四月号だが、それがいつの間にかやら、高橋氏によつて「発禁」にされてしまつてゐる。世の中にこんな馬鹿げた事があるものじやない。はつきり言うが、

奇譚クラブ四月号は絶対に発禁になつた事実はない。「編集責任者が全然、発禁押収された覚えがないのに、」鉄氏一流の例の誇張した筆で、これこそ事実間違いなく、と太鼓判を押して二セの発禁にされている。その上御丁寧に「そのため私自身はまだ実際に読んでいない」と言うのだ。第一、五月号が三月二十三日に発売になつてゐるのにその先月号の二月二十三日に発売された四月号が書店にごろ／＼してゐる雑誌なんて、今どきあるもんか。

朝日新聞へ抗議文とやらを寄せて、「薄謝」迄貰つたという氏のことだから苟くも自分の書いたものには責任を持たれることだろうと信ずる。如何なる理由によつて虚偽の記事を発表したかを訊きたい。

(箕田京二)

Das Grausame Weib

△殘虐なる女性達△

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森本愛造・訳



残酷な気持が如何にエゴイスムと同じ系類

に属するかについて良い例を一つあげよう。

「ヴァージニア (VIRGINIA) のロッキンガム・カウンティ (Rockingham County)」

に住んで居たペンス (Frod Pence) という

女性は何時にも自慢そうに云うのだった。

「私は娘共を鞭で打つ事にかけては、此の国

で右に出るものがない位よく知っています

よ。」

実際彼女は日曜日の朝、娘達を庭の立木に

縛りつけ、ゆつくりと丹念に鞭を浴せ、彼女

の所謂「黒人用の膏藥」つまり、塩と胡椒を

酢でねり固めたものを塗り

つけ、苦痛で喚き立てる娘

達も尻目にして悠々と日曜

の礼拝にと教会へ出かけて

ゆく。教会のお勤めが終る

と、気が向いたとき、愛用

の乗馬鞭を取り出して、娘

達の前に現われ、容赦なく

打ち叩き、のたうち廻らせ

るのであった。

此の本の著者「ジョージ

・ブルタ (Rev. George

Bourne) 卿がペンス嬢

に「一体なぜ、貴女は日曜の朝を選んで罪もない娘達を縛りつけ、公然と牛馬の様に鞭打つて、隣近所を騒がせるのですか。」ときいた答が面白いのである。

「私が、もし、週日に彼女等に鞭を当てたら彼女等は一日仕事を休まなければならないのですよ。日曜日なら、どんなに厳しいお仕置でも、月曜の朝までには治つているので、一日も仕事を休まないでいゝわけですからね。」

(訳者註、此の実例は性的鞭打が実に簡明に述べられた好例であろう。そしてペンス嬢は他の著述により、馬や牛をも虐待し、虐待させたと記されている。即ち、裸馬に彼女は男装して跨り、女又は男の奴隷達に馬の各脚に綱をつけて引張らせ、カウボーイのつける様な一蹴りで脇腹に突き刺る様な残酷な拍車をつけ、特に革で作られた太い乗馬鞭(奴隷懲戒に用いたものも之である。)を尖端がこわれてサ、ラになつてしまふまで、執拗に力一杯用いたらしい。スポンを通して三十七度の馬の体温が伝わり、両脚をしめつける事によつて拍車を用いる為、その行動が正に彼女の征服慾を満足せしめるのである。

更に五人の奴隷達に見せびらかし得る事は露出癖をも満足させるであろうと同時に奴隷

達が自分達にもやがて廻つてくるであろう責苦を目の前に見せつけられる事によつて示す表情にも、快感を感じるものであろう。之等の事は、新年号の「ダイアナ夫人」等にもよく書かれてはいるが、大変珍らしい実例と思う丁度別の参考資料 *L'esclavage du Nord Amerique* (北米の奴隷制度) 巴里版、一八六八年版、仏文著者不明があるので申添えておく。

女主人達が奴隷を自から鞭打つた事は日常の事であつた。それには簡単に幾ダースかの日記等の資料が証明を与えてくれる。

さて、茲まで引例して来た実情はすべて読者の目を瞞らせるに足るかも知れないが、併し是等は、前にも述べた通り、日常の家庭内の単純な懲戒にすぎない。そのありふれた事実も、他国からの善良無智な旅行者達にとつては殊更に、日記や記録に留めておかねばならぬ程に、驚ろくべき残忍行為であつたという例証にすぎないのである。確かに、前述の数例は、野蛮にして残酷な行為と心理とが如実にうかゞわれ、而も日常の家庭内で惹起した問題であるだけに猶更、女性のサディッシュな傾向の例証になるのであるが、著者は更に特殊な資料から、特殊な例証を引用しよ

う。即ち、女主人達が一ケの女優として振舞つたのみならず、加虐の方法の新発見者として、又、考案者として新しい領域を開拓した実例を紹介しよう。此処に、女性達は極端なるサディストとして、現在に至るまで野蛮人の社会に於てしか見る事の出来ない程に深刻な、加虐行為を実施した事実が物語られて

オレンジ・スコット (Rev Orange Scott)
卿は次の様な実例を挙げてゐる。

「ジョセフ・ヒュウ (Rev. Joseph Hough) 卿が米国南部で働いていた時の事であつた。彼は或る晩一人のメソジストの家庭に一泊した。丁度其の日は土曜日であつた。偶に、一人の女奴隷が女主人の氣に入らない行為をしたとき、女主人は来客の前で其の奴隷にノミと金槌とを持つてこさせ、その奴隷の齒を一本切り取つた。その行為は極めて、悠々と行われたので、観る者は唯驚嘆に一言も発し得なかつた。

南カロライナ (Süd Carolina) の最高裁判所判事、故グリンケの娘サラ・M・グリムケ (Sarah Grimke die Tochter des Verstorbenen Richters Grimke) は殊に上流階級に於ける奴隷虐待について觀察をしている。

彼女の友人の中の一人について彼女の記述があるのでそれを紹介しよう。

「チャールストン (Charleston) に居る一人の女の友人 (名は秘す) は或る一つの残酷極まる刑を考案した。其の刑は、鞭刑が特に酷くさえなければ余り氣にしない程、仕込まれた奴隷達を恐ろしい恐怖感に陥れた程ひどいものです。(訳者註、鞭刑は笞刑と異りその残忍さ、惨烈さについては沼氏が「あるマゾヒストの手帖」に一項を設けて詳述し、引用してある程ひどいもので、笞刑即ち、通常の乗馬鞭や犬鞭や駿馬鞭による刑と異り、牛追用革鞭や「九本の尾を持つた猫」と同刑の所謂刑用の多紐鞭——之はよく海洋活劇等の映画でおなじみのもの——等を用いるもので

酸烈極りなく、ロシアに於ては死刑の一つに鞭刑による死刑があつた位である。) つまり新しい刑とは、受刑者を片足で立たせ、片足を手で保持させる事が基本で考案者は、片足の踝を革紐で結びその紐を肩から首にしばらくつけて伸びない様にし、その足を少しでも下そうとすると、ひとりでに首がしまる様にしたのです、そうして、この刑は自分の脚で自分の首を絞めて死ぬまで続けられるのでした。勿論、姿勢を保たせる為には刺のついた

革鞭が、彼女の手握られている事は云うまでもありません。〃

(著者註、この不自然な姿勢から生じる苦しみは言語に絶するものである、そしてこの報告者の説明によれば刑は通常一時間以上も終了しなかつたのであるから、恐らく死は安易な逃れ道としか考えられない様になつたであらう。)

この報告者はつゞいて述べている。

〃その友達はいつか一人の部屋付の女奴隷が一寸した盗みを働いたとき、黙つて小刀を取り出し、両方の耳をザツクリと切り裂いた事を、歡喜の表情を以つて話した事がありました。彼女は、奴隷達を縛りつけて全く手出しの出来ない状態に放置して、全くしつこく残酷というよりは残忍に革鞭を振るのが常でした。その上、彼女の良人はそんなに残酷な人ではありませんでしたが時々彼女が良人をそのかして、奴隷達を悶えさせるのでした

著者註(巻尾)

(一)此の女性に驚くべき程残忍な発明に優れていた。彼女の考案になる拷問を実施出来る男性すら少なかつた。

(二)一七九二年マンハイム刊行の西印度諸地方の旅行記(英文)の中にも、若い女奴隷

を、同地の女主人が折にふれて、屢々同種の拷問にかけた事が述べられている。

シュテツドマン(Stedman)の報告によれば

〃S—L—K—Rという或る女性について、彼女は或る日、最近買った奴隷をよく見る為に領地を訪れた、偶々、一人の美しい顔立の十五六才の黒人の娘がその中に入つて居て目立つて居た。不幸にもこの娘は英語が十分に話せなかつた。女主人はこの美しい肢体と顔とを認めたとき、とつさに鋭い反感を覚えたらしい。その反感は娘が何の反抗も示さないのに、単に英語が充分に解らないという理由で、女主人自ら鉄を真赤に焼き、両方の頬と頭に当てた上、片足のアキレス腱を切つて二度と見られない恰好の怪物にしてしまつたのだつた。此の事件のあつた後で奴隷達は相談して、女主人にもつと奴隷に対して優しくしてくれる様に嘆願した。その効果は即時に現れた。女主人は激怒して乗馬鞭を以て十五才の娘の身体中を血だらけにし、金槌で頭の上を打つて穴をあけ、脳味噌を引きずり出した上、二人の若い黒人の首を自から長剣を以つて斬り落したのである。〃

オウダツシュ(Mademoiselle Audache)

という女性が一人の若い女奴隷を窟から連れ

帰つて、彼女を縛りつけて革鞭を振つた。其の上、居合せた一人のラザール(LAZAR)

という男と計つて、此の娘を、火薬で焼く事を思いついた。ラザールは火薬を女奴隷の腹の上と背中にまき散らし、臥せた地面の上にも撒き、ワラを少しづつ適当にちらばし、オーダーツシユ嬢が焚木の燃えさしで点火した。

女奴隷が恐ろしい予感と、苦しみとで身を持ち上げようとする、ラザールは女の背中を脚でふみつけて腹に充分に火を当てる様にした。この人間の丸焼きが出来上ると(それでも不幸な娘は死ねなかつたらしい)台所へひきずつて行き、身体中に蘆薈(ローワイ、ALOE)と生石灰を塗りつけた。〃

他の女主人の例を一つ挙げてみよう。

〃彼女は二年間に八人から十人の黒人を焼いた。(Lucien Peytraud; Léselavages aux Antilles Française avant 1789, Paris 1897 P.328-333)リュジアン・ベイトロオ著「一七八九年以前の仏国範圍に於ける奴隷制」一八九七年パリ刊三二八頁より三三三頁まで。或る女奴隷は美しいが故に、女主人の反感を買い前足(特に前足とこの女主人は報告している)を切り取つて、森の中へ捨てられた。〃

N.H. Julius, Nordamerikas sittliche

zustände, Leipzig 1839

N.H. ユリウス教授著「北米の風俗習慣」

ライプツイヒ刊一八三九年更に某氏が一八三四年四月ニュー・オーリーズ (New Orleans) からフィラデルフィアに居る友人の許へ送った書簡の中に次の様な部分がある。(British and Foreign Anti slavery Reporter, London 1843) 英国及外国に於ける奴隷制廃止運動一八四二年ロンドン刊

「私は一人の欧州系米国夫人について君に知らせようと思う。彼女は社交界で天使の如くやさしい人だとされている。不幸にも夫人は二度も良人と死別して今はフランス人の医者の妻である。尤も之から書く事件に関しては彼女の良人は無関係だとされているが此の手紙を書く。二、三日、フランス人の医者の家から火事を出した。消防の主任は消火に当たっていたが、火元がどうも地下室の方らしいので、地下室をこわさなければいけないと夫人に云つた処、夫人はあの中には何も入っていないからやけてしまつてもいいんです。あそこはもうこわそうと思つて居た処ですからと云いはつたが、人々の内に事情をうすうす知つて居た者が居て、地下室を開けてしまつた。火事は漸く治まつたが、調べてみるとこ

の地下室の中からと、家の中の他の室から合計七人の男女の奴隷が発見されたのだつた。

彼等は解放されたとき、やせ衰えて、全く人間とは思えない程ひどい状態であつた。私は此の目でその動物達を見たのだ。友人よ、それは正に恐ろしい地獄の住人を見る様な恐怖感をすら呼び起すに充分なものであつたのだ。私は勇を鼓して正確な判断を下す為に、私の震え上つてしまつた神経が許す範囲で、部分部分について調べた結果、私はこの女主人——女悪魔と呼ぶに相応しいが——が使用したという拷問用具を発見し、或る種の噂が事実であつた事を確認した。夫人は奴隷を裸にした上全身が傷だらけになつて身体の線が崩れてしまふまで鞭打つたが、之では彼女は満足しなかつた。又、彼女の慾望は女の乳房をむしり取つてすら完全に満足しなかつたのである。それ処ではない。恐らく宗教裁判に於てすら遠く考え及ばなかつた様な拷問道具を持つて居た。曾つて、パリで夫人の一人の娘の脊椎彎曲を矯正する為に購入した一種のペットは巧妙に拷問に使用されていた。鉄で出来た頸輪は犠牲者の頸を押しつける幾つもの尖端を持つて居た。他の首輪は内側に鋭い刃を持つていて、其の為に犠牲者は首をうごかす訳に

ゆかない様になつて居た。或る時は、夫人は彼女の化物達に一つの鉄の輪を冠らせた。これは一つのネジの助けによつて徐々に刺を犠牲者の額に押し込んだ。又釘のついた椅子も彼女の愛用したものであつた。奴隷達の体力が余りにも衰えすぎて、彼女の満足する様な苦しみを示さなくなると、彼女は傷口を灼鉄でやいた。何時も、夫人が静かに楽しむ時を希むと、彼女はこの地下室へきて、傷の臭気や、臭い空気を胸一杯に吸い込み、奴隷達の痂皮に手を触れ、その大きさを計るのを楽しみにして居た。友人よ、私は一週間前まではこんな事を信じはしなかつたのです。今や私は信じざるを得ないのです。

かくの如くまとめられた北米合衆国に於ける女性の残酷な行為のモザイク的な映像について或る人々は、特殊例であるとして、私の所説に反対するかも知れない。併し、私がここに飽きる程の実例を引用しないのは、資料が不足な故でなく、余り同一の事例が読者をして退屈な不感の空氣の中に陥れてはならないと思ふからに他ならない。又、頁数の關係から云つても此の種の引例は之以上控える心算であるが、只一つ北米という奴隷制を容認した国民の中で特に女性に關してのその心理

上の一つの概念を要約する為にもう一つの事実を紹介しようと思う。それは毎日の様に現われている当時の新聞広告の抜粋である。

之等の広告文は、簡単に当時の農園の実状を伝え得ると思う。それは、或る程度以上の残忍な行為が普及していなければ、この様な広告は現れないからである。

(1) ニュー・オリーンズ市ビーネ紙 (NEW-

ORLEANS BIENE) 一八三八年十二月廿

一日号の広告文。私所有の女奴隷逃亡、特長足指を全部切断済み。

ニュー・オリーンズ市エツチ・チャートレス (New-Orleans, ECKE CHARTRES.

・トゥルウズ通
TOULOUSE STREET.

ビュルヴァン夫人
(BURYANT)

(2) ジョージア州ジョージア紙 (GEORGIA ZEITUNG) 一八三七年三月廿七日号懸賞広告

私所有逃亡奴隷捕えた方に廿五ドル。特長前額に鞭痕、背中中央にピストル射撃による弾痕在り。

サラ・ウォルシュ、モビール・アラ各夫人
SARAH WALSH, MOBILE, ALA,

(3) ワシントン市ナショナル・インテリジェンス紙 (WASHINGTON-CITY NATIONAL

INTELLIGENCE) 一八三七年六月十日号広告
逃亡奴隷、モーゼス。(MOSES) 特長両耳
切断

ヴァージニア・グロウプトン (NAHE VONGROVETON, VIRGINIA) 市近郊

エリザベス・L・カーター夫人 ELIZABETH, L. CARTER

之等はクーパー (COOPER) の「米国奴隷制度の真相」による抽出であるが著者自身此の種の広告に当時の新聞紙が相当多くの紙面をさいており、之等の広告が、現在、米国で出される自動車や、家具の売買広告位の地位を占めていた事を証明するに足る資料を持っている。つまり当時の奴隷関係の広告の中で典型的なものが前述の三つの実例である。もうこれ以上の註解は不要であろう。脱走者が捕えられると、即時に人間離れした方法で懲戒を受けるのは勿論、未だ身体に何にも印を持つて居ない時は再びの逃亡に備えて、広告の出しやすい様に足を切るか、耳を裂くか又は歯を抜くかのどれかで直ちに片輪にされたのであった。

【訳者註】こゝまでで、本章は大体半分である。之までは特に米国に於ける奴隷制について著者はクーパーの作、及び他の幾つかの著

書や、手許にある資料から詳しく述べて来たが、これから約四十頁に渉る部分は、トルコ、ロシア、支那等の諸国での実例を主として居る。奴隷というものが現在まで沼氏を始め種々の形のマゾヒスムに於て一つの憧れを以つて語られる時、これまで述べられた様な場面は或る意味で過激に過ぎるかも知れないし余りにも非ロマンティックであるかも知れないが、之等の実例が存在して始めて、女性達の中に残忍な行為が性的な関連を持つて、今日に至るまで存続して居るという事が判明するのである。ルードルフ・シュリヒテルが夢想した様に、ロマンティックなマゾヒスムの世界を樹立す為には流血や、残忍を極めた事件に対する女性の好奇心と同時に甚だしく強烈な征服慾が必要である。植民地に於て發揮された之等の被征服者に対する行為の中心に私達の望む処の征服慾が勃然と感じられるのである。次に続ける前に訳者は暫くの間、西欧(殊に独逸(英))に流行し、現在我が国にその実現をまたれているマゾヒスム愛好者の為の特殊娯家について述べようと思う。今迄、諸刊行物に記された此の種の記事は余りに簡単に過ぎるが、之等を引用し乍ら、その一つに詳しい説明をつけて行こうと思つてゐる。

【読者通信】

前号富岡陽夫氏の読者通信に対して少し書かせて戴きます。

氏は一月号で私の引いた文中に「毛皮の貴婦人」がマゾツホの作なる旨の記載がないといわれますが、ないからこそあの文章になつたのです。昨年七月号にあの「手紙」を訳した時（因にこれは全文です）、私は「毛皮の貴婦人」について全く知らず、唯「赤御殿」はゴータの作を讀んでいたもので、ゴータ作と書きました。所が氏の御教示に接し、同名の作品がマゾツホにあると知つたので、「就中」*Besonders*の一語を手掛りに、「毛皮の貴婦人」はマゾツホ作であろうと推測したわけです。暗中摸索ですが、それで文意が通ずるからです。

氏の再度の御教示により私の右の推測は一応否定されたことになりふり出しに戻つてこの「赤御殿」は両作品のどちらをさすか不明になつたわけですが、私はやはりマゾツホの作の方と見て良いと思います。それは、一月号でも書いたような、毛皮に対するマゾツホの特殊の愛好から考えて、「毛皮の貴婦人」という標題がマゾツホ

らしく思えるからです。御教示によると「赤御殿」は「謎の女」という本に入つてゐるようですが、それでは前記の *Besonders* が素直に解けないので、私はやはり別に「毛皮の貴婦人」という短篇集があつたとの推測を維持致します。

氏などはよく御承知でしょうが、マゾツホの短篇集には同一作品の重複が少くありません。昨年八月号の「キエフ流血婚」の二つの版のことは解説でも一寸触れましたが、外にも例えば、「サバタイツエヴィとピアロールのニューディット」という短篇集の標題をなす二作品は、*Sabbathai Newi* の方は「恋愛譚」という短篇集の正篇に、*Die Judith von Bialopol* の方は右の読篇にそれぞれ収録されてゐるといつた工合です。ですから「赤御殿」が二つの短篇集に入つてゐると思つて差支えないし、それでなければ、あの手紙の文がおかしなことになります。もしマルブカという女性が、毛皮を着ていなかったら、右の推測に対する確定的な反証でしようが、マゾツホの作である以上、そんなことはありますまい。

尙、シユリヒテグロルの *Die Venuspeitsche* は、各巻独立の長

篇小説個人叢書で四冊あり、二部作ではありません。氏のあげられた二冊に続き、第三巻に「悪魔の娘達」第四巻に（一月号で題名襲用例としてあげた）「牝狼」が出ておられます。

「謎の女」「残酷な妻」「魔とジレーネ」等いずれも私は未見のものです。貴重な秘書を死蔵なさることは残念です。全国同好者の為に、十年後二十年後のマゾヒスト達の為に、是非とも訳出の勞を取られるようお願い致します。今迄日本における西洋性文学の紹介は通常性の好色ものやサディズムのものばかりではやされ、マゾヒズムものは不当に軽視されて来ましたが、奇巧読者の何割かはこの種作品を渴望してゐるのですし、マゾヒズムの源流たるマゾツホの作品紹介の意義は非常に大きいと思ひます。氏は「専門家でも研究家でもないから」といわれますが、それは私とて同じこと、ただ日本のマゾヒズム文化のために応分の寄与をしたいという気持からのこととあります。氏の今後の誌上における御活動を読者の一人として心から期待しつつ筆を擱きます。

（沼正三）

「奇譚」の愛読者の一人です。希望として口絵と写真をうんとふやして下さい。わたくしは本文は殆んど読まず、口絵と写真で貴誌を買つてゐるといつても過言ではありません。五月号では「車を轆くポニー」と「通り魔」がいただけです。四月号は「轢殺」です。畔亭先生にセーラー服や洋装の美女の素晴らしい姿態をドン／＼書いて頂きたいと思ひます。滝尾子先生にはシユミーズ姿の縛りをお願い致します。（高知の一愛読者）

私は生来のソドミアで又かなりのサド的傾向を有する者です。私が今一番奇巧に希望したいのは、口絵に一頁で結構ですから男性ミッド又は男性の責め絵写真（ソドミアとしての責め）を毎号掲載して頂きたい事です。それも看守が少年囚を苛めるといふ等は平凡で脆弱な青年が屈強な男を責める方が妙味もあり、モチーフとして秀れてゐると思われず、弱者に虐待される強者の屈辱感、強者を責める弱者の征服感こそ最上のものではなないでしょうか。責めのアイディアとして私の好むものは、（一）兵士に鞭打たれる下士官、（二）ボン中青年にリンチされる警官、（三）土工達に復讐される現場監督等です。（フオト生）



夫から妻から

久留木 栄

——縛るといふことより、それを通じてみた夫婦生活の考察——

美代子、もうお別れしてから一週間になりますね、やつと書斎の整理も終りました。きれいになった本箱、その上に私の大好きなゴッホの自画像をかけ、芥川龍之介全集の前にお前からもらったこけし人形を飾りました。頭の先にトンがりのついたエンピツ大の少年と頭の先が凹んだ、キヤツブ大の少女像です。お前と結婚して三日目、博多の岩田屋で買ったものですね、その形にも色にも言うにいわれぬ懐しさがこもつて、言うに言えない程の感激を思いおこさせます。

「久留木君、人間には時には自分で思うようにならぬこともあるのだよ。半年ぐらいいは我慢できるだろうね。」
思いやりのある編集長がそういつて

くれたので、やつと行く気になった片田舎です。着任そうそう付近の農家やひなびた学校や、「魚とるべからず」と書いた池畔を経めぐりながら何度その言葉を思い出したことでしょう。俊寛が鬼界ヶ島に流された。私はそう思つて我慢をする気になりました。思えば結婚して丸六年、離れて暮らしたこともなかつたのに、——

お前が家を出る時に言つた言葉は、決して忘れないよ。私はたしかにアブノーマルだからね。

「自分を知つて無茶をしないで」

お前は本当は無茶をしてもいい、仕事が出来た出来上つてということと言いたかつたのだね。それが充分言えなかつたお前。私にはお前の表情が、ぼ

やけて少しくずれかかつてみえたのでお前の負けん気もやはり感情にはもろいものだということを知つた。しかし美代子、私はここに来てはじめて知つた。こうも私達の、いや私の日常生活にお前の占める部分が大きいとは——やつぱり私達は幸福すぎたね。

この前の手紙では転任後のあわただしい空気でさしたることもお便りすることでもできませんでしたが、こう落付いてみると、私はとりかえしのつかぬ寂しさに襲われるような気がします。

そして唯一人になった時、考えるのはお前の事ばかりです。

父の代から伝わったいかめしい家、五寸以上もあるうかという太い柱、うすぐらかつた居間、そして総桐の簞笥



の一番下に私たちだけが愛読した本（奇クのこと）が入っているのも、懐しく思い出されます。

二人だけの秘密、話が、七日もあわないと自然に本能的なことに走りますけど、やはり大事にしまっていることでしょうね。半年も貴女を縛れないなんてー

たしか、お前を最初に縛つたのは新婚旅行の最中だった。お前はあの時のことを聞くとどうしても知らないと言いつ張るけど、私は完全に記憶している。その事が昨夜本箱のこけしを手にとつて眺めているとふつとふき出るように思い出されてお前がいなくて気が狂いそうな感じがした。旅館の真白なシーツに寝て、私がお前にはじめて手をかけた時の興奮を私は今も忘れることができない。私はたしかに最初から相当暴力的だったと思う、性という知識が全然なく、シンクインゼネラル「常識ほどの意」なものがし勉強していた私が自由になる天使を得てカッとしたにちがいない。お蔭で前と私の間には初夜から医者と呼ばねばなら

ぬという大失態をやらかしめんくらつてしまったが、今こうしてはじめて、離れてお互のことを考えてみると、とんでもないところで純潔を露呈した二人の行為が、実は何にもかけがえのない、尊いものに思われてくる。

あの夜自動車でお前を病院に送りとだけ再びかえつてきた時、

美代子、結婚愛というのは、二人で礎くものだったね。と手をとりあつて泣いたことを覚えている。お前はこう二人で離れてみると、その時のことがありありと目に浮んでこないだろうかそれともお前は又、私が会社から帰つてくるのをいつも待つような気持ちで大きなお腹をかかえて、格子戸のところによりそつて南の空ばかり眺めてはしないだろうか。きつとお前の事だから、気丈に生れ来る赤ん坊のために必要な色々の知識を勉強しているに違いないと思うんだが。念のために県立病院の乾婦人科部長から推薦された良書、築田多吉著「子供の病気の家庭手当と看護」昭和二十一年東京ハンドブック社出版、定価二十円と高谷淳著「

育児と看護」昭和二十二年大阪高島屋出版、定価七十五円を紹介しよう。ともに古いので再刊が出ていると思うがなければ山本書院（古本屋の名）へ問合せたらよい。どうしても手にいらねば乾博士から期限付きでかりてもよいと思います。

とんだところで大変な脇道にそれたが、お前と別れてからもう六ヶ月間もあえない、しかも今度会う時は身二つだけだと思つと信じられぬくらいハネムーンの時が慕わしい。実は任地に赴任する道すがら、美しい九州背稜部の連山や、霧島の霊峰をながめていると汽車の窓ごしにふつとお前の顔が浮んでは消え、消えては浮び、いつもお前が愛用していた地味な麻のワンピースの薄桃色のサバサバした手ざわりが思い出されてきた。

柄にもないと思つて、手にした週刊朝日をみたが駄目だった。最近、にわかにつつとライトを浴びた松川事件や清水昆のヒット作、河童天国の行間からしきりにお前の嗚咽が聞えてくるよ



うだつた。その嗚咽や汽車の騒音と一緒にになつてしきりとハネムーンの新婚旅行の思い出をかきたてたというわけだ。もつとも新婚旅行も山に關係のある雲仙だつたので、任地が霧島のみえる町とあつては思い出の種がつきぬのも無理はない。

一休人間というものは、些細なところで感動したりするもので、私がお前に感動したのも、実はお前のサジステイックな視線だつたかもしれないね。このことはいずれまた詳しくお便りするとして、いささか気分が落付いたゆとりをみせて第二伸を終えよう。皆様にもよろしく、さようなら

さつそくお手紙、有難うございました。貴方が紹介して下さいました本、どうしても見つからないので出版所に照会いたしました。そしたら、育児と看護法は女学校時代のお友達もつていて借して呉れることになりました。御厚意ほんとにうれしくつて、貴方の思いやりのあるお便りをみてみると美代子泪がとめどなくでてそれをギョツとだ

いて寝ましたのそしたら何だかボリュムに欠けていて――

そうそう、貴方が私をお連れにならないものだから、隆子さん（女学校時代の友達）から、うんといためられました。

あんたは甘ちゃんだから、御主人をしりの下にしているんだつて、――
「そうよ」

と逆に一応意張つてみましたがつぱり貴方の重量感ある体や、がつしりした腕が恋しくて恋しくて夜になるとどうしても寝つかれないのです。ふしぎに目がさえて、貴方から叱られたことや叩かれた事、泣かされた事、二人で脊振山にのぼつたこと。あの山の腹で、貴方は「今から僕のいうことをきかぬと、この桶に縛りつけてやる」といつて私をおどかして、始めて私に貴方のお氣持を打開けて下さつたのね。結婚丸二年目でした。私はそれまでいつも片思いと思つて、あきらめていたのに、中学二年の頃から私を見染めていたなんて――しかも貴方は私を後手に縛つて置物のようにすえてまるで

人事のように仰言るなんて、意地悪！

あの時ほど私は口惜しかつたことはありませんわ、貴方にニヤニヤ笑つて私の顔をみていらつしやるし、何しろ自由を奪われているので、仕方なくウムウム相槌打っていましたけど、ちつとも私、信用しなかつたのです。それが貴方それから一週間たつて仕事で貴方が出張された後、悪いけど勝手に手文庫の中を探して古い学生時代の貴方の日記を発見して読んだ時の驚き――

私はすっかり取乱してしまいました。私たちが結婚を前提としてはじめてお会いした時、そしてお互に胸の打ちを明すこともなく、アツと結婚式の日取りが決まつた時、私は貴方のような自由主義者にも日本的な家族制度の枠がひしひしと身をしばりつけているのかと思うといたたまらぬ氣持でした。その頃、私は寝てもさめても貴方のことばかりしか頭にない頃で父にもいつて貴方を説き伏せるのに一生懸命でしたが、それだけに家の為、家庭の名前の為にして又貴方は父や母の義理の為にだまつて結婚を承諾せられたも



のと思つていました。というのは貴方がIさんという美しい女の人を真剣に愛していられたことを知つて嫉妬していたのかもしれませんが、今では何でもないことかもしれません、その時は恥しいながらまるで気狂いみたいな私でしたもの、

従つて初夜も、そして最初、貴方が荒々しかつたことも皆、私への腹いせいえ、そうじやないとは思いつつも、それに違いないと考へてあきらめて来てましたもの。早くから母をなくし、後妻とともにあまり面白からぬ家庭にいささかひねくれていたためかもしれない。

従つて貴方が、夫婦愛というものはお互に築くものとおつしやつた時、私は恥かしながら、言い分けぐらいに考へていました。でも初夜の興奮はおさまらず泣くには泣いたのですけど、それを貴方は根底からくつがえしてしまつたのですね。

私はあの時はじめて私の人生に光がさしたような気がしました。

家運が傾き、たのみの父が死んだ時

まだ夜学に通つてらつしやつた貴方は心を鬼にして家運をたてなおして呉れました。

そして貴方は貴方の父や母と私の叔父たち親族の板ばさみになり、私への愛情に怒を持ちながら、それでも貴方は二年間、たゞひたすら私の為を持ちこたえて呉れたのですね。

「君の名は」が流行になり、この前の同窓会の時に春樹なんて男性が此の世にいるのかしら夢だわ、と皆でうらやましがりましたが、その時、私は春樹以上に素晴らしい人がいるとひそかに皆を見降してやりたいくらいでした。その昔、私の胸の中にボツと火を灯して呉れた貴方が、終始かわらぬ伴侶だつたとは。

女はたつた一人の人に死ぬまで愛されればこれにこしたしあわせはないんですもの。

それいらい私はほんとに生れかわつた積りです。——でも

こうして離れていると、何と寂しく弱々しいものでしょう。

女なんて所詮、人にすがり、人にた

よらねばいきていられないものなんですね。

「貴女がサチステイックな目」と仰言いましたが、本当に、我慢一杯にそだつた私には、そんな所がありますのね、それを思うといたたまらぬ気持ちになります。

心ではこんなに貴方をお慕い申しているのに、充分甘えきらぬ美代子、どうかこんな美代子でも叱らないで下さい。ね、貴方、貴方は私がどんなに寂しがっているかわかりになりませんか、私は今泣きながらこの手紙をかいています。貴方がごけしを愛したように私も貴方の描いた私のスケッチやフォトを眺めて、私の胸を慰めていきます。せめてもの思いがとどくならとお粗末ながら、貴方の大好きな塩コンブと、ツケアミをお送りしました。話によりますとそちらにはツケアミなんてんでないそうですね、貴方の会社の同僚が顔を出してそんな噂をふりまいて通りました。その言葉すら不安になるようです。

では御自愛第一に

かしこ

(未完)

本誌創刊七周年記念

懸賞入選作品（二席）

私のモデル

飛田良二

一

春はまだ浅い、しかし、シーズンに先駆けて次々と、新作を発表して行かねばならない私の職業は、次の発表会の為や服飾誌の依頼に頭を痛めながら、一方店の春物生地を捌ばいてしまうのに忙しかつた。

そんな多忙な一日を、同じTDC（デザイナークラブ）のH氏から頼まれると、私は或る別の目的の為にA劇場の五階にある彼の経営になるモデル養成所に出かけて行つた。

その日は、此の養成所の入所希望者達の選抜試験が行われる日だつた。

水着一枚になつた五人の娘達が緊張した気配で右側の扉から一列に消えると、すぐ左側の扉から同じ様な一組が代つて現れた。リー

ダーの声で正面に向つたその五人が、ようやく今日の審査の最終であつた。

「居た！」

ついに私は私の目的だつたものを見つけた。私の記憶の中から幾人かの候補者の姿が一ぺんに、かき消えてゆくと、ほとんど夢中で隣に座を占めていたK女史から、その詮衡書類を奪う様に手に入れた。番号に合わせると、「香山美樹」十九才とあつた。その娘は黒のジャージーの水着の腰に「NO二九一」の札をつけていた。

「ハイ！ ワン・ツー・スリー」

あらかじめ教えられている娘達は、リーダーの声と、その動作に従つてぎこちないながらも、懸命なポーズをつけて見せる。

「御苦勞様……」

委員長格のN氏の言葉で三百人に近い応募者の審査が終了する

と、詮衡委員達は、やれやれ終つたかと肩の荷でも下した様に安堵の色で顔を見合せた。私は急いで室を出て、廊下の窓で一息入れると、すっかり西日が傾いて雲が赤く染つていた。目をつぶると、たつた今見た「香山美樹」の姿態があつた。その固く緊張した四肢がくるりと廻つた。

(この女だ!)

(どうしても私のものにして見せる!)

出来る! 私は自分の直感を信じてうたがう処がなかつた。煙草に火をつけると、今日の結果が出るのを待つていた。



頃合いを見計つて部屋に行くと、紫煙の中から、N氏が手をあげて呼んだ。

「なんだ、君まだ居たのか?」

「はあ、実は、この前……」

「あゝ、そうか、解つた解つた」

引取つて、Nは合格者の表を掲げながら私に見せて言つた。

「どの娘だ? お氣に召したのは……」

「香山美樹」の名は、やはり載つていた。

「あゝ、この最後の組の——ウンウン、しかし少し、のびが足りないよ、これからのモデルには。が、ちよつと、モデルには惜しい様な素朴な娘だつたな、実は僕も、この娘が此所を卒業したら僕の所で雇つてみようかなと思つていたんだ……」

N氏は、つい三年前まで人形作りなどの内職を細々としていた私を一人前のデザイナーにしてくれた恩師にあたる。だから前々から(専属モデルが欲しい)と云う私の意向は通じてあつた。しかし、その恩師にあたるN氏が引ばるなら、私には二の句がない。しかし、幸いにも

「Hさん、合格をもう一人増して下さい……そして二九一番の人。彼の処へ廻してやつてくれませんか。彼も近頃大分発展でね……」

手を振つて主催者であるH氏に掛合つてくれたのである。本当に有難かつた。

「モデルを雇うなら、何も君、卵から拾わんでも僕

の処からいくらでもヒョコ位になつたのを廻すぜ」
そう云いながらも、Nの掛け合いでHも快く承諾してくれた形になつた。

あとは問題ない。此所から通知が行けば、「香山美樹」は、二、三日中に私の店へ訪ねて来るだろう。モデル養成所に入つてからという気の彼女に、早速、それも少しはずんでやれば、次の日からでも喜んで出勤して来る事はまちがいない。しかも、モデルになる為の基本から教えてやると云う事であれば、願つたりかなつたりで文句はない筈である。

「さすがは、先生らしいわね」

合格者表を、もう一度眺めながらK女史が忘れずに皮肉を云う。
Nが一方の泰斗であれば、このオールドミスも、せせこましい日本の服飾会では大御所として祭り上げられている一人であつたが、私とは肌合の違い過ぎる程違ふ存在であつた。そこで用が済めば、さつ／＼と引上げる事にした私は、Nにあらためて礼をのべるとエレベーターで一氣に下りて、すぐ車を拾つて荻窪へ向つた。

(これで、今日此所へ来た甲斐があつた。)

車の中で私は、もう手に入れたも同然の、「香山美樹」の水着姿を思い出して見ると、思わず口笛でも吹きたくなる浮き浮きした氣持だつた。

二

例えば、着飾つた女達の何でもないスカート一枚にも、それが良い仕立てであればある程、かくされたテクニクがその曲線を魅力的に強調し、欠点はカムフラージされてしまう。しかし、事、その道

では専門である私達には、その下の下着も、コルセットも透して最後のものを想像する事はいと易い。まして今日の様に水着一枚で全身をさらしている為、それは素裸を見せているも同じであつた。なる程、Nの云う様に上背がこれからのモデル稼業には、少し不足かも知れない。と云つて決して足が短かいのではない——。

日本人ばなれした。と云う形容詞がびつたりする。あの多くの希望者の中から見事に合格の栄冠を得た一人なのである。此処で特に素質と云つたのは其所に私の狙いが有つたからで、即ち訓練次第で如何様にも仕上げることが出来る、未完成な若さが魅力的であり、私を満足させてくれた。その厚みのある短かいトップスが、突然デリケートな曲線になつて張り出し、それが、小鹿を想わせる素直なもののびとした脚線になるまでがしつかりとかたく引きしまつている事を、黒いジャージのシングルになつた水着が、はつきりと物語っていた。

その水着の黒と強いコントラストを構成した陶器の様になめらかで艶のある白い肌。パーマにも荒されていない黒々とした髪。愛くるしい大きな瞳。その形良い鼻も、耳も、口唇も、そしてそれらが整然と構成した理想的で少くとも、私の好みを満足させてくれるに十分な美しさだつた。

そして今日、試験を受けに集つた三百人の中で、最もコチコチになつて居た一人だつた。

そんな生娘的な水々しい処が、たまらなかつた。あの細作りの長い頸へ頭も廻せない程の鉄の首輪を食い込ませたら?——その光景が忽ちグリーンの狼轡を蝶々に結んだ、せつなそうな瞳になつた。
長い睫がぬれて……

(あゝ、あの娘は、どんな表情を見せるだろうか?.....)

たくましい妄想が、もくもくと頭をもたげて来る。愉しい空想が後から後からとつきないのだ。何時の間にか私のパトロンが住んでいる荻窪が、近くなつていた。そこで我にかえつた私は、急いで明日からの段取りと、それに必要な費用を胸算用して見た。彼女が手に入れば、かねての計画通り、今の仮縫室の隣りに一室を作る必要がある。そこで彼女を、ゆつくりと私の思いのまゝに仕込む毎日と思わずこみ上げて含み笑いになつてしまつた。

それから——これも銀座人種の足を止める宣伝手段として、ぜひ実行に移す予定の、廻転するウインドの事。その設計を変更する必要が考えられた。ポーズをつけてはゝえんだ香山美樹が、その円いガラス箱の中に立たされて、ゆるやかに廻つてゐる姿が眼に浮んで来た。

大体ガラス箱に納つた人形のように、大きなウインドの中でマネキン人形が、立たされている光景は自然であり、モデルはマネキン人形の代用でない。モデルには舞台やカメラの前でポーズをつけて見せ、その衣裳を見事に着こなして見せる事が使命であり、立派な誇りある職業である。そのモデルを、人形にされた事を意識させる円いガラス箱に追い込んで白昼にさらす計画は、不自然であり、その不自然な処が是非、実行して見たい私の欲望になつたのである。

「其処を曲つてくれ、もう一丁程だ。」

運転手に命じた私は、今から私のパトロンである「久保幸子」を今夜は又、一責めしてやらなければならない義務を想い出した。

このマゾヒスティックな中年女の性情が、ついに私の異常な性格を助成する結果となつてしまい、そんな性癖をかくしている私も、日

頃発表するデザインに、知らぬうちに鎖や縄のアイデアの発表を後から識り、思わず苦笑いになるのであつたが——不思議に私の、デザインは好評で、お蔭でパトロン久保幸子から出させた西銀座の今の店は、客筋もよくアクセサリーのデザインまで忙しくなると、月刊の服飾専門誌や、婦人雑誌からの依頼に追われる様になつてゐる現状だつた。

しかし、責めて欲しい相手。その肉体的な苦痛を喜ぶ中年女に、今では何んの感興も湧いてこなくなつていた。だから自然、此処へは足が遠くなる。電話で催促があつても、俄かごしらえの急用を口実に三度に一度は、逃げをうつてゐるのだつた。しかし今日は又、このパトロンから、今度の計画に必要な経費を出させる必要があつた。

車をすてゝ広い門をくぐつて行く。犬は敏感な動物だ。私の臭いを識つてゐる巨大なセバードは、私の足音にはほえない。犬がほえないで呼鈴が鳴れば、此の未亡人の広大な邸の訪問者は、彼女にはすぐ解るのだつた。満面に媚を見せて三十五は三年前に過ぎた「久保幸子」が挑発的なチエツクのパチヤマのまゝ出迎えた。

犬はもう一匹飼つて居た。小さな愛玩用のスピットである。私が訪ねない大部分の夜の為に、この未亡人は、愛玩してゐるらしくつた。しかし私が訪れた夜だけ、此の小犬は邪慳に扱われる。爛熟期にある様な、この豊満な女体の生理はちよつと憐憫を誘う。

「今日は、馬鹿に美しいじゃないですか、……その耳飾りはいゝ……」

どんな女も、一番ぬけぬけとしたお世辞に聞える一言と、もう一つ彼女達が、最も気を配つていない他の一点を同時にほめる事も、

私の営業上の最も陳腐なお世辞の一つであるが、——しかし、もろい事には、こんな言葉がデザイナーと云う肩書で、店のお客を喜ばしてしまふ。それだけにデザイナーとしての責任が、軽々しい言葉は極力、口に出すまいと常々心掛けているのだが、この女の場合は又別である。

「まあ、又お上手な事。だまされませんよ」

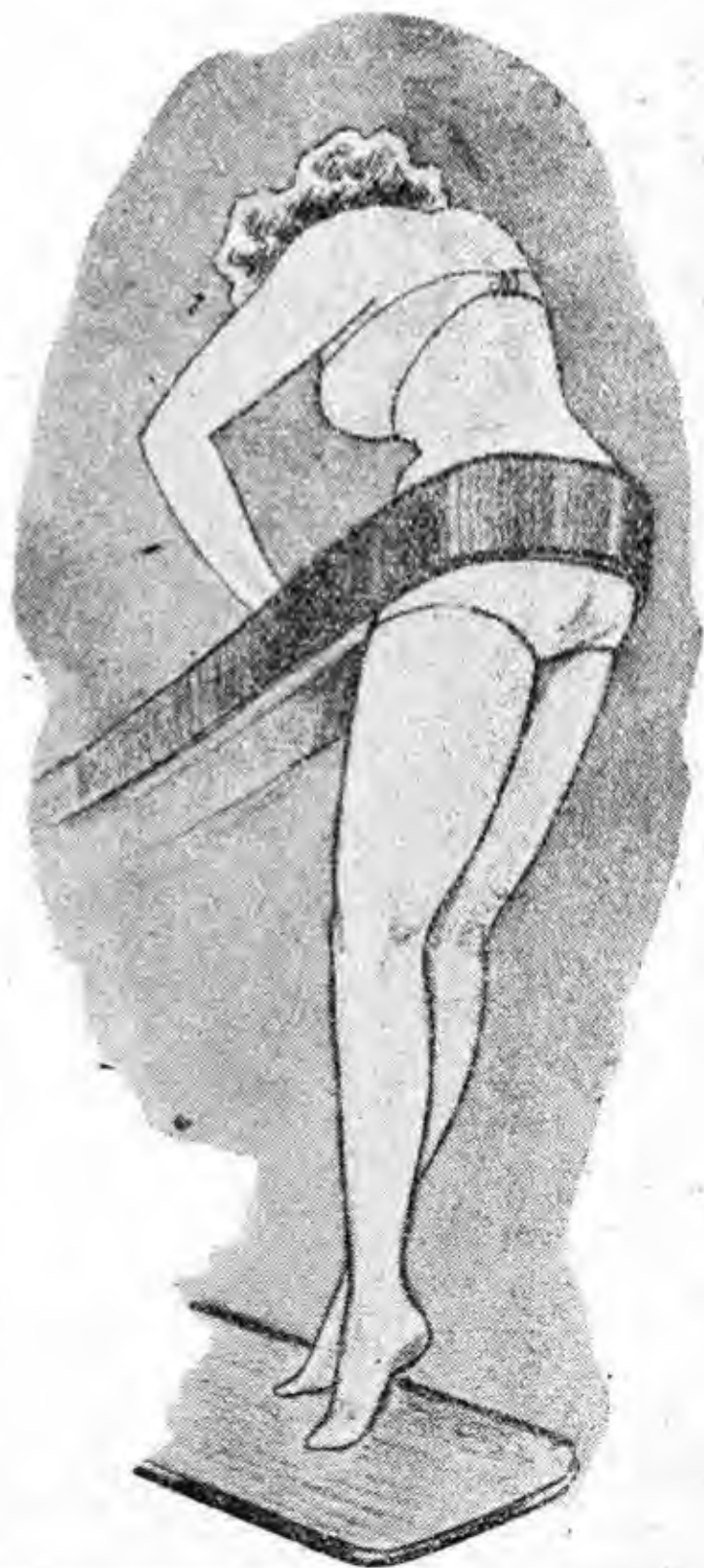
すつかり喜んでゐる。パトロンは浮き浮きした調子で云つた。

「又、お店に女の子のいいたいのでしょ、十人も売子が居れば上等よ、でも、やつぱり貴男が、もつともつと有名になつて欲しいわ。」

近々と寄つて来る久保幸子は決してみにくい女でない。いや中年女の魅力のサンプルを見せられる様なそのあでやかな容姿。

パリのマヌカンの様に枯木の様な女性は、商売の為、即ち、服を売るためには好都合だが私の性癖には困る。と云つて、この未亡人の様な太肉の肢体にも魅力はない。私の求める女体——それは、今日やつと、発見した香山美樹の様なまだ乳臭さの抜け切らない、それでいて最後の仕上げに耐えるだけの發育を見た芳ばしい香りが発散する肢体なのだ。

私は、このパトロンが喜ぶ様な責め方には、もう堪能していた。やはり何のけがれも知らない生々しい処女の、凌辱に打ちひしがれた、消え入る様な羞恥の表情。その精神的な責苦にもたえる姿を、



何時の間にか作り上げ、しかもお仕置き、折檻、そんな言葉の持つ一種独特な甘美な雰囲気だつた。

もう寢室へ行きたい、そして、思いきり責めて欲しいといった幸子の表情に、私はわざとゆつくり煙草をくゆらしては、商売の話を続けていた。

事実、店の改良、レッスンスクの増設、廻るウィンドケースの構想の外に、夏のT・D・Cの発表会には、思い切り飛躍したアイデアを、費用をおしきりに繰り拡げて見せる夢があつた。その為にも、相当の金額が必要だつたのである。

「いゝわいゝわ、又口座の方へ切換えて置くわ、あのお店の名義だつて、貴男のものに書きかえてもいいの……、ね、だから私をすてないで、ね、お願い！」

アルコールが廻つてくると、女はくどくなつた。

「こんな性質の女、いやになつて?……でも、私には貴男が必要な
の、ね、ね。」

いゝかげんで、だまらしてしまわないと切りがないと思うと、私はやにわに彼女の右手をねじ上げた。そして、そのせいたくなパチヤマの紐をといた。

「ダメダメ、婆やが来たらどうするの」

今夜は、女中は、留守だつたが耳の遠い婆やは何時顔を見せるか解らない。しかしそう云いながら女は、早や、せわしく息を切らして居た。

三

翌日、私は昨夜の記憶で頭が重かつた。久しぶり。それに始めて見た香山美樹の水着姿を幸子におきかえて、酔つた私は荒れた。その疲れで締め切りの近いデザイン画の筆もはかどらなかつた。

電話がなつた。雑誌社からの催促だつた。あくびをかみしめながら私は三年前程のボーク誌をべらべらとめくつてみた。こんな事は本心でない。(何んとか久保幸子と切れてしまわねばならない、私はだめになる。) そう考えながら一方、香山美樹の出現を期待している自分の身勝手がおかしかつた。いや私は、彼女を得たら決してこんな事はない。(適当な慰安が、より発展的な明日の糧として必要なのだ) そんな理窟をつけて自分に云い聞かせていた。又、電話がなつた。ウインドケースの会社からである。

「そうそう高さは二米位、なに、高くつく、仕方がない真中から二つに開く様にして総ガラス張りだ。真中の枠に鍵をかけられるよう

に厳丈に作つてほしいんだ。直経は最初のまゝ、うん、じやあ」

「……………」

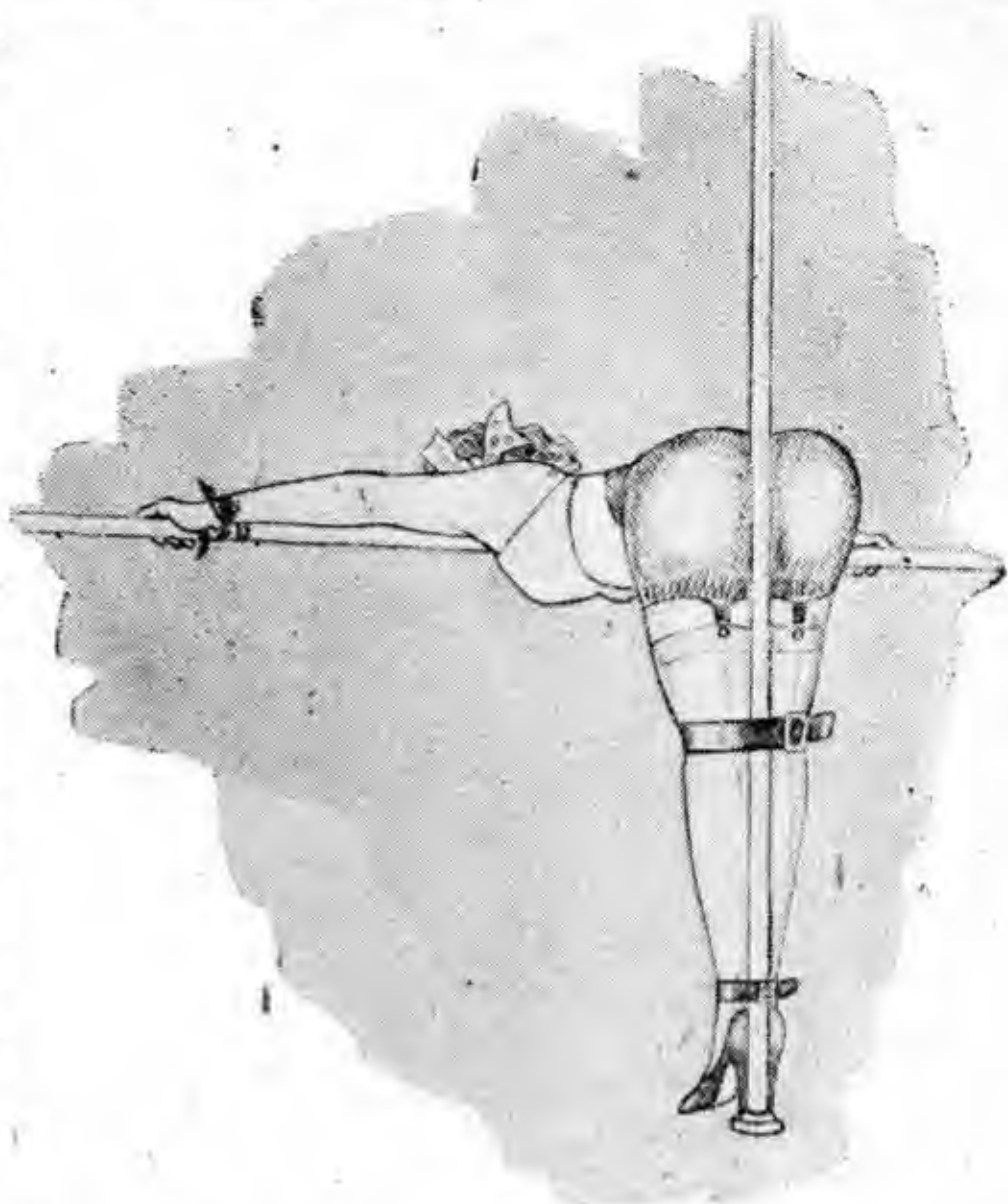
「それから下のモーター入りの台の下に、ゴムの車を四つ忘れずにね。何時頃つて、早くして来てくれ。」電話を切ると昼が近かつた。店に出て見た。客が相当に入つてゐる。その中から上得意のS嬢が笑つてちよつと手を上げて見せた。中食を遅らして一商売する氣になつた。

あれから三日目、ついに彼女が店をたずねて来た。まだ計画のレツスン室が出来上らないので、当分は店の売り子の見習いと云うことにして、明日から出勤する様にと決めて帰らすと、急に元氣が出て来た。香山美樹がかぶつて来た野暮つたい帽子から新しいヒントを得て私は急いで鉛筆を走らして居た。

「お店へ上つてみる様にと向うから、お葉書戴きまして……」

香山美樹は娘らしい羞らいを見せて、言葉少く語つた。可愛いすき透る様な声だつた。そしてうつ向き加減のうなじにトビ色の生毛が光つていた。

「何しろ応募者が多いですからね、なに向うですべつたつて、がっかりしたりする事なんかありませんよ。此の店でよかつたら明日からでも出勤していらつしやい。充分に基本レツスンから教えてあげます。まじめに勉強さえすればすぐ一人前のモデルになれますよ、そうしたら、此処の専属のマネキンになつてもらつて、雑誌にもどし／＼出てもらい、お給料の方も、モデルクラブで縛られるより倍もあげますよ、尤も貴女なら、モデルクラブに紹介してあげてもいいし——」



ゆつくりと話を進めながら私は、詳細な観察をおこなうなかつた。その高い布地でないチャケットもスカートも、野暮くさいが不思議にその為、一層この娘を子供々々しく見せていて、そのくせ、何かエキゾチックな臭いもある美貌を引立てているのだった。つい最近父を亡し、母と二人で叔母を頼つて上京して来たという彼女に、都合的なセンスはないが、磨けば光る素質を持つてゐる。

「私、前から本で見て、先生の服、大好きでしたの。」
それが勢一ばいのお世辞らしかった。そして嬉しそうに帰つて行

つた。

四

仮縫室の隣に、小さいが又それだけ一応纏つた設備が整つたレツスン室が出来上ると早速、稽古にかゝることにした。このレツスン室の奥が私の私室になる。そこで出入口は、縫室のそれと並べて一つ、私の室から一つ、窓は隣家の外壁に向つてかなり高い処に一つ、曇りガラスを入れた。そしてその下側と反対側の壁にバレーのレツスン室の様な手摺を設け、その手摺より少し離れた位置へ、天井から金属性のパイプの柱を両側に一本づゝ用意し、螢光灯をはめ込んだ天井にも同じ様なパイプのレールを並行に二本準備した。それから、これも後日の為の注意深い設計の一つであつたが、私の室からは直接この店の側面へ出られる出入口を新たに作らしておいた。

処で私は、フアツションモデルを養成する實際の方法に暗かつた。そこでこの室が出来上るまでにチヨイ／＼と用件を作つてはH氏が自身指導している彼の、レツスン場を訪問し、大急ぎでアウト・ラインを覚えておくことも忘れなかつた。其処では、試験にパスした恵まれた肢体の娘達が熱心に勉強し巣立つ日を待つていた。その光景を見学しながら、私は、美樹にこの通り、いやもつと／＼きつとはずかしがるに違ひない、恰好も（モデルになる為）と云う口実でどうにでもなるこの美しい餌物を、そしてついに私の理想とする光景を創り出すために馴して行く毎日を、ともすれば、飛躍しがちな空想にふけりながら、そしてその通りを実行に移していく決心をした。

こんな悪企みを知る筈のない彼女は、私をすっかり信頼していた。

まだ売り子の見習い程度の娘に、法外な給金を出す事も出来ないし、あまりみすばらしい恰好をしているのもいけないし、と考えた末、私は彼女に必要な一切を私の趣味と、目的の為に選んで貸与する事にきめた。衣裳から靴、そして下着からコルセット、ブラジャーの類まで順々に揃えてやつたが、決して自分のまゝにさせず、あくまでも貸与するだけであつた。

給料で雇われている専属モデルであると云う彼女の資格をはつきりさせてやる為である。そして毎日、午後から四時までの三時間をレッスンタイムときめて「私の遊び」が始つた。

例えば、モデルとしてぜひ必要な二本線上を、体を水平に移動させて進む練習の外に、私は理由をつけてわざとその純白のブラジャーとコルセット（パンティとコルセットの事）だけと云う姿にさせた彼女に、そのヒップを急角度に左右に又は、前後に振り／＼歩く事を命じた。こうして基本からと称して楽しむ方法は、断じて練習所を卒業して来たモデルなど、やとつて味わるものではなかつた。又店にはパトロンが云う様に年頃の娘達が十人雇つてある。が、

しかし、近頃の都会のそれも、なまじつかの事を聞きかじつた女達などあきれる程、私にとつては魅力のない存在だつた。その中にも美しい娘はいる。又教えればモデルになれるセンスの持主もあつた。しかし、やはり私の目的のためには、香山美樹でなければならぬのである。私が仮縫いに立合つたり、原稿を書いている間も、壁一つ隣の室で彼女は一人汗になつて、真面目に私の教えた基本体操を繰返しているのだつた。

若い女性が、より美しくなる為にしかも商売になると考える以上は、決して此のレッスンをいなむものではない。だから私がヒップの線をもつと魅力的にする必要があると云つて、高級な美容院で用いる電気マツサージ器を購入してその使用を命ずれば、私の目の前でその巾の広いベルトに可愛いお尻をあずけてブルブルと振わして立つている。この電気ベルトは高価な道具であるが、贅肉をけづるのに効果があると称して、いづれ増設を計画中の総合美容室が完成すれば、豚の様な有閑マダム共からタツブリ巻き上げられる道具である。

その中、大分彼女もこのレッスンの日課がなれてくると、私も嬉しい気持ちになりもう一步進めることにした。

もう少しバストを発達させる必要があると云つて一定時間、そのブラジャーの上から両手で刺戟を得るために乳房をもませて見た。こんな時、私は、一たん自分の室へ帰つてしまふが、定めた時間が終るまでに突然引返して、その羞恥に染つた水々しい表情をたのしんだ。私から（あと二分）事務的なまじめな顔で命じられ、一生懸命に棒の様に立直した姿で又始めている。そんなうぶな娘だつた。

しかしどんな刺戟も続けければ新鮮味を失う。それを一番恐れている私は、別に養成所の様に三ヶ月で一人前という期限の必要もない、だからレッスンタイム以外は、他の売り子達と一つしよに店で使つた。処が彼女だけ、特にモデルとして雇われた別格扱いが、その恵まれた美貌とだんだん身について来る身のこなし方が、他の娘達の羨望から嫉妬心と変り、常々仲間から遠のけられる結果が、残る三時間のレッスンタイムを心待ちにさせ、私にとつて極めて好都

合だつた。

こうして美樹を得てからの私の毎日は、午後のひとときを明るく螢光燈の下で次々と、私が考えたでは命じる新しい方法の為、そのどうしてもぬぐい切れない羞恥心に顔を赤くしながら、実はモデルになる為の必要以外の運動も拒ばめず、そうしなければならぬものと繰り返している彼女。その汗になつた緻密な柔肌から発散させる馥郁たる処女の芳香を満喫しながら次々に変化する姿態から生じる微細な線や陰の動きを堪能した。そして、やがて、此の素敵な牝鹿の自由を奪つてしまう時の妄想をたのしんでいるのであつた。

五

いよいよ待望の「廻るウインド」が完成して運ばれて来た。私は早速、人形の替りに彼女をこの中に立たせる案を実行に移すことにした。

美樹はさすがに驚いたらしかつた。その大きな瞳を見開いて私を見上げた。そして、すぐ燃えるような羞恥心に頬を染めた。私は彼女のこんな所がたまらなく好きであり魅力である為、一層、私の残酷な欲望をかり立てるのであつた。

どちらかと云えば無口な彼女は、それだけにすぐ表情に現れる。その驚愕も、羞らゐも、やがてあきらめになり、観念した様に、同僚の光子達の冷たい眼差しと、一方忽ち足を止めた通行人達の好奇に満ちた無遠慮な視線に、つきさゝれながら美樹はそのガラス箱の人形になつた。

私の教えた通り、ゆつくりと一廻転する度に、少しづつポーズを変えて見せる。生々した人形は、思いきり派手な服装で立つて居

た。桜も咲かないうちに、私のデザインした水着にビーチウェアのアンサンブルと云うスタイルは、その日の夕刊に写真入りででかかとのつた。

「ウン！ いゝ体になつた。しかし君、あんまりモデルにこつていゝるじやないか？……」

通りがかりだつたと云つて、車を止めて立寄つたNが云つた軽い言葉が私にヒヤリとした。私とて、決してモデルとしての目的を離れたものに仕上げるつもりはなかつたが――。

「こりや、H氏が一遍レツスン拝見！ とおだてるぜ」

肩をたゞかれて、恐縮した様に見せながら私の内心は、おだやかではなかつた。私に顔を支えられて、その少しさし出した上半身の安定を保つたまゝ目はつぶり、自分で乳房を摩擦している図や、コルセットの代りにウエストに五インチ巾を越える黒皮のベルトを締めたその強調したヒツブを、前後に振つて見せる運動の光景など、人に見せられるものではない。又床より四インチ以上のハイヒールで大急ぎに歩く処などはまだしもだが、絶対水平に、そのヒツブを移動させる為のレツスンと称して、下は薄いタイツ一枚のまゝ、そのハイヒールをはいて、腰、一ぱいの高さに張つたロープをはさんで歩く処などはとても他人には見せられた図ではなかつた。

美樹もこの練習は、一番いやがるものゝ一つであつた。

「それは、今のところ自信はありませんよ、先生」

私はあわてた。Nは意味ありげな笑いを浮べ時計を気にしながら車の人となつた。

六

そろそろモデルとして使えそうになつて来た美樹は、臨時のモデルを使うより、はるかに経済的でもあるし、私の宣伝の爲にも、又この娘を手に入れた本来の目的にも、その時期が来ている様に思われた。

そこでS誌の今日の締切りまでに作らねばならない。或るメーカーからの依頼の服は彼女で行こうときめた。始めて美樹が雑誌に載る事になる。きつと喜ぶに違いない。これが又、一つの機会なのである。この機会を逃すことなく私は第二段階に進む必要がある。即ち、こんな餌を与えて喜ぶ彼女に何か(ミス)を作らし、それを理由に折檻の形を実現したくてたまらなくなつていたからである。

そして、とうとうその機会が来た。「おや? 又ベルトを忘れているね、ダメだな」

これから裁断する布地を運んで来た彼女をつかまえると、私は殊更怒つた様にした。

「もう君が着る服は、三着とも仮縫いが済んでいるんだよ。撮映は明日の朝だ、今日中に仕立て上げる事は君もよく解っているだろう。しかも、もう一輦、ウエストをけずる必要のある事も……」

一旦青くなつた彼女は、見る見る頬を

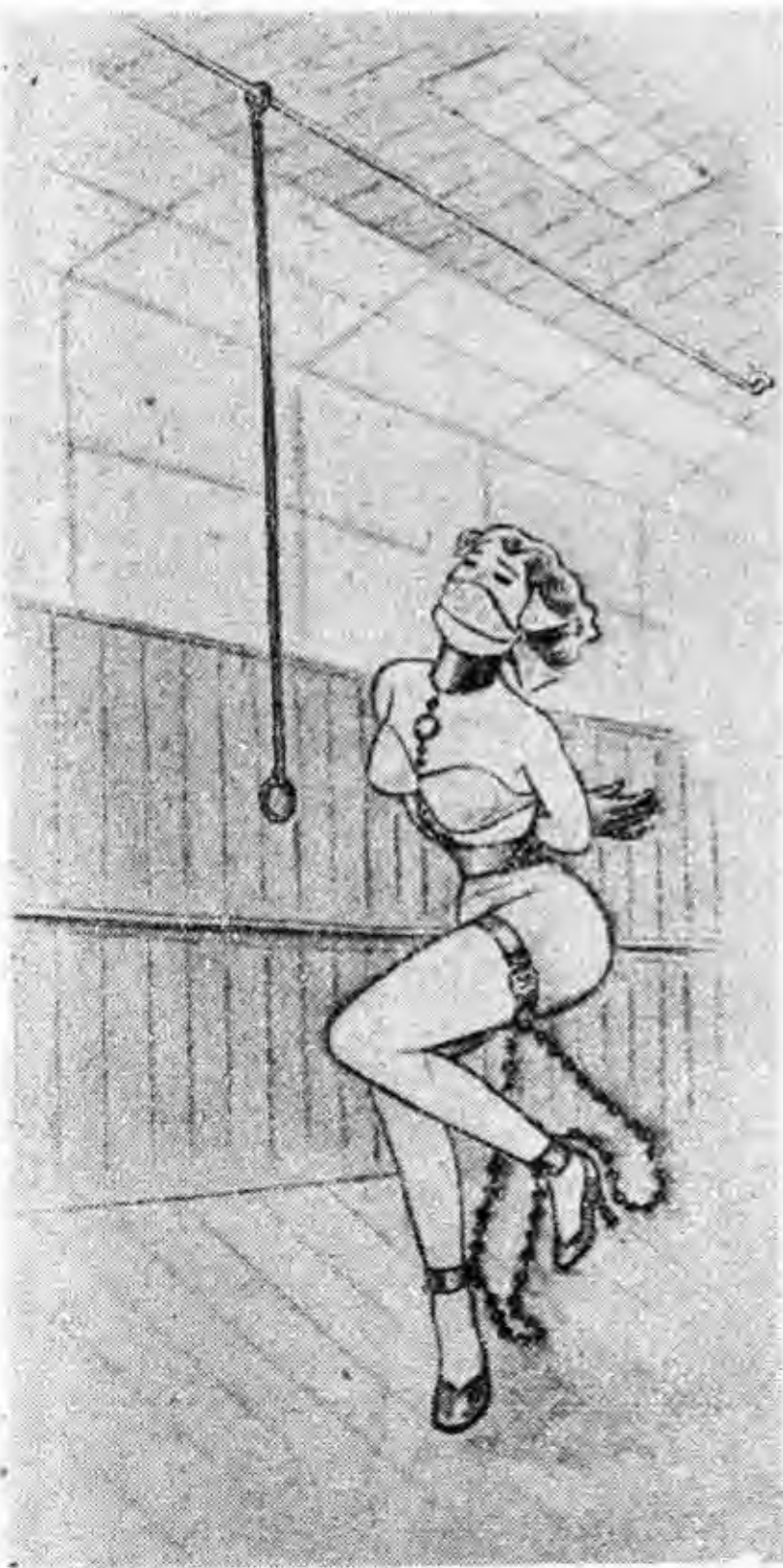
赤らめて固くなつた。

「僕が苦心しているドレープの量に狂いが来るじやないか、すぐレツスン室で待つていなさい!」

そう命じると、私は裁断師の岸田にちよつと出かけるよ、と合図を残しておいて、私の室からレツスン室に入つて行つた。

例の巾広いベルトを四六時中、締めているという事は、仲々つらい事で、此頃ではつい私にかくれてそのベルトをはずしている彼女を、私は知つているが知らぬふりをして今日を待つていたのだ。

ちよつと説明すれば、ファツションモデル達の生命はその、ウエストのサイズにあると云つても過言でない。パリなどでは、ウエストがちよつとでも広くなればお払い箱になるので、食べたい食事



喉を通さない。それは華やかな彼女達の生活の裏側である。美樹も今、自分の犯した罪におびえながら、私を待っているに違いない。「せつかく来月号には、君で僕のイメージを世に問う意気込みだったのに——」

私は更に、一言つけ加えて、すぐに基本レツスンから始める様にいった。

「これから僕は、ちよつと外出しなければならぬ。出来上った服もう一度着てみる必要があるから、今日は少し残ってもらおう。それからヒップも出来ればもう少し、けずりたいな。ウエストは絶対だから、もし予定通り行っていない時は、ちよつと荒療治になるが応急手段があるからそれを後でやつてあげよう、……いゝね。」

「お願いします」

美樹はすつかり恐縮して深く頭を下げた。室を去りかけておきながら、

「そうそう、誰も見ている訳じゃないから、例のベルトにかゝる時は、何も着けないでやり給え、その方が効果があるから」

そうつけ加えて後も顧らず私は室に帰った。

夜の方が万事都合が良い。売り子達は一人店番を残して全部帰ってしまふ。残るのは、裁断師の岸田だけ、その岸田は用事を作つて追い帰せば万一の心配もなくなる。

しかし、私はすぐに外出せず、時計を見計いながら彼女が電気ベルトに掛るのを待っていた。

実はこつそり作つて置いた、壁掛の後の小穴からレツスン場のベルトの位置が充分うかがえる様になつていたのである。

こゝからその「のぞき」の興奮を味うのも悪くないと思つたから

である。それに又、一步進めた計画を（彼女は果している？）そんな興味も手伝つていた。はめ込みになつた、その小鏡を取ると、折しも今日まで一度も取らなかつた、その純白のパンティを下げて彼女がレツスンで上気した姿態を、そのベルトにあずける処だつた。こんな処から部分的にうかがえる光景は充分私をたのしませてくれる。まさか他人がのぞいている等と知る筈のない彼女は、忠実に私の命令を実行しているのだつた。純白の下着にはさまれた形の彼女の太股が、モーターが伝える一定の階調で小刻に振動している状態が至近距離ではないが、まるでスクリーンを通して映画でも見る様な、特別な面白さが私を夢中にさせた。

「ティンエイジ向き」にデザインした、三組の服が出来上つたのは六時に近かつた。私の店では六時に本格的な営業を打切つて、店は閉めないが店員を帰えすことになつてゐる。今日の居残りは、新米の娘だつた。予定通り岸田にはお得意様へサイズを取りに行かせた。（帰りは真すぐに家に帰つていゝ）とつけ加えておいて、私はレツスン室へ引返した。

美樹は待つていた。スタンに着せた三着の服をうれしそうに眺めている処だつた。

「さあ、サイズを取つて見ようか」

いそいそとチャケットをぬいで、薄いセターも脱いだ彼女は、急に不安な顔になつたが、かまわず、今度はスカートもすつかり脱がせると、例の巾広いベルトをはずした。そうしてメーシヤを廻した。

「ウーン、（水着）の方はいゝが（カクテルドレス）と（イブニングドレス）の方は、ちよつと無理が出来るな。」

そう云った私は、試験を受ける時の様に緊張している美樹の顔に真近く立上ると、ハツと息をふきかけた。

「どう？ 酒臭い、僕はあまり飲まん方なんだが、さつき出た時にN先生につかまっちゃつてね、こつちはまだ仕事があるのに。うまくまいて、やつと逃げて来たんだよ」

「すみません」

美樹は自分が悪い事をした様にあやまるのだった。もし、これから私が行き過ぎになつても、その時、後でつい酒の勢いで——と云う伏線を張つておく事を忘れなかつた。そんな平凡な解釈を彼女につけさせる方が、こんな私を知らないで日頃から信頼し尊敬しているに違いない夢を、一ぺんにくずさずに済む、……そんな勝手な口実をつけないでおれぬ位、まだ私に純真なところがあつた。

「先に水着からきてみてくれ給え」



「はい」

答えたものゝ、さすがに美樹は困惑して見せた。水着である以上、きている下着は、すべて脱がねばならない。しかも私は一向に動こうとはしない。この室には蔭をつくる衝立一枚も立っていない。私が出て行きそうもないので、彼女は他の部屋に行きかける。

「羞かしがる事はないよこゝで着給え」

私は、突き上げて来るおかしさを極力押えつけて、うながすとやむなく彼女はスタンからその水着をとつた。少しためらつていたが、思い切つて後向きになると下着を脱いだ。その手先がわずかにふるえている。

美樹は服を着ていれば、所謂着やせして見えるが実は全体に細作りの体は、そのよくのびた腕にも適当な丸みを帯び、厚みのある胸部、その背後は女らしい曲線が心持ち猫背の様に、肉づき、特別の表情を作つていた。その緻密な肌が淡く染つてくるのを私は見つめていたうちに、美樹はおず／＼と、その最後のものをとりはじめた。始めて見る鮮やかなスロープがよく引き締つたウエストから、突然ぐつと張り出してそれから一気に、そのまゝ、水も洩れぬ程合わされた脚線に落ちてゆく。私の視線がせわしく動く間に、彼女は大急ぎでその華かなフリースツのある水着をつけていた。

対になつてゐるケープを、あしらつて見て少しポーズを付けて見ると、すぐ又この水着を脱がねばならなかつた。御承知の様に、ピ

ツタリ体に合せた服はどんなものでも、特別の工夫がないかぎり、それをつける時よりぬぐ時の方があられもない恰好をして見せねばならないものだ。水につかつていない事がまだしも幸いであるが、實用よりも写真効果に重点を置いたこれらの服は、尚さらの苦勞がともなつた。ほんの瞬間的であるが異性の目の前で、素裸になつた羞しさ。その衝撃で美樹は、ほとんど全身を染めてしまつていた。

「さあ、今度は少し荒療治だよ」

急いでブラチアーとバンティだけ身にまとつた彼女を、私は一方の壁に設けた手すりの処に導くと、その上体を少し前かがみにするように命令した。

「そのバアー（棒）を、しっかりと両手でにぎつて離してはいけません。そう、そうして両足は真直ぐに少し開いて——」

「イヤアー」

美樹は忽ち身をくねらして手を離していた。

「急激に、不規則な筋肉運動を此処に集中する必要があるんだよ。」
適当なうそを真しやかにいつては、又元の姿勢になつた彼女の、そのくびれたウエストへ私の十本の指が這い廻ると、いそいで手を離す美樹、

「だめだ、がまんしなくては。大体、君が云う通りにベルトを締めていながらだ。明日は撮映するんだよ。」

一生懸命にたえ様とする彼女の努力も、結局私を次第に大たんにさせる結果になり、ついに手をはなせない様にと細いベルトで、そのバアーへ彼女の両手くびを別々に縛りつけてしまつた。恐らく始めて経験したに違いない緊縛。両手の自由が、きかなくなると美樹の前かゞみの体がぶる／＼と震え出した。

そのまゝの姿勢で彼女を残して私は、売り子達の室に行き、一番高いヒールを取り、ついでに店番の娘を確めて置いてレツスン室に入ると、扉の鍵を素早く下した。レツスン用のシユミーズを脱がせて、ハイヒールをはかせると、そののびのよい脚線が一段と魅力的になつた。両手を縛られているが、未だ私を信頼している美樹は観念した様に従順になつた。

しかし操ぐられてがまんしている事は不可能に近い。つい、揃えてあつた足が開いて動く。そこで一たん手首のベルトをとくと、パイプの柱に最も近い位置に連れて行き、再びそのバアーへ間隔を十糎程あけて別々に細いベルトで固定すると、彼女のハイヒールの踵が、パイプの柱を突つばるまで体を後にさげさせた。

これも順序の一つで、私の手が伸びれば、すぐその揃えた踵は乱れてしまう。そこで罰として、そのまゝ足首も、ベルトで縛りつけられた彼女は、それでも尚こんな恰好にされた危険、その羞しさをその緊迫感にまぎらわすのかの様に私の手がちよつとでも触れば笑い出す仕末で、私は押し上げてくる自分の興奮をかくす様に、きびしい声で私のハンカチをくわえている様に命じた。その嚙しめた白い歯の間から下つたハンカチも、すぐ落してしまうのだつた。そこが又、私のつけ目になつた。

「ダメだ、口を開けて御覧！」

直角に二ツ折になつた彼女の俯向いている下へ、私はかゞみ込んでその可愛い口を一ぱいに拡げさせて急いでハンカチを押し込むと、用意の端布で手早く猿轡をかけてしまつた。その張りのある真紅の布地を蝶々に結ぶと、ピンとはね返つて見事なアクセントになつた。

「やれ／＼、こちらが疲れてしまったよ」

そんな事を云いながら、わなに落ちた哀れな彼女をゆつくり観察する為、私は少し離れて椅子に腰を下すと落着いた態度で煙草を取り出した。

今や完全に自由を奪われて、声を出す事も出来なくなつた美樹は時が経つにつれて自分の今置かれてある立場に対するシヨツクが圧える事の出来ない本能的な恐怖となり、その下向きの乳房が純白のブラジャーを生物の様に動かせていた。私はギリ／＼巻きにした姿態は好みでない。ほんの僅かな道具が効果的に犠牲者の自由を奪っている姿が好ましい。彼女は切迫感に早や、涙をためていた。

「さあ、もう少しの辛抱だ。明日写す服は撮映が済んだら、君に第一回の記念のために贈呈しよう。苦しかつたら思い切りあばれてもいいよ。」

そう云つてしまつて、私は何か白々しいものをごく喉をならして飲み込んでいた。彼女はコツクリをして見せた、せきを切つた様に大粒の玉が床に落ちた。

涙があふれる美貌が真紅な猿轡の下から、押しこらした様なうめき声をもらして、黒髪を振り乱してしまつた。

私は夢中になつた。両手首の皮ベルトを一たんとくと、今度はその上体を真直に起して固定しようとした。美樹は意外な力でそれを拒んだ。私はその抵抗にあふられると、本気で力を出してその手首を出来るかぎり引き上げ、後のパイプの柱に縛りつけてしまつた。当然胸の隆起は一層張り出しその純白なブラチャ―は、突き上げられる様にはげしく息づいていた。

私は、さつきとつてやつた巾広いベルトを拾い上げると、その赤

くなつたウエストに締めつけた。こんな私の憑れた様な行動に、裏切られた絶望を見せて、美樹の目は次第に恐怖に変わつていつた。その時、私の室の扉にノツクの音がした。われに返つて飛んでいつた私は、今一步と云う処でかろうじて秘密を保つ事が出来た。何も気が付かなかつたらしい店番に残つた店員は挨拶をすると、帰つていつた。いつの間にか店を閉める時間になつていたのだつた。

私は後悔した。車を呼ぶと、残りの服は明日つける事にして、まだ泣きじやくりの止らない彼女を車で送つて帰らした。

危い処だつた、明日の撮映をひかえて私は行き過ぎになつた事を悔んだが、一步という処で我に返つた事を喜ばずにはいられなかつた。店員が来ていなかつたらきつと、彼女は明日は出て来ないだろう。締切に間に合わない事はやむ得ないが、やつと見つけ出した、そうして育てゝ来た、得難い珠玉を一気に失う事は私にとつて堪え難い打撃である。

（今夜の処は、あれまででいゝんだ、これから先はこの次のたのしみだ）そう自分にいゝ聞かせながら一方、俺も焼きが廻つたか？ そんな苦笑になつた。誰も居なくなつた店内を習慣で戸締りをたしかめてから、主の居なくなつた円いウインドのガラスをなぞてみた（いや、やつぱりあれまでで良かったんだ）

そうきめると、（明日から又、新しい工夫が必要になつて来る……）今夜の経験で一步成長した香山美樹と私の明日からの毎日が、二階に用意した寢室に横になりながら心の中で再び発展した空想を描き出していた。

しかし明日、彼女は出て来るだろうか？ 純真な彼女に今日のシヨツクは大きかつたに違いない。又そんな心配に変わった。（いや、

案外、しやしやとして来るかもしれな
い)

私はいつのまにか眠りに落ちていた。

七

翌日、私の心配は杞憂に終った。心持
ち顔色のすぐれない彼女は、つとめて私
の視線を避けながら、モードカメラマン
F氏のカメラに順調にポーズをつけてい
た。ところが撮映が済むと、思いあまつ
た様な態度で私の室に入つて来た彼女は
私から視線をそらして言った。

「今日限り、やめさして戴きます。」

「ほう、どうして？」

すつかり安心していた私は、内心いら
くして来た。沈黙が続いた。

「もし、やめさせないと云つたら、貴女、どうする？」返事がなか
った。やめさせないと云う私の言葉をどう解釈しているだろう？

「まあ、今日は撮映も終つたし、今から帰つてゆつくり休みなさ
い。それから今、映つた服は今日の記念にとつておきなさい。」

美樹はまだ顔も上げず、返事もしない。

「……………」

とうとう返事のないまゝに彼女は帰つてしまった。スタンにかけ
られた三着の服も、そのまゝだった。又一晩中心配になった。午後
からパトロンの久保幸子からの催促の電話があつた。(又荒れてや



るか……………」しかし思い返して何もかも忘れ様とつとめた私だ、そ
の夜、夏服のデザインを大量に書き上げていた。

翌朝、まだ早い。店の売り子達も揃つていないのに私は、レッ
ス室に気配を感じて扉を開けた。

「サモンピンク」のナイロンの「コンビネーション」(スリッパな
しのブラジャーとパンティコールセットが一つになっている下着)一
つの美樹の姿があつた。

「何んだ、朝つばらから……………」

思わずうわづつた声を上げた私は

「勝手な下着をつけている、又お仕置きがして欲しいのか」

と云つてしまつた。しかし、私が貸与した下着でないものを着ている彼女が又、とても新鮮で美しかった。「お仕置き」と云う言葉で急に後ずさりした彼女は一瞬、形のよい耳ぶたを赤く染めた。

(うつかりすると、彼女に負ける……それでは台無しだ) そう感じた私は

「馬鹿だな、さあ、早く服を着けなさい」

つい命令口調にいつてしまつた。

八

そして桜も散つて夏が来た。私はもう冬のモードの創造に忙しかつた。

やはり香山美樹を不幸にしなかつた。彼女も又決して私を失望させなかつた。それが証拠に今も又、私の目の前で皮紐と鎖で構成した奇妙な、「お仕置き服」を着せられた彼女がいる。

「柱まで歩いたら許してやる」と云われると、そのグリーンの猿轡であえぎながら、まといつく皮紐に足を奪われて、ころがつては又起き上り、それでも一刻も早く、こんな恰好から開放され様と懸命になつてゐる。

今日は例の基本体操を早く切り上げて、このお仕置きに移つたのであるが、彼女の横顔は明るく暗い影など少しもない。私は毎日のようにこの一刻をたのしんでいる。

壁一つ離れた店では、今では十五人に増えた売り子達のいそがしい店であるのに、こゝは別世界なのである。狭いが二人だけの秘密のレッスン室、誰にも見せないこの室内に、今日までの美樹のフアッション・モデルとして成長してきた歴史? が並べられている。

清潔を命じられている衣類、色とりどりの猿轡、絹紐も、ロープも皮ベルトも、くさりもある。釣り籠も折檻椅子も——まだく美樹を泣かせる道具はこれからも増々ふえることだろう。

しかし鞭だけは、見当らない。いや今後も備えないつもりだ。何故なら私は鞭が、きらいである。それからもう一つの様に店がいそがしくなつても、私の専属モデルはこの美樹一人で充分だと思つてゐる。

(おわり)

伝言板

○懸賞原稿応募作品中、要返却作品は既に返却致しましたが中に目下検討中のもの数篇保留しています。

○佳作品に対する本誌の贈呈は本月号より開始いたします。直接購読者の方はその分だけ延長することになります。

○中康弘通先生は急病にて御病臥中でありますので、連載中の「切腹研究夜話」は一時中絶のやむなきに至りましたが、御快癒の上は引続いて御執筆下さる筈であります。

○坂口潤子さま、三月十四日附

の御礼状恐縮です。御連絡が急でしたので、御希望の通信を整理する暇がなく残念でした。若し御事情が許すならば呼び掛けに対する御返事は是非お寄せ下さるようお待ちしております。

○児島輝彦氏へ、雑誌並に転送書状、返戻されてきました。御差支えなければ連絡場所御指定下されたく存じます。

○由利瑞江様、御指定の住所は連絡がつきませんね、御希望は拝見しました。

○沼田扶二世様、今迄沢山原稿を頂いていますが、重複したり発表出来ない個所があつたりで惜しいと思います。お暇を見て新しい出来事を書いて下さい。

私の好きな縛られ方

川端 多奈子



事まで書いてありました。そして最後には今迄お便り下さったの方を書いていると、同じように貴女を全裸にして縛り上げて、そして——という色々の場面を書かれてから、是非私にも貴女を縛らせて下さい、という文句で終わっていました。

こんなお手紙を今迄幾回となく貰っているのに、やはり私は何かの期待を持つてお返事を書いてしまふのです。私という女はなんとこの浮気者なんでしょうか、「川端多奈子」と印刷した小型の名刺を同封したりまでして——。

又、或る人からは「川端さん、貴女は本当は、辻村さんか塚本さんの奥さんじゃありませんか、若しそうだったとしたら、なんとサジスツクではありませんか、自分の配偶者をモデルにしてポーズをつける。そして雑誌の口絵を飾る。」と、そして「でも、やはり私達読者は貴女が娘さんであつた方が嬉しい」と結んであるのもあ

りました。

私は、これから「私の好きな縛られ方」を書こうと思いつく、つい、その反対のつまらない縛られ方をした事について、最初に書くような事になつてしまいました。以前にも書いたかと思いますが私は縛られるモデルをしている中に次第に不満になつてきました。それは写真撮映に至るまでに色々と準備の時間がかかり、さて痺れると直ぐ解かれてしまふからです。もつと長い間、後手が痺れるくらいきつく縛つておいてほしい。私の思いつかないような苦しい縛り方で一時間でも二時間でも縛つたまゝにしておいてほしい。とそう願つても、色々の変つたポーズを撮るためには、一つのポーズで長い間放つておかれることは殆どありませんでした。

「こういつた不満から私は誰か読者の中のマニアの方から、モデル対撮映者というような関係を離れて純然たる遊戯として一度縛つて

五月号の読者通信で岡田芳夫さまが私に「私の好きな縛られ方」について書けとの御注文でしたので、又とりとめもない事を書かして頂きます。四五日前、東京の或る読者の方から大変熱のこもつたお手紙を貰いました。私に対しての私信でしたので、そのまゝこゝ

に書くわけにはまいりませんが、大体今迄私の書きましたつまらない告白に対しての御賞讃の御言葉でしたが、私の縛られた写真を見ながら告白文を読むと大変興味があるというようなことでした。勿論、お手紙は私信ですので、私が読んでいて顔の赤らむような

ほしいものだと思うようになりました。幸い私の手元には全国の読者の方々から送つてこられた「貴女を縛らせてほしい」という便りが沢山ありました。

私が何度も躊躇した挙句、最初に訪ねて行つたのは神戸某氏のところでした。忘れもしません、昨年の二月、関西に初雪の降つた日曜日でした。私に賞讃の限りを尽した手紙を下さつた方はどんな人だろうか、二十六才、独身、そういった文句が私の心を強く捉らえていたのも事実ですし、いろんな夢や空想も抱いていた私でした。今迄相手の人の容貌の美醜について余り念頭に置いていなかった私は一べんに風船がしほむように幻滅の悲哀を抱いて自分の浅墓さをなげきました。

世の中の限られた男性にしか接していなかった私も、世間には優秀ささまざまな男性があるものだと気がつきました。手紙では美辞麗句を並べたてながら余りにも貧相な相手、それにもまして、文面の勇ましさに似合わず、余りにも内気なオド／＼とした態度。男性といえど、圧倒的な精力で女性の総べてを拘束してしまうものだと思つていた私は、サジストと自称される方の余りにも意気地ないのに歯がゆくさえなりました。

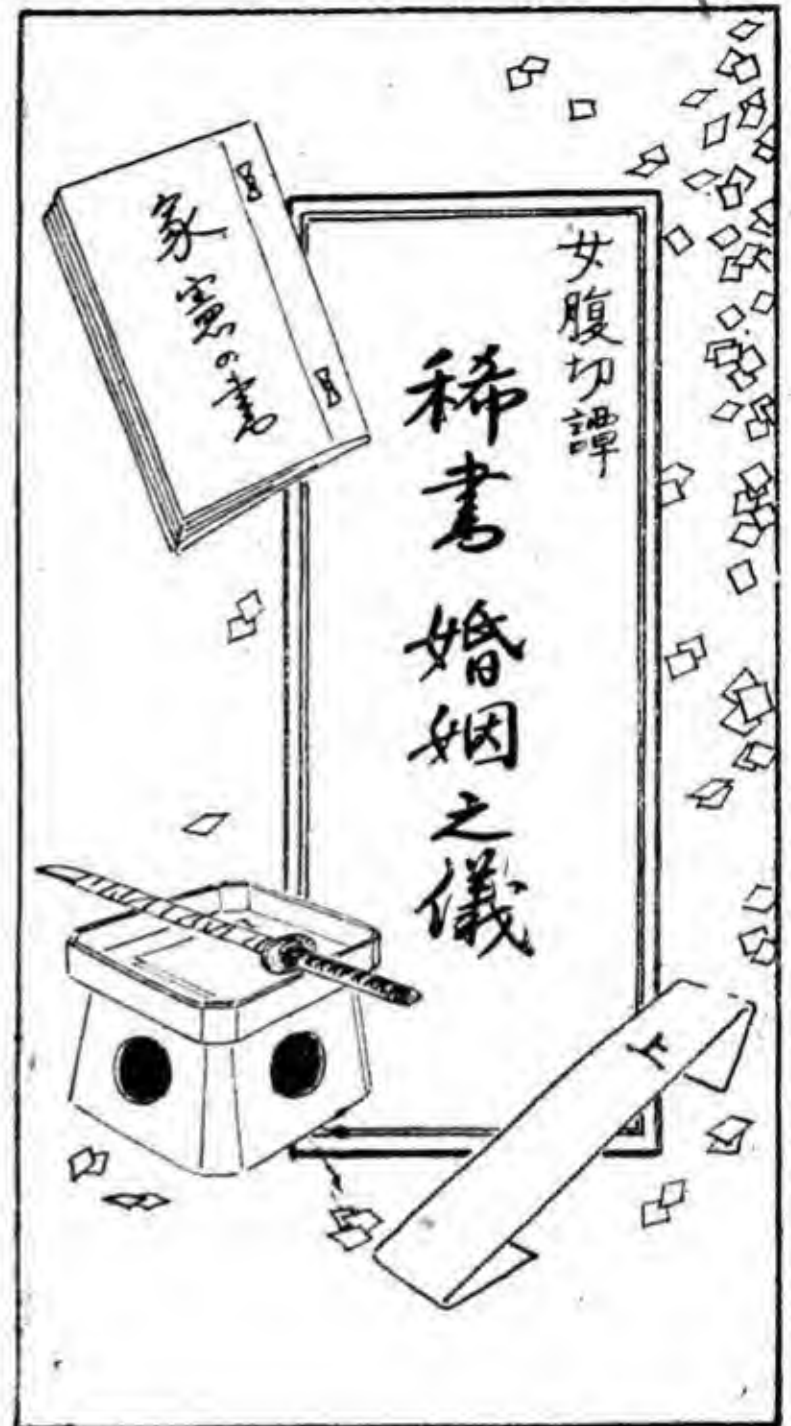
「縛らせて下さいね」と猫なで声で私の手首を持つ手もふるえていゝるではありませんか、そして、縄を胸へ一巻きする毎に「痛くないですか？」と駄目を押すのです。最初から縛つてもいいといつてゐるのに、なんというシレッタさ。どんなヒドイ事をされるんだろうか、と内心ビク／＼しながらも心の奥底で期待していた私も、これですっかりイヤになつてしまいました。イヤになつてしまうと不思議なもので、矢も楯もたまらず帰つてきてしまいました。縛られる事を求めて、わざ／＼神戸くんだり迄訪ねて行つた私の浅墓さ、そして、その夜はもう二度と読者の所へ縛られになんて行くまい、と決心しました。

然し皮肉なもので、私がそんな決心をしたにも拘らず読者からの便りはあとも切らずに私の手元へ送り届けられてきました。そして各地からの各種様々の御手紙をゆつくり何度も繰り返して読みます。奇譚クラブの文章や写真、絵なんかを読んだり見たりした時に感じた胸内のうずきとは別に、読者からの便りは私の心を捉らえましました。その中に一通、座談会に出席された方からのがありました。私はその方をよく覚えていませんでしたが、その方は私の事を細かく便箋五枚ばかりにぎつちりと、それこそ初恋の人に対するような甘い言葉で綴つてあるのです。

私は早速、座談会の時皆で一緒に撮つた写真を三枚貰つてあつたので、手紙を呉れた人はどの人だろうかと探しました。色の黒い大柄な人で何んだか不潔なようで好きになれないタイプの人だつたと

思い出されました。妻を亡くして只今独身だといふ乍ら、四十を越した年齢が、私には嫌なものを感ぜさせました。——私のような小娘を縛つてどうするのだろう——

座談会に出席した人、というので一応気をひきましたが、私は思い返えして、次の手紙の封を切つていました。——貴女のような美しい縛られた女体は今迄見た事ありませんでした。——歯の浮くような文章は、今迄幾度となく中には余りの美辞にそら暗記する位読んだのもあります。それでも又変つた人からの便りですと、宇頂天になつて読んでしまうのです。編集部で切手は負担しますから出来るだけ返事は出して下さいね、——そう云われて、最初はお仕事のように書いていた返事も此の頃は、自分の意志で書いてみようかなア、と思うようになりました。そして、私に來た手紙はなんであつたでしょう。(未完)



瀬川泰子

九月ごろでしたか、店頭で「奇ク」をはじめ立ち読みし、女腹切りの三態の図がアート紙に印刷されているのを見、名状しがたい昂奮をおぼえて以来、毎月「奇ク」を購読して居ります。

総目次によつて、前の号に切腹に関するいろいろの記事がある事を知りましたが、入手の方法なく、それでも、新宿の追分にある書店に旧号の「奇ク」が保存されてあるところに偶然ぶつかり、五、六、七月号を入手することができました。

特に中康弘通氏の含蓄のある御研究の筆の跡と、亀岡絃七郎氏の「女腹切八景」、川合伊都子様の記事は興味と示唆に富むものとし

て、面白く拝見して居ります。(信太蓉子様の「開花の契機」を読めないのが残念です。)

十二月号ならびに新年号と、女腹切りに関する記事と写真が躍進的に増して来たことを、大変心強く感じて居ります。

私もその翼尾に伏して、つたない研究の一部と体験とを綴らせていただきたく筆を執りました。私は本年三十四歳、五尺二寸八分、十四貫六百匁昭和十七年結婚翌年一子を設けました。夫はT大卒で仏教美術史の専攻をもつて、唯今S大学に講座を持つて居り、私はN女大の国文学科卒でございます。

私が、女腹切りに関心を持ちはじめましたのは昭和二十年八月十一日の夜でございました。

私どもは、前年の六月、夫が特別研究員として満洲国に、二年間の長期出張を命ぜられました関係で、新京に移つて居りましたが、八月九日未明、ソ連戦闘機の不意打ちを受けて、日ソ断交に入つた恐ろしいあの日を迎えねばなりませんでした。

夫は徴集免除の恩典を受けて研究生活に入つては居りましたが、ソ満国境は、急激に敗退の色濃く、新京はいつ市街戦の只中にまきこまれるかも知れぬという騒ぎとなりました。

在郷軍人は、自衛隊を結成して、市街戦に対処するという形勢に突入しました。関東軍司令部は、市民を放置して通化に転進という無責任さを暴露したのもこの時です。自衛隊結成の段取りが決つた

のが十一日——明日は、夫と離れ離れにならなければならぬ運命の日でした。

すでに婦女子の南下避難の行動も開始されては居りました。朝鮮が大連か——いずれかの道をとつて日本への避難が企図されたわけです。

しかし、私は幼いひとり子を抱えて、夫を新京周辺に残して日本への脱出を敢行する気にはどうしてもなれませんでした。

私は、不幸にして夫が斬り死にするかもしれないこの新京の地でやはり生死を共にしたいと願つたのでした。

十一日の夜——私たちは、それが、あるいは最後の夜となるかもしれない感慨と愛情と昂奮とをこめて、すごそうとしたのです。

夫は、

「敗戦の常として、女は異常な覚悟が要るかもしれん。最後はもちろん死あるのみだが、子供を殺して自害するということは、よほどの勇気が必要だろうと思う。できるかね？」

と、私をはげしく見つめました。

「その場になれば、立派に死ねると思いますの。」

と申しましたが、自信も知識もあつたわけではございません。

「頼むよ。」

と、夫はいたわるように言つてくれました。

夫は剣道四段で、古刀の大小を学生時代からずっと身邊に持つて居りましたが、

「こいつは明日腰にぶちこんで行くから、短い方を残して行くよ。いざという時には、これを使つてくれ。」

と、一振りを私に握らせました。それから書齋に立つて行きまし

たが、二冊（上下）の写本を持つて来て、その中の一部を開いて読んでみると申します。

それは、「婚姻之儀」と表紙中央に筆太に書かれた分厚な本で、奥書には

此抄、加藤甚左衛門聞書也。以自筆本、書写校合畢。尤可成証本者也。

宝永二乙酉之歲如月中浣

素念（華押）

とあり、約二百五十年前の古写本でございます。夫の書齋には、美術関係の本を中心として古典物、和本がビツシリとあり、私も夫の著作の手伝いがてら、相当に書齋の本は見たつもりで居りましたが、これははじめて目に触れるものでございました。

夫が開いて示したところには「床入りの儀」と見出し書きがございました。

私は読みはじめました。そして、この切迫した別離の一夜に、この書は私の肉体と精神の中に、新しい息吹きを与えてくれることとなつたのでございます。以下、原文のまゝにそれを記してみます。

（句読点は筆者）

一、床入りの間に入るに先だち、隣の小間にて衣裳を改む。この時、女仲人諸事をまかなふ者也。

一、胸より腹にかけて白羽二重を二重、白木綿を三重に巻き、布端を背中にて巻布に挟み、白無垢、襦袢二重を着用。白襦子の胴巻きを以て帯とし、二重に締め、左脇にて結束。

一、新婦は新夫に先だち床入りの間に入る、これ儀法也。女仲人新婦を導きて、床の間正面に坐せしむ。寝具は、床の間より一間下

りて敷くを法とす。

一、床の間正面壁間に八幡大菩薩の一軸を表し、左右三宝に松柳を配す。正面やゝ下りて三宝二基を並置し、左は家憲の書を載せ、右は奉書紙半折の上に短刀を横たふ。

一、新婦の席、三宝に相對して右に在り。女仲人退室すれば、やがて新夫入来。三宝に相對して左に坐す。

一、兩人、上段掛軸に對して一礼。了れば新夫三宝二基を取り下して、家憲の書を己が前に、短刀を横たえし方を新婦の前に据ゑて初めて相對す。

一、新婦少しく低頭。この時、新夫家憲の書を読み聞かすべし。

一、了りて新婦、三宝を捧じて、再び正面軸に對す。三宝を前に据ゑて礼拝。了りて白無垢表衣の兩袖を脱し、左脇に結束せる胴巻の端を緩めて、やゝ下し、細腰のあたりにて結束すべし。

一、次で、三宝の短刀を刃先を向ひとして左手に取り、右手に半折の奉書紙を取りて、右膝上にて刀身を巻く事九重。刃先一寸を現す。

一、次で、右手に持ちかへ、裾袈上より、左脇腹に刺し、一文字に臍下一寸のあたりに引廻し、一息の後、右脇腹に引廻して止む。

この時、紅絹糸一筋ほどの切り傷をつくるを法とす。

一、了りて、短刀を三宝に還し、兩袖を入れ、胴巻を元に戻し、衣裳を正して正面に再び礼拝。新夫は横より之を檢視する形也。

一、次で、新婦座を立ち、やゝ低頭のまゝ室一隅の屏風囲ひの中に後退隱身すべし。

一、新婦、衣裳を解き、白木綿、白羽二重の腹巻を脱し、再び衣裳を整ふ。この時、白襦子胴巻を紅絹に変ふる也。

一、白木綿腹巻を一尺幅に畳み重ね、その上に白羽二重腹巻を重ね。この時、白羽二重の血一文字につきたる方を上に載するが法也。

一、次で、之を捧じ、新夫の前に進み、家憲の書を載せたる三宝の上に置きて一礼すべし。

一、新夫、之を受けて、三宝を神前に還す。この新婦の切腹の儀法は、生家旧姓の縁を断ち、新たに婚家に命を賭するの儀にして夫唱婦隨、以て弓矢八幡の道を全うせん意也。

これがその部分の、原文通りの抜き書きでございます。原文は全部で百八十三枚の雁皮紙に書かれたもので、婚礼の諸儀について、事細かに記されたもの。右に示しました文の後には、いわゆる「初夜の契」の筆が進められて居ります。

夫は、私が読み終るのを待つて、

「それを読んでもらつたのは、いざという時のお前の行動に、なんらかの力を与えてくれると思つたからだ。」

と言ひ添えました。

夫はそれから、女腹切りの実例を、史上の人物についていろいろと語つてくれました。亀岡絃七郎氏がすでに書きになつた「礼津女」の話も、その中にあつたことを思い合せます。

結婚の初夜に、切腹の儀式が床入りに先行し、白い肌を一文字に薄く傷つけて後、夫の愛撫の中に一切を托して行く武士の新妻のういういしい健気さと、之れが初夜の昂奮の中に行じられるという性の香り高さと切り離せない事実であることを知つて、私は嘗てない……昂奮状態に酔つている自分を発見したのでございます。

「死を執行する場合に、木綿の腹巻を幾重にもしては、恐らく

女の力で、見事一文字腹は切れまい。たとえ切れたとしても、それは致命傷をつけることは不可能だと思ふ。だから、万一お前が死をもつて女の誇りを護らねばならぬ場合が来た時には、盛装をして端坐し、臍下を思いきり一突きして切腹に代え、二の太刀は乳下につけて前に倒れればいい。やはりお前には、一応、切腹の形式をとつてもらいたいな。」

と、夫は目を輝かして申します。

夜は静かに更けて居りましたが、近くの公園から、対戦車壕を掘りつづけるシヤベルの音が、かすかに聞えて、ただならぬけはいの切迫を感じさせて居りました。一刻一刻が惜しまれてならぬ貴重な「時」の足音が、心をゆさぶつて参ります。

燈火管制用の電灯は、狭い範囲に半円の薄い光を投げて居ります。枕もとには、防空服装が畳み重ねられてあり、閉めきつた夏の夜の部屋には、薄く汗ばむほどの暑さがたちこめて居りました。

読み終つた私の異常な興奮を、夫はいち早く見てとつたにちがいありません。私はカツと上気するような気持と同時に、腹から太腿にかけて駆けぬけて行くゾクゾクするような一脈の性気を感じとりました。

夫は、いきなり、坐つたまゝの私の体を、横抱き……



にかゝえこみました。……私は呼吸もつけぬほどの思いで、夫の腕に背に力をこめて縋りつきました。「今夜はなにもかもしよう。心おきない時間をすごそう。いゝね? いゝかい?」

と、夫の熱い息が耳もとで、押しつぶしたようにひびきました。私は夫の胸の中に顔を埋めたまま夢中になつてうなずきました。夫は私の顔を両手にはさんで、まともに眸を見つめ、

「切腹の練習をしてみるんだ。見届けてやる。お前のその姿を、胸の中にはつきり刻みつけて行きたい。やつてくれるか？　してみるね？」

と鋭く言い寄りました。夫の目の中には、はげしいもの、燃えあがるものがキラキラと輝き、私は瞬きもせずに、それを見返して居りました。

私は、「えゝ」と低くつぶやきながらうなずき、夫の腕を強く握り返すと、簞笥の方に立つて行きました。晒木綿は三段目の抽出しに入っていたからです。

私はそれを取り出し、簞笥の方を向いて立つたまゝ、扱紐しごきを解いて浴衣寝間着の前をはだけ、木綿を腹に巻きつけようと思いました。その時、静かに素早く後に近寄つた夫は、

「俺が巻いてあげる。」

と言うなり、木綿を取りあげて、私をグルリと正面に向けさせ、夫は両膝立ちになつて私の腹に二廻り三廻りと巻きつけてくれました。上は心窩みみちのあたりにかかり、強く巻きつけられた布のために、乳房がグツと張り出している感じになりました。夫は、布を次第に下に巻きつけて行きながら、お腰の紐に手をかけてブスリとそれをほどいてしまったのです。お腰は太腿を滑つて、あつけなく私の足許にずり落ちて行きました。結婚生活三年、その間に、私たち夫婦はこのようなポーズで対い合つたことは初めてでございました。私は、思わず小さく羞恥の叫びをあげ、手はおのずと……すうような形で動いたのです。

夫は、邪魔になる私の手を静かに払いのけながら、布を更に巻きました。私は、手の置き場に窮して、夫の両肩に、交えるような恰

好で置いたのです。布の下端は腹部全体をキツチリと覆いました。その巻き広げられた布の上から、腹のふくらみは、なだらかに、しかもモツコリとながめられました。夫は巻き終ると、突きあげられるような激情をこめて私の……抱き、……頬をつけて、しばらくは放しませんでした。

新しい官能の夜が開かれるのだ、そんな疚きが、……夫に抱きしめられながら、私の全身を駆けめぐつて行きます。

間もなく私は真白なシーツの上に正坐し、夫は真正面に坐りました。短刀は新しく切つた木綿で巻き刃先を前後あらわして右手に持ちました。

「本当に切つてしまふんじゃないよ。傷をつけるんじゃないんだ、わかるね。」

と夫は、左手で浴衣の胸もとをくつろげた私に何度も念を押しました。扱紐しごきなしに着た浴衣の前は、簡単に腹の下まで開けました。太腿……も夫の目に触れて居ります。

私は、夫の昂奮した顔を見つめながら、左手でゆつくり左乳下から腹一帯にかけて四、五回強く撫でさすりました。夫の目が私の腹を中心に吸いつくように注がれているのが、不思議と、私を壮烈艶美な一幅の画中女人を以て自認する幻想に拍車かけてくれました。

右手を左脇腹の上に持つて行き刃先を静かに布に触れさせ、左手の五指を揃えて、そのすぐ横を強く押しつけながら、腹にグツと力を入れるのと、体をやゝ反らすように腹をせり出すのが同時でした。一瞬、私は目を瞑つたような気がしますが、私はやはり夫の表情を見通すまいとして居りました。このわずかな心の動きを追いかけるように、右手に震えるような力が入りました。自分の肌白い腹

に、みずから冷たい刃先を加えるという未知の官能の剔抉に、私の右手は打ち震えたのです。

その震えに、夫との初夜の抱擁をすぐ連想させました。恐怖と、探求の好奇と、あの全身を包む圧倒されるような震え——「女体の開眼」の突端に立つて味わったあの甘美な戦慄が、私の右手から、今まさに盛りあがった腹に伝わりうとしている——快美はすべての一点に集中されている——私は、腋の下がわずかに湿っているのを感じました。

この一瞬は、すでに三年前に開眼された私の「女体」の第一の革命を現前するかもしれないぬ貴重な契機を孕んでいる——私は、刃先を布に触れさせたまゝ、ほんのしばらく、押し寄せ、高なり、滲透する想念をジツと見つめる思いでした。

しかし、それは恐らく瞬間のことであつたにちがいません。腹にグツと力を入れ、上半身を少し反らした一刹那の後には、刃先は布の中に突き刺されていたのであります。

夫はスツと体を乗り出しました。——深く切りこんだのではないか？——夫の心を、そうした思いがかすめて行つたからにちがいません。夫は咄嗟に私の表情を盗み見ました。私の眸は、うろたえずジツと夫の顔に注がれていたのです。夫の目は、すぐ私の腹に注がれました。

私は、表情を崩さず、うろたえもしませんでした。刃先はたしかに白い肌を破つたと直感しました。チクリという痛みが、そのまゝ快感に連なり、私は腹部を中心にして得も言えぬ刺戟に突きあげられたのです。

私は、右手の手首を腹に当てがうようにしながら、そのまゝ静か

に、しかも激みなく臍下一寸のところまで引廻しました。布は一文字に切れているにちがいません。臍の真下で一旦止め、それから右脇まで一気に引廻してグツと力を入れました。

その時、夫の嘆声が、

「見事だ。立派だよ。」

と小さな叫びになつて私の耳を打ちました。が、高揚され、飛躍した私の快感は、まだ刺戟を求めて荒れ狂つて居ります。私は、この刃先を一体どう処理したらいいのか私の腹は、わずか数秒の烈しい嵐をかきたてる広さしかないのか——こんな強烈な官能の悦びが一文字に傷つけられた五、六寸の線分の間から遁れ去つて行くというのか——私はそう考えながら、グングン心の中に膨れあがつて来る狂暴な性感の行く手を見守つて居りました。それは瞬間を積みあげつゝ私の右手に結集されて参ります。右手は、ブルブルと震えました。

私はいきなり刃先を離すと、臍の真下、布の下端にグツと突き刺したので。そこはすでに………べき場所でございます。

立ちながら布を巻きつけてもらつた時には、その部分がほとんど陰れるほどでしたが正坐する時、細腰の高さに引つ張られて、少し上にずれて居りましたから、布の下端は、………すれのところに位置して居りました。刃は上を向いて居ります。私は、少し腰を浮かすようにし、拇指を開いた形の左手で左腹を強く抑え、グーツと臍まで切り上げました。手応えは、横一文字の時よりも微弱で、ほとんど傷痕はつかなくかつたかと思われ、臍の真中で刃先を止めると、刃を右にして、尖端を強く突き立てました。烈しい刺戟が、臍の奥の方からジーンと伝わり、その時私ははじめて、短刀の突き立

つてゐる自分の姿を見たいという、抑えがたい衝動に襲われたので
す。

腹は、真白な布の下で弾むように波打つて居りました。想像した
通り、横一文字に布は切れて居ります。臍に突き立てられた短刀の
切っ先は、冷たく七、八分のぞかれます。そして、鋭く尖つたあの
刃先は、白布の中に没しているのです。私は、思わず、

「ああ。」



と嘆声を洩しました。乳房は円く張り出し、乳首はポツツリと立
つて居ります。

夫は、急にすり寄ると、私の背後に廻り、立膝の姿勢で、私の顔
を仰向けに抱き、喘ぎながら烈しい口吻を繰返しました。

「すばらしぞ。はじめて見た。お前のすばらしい姿を、はじめて見
た。」

夫の囁言のようなことが、途切れ途切れに聞えます。私は、一

刻も早く布を取つて、肌をじかに見てみた
い気持にかられて参りました。

「布、取つて下さる？」

口吻の嵐の中で、やつとそれだけが言
えたのです。夫は、背後にピッタリと体をつ
けるようにして、布をほどきはじめました。
私は短刀を枕の側に置き、一巻き一巻
きほどかれて行く布の下から、どんな光景
が現れるか心ときめく思いで見下して居り
ました。

最後の一巻きまでほどかれて、その白布
の切れ目から薄く血がにじんでいるのが見
えた時、私はその血の色に、改めて際だつ
た興奮をおぼえました。私はグツと腹に力
を入れてみました。心窩から臍の真上まで
は、すでに肌があらわになつて居りました
し、力を入れると、その肌と白布の境目あ
たりから腹部が弾みを孕んで盛り上がり、

血は少し幅広く滲みだしたような気が致しました。かすかな疼痛がその下で波動のようにうねっている感じてしたが、見下す肌色と布の白さと血の赤さ、そしてその下にわずかにのぞかれる黒い色調は、疼痛を越えて、うずくような心の高まりをおぼえさせるのです。夫の手が腹や脇腹に触れる度毎に、ビクツとその………しい速さで高揚して行きました。

ほどこき終つた素肌の腹には、上部はカツキリと一直線に、下部は一分から三、四分ぐらいのジグザグの幅を持つて、真紅の血が滲みだして居りました。

「こんなに切つたのか！」

夫は、横からそれを見つめ、驚きの表情で小さく叫びました。その目は、私をいとおしみ且つ讃嘆する複雑な光に輝いて居り、その底にあらわな………烈しさがたたえられていることが、私にははつきりと感じられるのでした。

下から切り上げた線には血は滲み出して居ず、白っぽい線が細く臍間で這い上つていただけでした。

「痛いだろう？」

と夫は、その処理にちよつと窮しているふうでしたが、私は、「ちつとも。………うれしいの。あなたに見届けていただけて、とつてもうれしいんです。私、大丈夫ね。立派に自害できますわ。」と夫に微笑みかけました。

夫は、急いで、今ほどいたばかりの白布を、二巻き強く締めつけました。

「立派に死ねると自信がついたんだけど、離れたくない。いやよ、今夜つきりで別れるなんて………」

私は夫に縋りつき、夫の強い力の中に喘ぎながら崩れて行きました。

しかし、私たちは、別離の不運を体験せずに済んでしまったのでございます。

翌朝、児玉公園（終戦後、児玉大将の銅像は取り毀され、名も中山公園と変りましたが）に集結した自衛隊は、夕方になつて一旦解散と決まり、別命を俟つことになつたからでございます。この時、斬り死を覚悟で、集結に先だつて妻をみずからの刀で斬殺して来た青年もあつたと夫は話してくれました。当時の事態が、市民に与えた切迫感、この一事によつても想像されると存じます。

この自衛隊は、別命を俟つまでもなく、十五日の敗戦を迎えました。そして、満人の暴動、掠奪は、その夜から始まりました。食糧確保の見透しの困難、身辺にたちこめる不安、さらに——八月二十三日、ソ連軍進駐による一層の暴圧と騷擾——この新しい敗残の日々の中で、私たちは、恙なく生き抜くということで精一杯になつてしまつたのでございます。

私の腹の傷は、一週間目ごろには、むずがゆさをそそつて、一種異様の快さを感じさせましたが、終戦後、まる一カ月も夫婦関係を断つていた私たちでしたので、このことは夫に話そうとも致しませんでした。

あの不安と恐怖の一カ月あまりの日々は、私たちから感情を奪い去つていたと申すより外はございません。私たちは、どちらかと申しますと、………短い時間に單的に目標とするというよりは、より多く雰囲気を尊重し、そうした雰囲気の高まりの果てに行為が設定されるという比較的時間をかける方法を試みて参りました。

ので、あの打ちめされた敗残のどん底的精神生活の中では、どうしても慾情するところまで氣持が入って行けなかつたのでございましょう。

それからの抑留生活の一年間、さらにそれに続く引揚げ後の二年あまりは、生活の安定を取りもどすための苦闘の連続でございましたので、特に申しあげることなく過ぎてしまいました。

二十四年春、夫は大学に専攻の講座も持ち、執筆と講座に昔のような世界を探り当てまして以来、私たちの間に、あの時の女腹切の忘れがたい味わいが常習として行われるようになったのでございます。

刀は、ソ連進駐の折、日本人所持の銃砲刀剣類の完全没収にあいすでに手もとにはありませんでしたが、二十四年暮に、九寸三分の短刀を新たに求めました。黒漆に螺鈿散らしのものでございます。

しかし実際にこの刀を用いて、腹に傷つけるまで強く切るということは、ほとんどありませんでした。それは、傷痕のある私の腹を見るのを、夫が好まないからでございます。無傷の、なめらかに張った腹——これが夫の好みらしく見受けられます。

それでいて、夫は私の切腹を要求しますし、また私自身も、切腹による腹部への刺戟的魅惑を離れることができません。そこで、杉を削って作りあげた木製の短刀を常用することに致しました。刃にあたる部分と尖端は非常に薄く鋭く作りましたので、それが腹部に与える刺戟はかなり尖鋭に感じられます。

その後の腹切に関しての一つの変化は、私だけがそれを用うというのではなく、夫もまた、同じ腹部の刺戟を味わうようになったこととでございます。対坐して、一方がそれを行う場合、相手……

こちらにもひびき伝わって来るような隠微な連結性——それを相互に味わう機会が多くなつた事実に気づくのでございます。

しかし、多くの場合、腹切の主役はもちろん私でございます。夫は副次的な立場にあつて、相互の……を高めるというポストを守つて居ります。

木製短刀を用いるようになってからは、素腹の上に直接用いることになりました。姿勢は正坐するか、又は両膝立ちで、やゝ股を開き、いずれも、腹部を十分に張ります。新年号にあります「女性切腹の擬態」の三葉の写真のように、膝を崩すということは絶対に致しません。腹部に横皺が入り、力が充実しないということは、私たちの好みに合致しないからでございます。張り切つて盛りあがつた白い腹——これが、絶対の条件のように思われます。

最近では私の切腹の場合、夫は私の背後に接着して位置する場合が多くなりました。そして、後から右手を廻して、短刀を握つている私の右手に軽く持ち添えるか、又は左手を廻して、短刀の尖端によつて、凹みながら押し進められて行く腹部の線を辿るという方法をとります。

また、ある場合には夫に切つてもらふという方法によることもございます。この時、私の情感には、自害形態とはちがつた一種の氣分的高揚が加わつて来ることを否定し得ません。

さらに、接近して差し向いの姿態で、臍あるいは腹部を刺し違える形で行うこともあります。しかし、前記しましたように、切腹の主役はどこまでも私自身であるということとでございます。

「悩ましき切腹悲願」（児島輝彦氏）は興味ふかい読物として拝見いたしました。一切腹の男性美、悲壮美、凄惨な自虐、甚しい露

出的傾向から見ても、切腹は所謂女性のもではありません」とある一条は、「切腹」に対する美学的断定としては、一方的すぎる感じを抱かせられます。

本来脆弱だと考えられ、男性からいたわれ愛される受動的な立場にある女性が、みずからの肉体に刃を加えるという「けなげさ」、それ故にこそ、「筋肉と力の象徴」と考えられる「男性」の切腹とは比較にならぬほどの悲愴凄絶さを感じられ、切腹を美感として思索した場合「切腹は所謂女性のもではありません」という断定が、思量の狭さを語るものであると存じます。

切腹は、いかなる場合にも、本来的には「死」を目指し「死」を内包していると言わなければなりません。

相手になしに独りで行う自害形態は、児島氏の書かれたように、たしかに「手淫」的情感の世界であり、刺違えは「相互手淫が相互口淫」的情感の世界だと見ることができましょう。そして、それが「死」を内包しているということによつて、生命の極限を代償とする「性感の最絶頂」を勝ち取ろうと悲願に裏づけられていると私は考へて居ります。そうだからと言つて、それが男性特有の世界だとは申せません。

私たちの場合、切腹の実技は、必ずと言つてよいぐらい「……」の実技をも伴いますし、それは、「男色」における場合とは違つて、正常な前戯あるいは補戯であると考えられますし、二つの実技が平行することによつて、性感は一層高められると見ることができましょう。

夫に切つてもらふという行為の中には、「死」を賭けて、愛する人の性感の中に斃れ伏すという、性感と愛情の極致に身を投げだして帰一して行く想念が私にはございます。また、そういう私自身を「けなげにもいとおしい妻」として実感してくれる夫の気持があるはずでございます。

私たちの場合、切腹の実技は夫婦生活の大きな部分を占めて居ります、そしてそれは、生活全般の信頼感と愛情を基盤とし、さらに

またこれを強める役割を果していると言ふことができます。

ありていに申しますと、私の場合は官能としての切腹は、腹部（臍およびそれから下の部分に限定されます。臍上一寸という切腹例は、私の場合それほどの快感を呼びません）に対する尖鋭な刺戟に尽きます。血を見るといふ視覚的な要素はほとんど望みません。従つて川合伊都子様の「野薔」「草木瓜」に書かれました「血糊の氷囊」は一度も用いたことがありませんし、また十歳の子を持つ家庭として、それは不可能でもございます。

部屋は、極くわずかな光だけで、あらゆる視覚的世界を避けることも私たちの一つの条件でございます。それは寧ろ触覚的、幻想的要素に貫かれたものと申すことができます。

切腹の実技を設定する条件として、川合伊都子様の「紅花草紙」の筋書や、亀岡絃七郎氏の「女腹切八景」の諸場面は大いに刺戟剤になります。が、「草木瓜」の中の「凌辱」を前提とする構想は、あまりに汚辱的で、私にはどうしても好ましく思われません。「腸を手繰出し殊に子宮など掘み出し引き千切つて踏み躪つてしまいたい気持」というところまでは行かないのでございます。

児島氏の挿絵にございます男性切腹の図でも、腸がはみ出しているところは、かえつて快感を削がれる思いが致しました。

八犬伝「伏姫立腹の図」の目付き、力のこもつた腕、月岡芳年筆の錦絵「烈女自害」の釣り上つた目、白い肌、腕などの筆致が寧ろ快感をそそります。その目付きは、歌麿以下溪斎榮泉に至る春画中の表情と全く一致することは見逃せないと存じます。しかし、いずれも肝心の腹部があらわに描かれていない物足りなさは、どうすることもできません。

夫の専攻の関係で、いろいろ絵を見る機会がございますが、「露出症、サド、マゾ、自虐、窃視症」等を統括し、的確暢達の線をもつて「美感」を盛りあげた作品には、ほとんど接することのできぬさびしさを痛感致して居ります。

のない死体の場合でも結構人形の様な女体を様々な姿態にして思うままなぶる、あの怪しいまでの描写を考えただけで夢中になつてしまします。何卒今後こう云うストーリーで編集に当られます様にお願い致します。(酒井生)

○ 前略御免下さい。小生、貴誌四月号入手して非常に興味深く読了致しました者で、貴めのアイデアを募る、という欄をみましたそれを左記に少し書かせて戴きます。しほり画は慣れすぎて、新鮮味がうすくなつて来た様に思いますので、こゝらで逆に簡単な手錠も等のはいかがでしょう。小生が昨夏、前橋市内で実物を見たのです。夏、洋服の可愛い娘さんでした。夏のことです。肩から手の出ている美しい手首に手錠をかけられてうつむいて連行されて行くところでした。

所によさがあるのだと思います。もう一つは鎌倉で二、三年前みただもので、これは遠くでみたのです。すからはつきりしません。何でも指名手配中の女がビーチパラソルの中でつかまつて、水着のまま手錠をかけられて、そこにもう一人水着の女がいてその女と一緒に歩いてるので、始めは何だか分らなかったのですが、実は婦警でした。これもなか／＼よいボーズでしたが、近くで見られなかつた事が今でも残念に思っています。水着話が出ましたので申しますが水着の女を責めている写真が最近入手しました。写真に於いても責めの画の場合も競技用のシングル(腰の辺りでダブルになつていないもの)がよろしいです。何と申してもデルタ地帯の様子が、はつきりしない様なものは、この際ベケだと思えます。

○ 漸く暖かくなつて来ました。二十三日「奇ク」五月号発売この調子で更に段々と発行が早くなつて一年に十三冊という事になると本当に嬉しいですがね。内容は常に優秀でその上安価で恐れ入つています。又読者もこれに於いて、益々一般にひろがるのは当然のことと思えます。それから又、切腹マニアの妄評で恐れ入りますが御覧下さい。

口絵の畔亭数久氏の切腹幻想、私は予告以来、最も期待したのがこれでありました。先ず口絵に女性切腹図が、取り上げられた事に對して大いに感謝致します。さて先月の鉄路の図から予想していたのとは一寸違いました。というのは、あの無惨さがすつかりなく、数久氏の、筆力に感じ入ると共に鉄路式の美化された、リアリティも入れた図をこの次に是非お願い致します。数久氏に限りません。が当然今後も、毎号口絵に切腹図(女性ばかりとはいいたいたですが、それでは児島氏の様なファンの方には困るわけですから、男性ものも入れねばならないでしょう。けれど)は載せて下さい。緊縛ファンに劣らず最少限二、三頁は恒久的に続けて戴く権利がある様に存じます。さていずれも図案或はカット的な絵ですが切支丹女の切腹が一番でしょう。クリスチャンの自殺は信仰が深い程、非常にたえない程で美しい切口です。しかし表情は一寸、苦痛恍惚の交錯が薄く真剣な感じが足りない様に思えます。次は看護婦の図、これは美しいですね。毎号同じものばかりと云う様な、恐れは絶対にないと信じていますから、どうぞこれから先も「奇ク」の一特徴となる様な口絵の女性切腹図をお待ちしています。

五十頁、溝口氏の女性切腹の夢小生とよく似た幼時の経験談に世の中には、やはり同じ様な人が沢山いる事を知り、何だか不思議な気が致します。何となく好きな女性切腹(勿論裸体)する夢をみたこと云われますが、私は夢に見た事ありません。この方も私と同様に童貞の苦しみの一変型だつた

群誌を圧して益々快調の本誌は読者の要望に
 えて毎月確實なる発行を続けて、六月号は定価
 据置のまゝ堂々二二六頁を保持して奇ク健在な
 りを誇示しております。引續いて次号七月号は
 何が飛び出しますか、本誌編集スタッフの総力
 を結集した斬新奇抜な企画に御期待下さい。

白への憧憬……兵頭 庫一
灸責愉楽……春山 鮑三
コンピネーション随想

腹部愛好癡・マニア村

長谷川 洋
村松 時一郎

義母への追想
一柳真砂子
山岡 紫郎
フレンチ・力

ニカン

私：沼田扶二世の好きな顔

川端多奈子

評載 感情

好連
ある

海外サデイズ
手紙集 夫か

殘虐なる女
伊藤青雨文

随筆 私のシ

「女性愛欲
私の求めた」

痴迷……

鼻は花なり……北谷 英二
現代マゾヒズム芸術時評

ソドミヤコンフェション
(原忠正)

足台になつた少年(久留木栄)
膝窩に対する省察(須藤律夫)

(口絵) 七月号予告
図解縛り方講座(滝麗子)

都築峰子賣絵画集
杉原虹児画集
切腹写真

迂村隆写真集
畔亭数久画集

外多数

育……吾妻新

リヒストの手帖から
沼正三

記 服装の利用……吾妻
から……久留木 栄新

森本愛造 品 厚男 年
非小説 生夜 作 変委緑 吉

選老山想園

松井鑛子賞々小虐

鬼山絢策 惠華 悦

1

のでしようが、私と同じ様な注文をなさっているのは大いに愉快です。

尙又梅田淳二氏の絵は最上の表しさだと思ひます。唯々残念なことは、切口や臍を含んだ腹部に血の見えないことです。でも表情といいポーズといい素晴らしいものです。どうぞ巻頭の口絵に麗筆をふるわせて下さいます様に切にお願い致します。

中康氏の切腹研究夜話、遂に文献を出されましたが、この集めにくいものをよく努力して下さった事を感謝します。しかし何と云つても「奇夕」の昨年来の毎号こそ切腹殊に女性の切腹の一大文献となりましょう。実例は男の方が多いいのですが、貴重な女性の実例はきつと可成あると思ひます。乱軍中に割腹して腸をなげつけた例、十四才の少女の割腹、中国人の立腹日赤看護婦の切腹、何れも美事なもので更に実例を集められた上御発表をお願いします。成竹成太郎氏の挿絵は、私の趣味でない為にびんと来ません。簡単な筆ですが、顔の表情は出てはいるのです。よく見ると美人でないらしいです。(女腹切は絶対に超美人であ

つて欲しいものです。でも今月（五月号）は合計九枚の女性切腹図で本当に満足しました。一度、女性切腹図のコンクールを募集したらと思います。予告を見ると切腹がない様に思いますが、「やわ肌」に氷刀、熱き血潮、悦虐の美しい顔」を今から続々と載つてくる事をお待ちしています。妄語多謝

(吾妻京生)

貴社の御健闘を心から感謝いたします。小生露出慾にこそ生き甲斐を見つけている者ですので、この露出に就いてよい方法や、その他の事を色々知りたい為、相当長い間貴誌を愛読していますが、露出については時々しか見ません。どうぞこの露出について多く書いて下さいお願い致します。それから貴誌の活字に就いて私の感じた事を少し言わせて戴きます。新字体が制定され新かなづかいになつてからもう幾年にも経ちますのにどの本を見てもそれが実行されず立腹しています。少なくとも人々を導くべき本がこの様では情けなくなります。これ等の事を使用せよと制定された上は、日本全国そろつて、使つたらいいではありませんか。その点、貴誌の活字は完

全に新しいです。一字も古いのを見た事がなく新時代の尖端を行く新鮮さが貴誌には、あふれて居り新聞の活字に勝るとも劣りませんといいたいです。そして貴誌に一流の画家揃いだと思えます。どの絵を見ても素晴らしいです。僕は数久先生の轢殺に感激の余りに書きました一文を、貴誌五月号の読者欄にのせて戴きました西沢です。今度の数久先生の切腹の幻想は全く素晴らしい僕の友達五人も、貴誌の愛読者で皆口を揃えて、畔亭数久先生の絵が多ければいいなと言っています。僕は勿論本文もくまなくよみますが、まず口絵を見ます。男なら誰れでも貴誌の口絵を見れば買いたくなると思います。そこで僕はくれぐれも先生にお願いしたい事は、露出慾のことです。何て勝手な奴だと先生はお思いなるかも知りませんが、どうぞお願い致します。長々とつまらない事を書き並べましたが、何時も先生の御幸福と健康、貴社の御発展を心から祈つてやみません。さようなら(大阪西沢生)

然し、数久先生の口絵に驚いています。又数久先生が挿画にも御活躍下さっているのはこの上もない程嬉しい事です。あの現代的な感覚に富んだ美しい線は、その頁に光り輝いている様に思えます。この様な風俗雑誌にとつて口絵と共に挿図も大切な事で、御誌発展の為に非常に慶びます。読者が最初書店から購入する場合は、内容の善し悪しは問題でなく、口絵挿図の好きなものから題目を一寸見た位で選びます。又実際に読む場合も挿図の影響は大きい事です。早速ですが数久氏の画集の発行を計画下さる様お願い致します。

KK通信が最近停滞しているの心配して居ります、毎月遅れないう様にお出し下さいます様に重ねて願つて置きます。(T・M生)

○ 前略御免下さい。編集部の皆様毎月新しい感覚と前衛的な編集に全く頭が下り、今や他誌を抜きユウユウと群誌の先頭を切つて進んでいられる事を嬉しく思つています。今後とも種々の面白い変つたことをお知らせ下さい。全くの処毎月の下旬ともなれば日夜KKの事を思つて気が落ちつきませんやつと入手して二、三日で何度も

読み返した後は退屈で、仕方なくつい他誌に指を動かすのですが、本屋の店先でパラッと見ただけでもう内容の知れる様な、底の浅いものばかりなので一ヶ月大人しく次のKKの出るのを待つているという有様です。

殊に三月号の「女性の鼻」について真鍋氏の文と絵！僕はこれを今までどんなに待った事でしよう。それで僕は真鍋氏に女性の鼻について僕の様な、讃美者の一人がいるという事を知つて戴きたい為にこゝに一文を記めた次第です。(奥谷)

○ 貴誌三月号筆禍にも負けず類誌を圧しての御発展御慶び申上げます。今、私は二十五冊の奇クを前にして此の手紙を書いて居ります五月号を特に愛読したのは告白と手記の体験で入選された篠原咲恵さんの「半公刑」で私は責め特に女性における私刑に関する作品に興味を持つております。(小坂多美枝さん、沼田扶二世氏等の作品) 尙、飛田良二さん、吾妻さん、久田木栄さんの今後の御健筆を期待致しています。最後に私の希望と致しまして、奇クの内容に就いて

てお願い致します。それは是非毎号、読者川柳欄を設けて戴きたいのです。何卒この願いを編集部の皆様で御検討の上、実現させて下さいませ。(大阪TA生)

○ 編集部の皆様、相変わらず毎月の御精進ぶり誠に御苦勞様でございます。私も病床で毎月楽しく奇クを読ませていただいております。いつぞやは中康先生から誌上で御親切な御返事をいただいて本当にうれしうございました。失礼なところばかり申上げましたのに叱りにならず穴があつた入りたいうのでございます。四月号で田谷先生の記事久しぶりに拝読させていたゞきました。中康先生とはまた変わった味の一言一句隙のない筆の運び何度読んでも訓えられることばかりでございます。景非文続稿をお出し下さいます様、中康先生には切腹夜話におあげになりました文獻一つ一つ御紹介いたゞきたく存じます。賤機様の絵に遠慮ない批判を致しましてさぞお怒りでございましょう、どうぞお許し下さいませ。又本誌で折々切腹図拝見出来ればお待ちして居ります。切腹写真も時々本誌にのせて下さいませ。(愛川晃子)

原稿募集

- 一、本誌の内容に適したものでしたら、どんな形式でも問題ありません。
- 一、必ず未発表の作品に限ります。
- 一、責絵、責写真についても自信のある方は御応募下さい既に優秀なる作品は誌上に紹介しております。
- 一、締切日は特に定めません。掲載篇は作品に応じ発表後謝礼を差し上げます。
- 一、枚数は十枚から三十枚程度但し内容によつては五十枚位迄は構いません。
- 一、誌上の匿名は御自由ですし筆者の個人的秘密は厳守いたします。
- 一、何卒、奮て皆様の力作をお寄せ下さるようお待ちいたします。

奇譚クラブ編集部

最寄有名書店へ御予約下さい

本誌は、他誌のように合併号の発行や休刊等することなく、毎月確実なる発行を続けておりますが、熱狂的なファンが増え、ため各地で本誌の入手難が伝えられておりますので、是非、最寄りの有名書店へ毎月御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

☆代理部より☆

迅速確実をモットーにしています代理部の事務処理は読者の皆様は絶大な信用を博しております。今回、従来の分譲品以外に多数の新版を追加致しましたので、何卒多少に拘らず御用命の程お待ち致します。

特別会員募集

本誌並にKK通信の購読者を以て組織しており、その連絡誌として発展して参りましたKK通信もこゝに、第十九号を迎えました。今後、更に内容の充実と新しい企画による飛躍を意図しておりますので、未入会の方々は是非お申込下さるようお願いいたします。申込用紙は郵券八円同封にてお送りいたします。

◎編集方針について

読者の皆様の声をも最も敏感に誌上に反映させる雑誌として有名な本誌を、更に一段と皆様の身近かなものにするため、編集内容、編集方針一般に亘つての御意見を求めます。編集者は誌上或は直接の回答を行う外、今後の本誌の編集に関し、それらの御意見を活かし、以て清新激刺とした雑誌に育て、行きたいと考えます。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文献的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円
半年分六冊(送料共)六百円
一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけておりますが、御買洩れのないよう是非直接購読を御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

奇譚クラブ

第八巻 第六号
毎月一回一日発行

六月号

定価 百円

昭和二十九年五月二十五日印刷
昭和二十九年六月一日発行

編集人

箕田京二

印刷人

上田庄之助

発行人

吉田稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所

曙

書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。